

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター調査報告書第28集

具同中山遺跡群 I

—中村宿毛道路関連遺跡発掘調査報告書Ⅲ—

1997.3

高 知 県 教 育 委 員 会
(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

具 同 中 山 遺 跡 群 I

1997.3

高 知 県 教 育 委 員 会
(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター



弥生前期末土器群



縄文晩期終末土器群

序

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターでは、平成4年度より建設省四国地方建設局の委託を受けて中村市と宿毛市を結ぶ高規格道路に伴う埋蔵文化財発掘調査を実施してきております。四万十川支流の中筋川に沿って、高規格道路が計画されているわけですが、中筋川流域は県下でも有数の遺跡が密集している地域です。特に古墳時代では、河川周辺で行われた祭祀遺跡が確認されています。さらに中世では、戦国の様相を垣間見ることができる山城跡が各集落に残っているようです。

本書は、平成6年度に実施した具同中山遺跡群Ⅰの成果をまとめたものです。縄文晩期から中世までの複合遺跡として大変貴重な成果を上げることができました。縄文時代では類例も少ない晩期の土器群、古墳時代では祭祀遺物と、連綿と続く時代の遺構・遺物を検出することができました。この報告書が埋蔵文化財の保護・保全、さらには今後の考古学研究の一助となれば幸いと存じます。

最後になりましたが、発掘調査の実施や報告書の作成にあたっては、建設省四国地方建設局中村工事事務所並びに高知県中村土木事務所の埋蔵文化財に対する深い御理解と御協力を賜ったことに心から謝意を表するとともに、調査・報告書作成と関係各位には多大な御指導と御教示を頂いたことに、厚く御礼申し上げます。

平成9年3月

財団法人高知県文化財団 埋蔵文化財センター
所長 古谷 碩志

例 言

- 1 本書は、高規格中村宿毛道路建設に伴う具同中山遺跡群 I の発掘調査報告書である。
- 2 具同中山遺跡群は、中村市具同に所在する。
- 3 調査は、建設省四国地方建設局・高知県の委託を受け、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターが実施した。具同中山遺跡群の試掘調査は、平成5年12月から平成6年2月まで実施した。本調査は平成6年5月から平成7年2月まで実施した。本調査面積は、4000m²である。
- 4 発掘調査は、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターが主に実施した。調査体制は以下のとおりである。

(1) 調査担当

松田 直則 (高知県埋蔵文化財センター主任調査員)
伊藤 強 (同上 調査員)
山崎 正明 (同上 調査員)
武吉 眞裕 (同上 調査補助員)
竹村 三菜 (同上 調査補助員)

(2) 総務担当

井上 幸雄 (高知県文化財団埋蔵文化財センター総務課長)
三浦 康寛 (同上 主幹)
山崎 詠子 (同上 臨時職員)

- 5 本報告書の作成・執筆は、各調査員が分担し編集は松田が行った。文責は、執筆者名を文末に記した。
- 6 検出遺構に関しては、流路 (SR)、祭祀遺物集中地点 (SF) で標示している。出土遺物の実測番号は、写真図版中の番号と一致している。
- 7 現地調査及び本報告書を作成するにあたって、池田誠 (中世城郭研究会)、橋本久和 (高槻市埋蔵文化財センター)、犬飼徹夫 (愛媛県考古学協会副会長) をはじめ諸氏の御教示を頂いた。記して感謝する次第である。
- 8 遺構、遺物の測量及び写真撮影は各調査員が行い、調査区全体の航空測量は、株式会社アイシーに委託した。さらに出土遺物の木製品は京都科学株式会社、種子及び土壌分析はパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。獣骨は、菊池直樹 (高知大学) に鑑定をお願いし、鑑定結果について玉稿を頂いた。記して感謝する次第である。
- 9 発掘調査及び遺物整理、報告書作成については、下記の方々に協力頂いた。

発掘調査

浜田 昌一、正木 信邦、野並 櫛、伊与田茂一、植 恵、上岡 孝久、立石 正吉、
桑原 定、岡上 悦美、岡上 孝子、岡上 定美、岡上寿美子、岡本 弘美、沖 和子、
中山 末子、布 陽子、橋田 逸於、桑原 照美、土居 澄子、中平百合香、能津 芳子、
松本 菊美、宮崎 幸、森 繁子、福本 澄子、林 延子、岡本 芳子、中山 昭子、

大原千代枝、岡本 隆江、上田 豊子、岡崎美代子、長崎 竹美、秋森 広松、岡本 正、
川村 豊、才市 和子

遺物整理、報告書作成

岡本 智子、小野 由香、吉本 睦子、宮地 佐枝、橋田 美紀、門田美知子、臼木 由里、
竹村 延子、矢野 雅

10 調査にあたっては、建設省四国地方建設局中村工事事務所、高知県中村土木事務所の御協力を
頂いた。また具同地区長をはじめ地元住民の方々に、遺跡に対する深いご理解とご援助を頂き、
厚く感謝の意を表したい。

11 出土遺物、その他図面類の関係資料は高知県文化財団埋蔵文化財センターで保管している。

本文目次

第 I 章	調査に至る経過	1
第 II 章	遺跡の地理的・歴史的環境	2
第 III 章	第 I 区の調査	
	第 1 節 調査の方法	6
	第 2 節 調査の成果	8
	1 調査区の概要	8
	2 基本層序	8
	3 検出遺構	
	1) SR 1	10
	2) SR 2	10
	3) SR 3	10
	4) SR 4	15
	5) SF 1	15
	4 出土遺物	
	1) SR 1	21
	2) SR 2	22
	3) SR 3	23
	4) SR 4	35
	5) SF 1	39
	6) 包含層出土遺物	39
第 IV 章	第 II 区の調査	
	第 1 節 調査の方法	58
	第 2 節 調査の成果	59
	1 第 II 区の概要	59
	2 基本層序	59
	3 遺物の分布状況	64
	4 検出遺構	64
	5 VII～VIII層の出土遺物	68
	6 IX～XI層の出土遺物	69
	第 3 節 小結	
	1 調査に際して	73
	2 遺物について	74
第 V 章	まとめ	105
付編 1	具同中山遺跡群における自然科学分析 (パリノ・サーヴェイ株式会社)	
付編 2	具同中山遺跡の古代・中世の動物遺存体について (菊池 直樹)	

挿 図 目 次

Fig. 1 中村市位置図 ……………1	Fig. 35 SR 4 出土遺物実測図 1 ……………39
Fig. 2 周辺の遺跡分布図 ……………3	Fig. 36 SF 1 出土遺物実測図 1 ……………40
Fig. 3 具同中山遺跡調査区位置図 ……………6	Fig. 37 SF 1 出土遺物実測図 2 ……………41
Fig. 4 第 I・II 区設定図及び測量基準点図 ……6	Fig. 38 包含層出土遺物実測図 ……………42
Fig. 5 第 I 区グリッド設定図 ……………7	Fig. 39 石製品出土遺物実測図 ……………43
Fig. 6 第 I 区南西部セクション柱状図 ………9	Fig. 40 金属製品出土遺物実測図 ……………43
Fig. 7 第 I 区南東部セクション図 ……………9	Fig. 41 第 II 区の区割り ……………60
Fig. 8 第 I 区遺構全体図 ……………11~12	Fig. 42 第 II 区グリッド設定図 ……………60
Fig. 9 SR 1 実測図 ……………13	Fig. 43 第 II 区北壁の堆積状況 (基本層序) ……………61~62
Fig. 10 SR 2 実測図 ……………14	Fig. 44 中央バンク西壁の堆積状況 ……………64
Fig. 11 SR 3 実測図 ……………16	Fig. 45 第 II 区遺物分布状況図 ……………65~66
Fig. 12 SR 3 垂直分布図 ……………17	Fig. 46 遺構配置図 ……………67
Fig. 13 SR 3 付図略図 ……………17	Fig. 47 遺構平面図及び断面図 ……………67
Fig. 14 SR 4 実測図 ……………18	Fig. 48 弥生中期・後期土器(Ⅶ~Ⅷ層出土遺物 214~234) ……………78
Fig. 15 SR 4 垂直分布図 ……………18	Fig. 49 縄文晩期土器(Ⅸ~Ⅺ層出土遺物235~ 243) ……………79
Fig. 16 SF 1 出土状態図 ……………19~20	Fig. 50 縄文晩期土器(Ⅸ~Ⅺ層出土遺物244~ 251) ……………80
Fig. 17 SR 1 出土遺物実測図 1 ……………21	Fig. 51 弥生前期土器(Ⅸ~Ⅺ層出土遺物252~ 261) ……………81
Fig. 18 SR 1 出土遺物実測図 2(木製品) ……22	Fig. 52 弥生前期土器(Ⅸ~Ⅺ層出土遺物262~ 270) ……………82
Fig. 19 SR 2 出土遺物実測図 1 ……………23	Fig. 53 弥生前期土器(Ⅸ~Ⅺ層出土遺物271~ 284) ……………83
Fig. 20 SR 2 出土遺物実測図 2(木製品) ……24	Fig. 54 弥生前期土器(Ⅸ~Ⅺ層出土遺物285~ 290) ……………84
Fig. 21 SR 2 出土遺物実測図 3(木製品) ……25	Fig. 55 弥生前期土器(Ⅸ~Ⅺ層出土遺物291~ 300) ……………85
Fig. 22 SR 3 出土遺物実測図 1 ……………26	Fig. 56 石器(Ⅶ~Ⅷ層出土遺物301・302) (Ⅸ~Ⅺ層出土遺物303~306) ……86
Fig. 23 SR 3 出土遺物実測図 2 ……………27	Fig. 57 具同中山遺跡群 周辺地形図 ………106
Fig. 24 SR 3 出土遺物実測図 3 ……………28	Fig. 58 SR 3 遺物出土傾向 ……………108
Fig. 25 SR 3 出土遺物実測図 4 ……………29	
Fig. 26 SR 3 出土遺物実測図 5 ……………30	
Fig. 27 SR 3 出土遺物実測図 6 ……………31	
Fig. 28 SR 3 出土遺物実測図 7 ……………32	
Fig. 29 SR 3 出土遺物実測図 8 ……………33	
Fig. 30 SR 3 出土遺物実測図 9 ……………34	
Fig. 31 SR 3 出土遺物実測図 10 ……………34	
Fig. 32 SR 3 出土遺物実測図 11 ……………36	
Fig. 33 SR 3 出土遺物実測図 12(木製品) ……37	
Fig. 34 SR 3 出土遺物実測図 13(木製品) ……38	

表 目 次

Tab. 1	SR 3 出土土器観察表 1	Tab. 18	遺物観察表 4
Tab. 2	SR 3 出土土器観察表 2	Tab. 19	遺物観察表 5
Tab. 3	SR 3 出土土器観察表 3	Tab. 20	遺物観察表 6
Tab. 4	SR 3 出土土器観察表 4	Tab. 21	遺物データ表 1
Tab. 5	SR 3 出土土器観察表 5	Tab. 22	遺物データ表 2
Tab. 6	SR 3 出土土器観察表 6	Tab. 23	遺物データ表 3
Tab. 7	SR 3 出土土器観察表 7	Tab. 24	遺物データ表 4
Tab. 8	SR 3 出土土器観察表 8	Tab. 25	遺物データ表 5
Tab. 9	SR 3 出土土器観察表 9	Tab. 26	遺物データ表 6
Tab. 10	SR 3 出土土器観察表 10	Tab. 27	遺物データ表 7
Tab. 11	SR 3 出土土器観察表 11	Tab. 28	遺物データ表 8
Tab. 12	SF 1 出土土器観察表 1	Tab. 29	遺物データ表 9
Tab. 13	SF 1 出土土器観察表 2	Tab. 30	遺物データ表 10
Tab. 14	木製品法量表	Tab. 31	遺物データ表 11
Tab. 15	遺物観察表 1	Tab. 32	遺物データ表 12
Tab. 16	遺物観察表 2	Tab. 33	出土遺物接合距離関係表及びグラフ
Tab. 17	遺物観察表 3		

写 真 目 次

PL. 1	具同中山遺跡群遠景 同上近景		鉄剣及び周辺遺物出土状況
PL. 2	SR 1 完掘状態 SR 2 完掘状態	PL. 22	鉄剣出土状況 第 I 区作業風景
PL. 3	SR 3 完掘状態 (東側部分) 同上 (西側部分)	PL. 23	SR 2・3 出土遺物
PL. 4	SR 4 完掘状況 SF 1 検出状況	PL. 24	SR 3 出土遺物
PL. 5	南東部セクション SR 1 セクション	PL. 25	SR 3 出土遺物
PL. 6	SR 2・3 セクション SF 1 周辺遺物出土状況	PL. 26	SR 3 出土遺物
PL. 7	SR 1 木製品出土状況 同上	PL. 27	SR 3 出土遺物
PL. 8	SR 1 獣骨出土状況 同上	PL. 28	SR 3 出土遺物
PL. 9	SR 2 木製品 (柵列) 出土状況 同上	PL. 29	SR 3 出土遺物
PL. 10	SR 2 木製品出土状況 SR 3 遺物出土状況	PL. 30	SR 3 出土遺物
PL. 11	SR 3 遺物出土状況 同上	PL. 31	SR 3 出土遺物
PL. 12	SR 3 遺物出土状況 同上	PL. 32	SR 3 出土遺物
PL. 13	SR 3 須恵器出土状況 SR 3 土師器出土状況	PL. 33	SR 3 出土遺物
PL. 14	SR 3 土師器出土状況 SR 3 須恵器出土状況	PL. 34	SR 3 出土遺物
PL. 15	SR 3 木製品出土状況 同上	PL. 35	SR 3・4・SF 1 出土遺物
PL. 16	SR 3 木製品出土状況 同上	PL. 36	SR 3・4・SF 1 出土遺物
PL. 17	SR 3 木製品出土状況 同上	PL. 37	SF 1 出土遺物
PL. 18	SR 3 獣骨出土状況 同上	PL. 38	SF 1、包含層出土遺物
PL. 19	SR 3 鉄鏃出土状況 同上	PL. 39	包含層出土遺物
PL. 20	SR 4 弥生土器出土状況 SR 4 木製品出土状況	PL. 40	SR 1、出土遺物 (外面) 同上 (内面)
PL. 21	金属製品出土状況	PL. 41	SR 2・3 出土遺物
		PL. 42	SR 3・SF 1・包含層出土遺物
		PL. 43	包含層 (土師器・須恵器・石製品)、SR 3 (木製品) 出土遺物
		PL. 44	SR 1・2 出土遺物 (木製品)
		PL. 45	SR 3 出土遺物 (木製品) 同上
		PL. 46	SR 2・3 出土遺物 (木製品)
		PL. 47	金属製品 (鉄剣) 同上 (鉄鏃・その他)
		PL. 48	第 II 区の全景 (完掘時点) 北壁の堆積状況
		PL. 49	縄文晩期～弥生前期の遺物出土状況 (X ～ XI 層) 弥生前期の甕出土状況 (X～ XI 層)
		PL. 50	弥生前期の甕出土状況 (X～ XI 層) 弥生前期の壺出土状況 (X～ XI 層)
		PL. 51	弥生前期の壺出土状況 (X～ XI 層) 弥生前期の甕出土状況 (X～ XI 層)

- PL.52 弥生前期の甕出土状況（X～XI層）
小型打製石斧の出土状況（X層）
- PL.53 西壁堆積状況及び板状木製品・土器出土
状況
B1・2区縄文晩期～弥生前期土器出土
状況
- PL.54 弥生中期～後期の土器出土状況（VII～VIII
層）
石製管玉の出土状況（VIII層）
- PL.55 石包丁の出土状況（VIII層）
第II区作業風景
- PL.56 II区VII～VIII層の出土遺物 弥生中・後期
土器、壺・甕
II区IX～XI層の出土遺物 弥生前期土
器、甕
- PL.57 II区VII～VIII層の出土遺物 弥生中・後期
土器（土師器）甕
- PL.58 VII～VIII層の出土遺物 弥生土器、壺・甕
IX～XI層の出土遺物 縄文晩期土器、深
鉢
- PL.59 II区IX～XI層の出土遺物 縄文晩期土
器、深鉢・浅鉢
- PL.60 II区IX～XI層出土遺物 縄文晩期土器、
深鉢・弥生前期土器、壺
- PL.61 II区IX～XI層の出土遺物 弥生前期土
器、甕
- PL.62 II区IX～XI層の出土遺物 弥生前期土
器、甕
- PL.63 II区IX～XI層の出土遺物 弥生前期土
器、甕
- PL.64 II区IX～XI層の出土遺物 弥生前期土
器、甕
- PL.65 II区IX～XI層の出土遺物 弥生前期土
器、甕・壺
- PL.66 II区IX～XI層の出土遺物 弥生前期土
器、甕
- PL.67 弥生前期末、甕（遠賀川系）
弥生前期末、甕（在地系）
- PL.68 弥生前期古段階、壺（遠賀川系）
II区包含層出土の石器 石包丁・管玉・
石製品

第I章 調査に至る経過

四万十川支流の中筋川下流域には、縄文時代以来連綿と人間の残した生活痕を確認できる。特に古墳時代には、流域沿いに大規模な祭祀跡が確認され護岸工事に伴う発掘調査が昭和61年度から高知県教育委員会によって実施されている。この一連の調査により古墳時代から中世にかけての遺跡が広く分布していることが周知された。これら遺跡のなかで最も広範囲な遺跡として具同中山遺跡群が挙げられる。

中村市は、宿毛市同様幡多地方の中心となる地域であるが、主要幹線としての役割をはたしている国道56号線は愛媛県南予に繋がる流通のルートでもあり、四国西南部の大動脈として利用されている。国道56号線は、近年特に交通量が増加し市街地付近では交通渋滞が頻繁に生じる状況である。その中で建設省四国地方建設局中村工事事務所は、中村宿毛間の渋滞緩和と高速道時代の幕開けを鑑み、高規格中村宿毛道路の建設計画が進められている。さらに具同地区に関しては高知県による県道中村下ノ加江線の計画も同時に進められた。中筋川流域は、遺跡の密集地帯として周知されているところであり、計画路線にかかる埋蔵文化財包蔵地の保護について建設省四国地方建設局中村工事事務所と高知県教育委員会は協議を積み重ねてきた。協議の結果、計画路線変更が不可能な埋蔵文化財包蔵地について、平成3年度から財団法人高知県埋蔵文化財センターが試掘調査を実施し、遺構・遺物が検出され本調査が必要な地点について発掘調査を実施してきている。今年度調査対象となった具同地区は、建設省と高知県が同時に工事計画を進行している。工事計画範囲は、古墳時代を中心とした広範囲な具同中山遺跡群が所在していることから、平成5年度に試掘調査を実施した結果古墳時代の流路及び土師器片を検出した。

試掘調査の結果に基づき、建設省四国建設局中村工事事務所・高知県及び、高知県教育委員会が協議した結果、遺物の集中する範囲を中心に発掘調査を実施することで合意した。平成6年4月1日付けで委託契約を締結し、調査は高知県教育委員会が受託し、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターがこれを実施した。(松田)

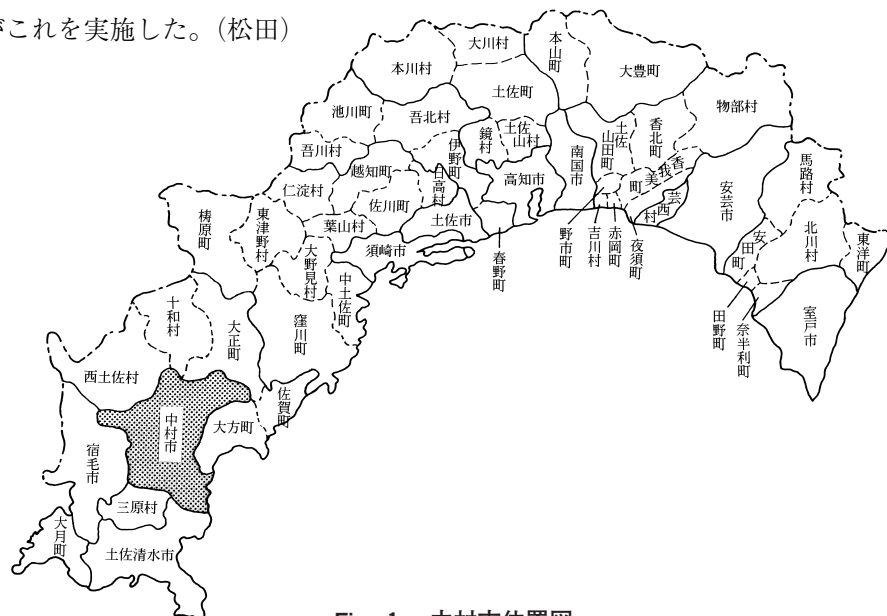


Fig. 1 中村市位置図

第Ⅱ章 遺跡の地理・歴史的環境

1. 地理的環境

国道56号線を西へ走り、中村市街地を抜けると、四万十川の雄大な風景が現れる。渡川大橋を過ぎ、森沢分岐の南、中筋川左岸に東西1.6km南北1kmにわたって具同中山遺跡群が存在する。付近には、右岸の船戸、風指、アゾノ遺跡など、多くの遺跡を数えることができる。中村市は、面積約385km²、人口約3,500人と県内でも有数の市部である。県西南部の政治、文化の中心地であり、商業活動も盛んだが、県中央部からは2時間以上を必要とする遠隔地であることから、県下第一の河川四万十川に沿って独特の文化圏を形成してきた。近年は、その豊かな水資源と美しい自然環境が「最後の清流・四万十川」というマスコミの呼び名と共に、全国的な注目を集めている。四万十川は四国山地の不入山（標高1,336m）に源を発し、その流路は四国西南部の雨量豊かな山地帯を縫い、大きく蛇行を繰り返しながら河口である中村市に至る。河川法適用の一級河川で、流域面積は2,270km²、主流の長さは196kmである。渓谷と原生林が美しい自然を生み出す源流域から、とうとうと穏やかに、そして雄大に流れる下流域まで、地域住民が誇れる河川環境が形成されている。水産資源も豊かで、現在でも伝統的漁法による漁業活動が行なわれており、アユ、ウナギ、エビ等の漁獲量が多い。

このように流域の人々に美しい自然環境や、豊かな水産資源を提供する四万十川も、その様相を一変することがある。四万十川の流れる四国西南部は、紀伊半島と共にわが国きっての多雨地帯で、年間降雨量は2,600mmにのぼり、九州南部が2,500mmでこれに次いでいる。また、河況係数（河状係数）が日本の河川の中でもきわめて大きい。河況係数とは、河川のある地点での一年間の最大流量と最小流量の比であり、小さいほど河川の流況が良く、大きいほど洪水の制御や、水の利用をやりにくい河川である。大陸の川は流域面積も広く、係数は2桁が多いが、日本の河川の係数はほとんど3桁であり、その中でも四万十川は、824と係数がきわめて大きい。降雨の集中する際には、四万十川は「御しにくい川」としての一面を見せる。

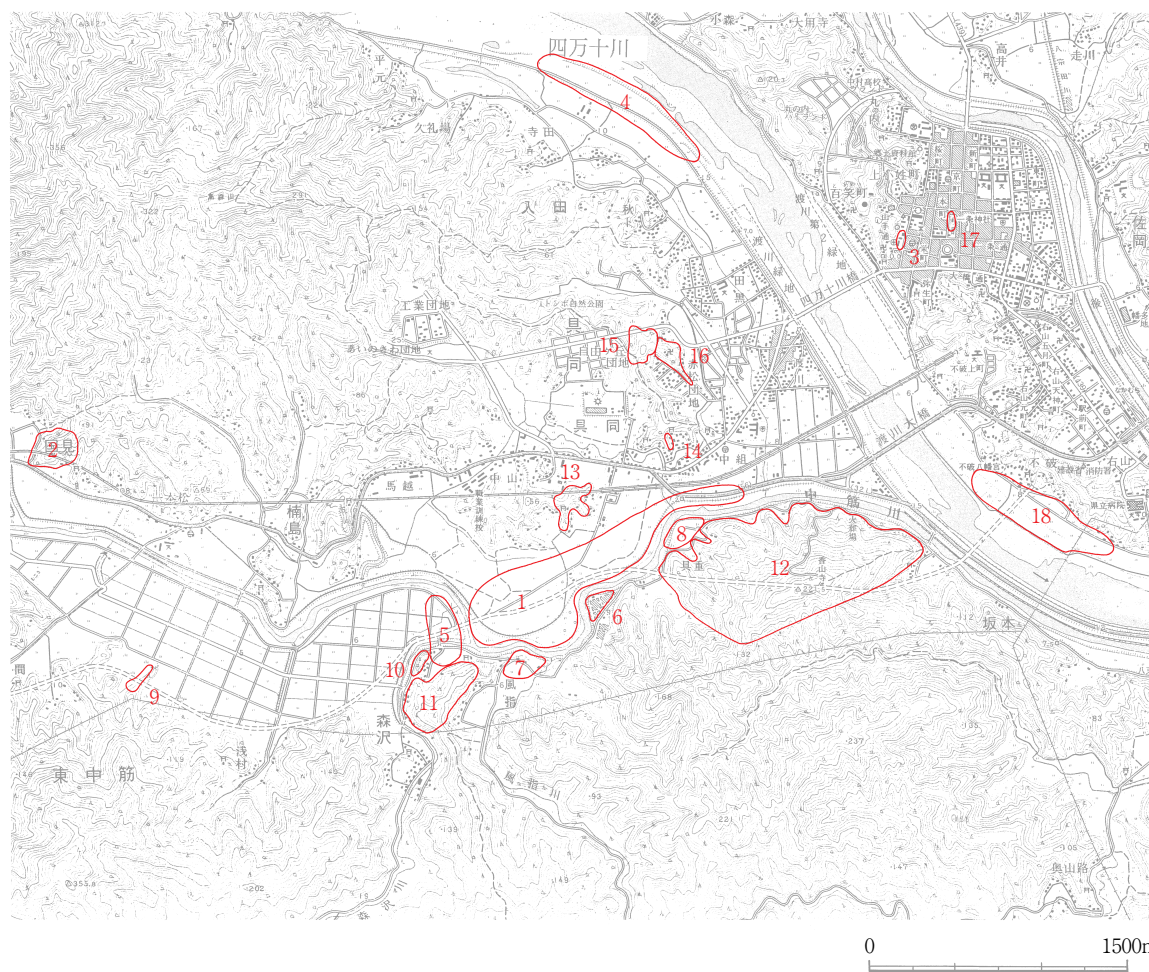
本遺跡は四万十川と支流中筋川の合流点より、中筋川上流へ7km程の中村市具同に所在する。中筋川は、宿毛市白皇山（標高458m）に源を発し、蛇行を重ね、河口から4km足らずの本流右岸に流



四万十川と具同周辺



四万十川中流



No	遺跡名	種別	時期	No	遺跡名	種別	時期
1	具同中山遺跡群	祭祀・集落跡	縄文～中世	10	森沢北ノ城跡	城跡	中世
2	国見遺跡	散布地	縄文・古墳	11	森沢城跡	城跡	中世・近世
3	中村貝塚	貝塚	縄文	12	香山寺跡	社寺跡	中世
4	入田遺跡	散布地	弥生	13	近沢城跡	城跡	中世
5	船戸遺跡	集落跡	縄文・古墳～中世	14	栗本城跡	城跡	中世
6	アゾノ遺跡	集落跡	中世	15	扇城跡	城跡	中世
7	風指遺跡	集落跡	弥生・平安・中世	16	ナリカド城跡	城跡	中世
8	具重遺跡	祭祀遺跡	古墳	17	中村御所跡	城跡	中世
9	間城跡	城跡	中世	18	不破遺跡	散布地	中世

Fig. 2 周辺の遺跡分布図

入する。流程は約39kmである。具同周辺は中筋川に沿って東西に延びる平野で、傾斜が非常に少なく下流より低い場所もあり、流路は蛇行するため流れが阻害される。降雨の際にはたびたび「御しくい川・四万十」からの逆流現象が起こり、具同一帯は度重なる洪水に悩まされ続けてきた。水を制し、そして水と共存することこそ、中村市に住む人々にとって大きな課題であった。

2. 歴史的環境

土佐国の歴史と言えば、高知平野を中心にして語られることが多い。しかし、幡多地域は海路をもって九州、陸路を取れば南予との繋がりがあり、県中央部、東部とはやや異なった歴史的発展を遂げてきた。以下、四万十川下流域・中筋川流域を主に、時代毎に概観する。

幡多地方には後期から晩期を中心に、数多くの縄文遺跡がみられる。四万十川中流域には、多くの石錘が出土した後期の三里遺跡、また中筋川流域には、晩期のツグロ橋下遺跡、やや下流左岸の低丘陵上に中期、後期の土器が出土した国見遺跡、さらに下って右岸には後期、晩期の船戸遺跡等があげられる。また中村市街地にも地表下6mの地点で発見された晩期の中村貝塚がある。中村貝塚の周辺には、まだ集落跡が残存する可能性も指摘されている。

弥生時代の遺跡では、まず前期初頭の入田Ⅰ式土器が出土した入田遺跡があげられる。入田遺跡は幡多地方における稲作農耕の開始を示す遺跡として注目される。同遺跡では、縄文晩期の突帯文土器も出土している。また国見遺跡でも、前期の住居跡が報告されている。中期後半の遺跡は、中村市の中心部、四万十川左岸の山上に点在する。中村市を一望できる古城山遺跡は高地性集落遺跡であると考えられる。また、本遺跡でも以前の発掘調査において、中期中葉から後期にかけての土器が報告されている。しかし、県中央部に比較すると幡多地方には弥生の遺跡は少ない。

古墳時代になると、中筋川流域の宿毛市平田に高岡山古墳群、曾我山古墳が造営される。本遺跡はこれら古墳の下流に当たり、以前の発掘調査で5世紀後半から6世紀前半の河川祭祀に関わる跡が確認されている。『先代旧事本紀』の「国造本紀」では大化以前の土佐国を都佐国と波多国に分けて記載している。波多国造の所在地は、曾我山古墳という説を含めいくつかあるが、いずれにしても、当時の中筋川流域には、中央勢力を背景にした強力な地方権力集団の存在が考えられよう。

律令制下においては、「和名類聚抄」に五郷が記載されている。しかし「遠流の地・土佐」の、しかも遠隔地・幡多について記述した文献は少なく不明な点が多い。発掘調査例としては、風指遺跡があげられる。風指遺跡は、その立地条件や、緑釉陶器の出土等から管制的祭祀跡と報告されている。また、船戸遺跡においても古代に盛行した一時期を見ることができる。

中世の幡多地方については、金剛福寺文書によると、嘉禎3年（1237）すでに幡多荘が成立していたようである。九条家の支配下にあった幡多荘が一条実経に譲られたのが建長2年（1250）であり、以後幡多と一条家との結び付きは、戦国末期に土佐一条



船戸遺跡

家が滅亡するまで続く。中世の幡多地方を代表する遺跡としては、まず本遺跡の対岸に位置する船戸遺跡があげられる。船戸遺跡は河津としての機能を有しており、古代・中世における水上交通の一拠点と考えられる。また本遺跡においても、以前の発掘調査で中世初期の貿易陶磁器、瓦器が多く出土しており、中筋川流域の中心的集落ではないかと考えられる。それら河津や集落の発展の背景には、空海が建立したという伝承を持ち、当地で強大な勢力を有していた中世寺院香山寺の存在が見逃せない。

応仁2年（1468）前関白一条教房は応仁の乱の戦火を避けるため京を脱出し、中村に居を構え、家領回復に努めた。中村御所と敬称された一条氏の居館を中心に京都を模した町づくりを行ない、以後の繁栄の基を築く。「土佐国七郡二御所一人大名七人ト申セシハ…以上八人此内一條殿者格別残り七人守護ト申」（長元記）と言われるように、土佐の国人勢力の中では別格の扱いを受け、大きな影響力を及ぼしていくが、兼定の代には土佐中央部に台頭した長宗我部氏が西への圧迫を強める。一条氏においては家臣団の離反等もあり、ついには九州へと追いやられ、土佐一国は長宗我部氏の支配するところとなる。中世末から戦国期にかけての遺跡は、中筋川流域に江ノ古城、ハナノシロ城等の山城があげられる。両城とも、15世紀後半から16世紀にかけて機能している。また、規模の大きいものとしては森沢城があるが、発掘調査には至っていない。

近世になると長宗我部氏に代わって入国した山内氏の分家が配置され支藩を形成した。いわゆる「中村三万石」であるが、17世紀末には本藩に返還、廃藩となる。（伊藤）

<参考文献>

岡本健児 日本の古代遺跡39高知 保育社

高知県の地名 日本歴史地名体系40 平凡社

出原恵三、松田直則 後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ「風指遺跡」 高知県教育委員会

前田光雄、松田直則、廣田佳久 後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ「具同中山遺跡群」

高知県教育委員会 高知県埋蔵文化財センター

曾我貴行 国見遺跡 中村市教育委員会

松田直則 四万十川流域の中世河津「中世都市研究3 津・泊・宿」 中世都市研究会編

伊藤猛夫 四万十川<しぜん・いきもの>-四国の河川(1)- 高知市民図書館



香山寺



一条神社

第Ⅲ章 第Ⅰ区の調査

第1節 調査の方法

東西に長い調査区を中央部で分け、西側を第Ⅰ区、東側を第Ⅱ区とした。第Ⅰ区は県道中村下ノ加江線を南辺として、東西80m南北30mにわたり設定した。調査対象面積は2230m²である。調査に先立って、調査区周辺に4級基準点を2点設置した。基準点設置は(株)ワタリ測量設計コンサルタントに依頼し、前年度の船戸遺跡発掘調査の際に設置した3級基準点を利用して行なった。

グリッド設定については、4m×4mを、公共座標に沿って調査区全体に配置し、呼称については東西を西から1→2→3、南北を北からA→B→Cとし、北西隅から東へA-1、A-2、A-3と呼ぶことにした。

第Ⅰ区においては、調査区南辺にあたる県道、北辺あたりの農地の崩壊を防ぐため、2～3m程調査幅を減少せざるを得なかった。表土から第Ⅴ層ま

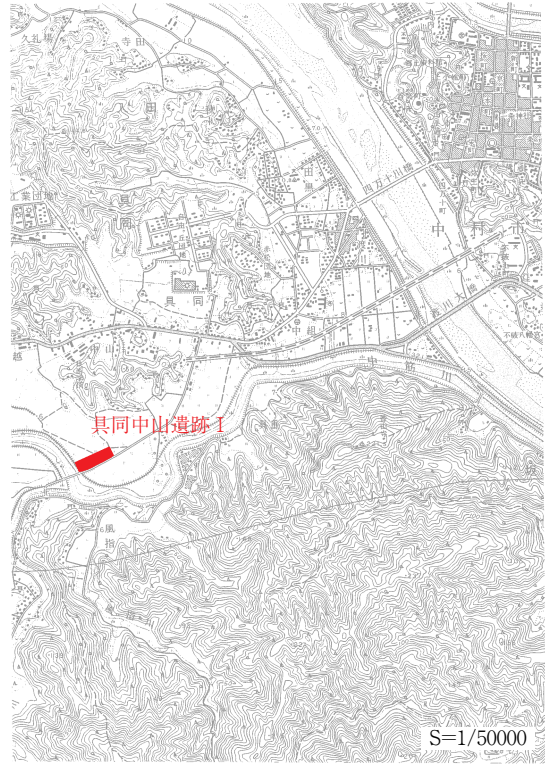


Fig. 3 具同中山遺跡調査区位置図

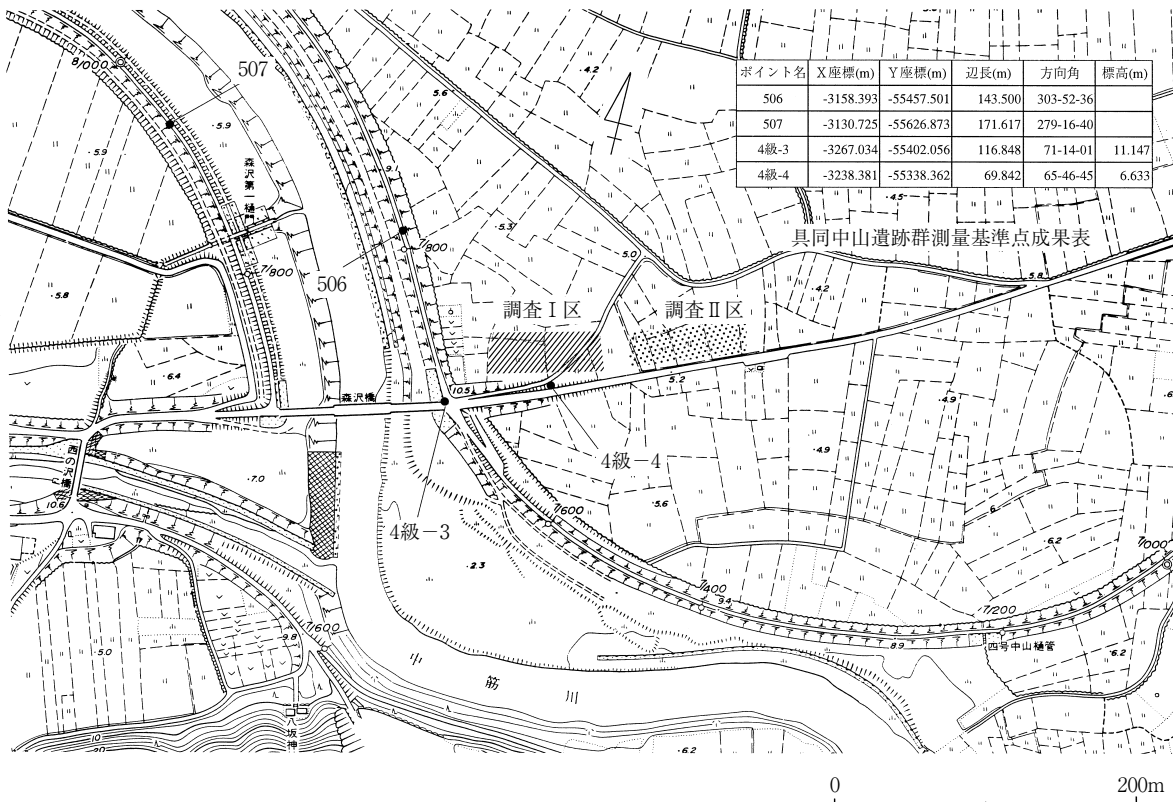
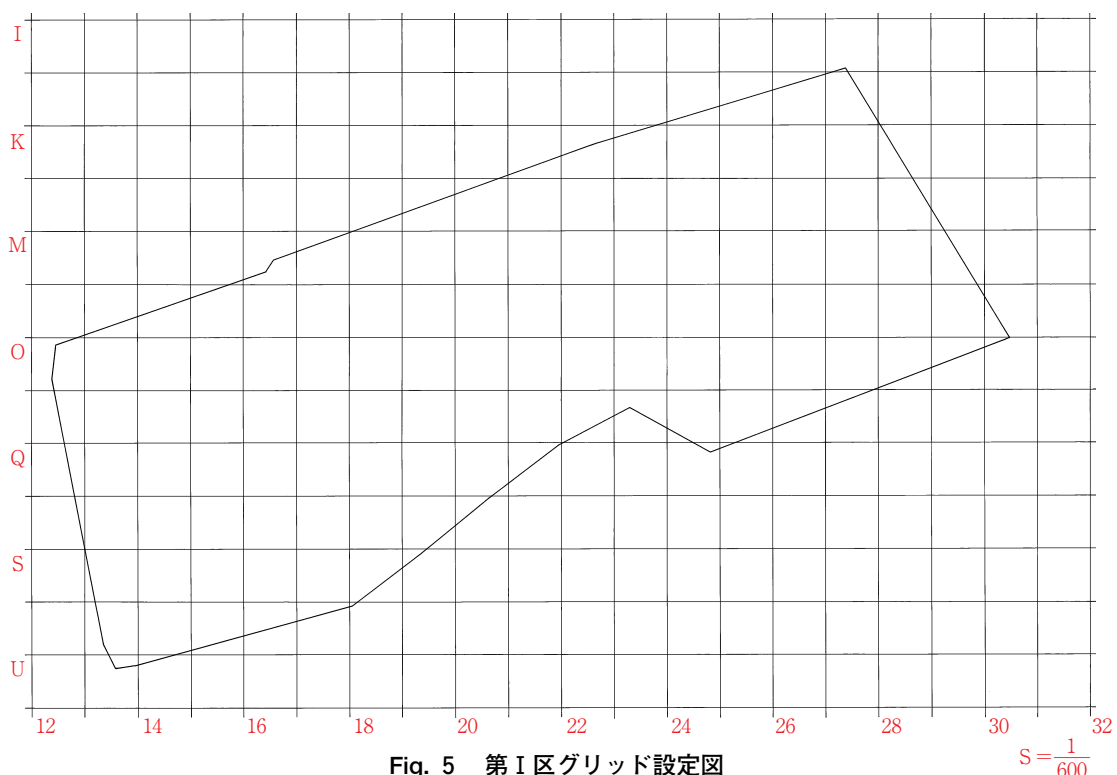


Fig. 4 第Ⅰ・Ⅱ区及び基準点設定図

では、壁面を約30度の角度を持つ緩斜面に留め、層序を確認しつつ重機で掘削した。第Ⅵ層に至り、炭化物細片及び、赤褐色の土器片を確認したので、その後は人力で掘り進めた。北壁中央部は特に壁面の崩壊が激しく、鉄製矢板を敷設し崩壊を防いだ。遺物の取り上げに際しては、必要に応じて平面実測を行ない取り上げた。流路については平面的にプランを確認し、流路と直行するトレンチを開削して埋土の状況を確認しつつ、人力で埋土を除去した。完掘後、平面実測、写真撮影を行なった。また、航空測量、航空写真撮影を必要に応じて行なった。

今回出土した遺物は、トータルステーションを使用して取り上げた。トータルステーションは測定地点においたプリズムを視準して光波をとばし、測定地点の位置を捉えることができる測量精密機器である。データコレクタを併用することによって、現場で測定したデータを持ち帰り、パーソナル・コンピュータのディスプレイ上に表示したり、プロッタを使用して図面化することができる。高知県埋蔵文化財センターにおいては、中村宿毛道路関係の発掘調査で、前年度よりトータルステーションを使用している。しかし、その使用に当たっては未だ実験段階と言えよう。今回の使用に際しても、いくつかの利点及び問題点があげられるので以下に記す。まず、現場で測定したデータをすぐディスプレイ、プロッタに出力でき、視覚的に捉えられる。また、一度の測定で平面的位置も標高も捉えることができる。よって遺物の出土地点を測定しつつも、素早く取り上げができる。しかしながら、機械の設置、操作に関して一定の習熟を必要とするので、特定の者が操作することになりがちである。またデータの管理、プロッタでの図面作成等についても同様である。では今後、トータルステーションはどのような場面で有効に活用できるかであろうか。それは、遺物量が大量になると予想される場合、それらが現位置を動いてない場合である。もちろん、各調査員の操作の習熟は言うまでもないし、データ管理、図面作成等については、複数の人間が行なえる環境も必要である。(伊藤)



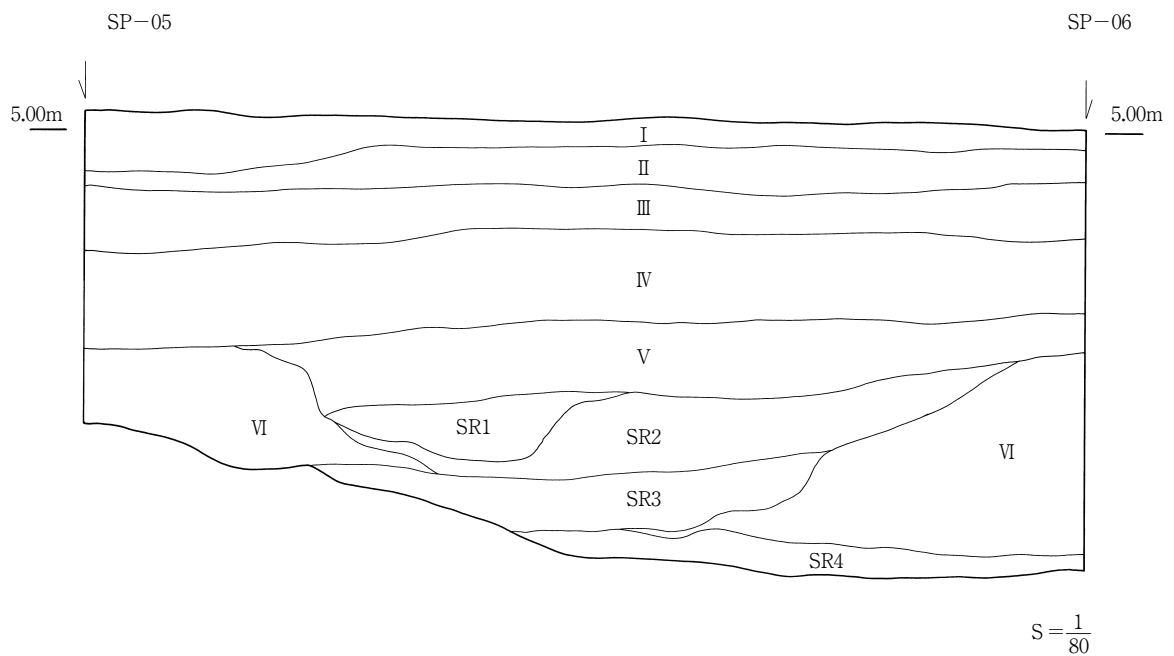
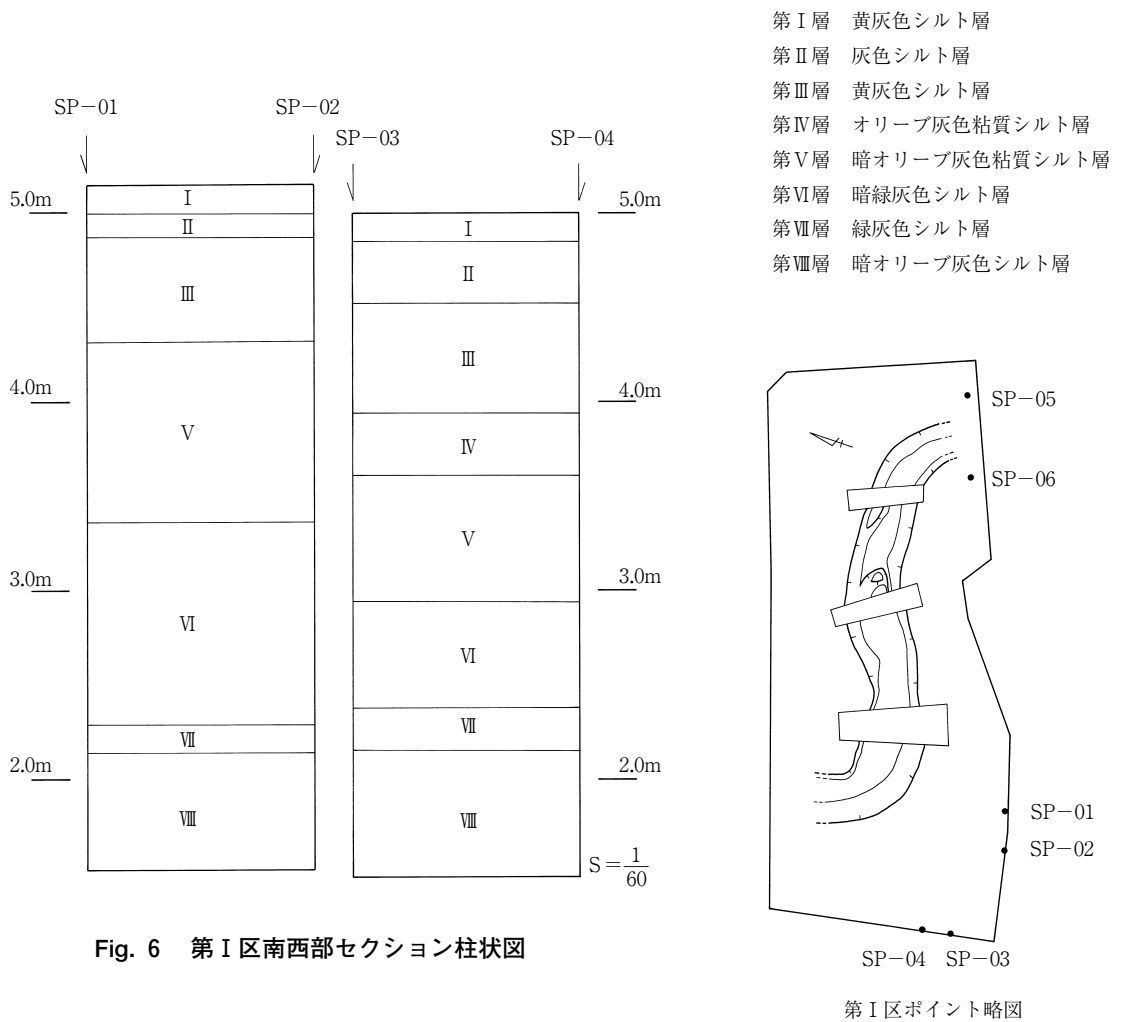
第2節 調査の成果

1. 調査区の概要

具同中山遺跡群は、古墳時代から中世にかけての中村市では最も広範囲に認められる遺跡群である。中筋川改修による昭和61年度からの調査では、大規模な古墳時代の祭祀跡や鎌倉時代を中心とした集落跡を検出している。今回の調査区は、これら祭祀跡や集落跡のひろがりを確認することや、中筋川対岸に位置する船戸遺跡との関連を掴むことを重要なポイントとして押さえていた。調査の結果、第Ⅰ区では弥生時代から鎌倉時代までの自然流路や、古墳時代の小規模ではあるが祭祀跡を検出することができた。各時代の流路跡は、東から西方向の流路で中筋川に流れ込んでいる。所謂中筋川の支流として弥生時代から連綿として鎌倉時代まで存続している。本流と支流の間の自然堤防上には、生活の痕跡が確認できるのである。特に古墳時代の祭祀跡は、流路跡にも祭祀行為終了後支流にも投げ込まれており、本流に近い場所ほど遺物が多いことがわかった。第Ⅱ区では、自然流路は確認できず南側に流路方向を取るものと考えられる。(松田)

2. 基本層序

第Ⅰ区においては地表下4～5mの掘削に至り、壁面の崩壊が激しく、調査区南西部、南東部でのみ表土(標高約5.00m)からⅧ層までの基本層序を確認した。第Ⅰ層は表土で、黄灰色シルト層である。酸化鉄分を多く含む部分がブロック状をなしている。上部には攪乱を受けている部分が所々見られる。第Ⅱ層は締りの弱い灰色シルト層の中に、酸化鉄分が植物の毛細根に沈着した状態でむらなく見られる。全体的には黄灰色が強く、シルトの粒子は比較的細かい。第Ⅲ層は黄灰色シルト層で、第Ⅱ層に比べ酸化鉄分の含量が非常に多く、粒状に沈着している。全体的には赤褐色気味で、西部に向かって厚くなっている。第Ⅳ層はオリーブ灰色粘質シルト層であり、シルトの粒子が細かく、粘性が強い。酸化鉄分が円柱状に沈着しているが少量である。北東に向かって薄くなっており、南東部西壁には見られなかった。第Ⅴ層は暗オリーブ灰色粘質シルト層で、微量の酸化鉄分が認められる。また、若干の炭化物と10～20mm程度の灰白色の多孔物質が所々に分布する。第Ⅵ層は暗緑灰色シルト層で、粘性は弱く、締りは強い。少量の炭化物を含む。古墳時代中期の包含層であると考えられる。第Ⅶ層は緑灰色シルト層で、やや粘性があり、微量の炭化物を含む。北部に向かって薄くなっている。第Ⅷ層は暗オリーブ灰色シルト層で、やや粘性がある。本遺跡における堆積層は、西から東へ若干の傾斜が見られるが、基本的にはほぼ水平に堆積している。(伊藤)



3. 検出遺構

具同中山遺跡群 I の第 I 区では、流路 (SR) 4 条、祭祀遺物集中地点 (SF) を検出した。流路は、調査区中央部で検出し弥生時代・古墳時代・古代から鎌倉時代にかけてのもので場所も流路方向とも同じである。

祭祀遺物集中地点は、調査区南西部で第 VI 層中で検出しており、出土状況としてまとまりがあるため祭祀遺構として報告することにする。

1) SR 1

調査区北西部隅の N-14・15 から O-27~29 において第 V 層の掘削段階で検出した。Q-16、R-16 から東側に蛇行し、M-25、N-24 に向かって伸びる。そこから O-27~29 に向かって蛇行し、調査区外に続いている。規模は長さが約 75m で最大幅は M-25、N-25 で約 5m、最小幅は P-20、Q-20 で約 2.5m、平均では約 4m を測る流路である。深さは最深部の P-20 で標高約 1.5m を測る流路である。出土遺物は土器、木製品、獣骨であるが、流路深部での出土が多い。獣骨は南東部の M-25~27 に集中しており、中には頭蓋骨部分がみられる。

2) SR 2

調査区 O-14~16 から O-27・28 に亘って SR1 の下層より長さ約 62m に及ぶ流路を検出した。P-17、Q-17、R-17 において東側に緩やかに蛇行し、M-26、N-26、に向かって伸び、そこから O-27・28 にむかって緩やかに蛇行し、西側調査区外に続く。ほぼ SR1 と同じ流れを呈している。規模は最大幅の O-20、P-20、Q-20 で約 10m、最小幅は N-27、O-27 で約 5m、平均では約 8m を測る。深さは O-26 周辺の最深部で標高 1.3m を測り、SR1 に比べ幅広の形を形成している。O-16、P-16 においては掘削段階で南北方向の杭列を確認した。杭間は 20~30cm を測る。出土遺物は土器、木製品、獣骨が出土しており、流路深部での検出が多い。獣骨は南西部 Q-18 に集中して出土している。(竹村)

3) SR 3

調査区中央部を東西方向に蛇行する自然流路で、北東隅から中央部を経て南西隅に至る。東端、西端はそれぞれ調査区外に出ており、検出できた部分だけで長さ 56m、幅は 5.2~8.0m を測る。深さは平均 78cm、底面の標高は西部で -0.20m、中央部で -0.24m、東部で -0.66m を測る。埋土は黒褐色腐植土層と、オリーブ黒色腐植土層に分けられる。黒褐色腐植土層は、15~20cm の植物遺体を多量に含む。また、若干の炭化物、砂粒を含む。オリーブ黒色腐植土層は、少量の植物遺体、炭化物を含む。砂粒は黒褐色腐食土層よりも多い。出土遺物は土師器の甕・鉢・高杯・手捏ね土器・椀、須恵器の甕・杯・壺などの土器類、木製品では編具・鋤・金属製品では鉄鏃、動物遺存体でシカ・イノシシ・タヌキなど多数出土しており、時期的には古墳時代の流路と考えられる。さらに遺物量も多く、第 I 区全体の 60% を占める。出土状態としては、流路西部からの出土が多い。流路内の接合関係のみても、約 2m から 4m 内外で接合できる遺物が多い。

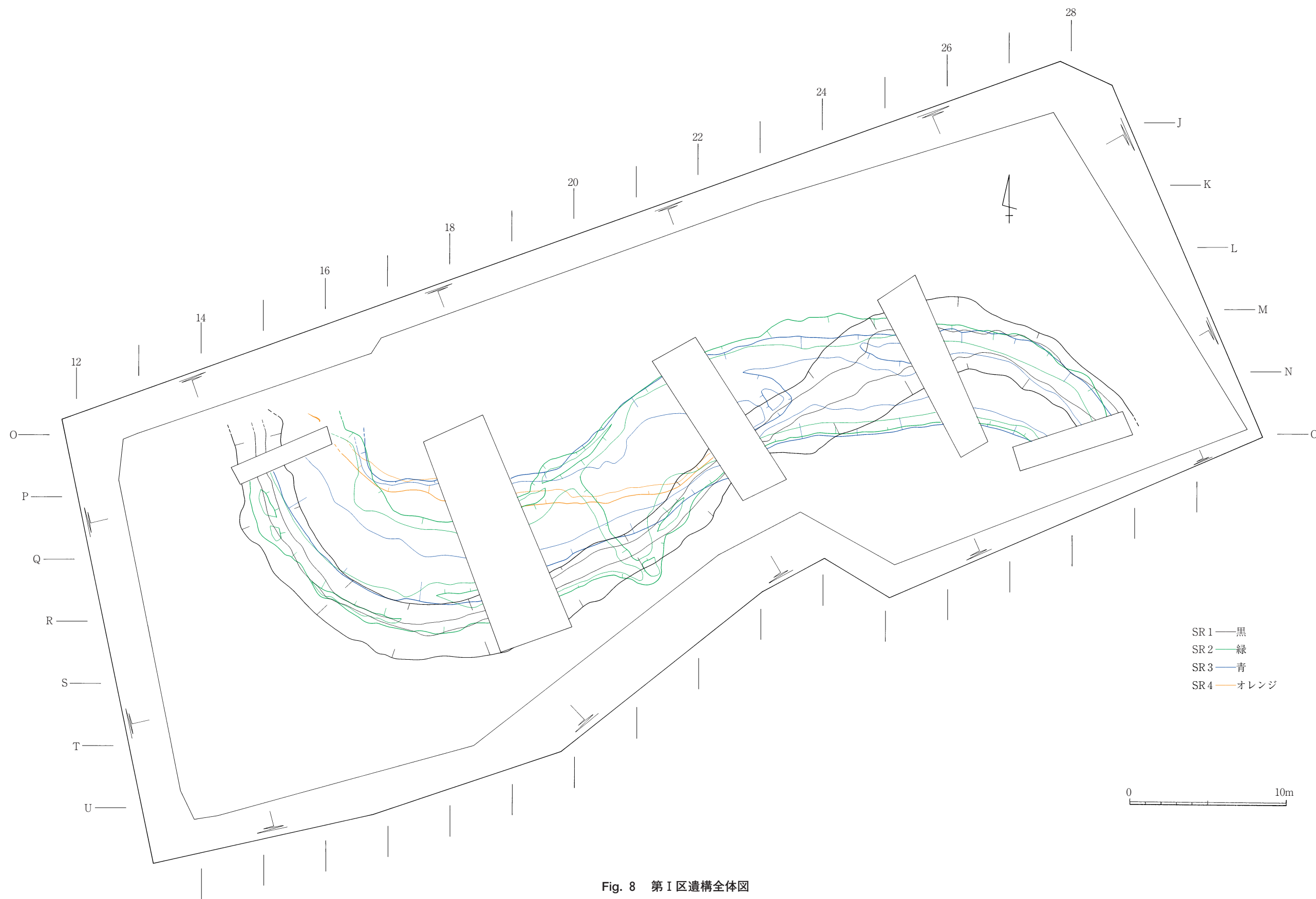


Fig. 8 第Ⅰ区遺構全体図

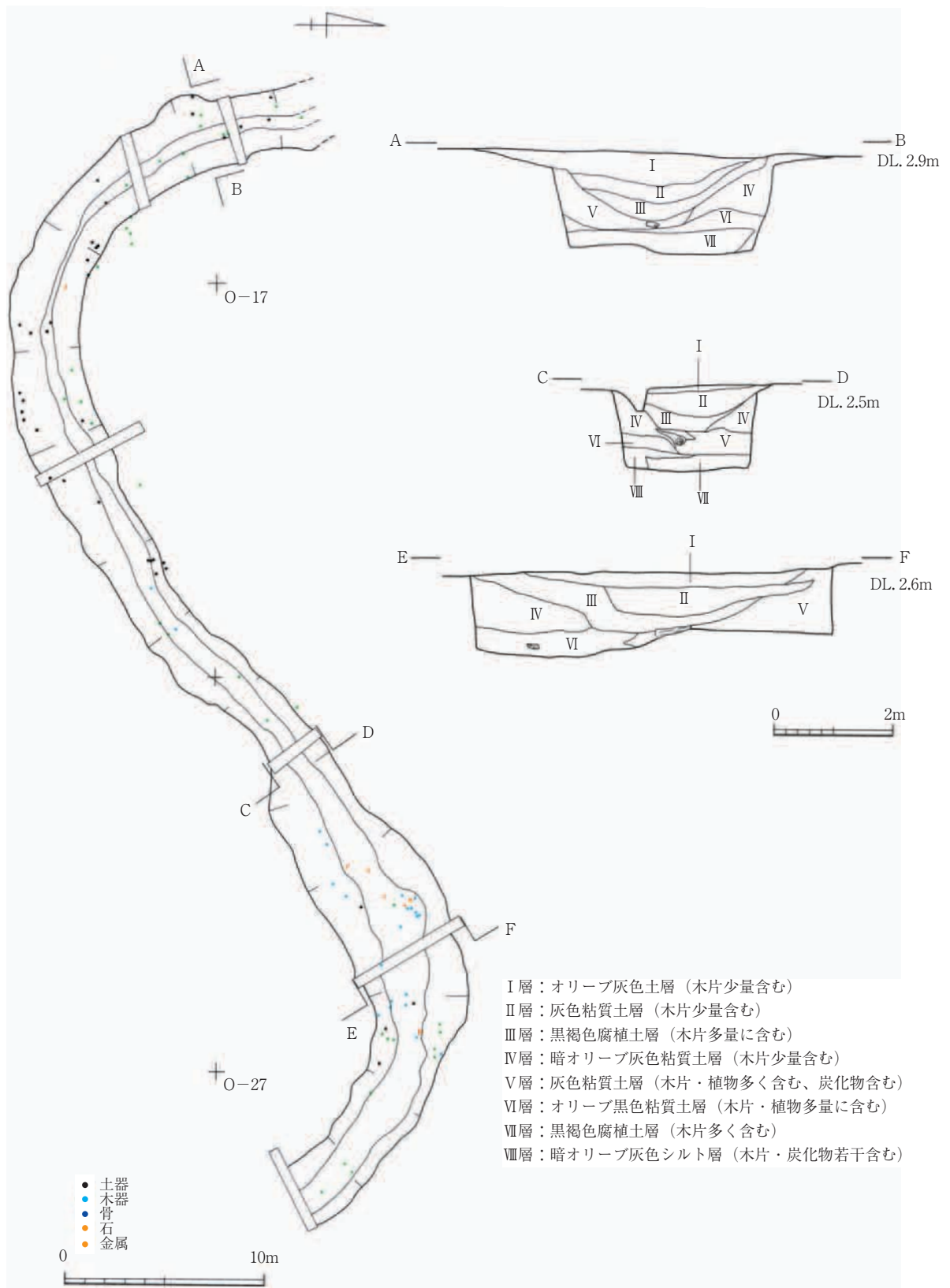


Fig. 9 SR1 実測図

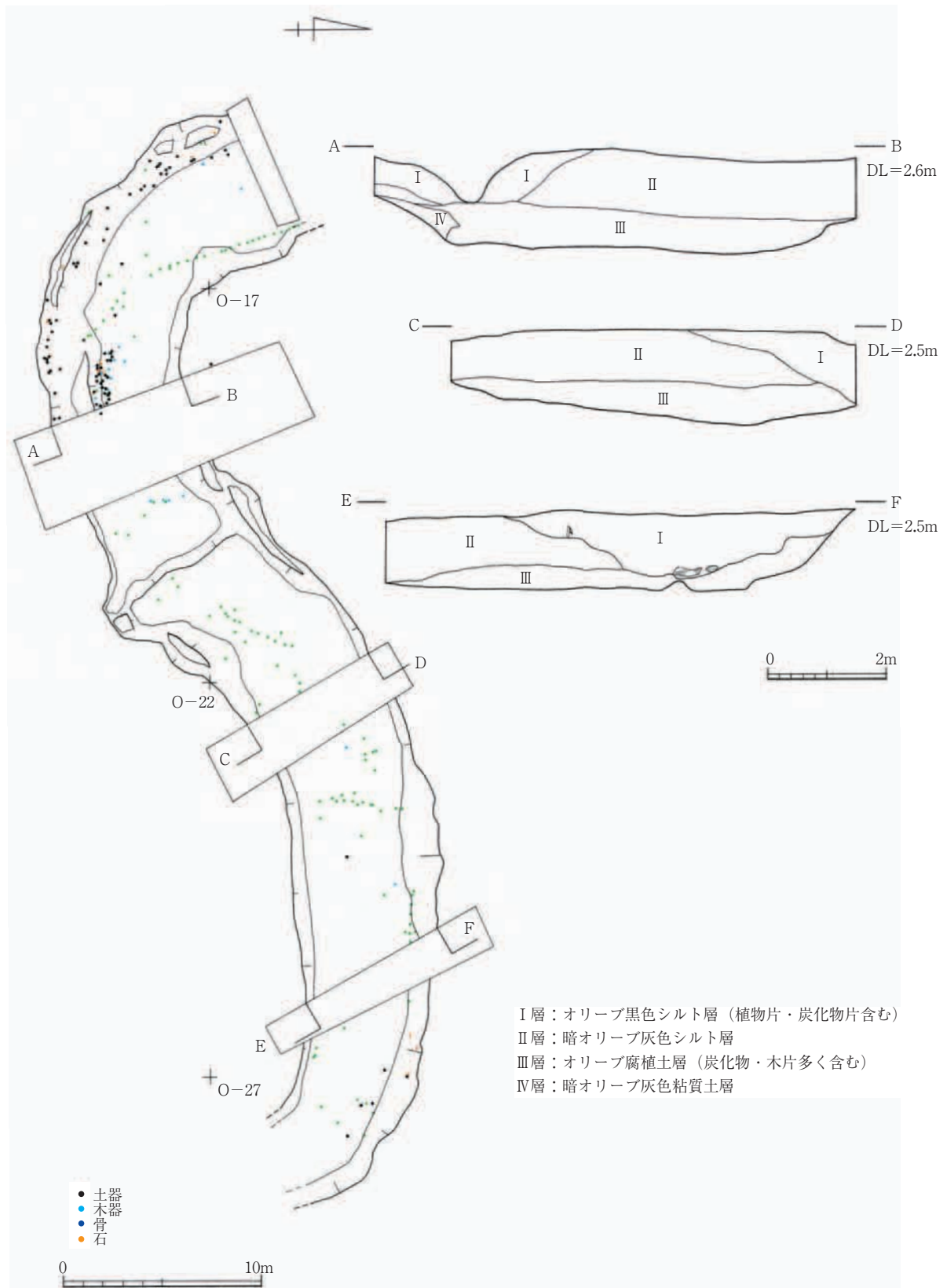


Fig. 10 SR2 実測図

4) SR4

調査最終段階で検出された。東部においては調査を終了していたので、西部のみの検出となった。また、表土からの掘削が6mに至り、矢板敷設部分付近は段掘りにして対応していたが、本流路の北側肩部分は掘削困難となり検出には至らなかった。よって調査区西部で南側肩部分を検出したのみに至った。検出できた部分だけで長さ19m、深さは平均70cmを測る。底面の標高は最深部で-1.18mである。埋土は黒褐色腐食土層であり、炭化物、植物遺体、砂粒等を多量に含む。遺物は中期後半の弥生土器、鍬など木製品等、70点ほどが出土した。

5) SF1

調査区の南西部R-13・S-13・T-13周辺で検出した。第Ⅵ層の包含層遺物集中地点として捉えることもできるが、手捏ね土器などの祭祀遺物が出土していることや、他の包含層遺物出土状況などと比べてまとまりのある一群であったため、ここでは祭祀遺構として把握し説明をして行くことにする。検出した範囲は、幅2m・長さ9mに及んでいる。出土遺物は甕が多く、高杯・手捏ね土器・椀・壺が出土している。手捏ね土器や高杯・椀・壺が比較的中心的な位置を占めており、その周囲や両端側に甕が出土している状態である。さらにこの土器集中地点は、土師器のみで構成されている点が特徴である。(松田)

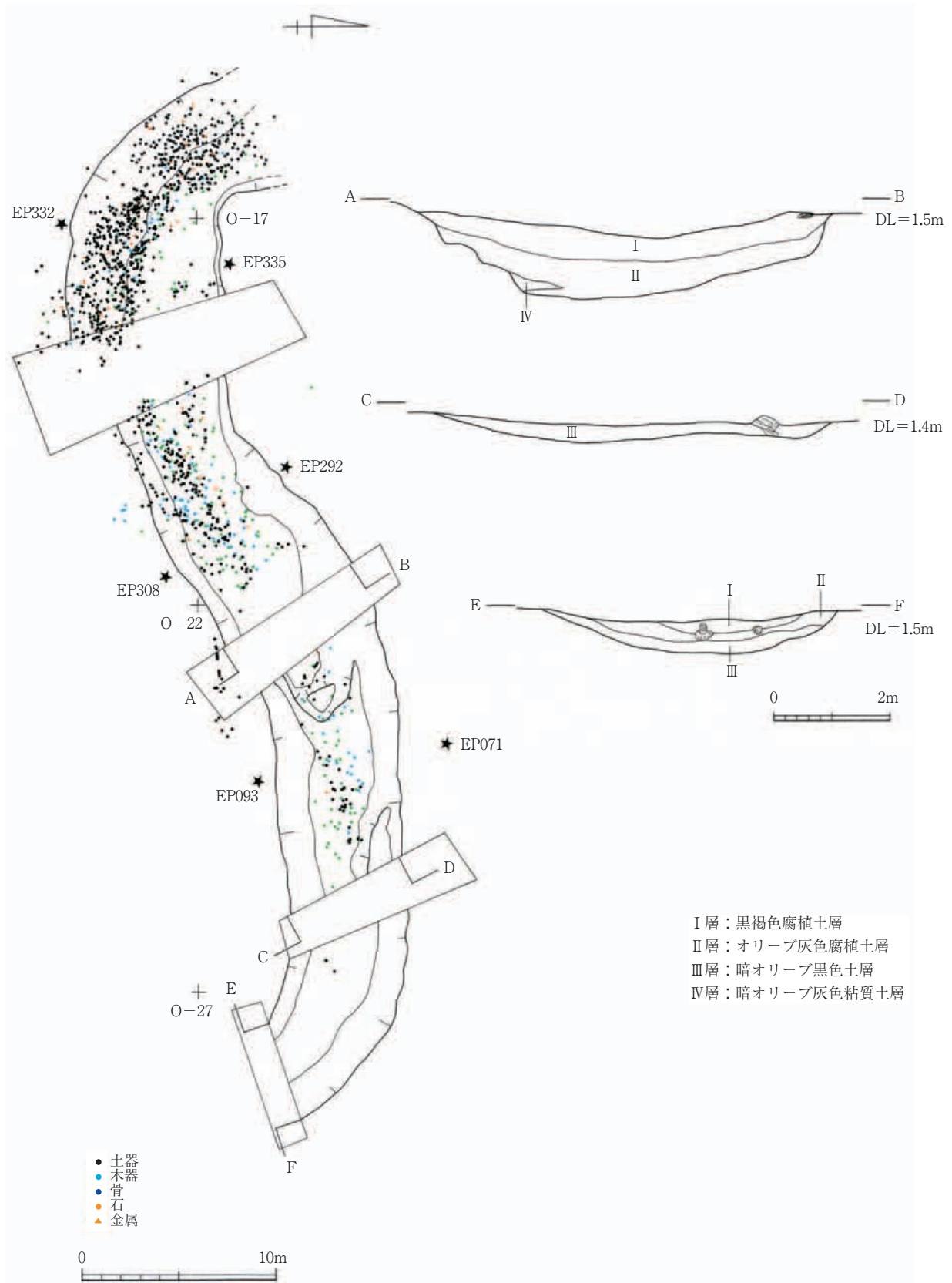


Fig. 11 SR3 実測図

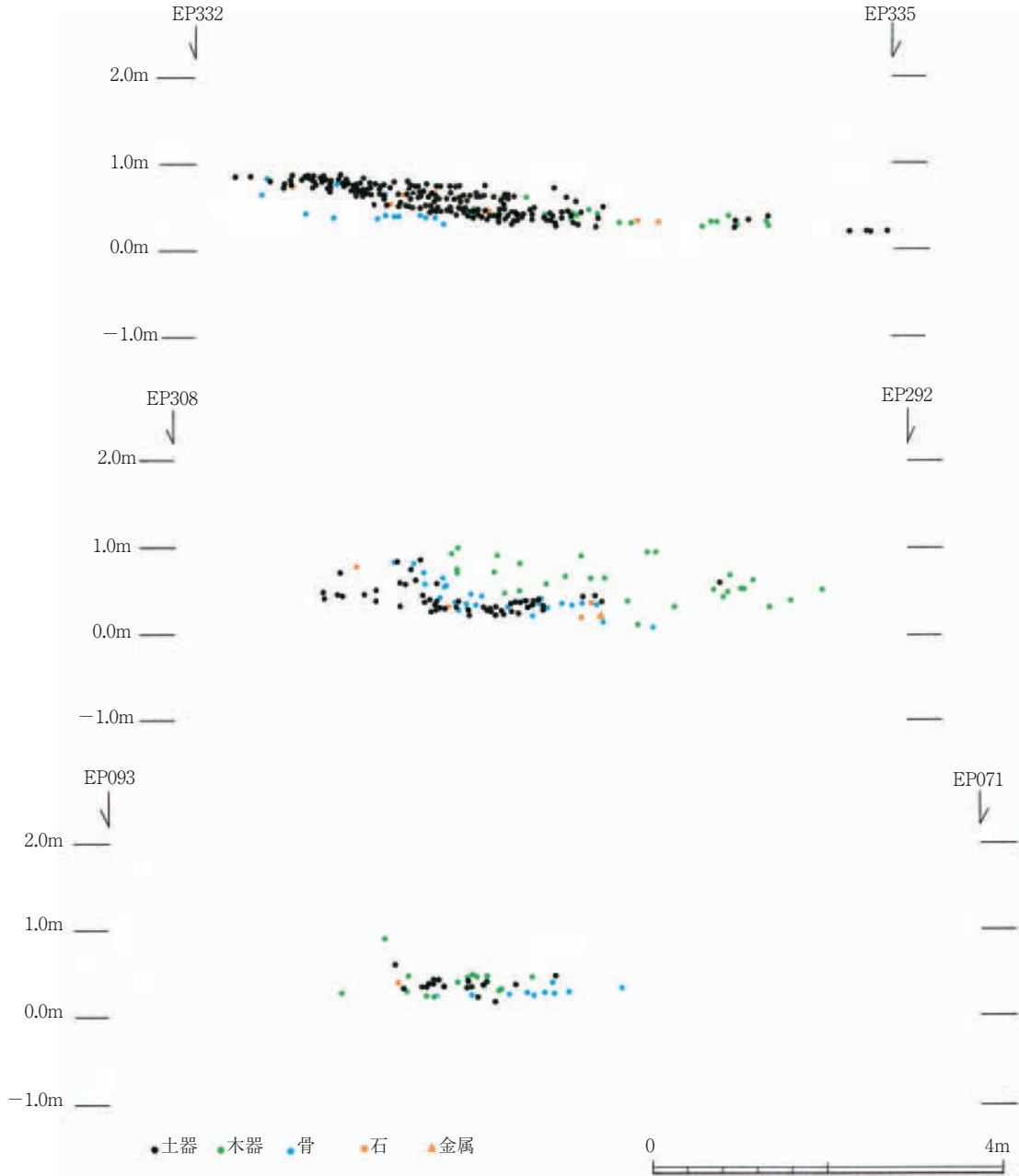


Fig. 12 SR3 垂直分布図

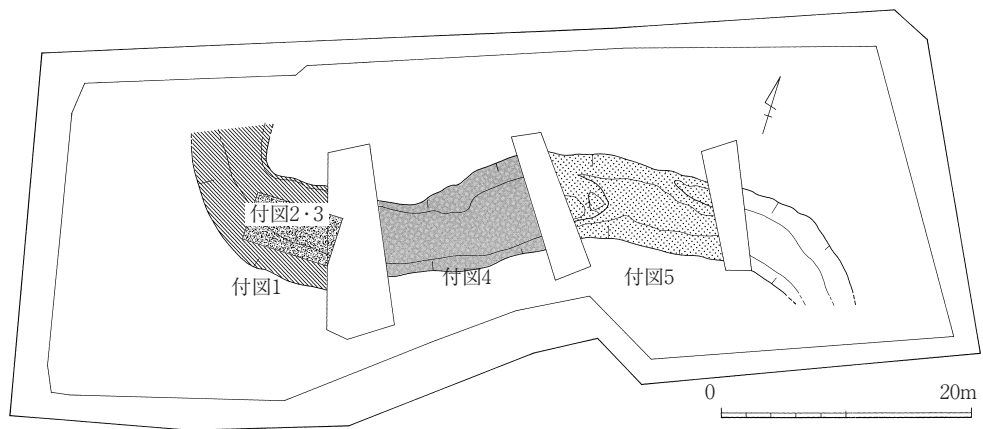
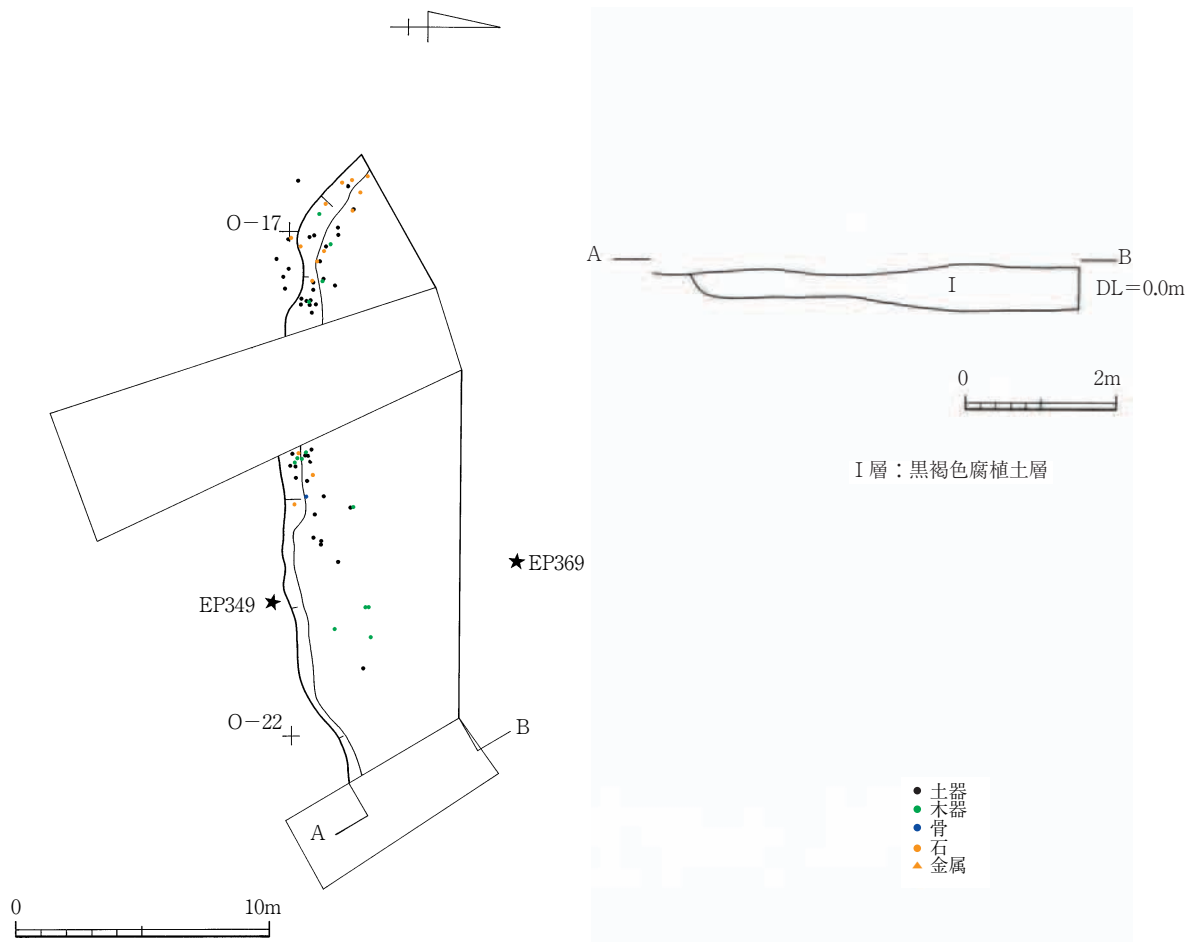


Fig. 13 SR3 付図略図



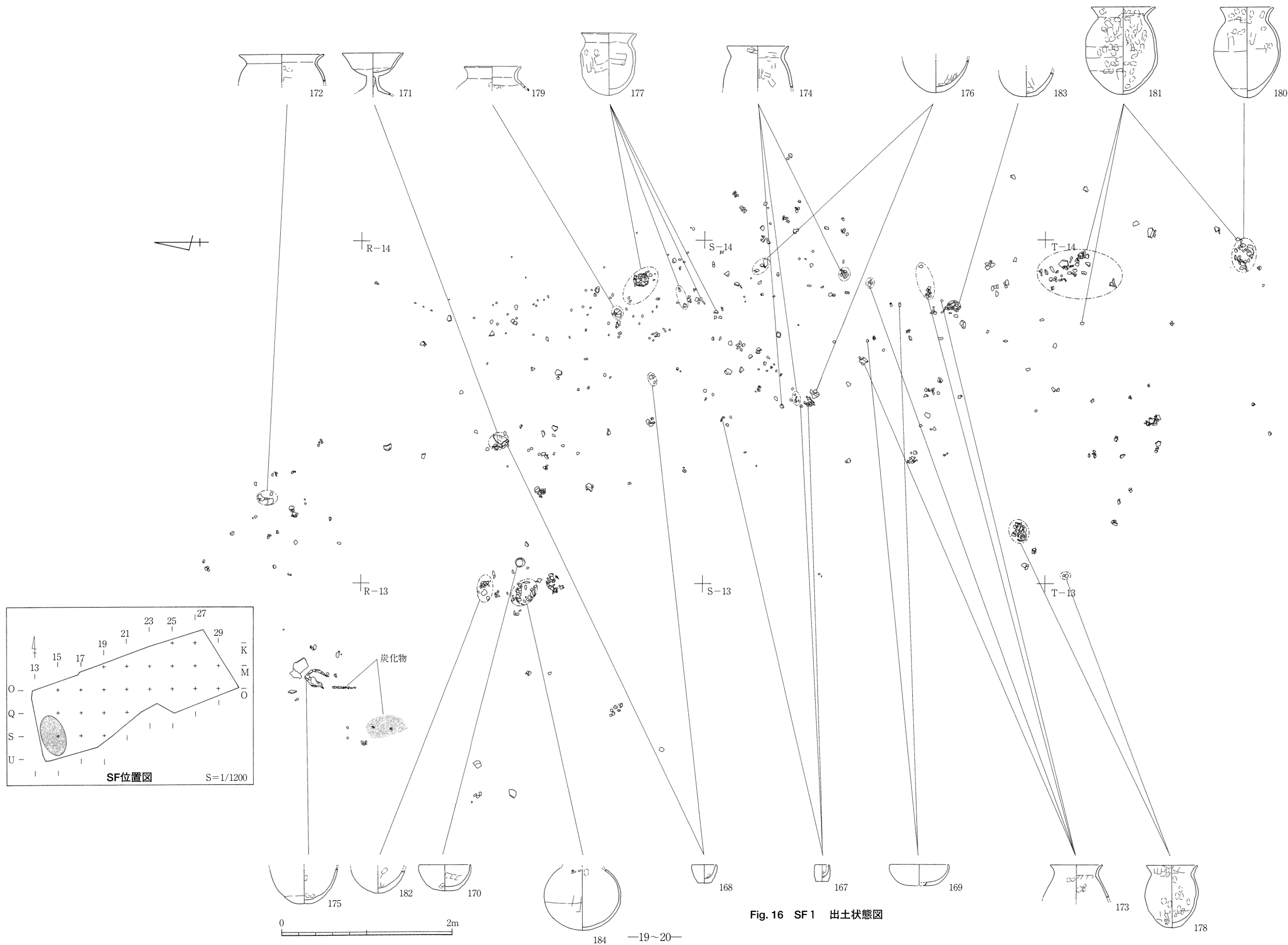


Fig. 16 SF 1 出土状態图

4. 出土遺物

出土遺物は、SR1～4・SF1の各遺構及び第VI層を中心とした包含層より主に出土している。中でも古墳時代の流路であるSR3からの遺物が多量に出土している。SF1については、包含層中での集中地点であるが遺物類も流れ込みではなく現位置からの移動はないと判断したため当時の祭祀場所と捉え、遺物集中地点SF1として説明していく。

出土遺物は、流路跡や包含層出土という性格から各遺構・包含層ごとに種類・器種別に概要を述べていくが、法量等の詳細は観察表を参照されたい。

1) SR1

SR1からは土師器、瓦器、木製品、獣骨等を含め約450点余りの遺物が出土している。中でも土器については細片が多いため図示出来るものは少数であった。ここでは実測可能であった遺物について説明していくこととする。獣骨については別章を参考していただきたい。

①瓦器

1～10は瓦器碗である。1～3、5～10は和泉型と呼ばれる碗の形態を有している。1、2は口縁部のみ残存している。3は口縁部から体部にかけて残存しており、体部はやや丸みをもちながら口縁部に至る。外面は指頭圧痕とナデ、内面には横方向のミガキ調整が見られる。口縁端部はナデ調整のためやや外反している。5～9も体部から口縁部にかけて残存している。体部外面には指頭圧痕、口縁部外面には横ナデ、内面にはミガキ調整が施されている。10は底部が欠損しているが断面三角形状の輪高台を貼り付けている。体部外面には指頭圧痕、口縁部外面はナデ調整が施されている。4は体部から口縁部にかけて残存している。体部はやや丸みをもって立ち上がり、口縁部に至る。内面には横方向のミガキ、外面には不定方向のミガキが施されている。口縁端部内面には一条の沈線が入る。楠葉型に属する。

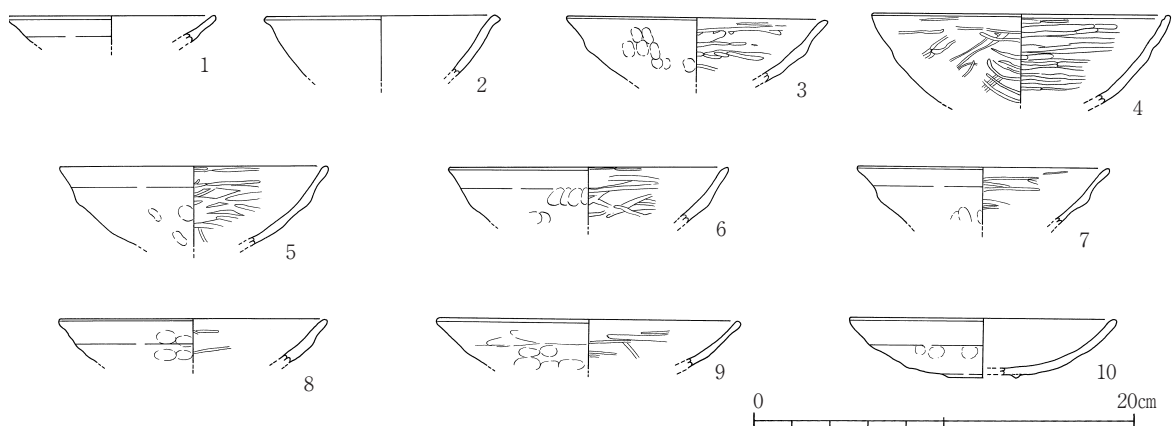


Fig. 17 SR1 出土遺物実測図

②木製品

11は、木刀である。全長は16.6cm、最大幅は2.7cmを測る。刃部分は一部欠損しているが把部分は残存している。把頭は6.8cm、把間は7.5cmを測る。12は、刀剣把装具の一部である。全長は13.2cm、最大幅は2.8cmを測る。剣の把部分をはめ込むものと考えられ、中心には4mmを測る孔が施されている。13と14は共に人形と考えられる。14は一部欠損している。13は、全長12cm、最大幅は3.4cmを測る。

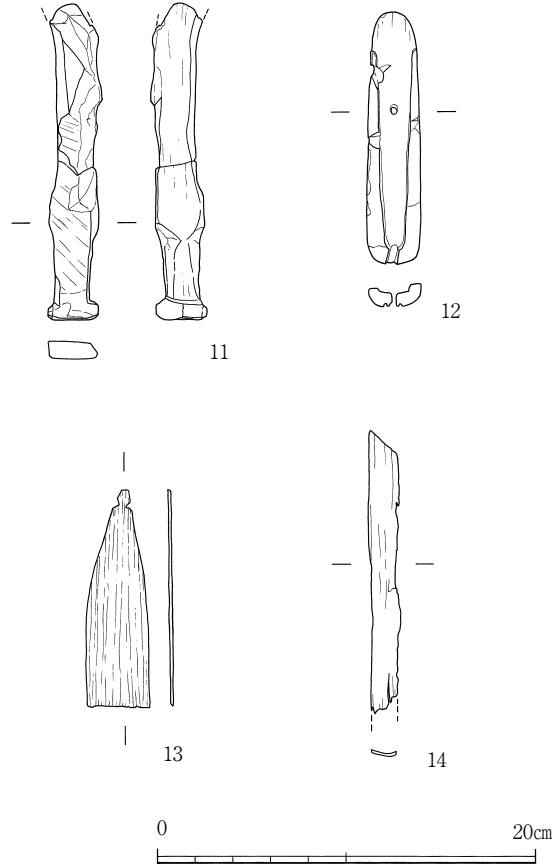


Fig. 18 SR1 出土遺物実測図2 (木製品)

2) SR2

SR2からは土師器、須恵器、曲物、杭等の土器、木製品合せて約250点が出土している。SR1と同様に細片が多いため図示できたものは数点である。すぐ下層にはSR3が形成されており、SR3に属する遺物も混入している。木製品の中でも杭は流路肩部分に打ち込まれており、土留めに使用されたと考えられる。

①須恵器 (古代)

15と16は杯である。底部は平坦で外面には回転ヘラ切り痕が見られる。体部は屈曲して斜め上方に伸び口縁部に至る。口縁部・体部内外面ともナデ調整がされており、火襷が15は内面に16は外面に入る。17は口縁部から頸部にかけて残存する壺である。口縁部から頸部にかけては「く」の字状を呈し、口縁端部は上方につまみ上げている。一部自然釉がかかる。

②土師器 (古墳)

18は甕の口縁部である。頸部外面にはヘラナデの指頭圧痕がなされ、口縁部内外面には横ナデと一部ヘラナデが施されている。19は口縁部外面に横ナデと指頭圧調整がなされ、頸部にはヘラ痕が見られる。内面には横ナデ及びヘラナデ調整が施されている。内外面とも一部煤が付着している。

③須恵器 (古墳)

20は杯の身である。立ち上がり部分は欠損しているが、受部の部分は斜め上方に伸びている。底部外面には回転ヘラ削り調整がされている。

④木製品

21は曲物である。底板はなく側板のみ残存している。両端を合せ円筒形状にし繋ぎ部分は縦方向に綴じ合せている。22は全長18cm、全幅4.5cmを測る板状製品である。両端は丸く形成されている。23は全長18cm、全幅2cmを測る棒状製品である。一部は炭化している。24から36は杭である。全体が把握できるものは少なく先端部分のみが多い。割木の物は少なく丸木の先端を削り、杭として使

用している。全厚は3.5～5.6cmの丸木が多く、中には31のような8.5cm大のやや大振りのものも存在する。(竹村)

3) SR3

SR3からは、土師器、須恵器、木製品等が出土しており、本遺跡の中で最も出土量が多い。中でも土師器類の出土が多く、高杯・甕がまとまって出土している。流路という遺構の性格上、出土遺物は種類・器種ごとに説明を行うことにする。尚詳細は、観察表を参照願いたい。

①土師器

手捏ね土器

37～39は、手捏ね土器である。底部片であるが37は丸底風、38は平底である。いずれも内外面に明瞭な指頭圧痕が残る。

椀

40は、脚付椀の底部片であるが、脚部は「ハ」の字状に開き、内面はヘラナデ外面はナデ調整が施される。41～52は椀である。これらの中で形態的な特徴で、41～44は底部が平坦で体部が直線的なものである。中でも41は、やや小振りの椀で口縁部内外面ヨコナデ、体部内面ナデ外面はヘラナデ調整である。45～47・49は、丸底で体部は内弯して外上方に立ち上がるものである。48・50は、平底で内弯して外上方に立ち上がるものである。51・52は大振りの椀で、51は底部が平坦で体部は直線的で口縁部は外反する。52は丸底気味で体部は内弯して外上方に立ち上がり、口縁部は強く外反するものである。

高杯

53～75は高杯である。53・54は脚部欠損。53は、坏部下方に段を有し口縁部にかけて直線的に立ち上がり端部は若干外反する。口縁部内外面横ナデ。小礫を多く含む。54は、坏部下方に緩い稜を有し口縁部にかけて直線的に外傾して立ち上がる。口縁部内外面横ナデ。小礫を多く含む。55～57は、杯部が欠損している。55・56は脚部下方で屈曲し裾へ開く。外面はナデ、裾は内面横ナデで柱状部内面はヘラ削り。小礫を若干含む。57は、脚部はなだらかに「ハ」の字状に裾に開く。柱状部は外面ナデ、内面はヘラ削りで裾部は横ナデ調整。全体的に小礫を多く含む。

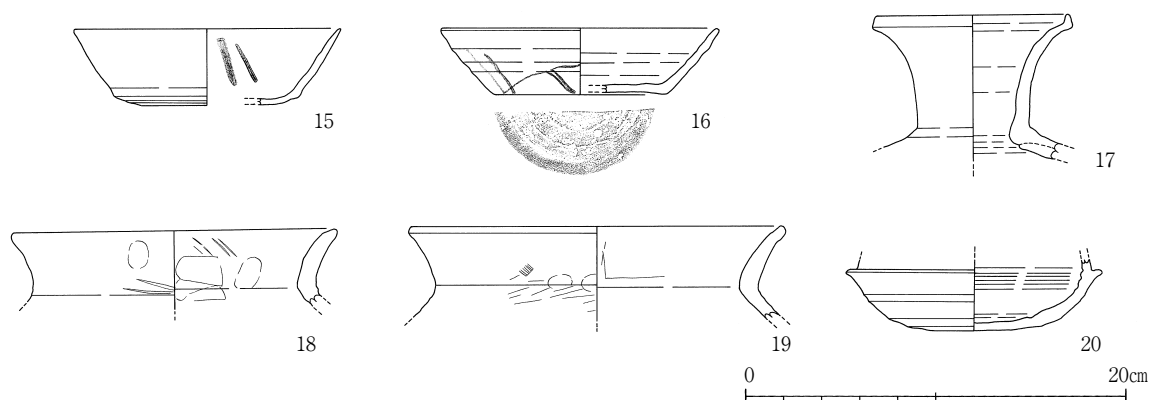


Fig. 19 SR2 出土遺物実測図1

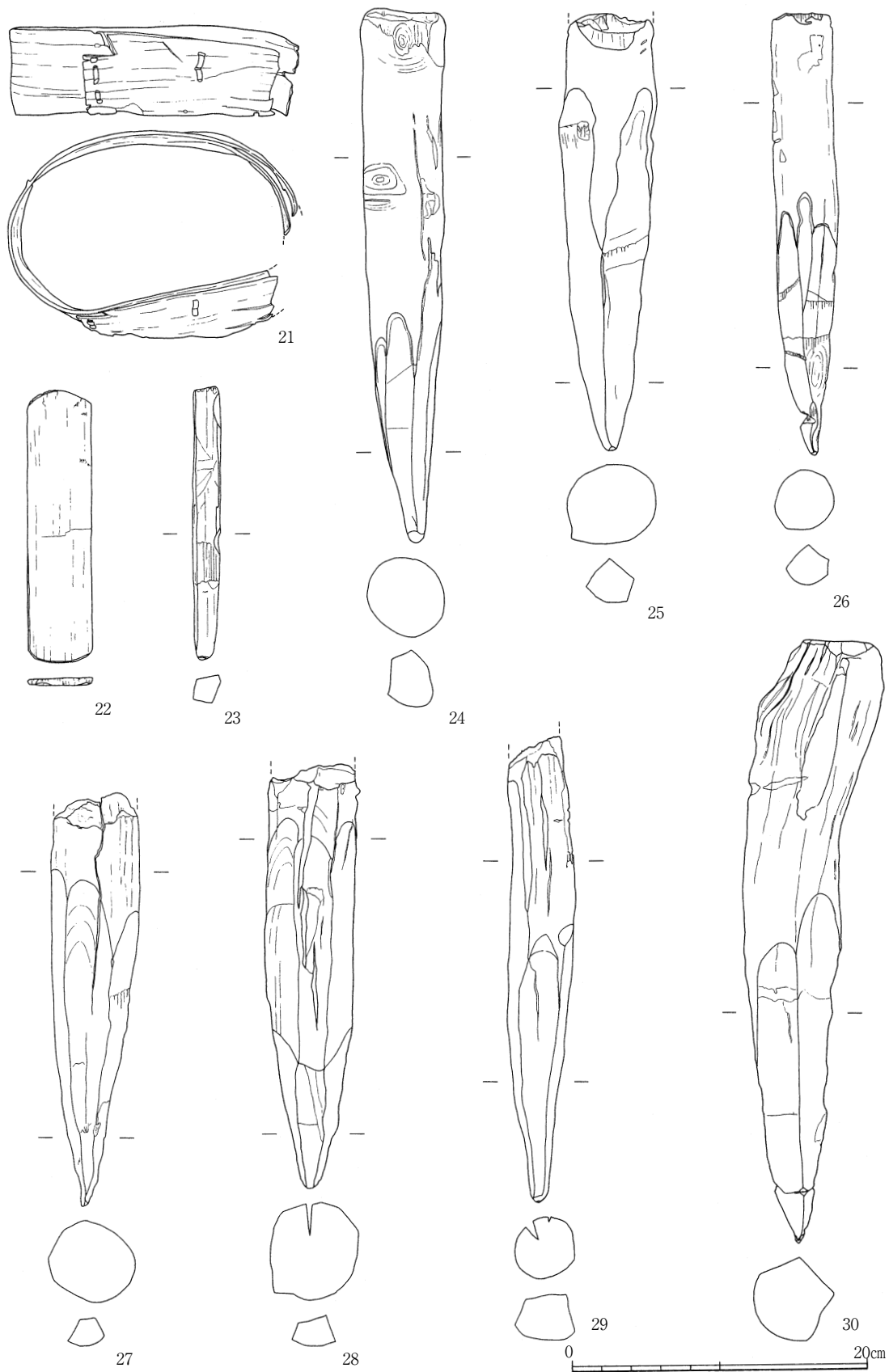


Fig. 20 SR 2 出土遺物実測図 2 (木製品)

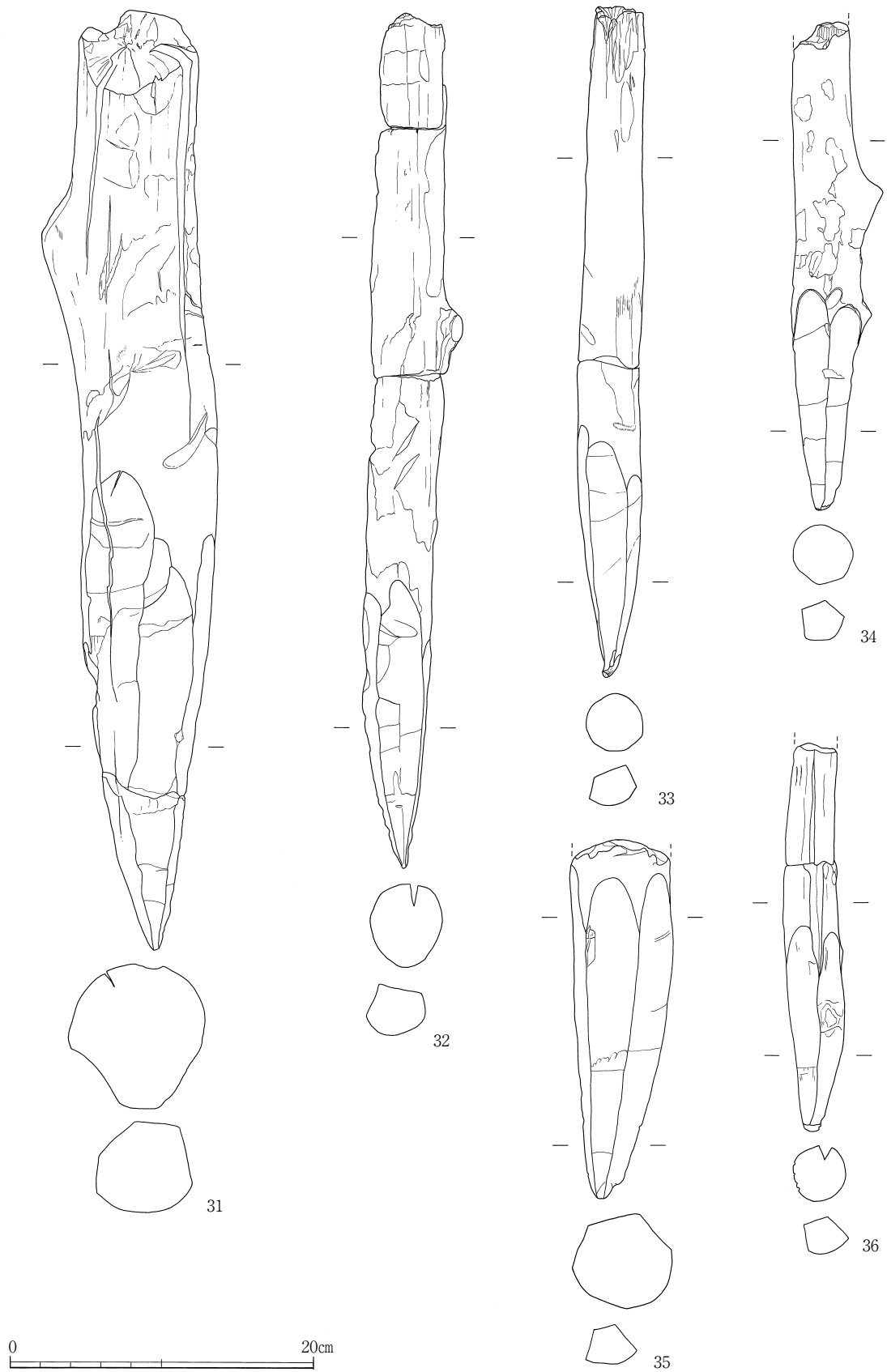


Fig. 21 SR 2 出土遺物実測図 3 (木製品)

58～61は脚部欠損。58は、坏部下方に稜を有し口縁部にかけて直線的に外傾して立ち上がる。口縁部内外面横ナデで小礫を少し含む。59は、坏部下方に緩い稜を有し口縁部にかけて直線的に外傾して立ち上がり口縁部は外反する。口縁部内外面横ナデ。60は、坏部下方に段を有し口縁部にかけて直線的に立ち上がり端部は若干外反する。口縁部内外面横ナデ。下半はナデ調整。61は、坏部下方に稜を有し口縁部にかけて直線的に立ち上がり端部は若干外反する。口縁部内外面横ナデ。小礫を少し含む。

62～64は、裾部が欠損している。62は、坏部下方に段を有し口縁部にかけて直線的に外傾して立ち上がり口縁部は外反する。口縁部内外面横ナデ、脚部はナデ。小礫を少し含む。63は、坏部下方に段を有し口縁部にかけて直線的に外傾して立ち上がる。口縁部内外面横ナデ。脚部は外面ナデ、内面ヘラ削りで小礫を多く含む。64は、坏部はゆるい稜を有し口縁部にかけて外傾する。内面は摩耗して調整不明。外面は横ナデ・ナデ調整である。

65～75は全体の形状を窺い知ることができる。65は、脚部は屈曲し裾が開く。坏部は段を有し体部から口縁にかけて外傾する。坏部は横ナデで内面一部ヘラナデが施される。脚部外面ヘラナデと横ナデで内面ヘラ削り。66は、脚部は下方で屈曲し裾へ開く。坏部は稜を持ち口縁部は内弯し外傾

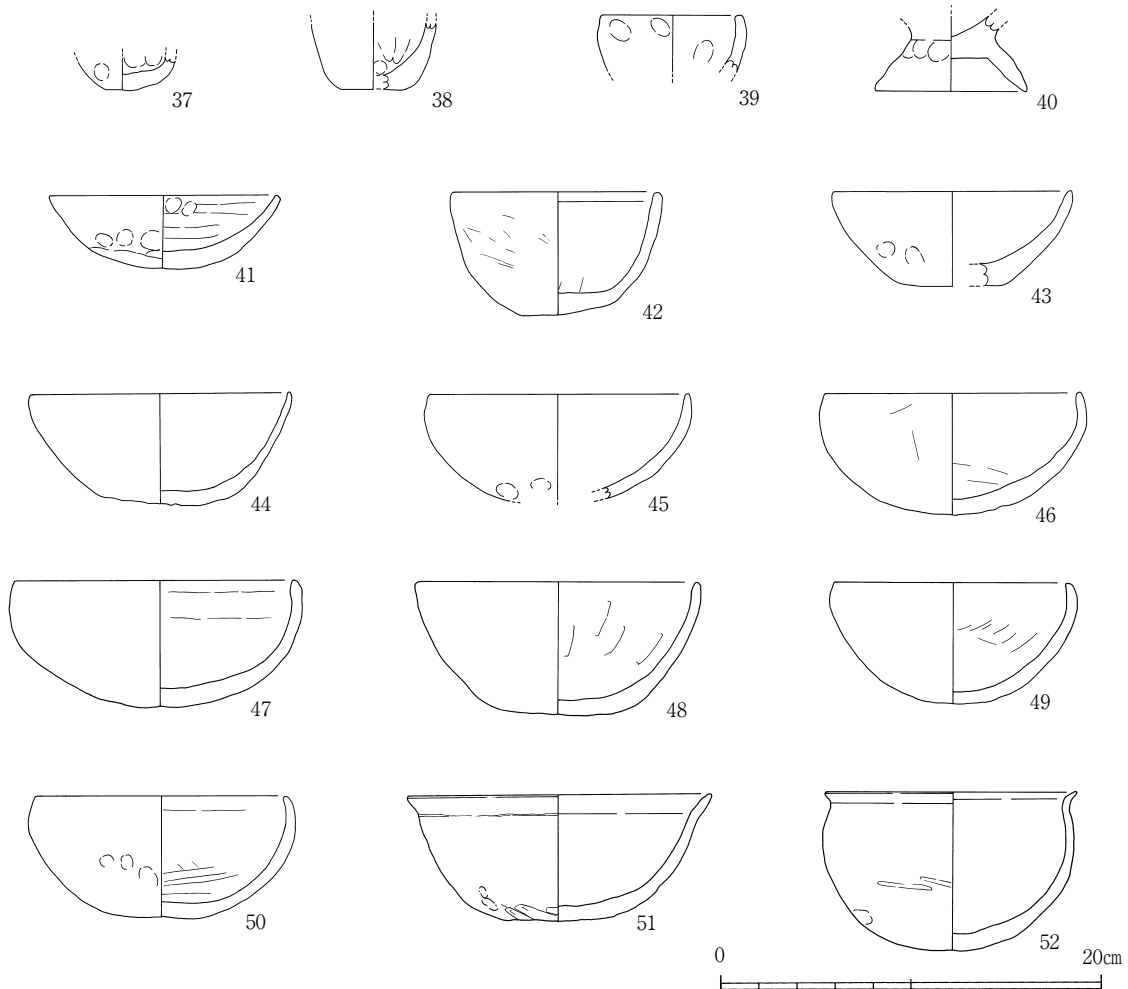


Fig. 22 SR 3 出土遺物実測図 1

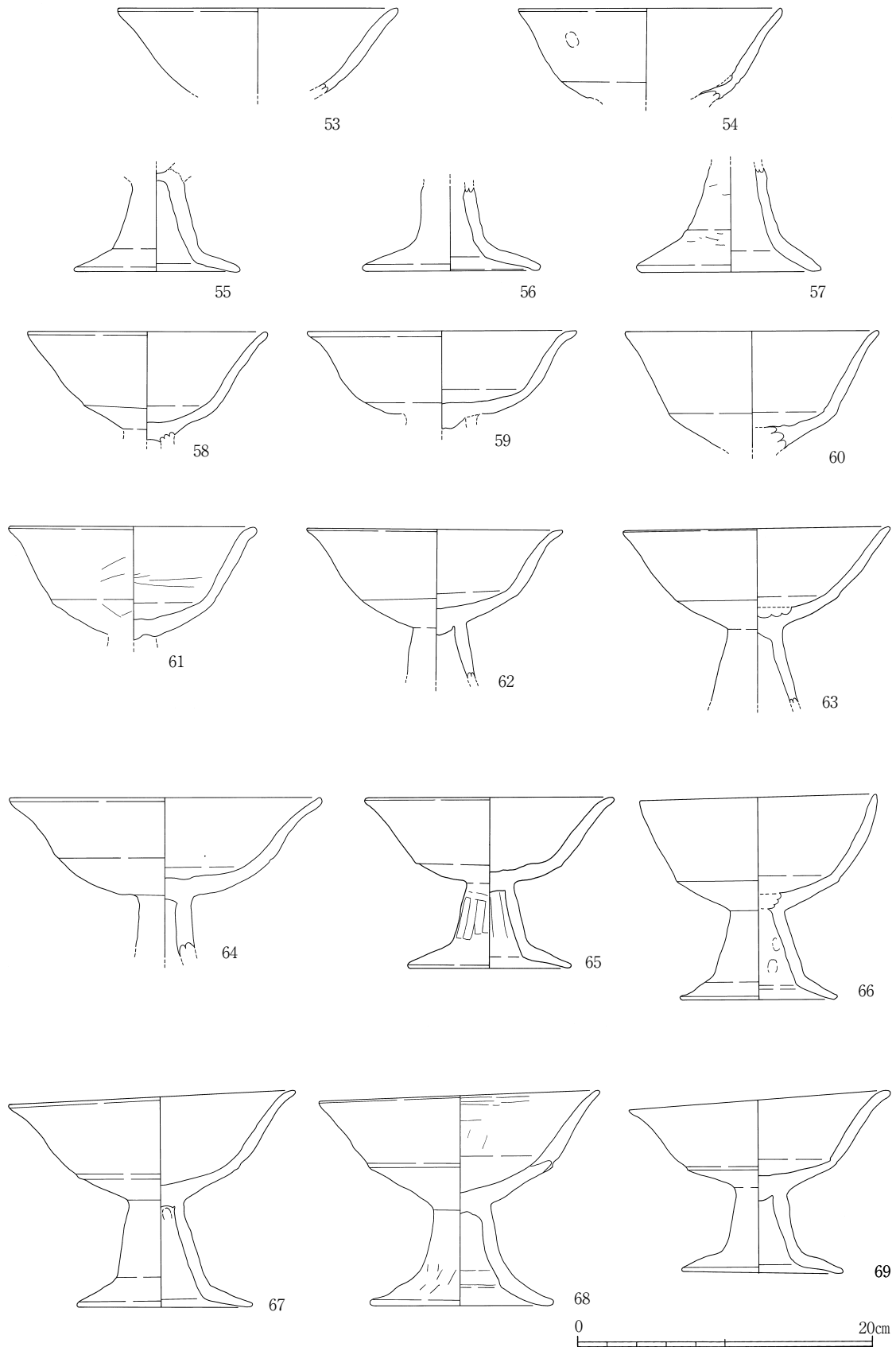


Fig. 23 SR 3 出土遺物実測図 2

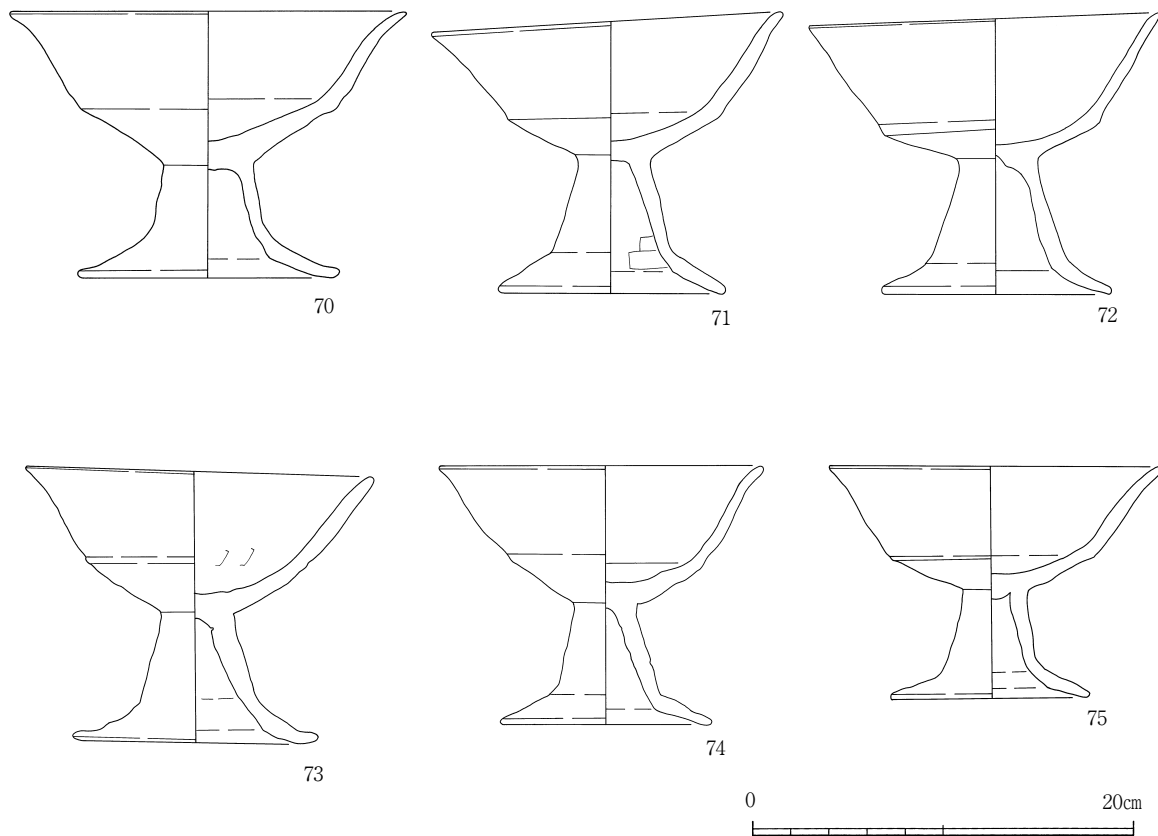


Fig. 24 SR 3 出土遺物実測図 3

する。体部から口縁部内外面は横ナデ。脚部はナデ、裾横ナデ調整。内面はヘラ削り圧痕。胎土は小礫を少し含む。67・69は、脚部が下方で屈曲し裾へ開く。坏部は段を持ち口縁部は外反する。坏部体部から口縁部内外面は横ナデ。脚部はナデ調整。内面はヘラ削り。胎土は小礫を多く含む。68・70の脚部はなだらかに「ハ」の字状に裾が開く。坏部は段を有し体部から口縁にかけて外傾する。坏部は横ナデで内面一部ヘラナデがされる。脚部外面ヘラナデと横ナデ、内面ヘラ削り。小礫を多く含む。71・72は、脚部は下方で屈曲し裾へ開く。坏部は段を持ち口縁部は直線的に外傾する。体部から口縁部内外面は横ナデ。脚部はナデ調整。内面はヘラ削り。胎土は小礫を多く含む。73の脚部はなだらかに「ハ」の字状に裾に開く。坏部は下半で稜を有し体部から内弯し口縁は外傾する。坏部は横ナデで内面一部ヘラナデがされる。脚部外面ヘラナデと横ナデ。内面ヘラ削り。小礫を多く含む。74・75の脚部は下方で屈曲し裾へ開く。坏部は稜を持ち口縁部は内弯し外傾する。体部から口縁部内外面は横ナデ。脚部はナデ・裾横ナデ調整。内面はヘラ削り。胎土は小礫を多く含む。

甑

甑と考えられる底部片で、外面から焼成後楕円状に直径8mmの孔が穿たれる。外面荒いハケ調整で、内面指頭圧痕と煤付着。胎土は角尖石を含む。

甕

77は底部欠損。頸部は、上方に立ち上がり口縁部は緩やかに外傾する。胴部中位下半に煤付着。胴

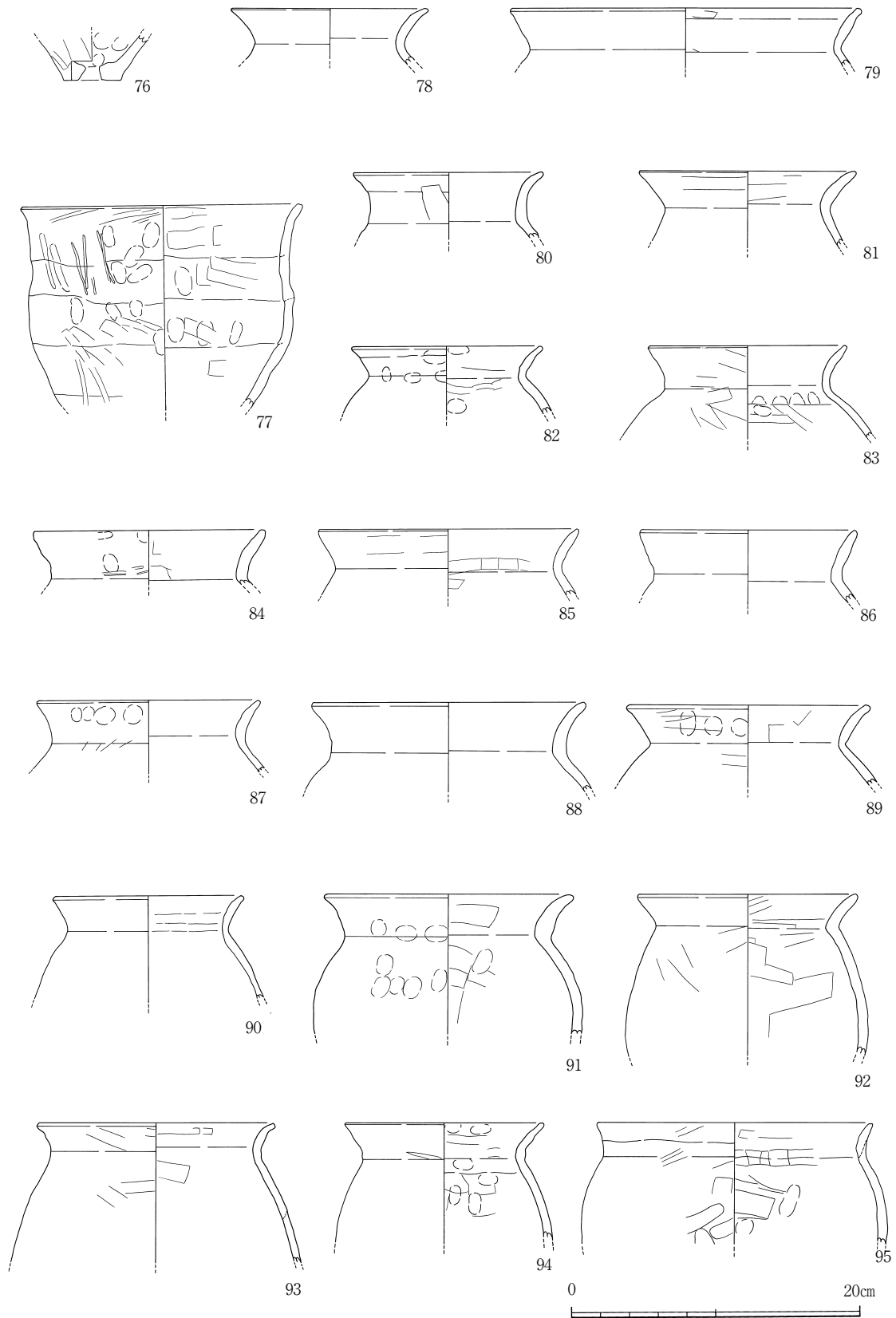


Fig. 25 SR 3 出土遺物実測図 4

部中位に最大径。全体的にヘラナデ及びナデ調整。78～89までは、口縁部から頸部まで残存する。口縁部が緩やかに外反するものから、「く」の字状に外反するものがある。90～107までは、胴部中位まで残存するものであるが95・96・101は、口縁部が緩やかに外反し、その他は「く」の字状に外反するタイプである。胴部中央部に最大径をもつものが多い。108・109・110・118は、底部が欠損する。いずれも胴部中位に最大径を有する。口縁部は、118を除き「く」の字状に外反する。111・112は、小型の甕である。外面ヘラナデが残る。113・114は、完形品に近い物であるが胴部上位に最大径を持つ物である。116・117は、胴部から底部にかけて残存する甕で、内外面ヘラナデが残る。119～122はほぼ完形品に近いもので、いずれも胴部中位に最大径を持つ。119の口縁部は緩やかに外反し、120～122は、口縁部が「く」の字状に外反する。

壺

123～125は、壺の口縁部破片である。123・124は、口縁部が外傾し立ち上がるもので、125は直線的に上方に立ち上がる。126は、口縁部が外傾し肩部が張る。127の底部は丸底で胴部は球形を呈し胴部中位に最大径を有する。口縁部は、上方に内弯気味に立ち上がり端部はやや肥厚し内傾する

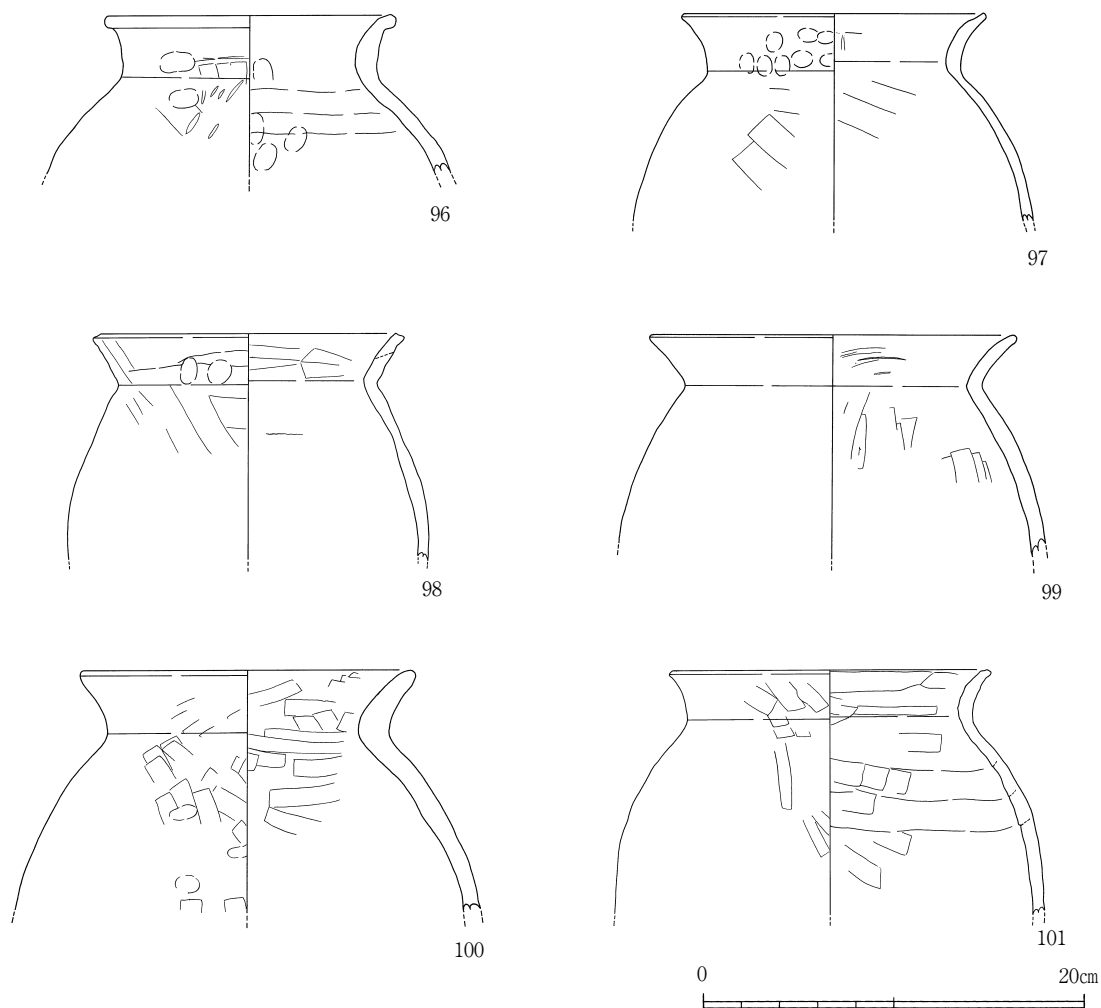


Fig. 26 SR 3 出土遺物実測図 5

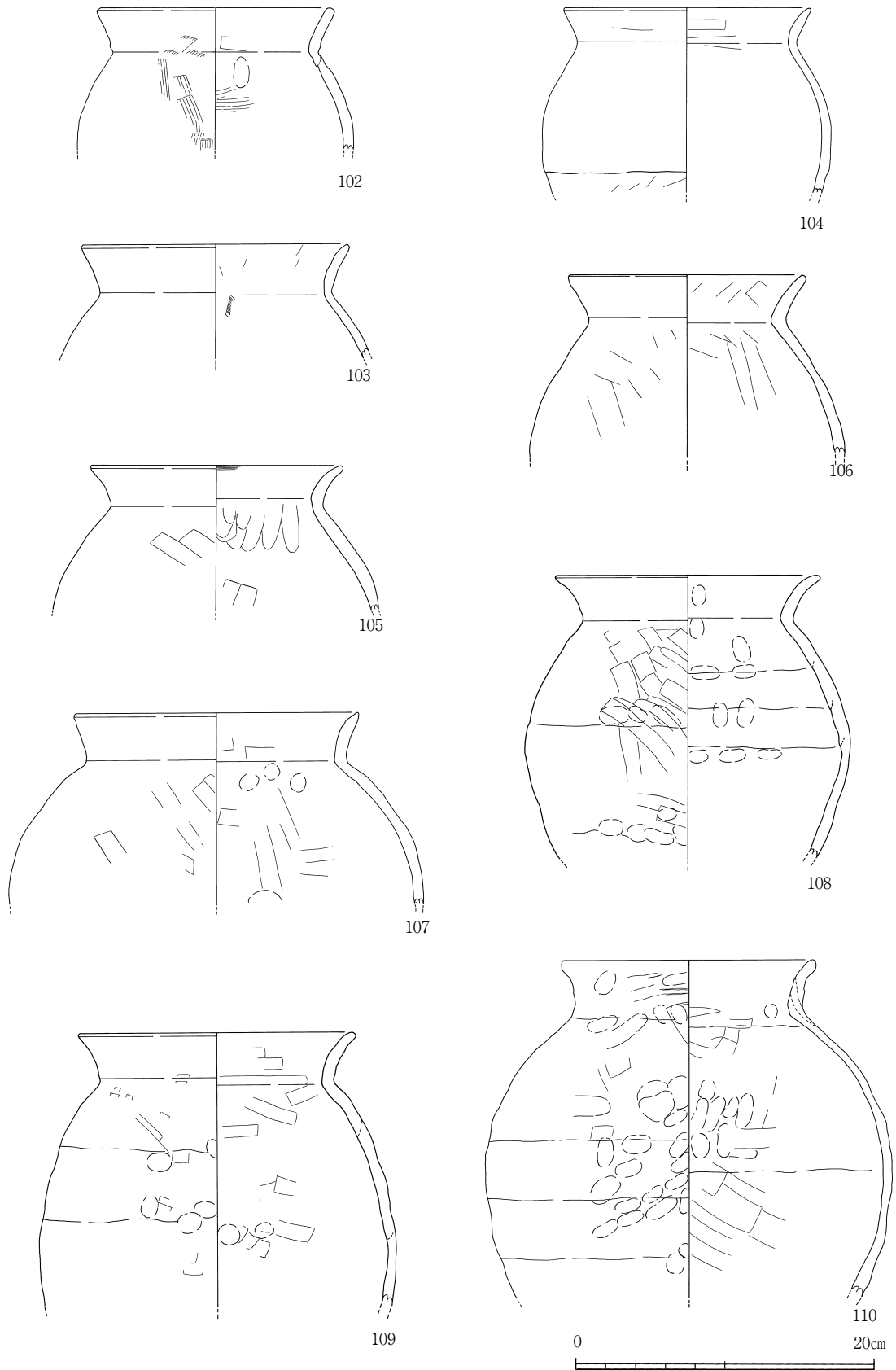


Fig. 27 SR 3 出土遺物実測図 6

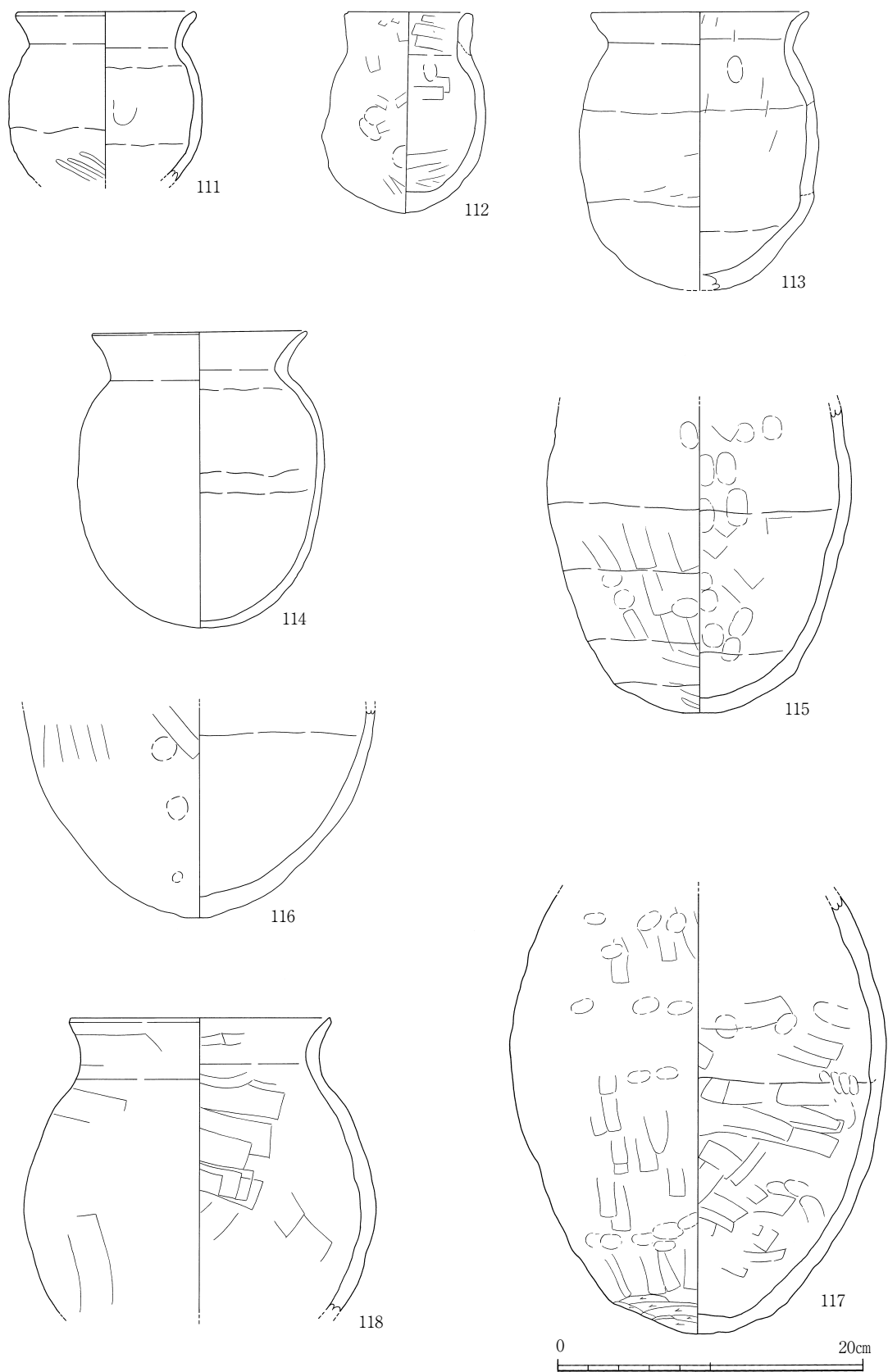


Fig. 28 SR 3 出土遺物実測図 7

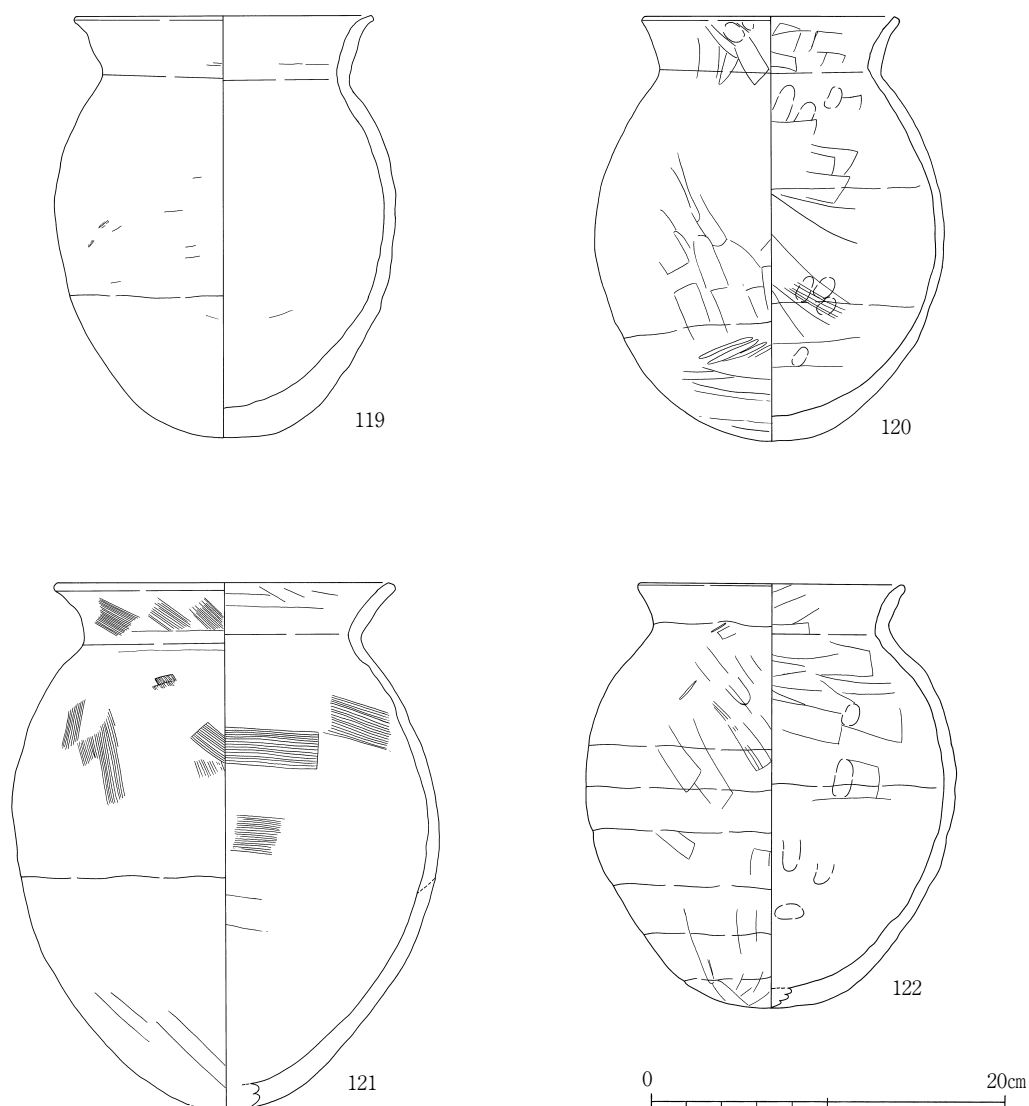


Fig. 29 SR 3 出土遺物実測図 8

面を有する。口縁部内外面ヨコナデ。胴部内外面はナデ及びヘラナデ調整。内面に粘土帯接合痕が残り小礫を多く含む。128～131は口縁部が欠損している。底部丸底で、胴部は張りがあり球胴形を呈し胴部中位に最大径を有する。

②須恵器

132～134は杯蓋である。132は口縁部直線的に下方に下がり端部は平坦。断面三角形の稜をなし、天井部はほぼ平坦である。天井部は3/5に回転ヘラ削り調整で他は回転ナデ調整である。天井部の一部に自然釉が残る。133は、口縁部内弯気味に下方に下がり端部は内傾する凹面をなす。断面三角形の稜をなし、天井部は丸く高く2/3に回転ヘラ削りで他は回転ナデ調整である。134は、口縁部やや外傾し下方に下がり端部は平坦である。断面三角形の稜をなすが鋭くない。天井部は欠損するが回転ヘラ削りで他は回転ナデ調整である。

135～138は杯身である。135は、口縁部立ち上がりは内傾してのび、端部は内傾する。受部は水

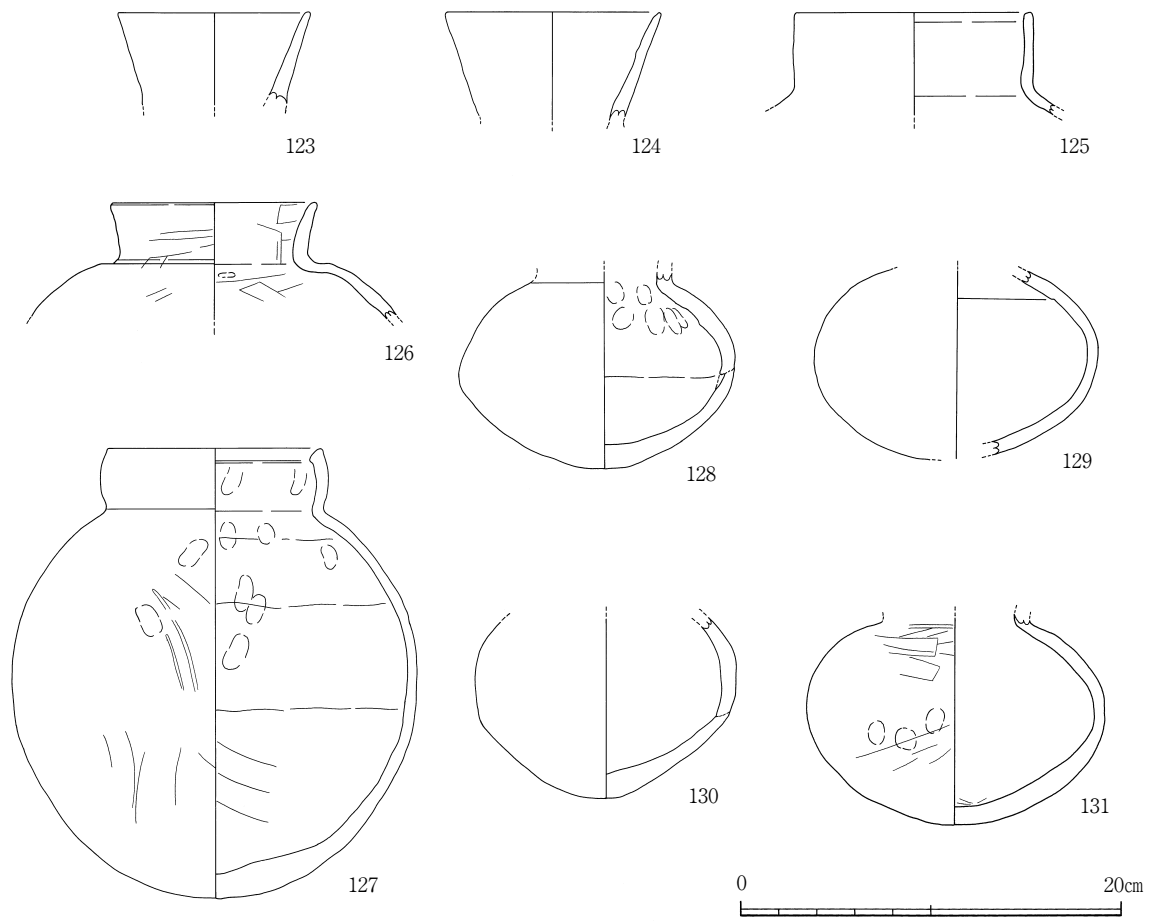


Fig. 30 SR 3 出土遺物実測図9

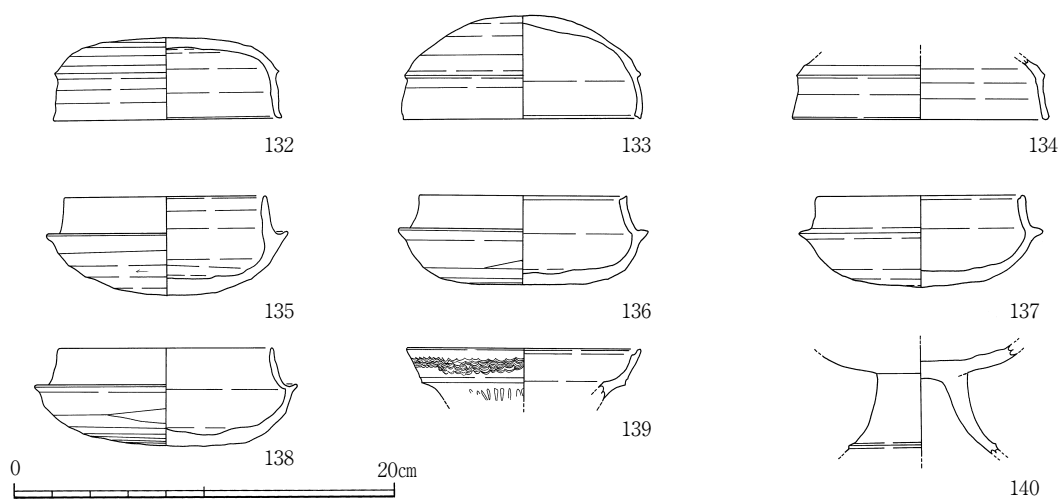


Fig. 31 SR 3 出土遺物実測図10

平に開く。底部はややいびつで丸みを持ち2/3に回転ヘラ削りが施される。外底に「/」状のヘラ記号を持つ。他は回転ナデ調整。136は、口縁部立ち上がりは内傾してのび端部はさらに内傾する。受部は水平に開く。底部は、平坦で2/3に回転ヘラ削りが施される。他は回転ナデ調整。137は、口縁部立ち上がりは内傾してのび、端部は内傾し凹面をなす。受部は水平に開き断面三角形を呈する。底部は丸みを持ち2/3に回転ヘラ削りが施される。他は回転ナデ調整。138は、口縁部立ち上がりは内傾してのび端部は丸くおさめる。受部は水平に開く。底部は、平坦で4/5に回転ヘラ削りが施される。他は回転ナデ調整が施される。

139は、甕の口縁部破片である。口縁部で屈曲し、直線的に外傾し端部は内面に浅い凹線をなす。口縁部外面に5本単位の波状文と頸部外面に刺突文を施す。140は高杯である。坏下部から脚上部まで残存しており、脚部中位に一条の凸線が巡る。脚部の一部に自然釉が残る。

141～143は須恵器甕である。141は、胴部破片で外面に平行叩きの後カキ目調整。内面は同心円文がナデ消される。142の口頸部は外反して立ち上がり、端部は拡張され外傾する凹面をなす。肩部は緩やかに下り胴部上位に最大径を有す。胴部下位は欠損。頸部から口縁部にかけて回転ナデ調整。胴部外面平行叩きの後カキ目調整。内面同心円文の後ナデ調整。143は胴部破片である。外面は平行叩き。内面はナデ調整。

③木製品

SR3から出土した木製品は、不明木製品が多くさらに流路という遺構の性格上、古代から中世にかけての製品が混入している。ここでは、SR3出土の木製品の概要を見ていくことにするが、法量等の詳細は観察表を参照願いたい。

144・145は、武具としての矢形と考えられる。しかし先端部が欠損しており、類例も少なく不明な点が多く今後検討を要する製品である。146・147は、編具の木錘である。いわゆる槌の子であるが2点とも丸木材を用いており、柱状の丸材の両端に丸木面を残し中央に向かって両方から円錐形状に削り込んでいる。148は、両先端を尖頭形に削り込み片端に刻みを入れ込んでいる。中央部一面から溝状の削り込をいれ貫通している。149は、棒状の製品で片端が欠損している。150は、台状の製品の一部と考えられる。151・152は用途不明木製品で、方形の板材に径4cmの孔が穿たれる。153は、一木平鋤の把手と柄の部分と考えられ、鋤先の部分が欠損している。154・155は、用途不明木製品であるが153の平鋤としたものと組み合わせることができれば、櫂とも考えられ断面が紡錘形状を呈している点から掲載した。156から158は、幅2.5cm内外の薄い板状の物であるが、157・158には二対の円孔が穿たれている。159は、曲物の側板で桜の皮で留められている。160は曲物の底板で一部欠損している。159・160は上層流路の混入品と考えられる。161は用途不明木製品であるが、断面方形の角材に片端部に柄状の突起を削りだしている。

4) SR4

SR4は、部分的にしか調査できず出土遺物も数少ない。弥生土器が数点出土している。

162は甕で、胴部から外傾して外上方に立ち上がる。口縁部外面に刻みを施されている。内外面に指頭圧痕が多く残る。163は壺の頸部から口縁部にかけての破片である。頸部から緩やかに外反し貼付口縁を呈する。貼付口縁の外面には刻みが施される。その直下には円形浮文が張り付けられ

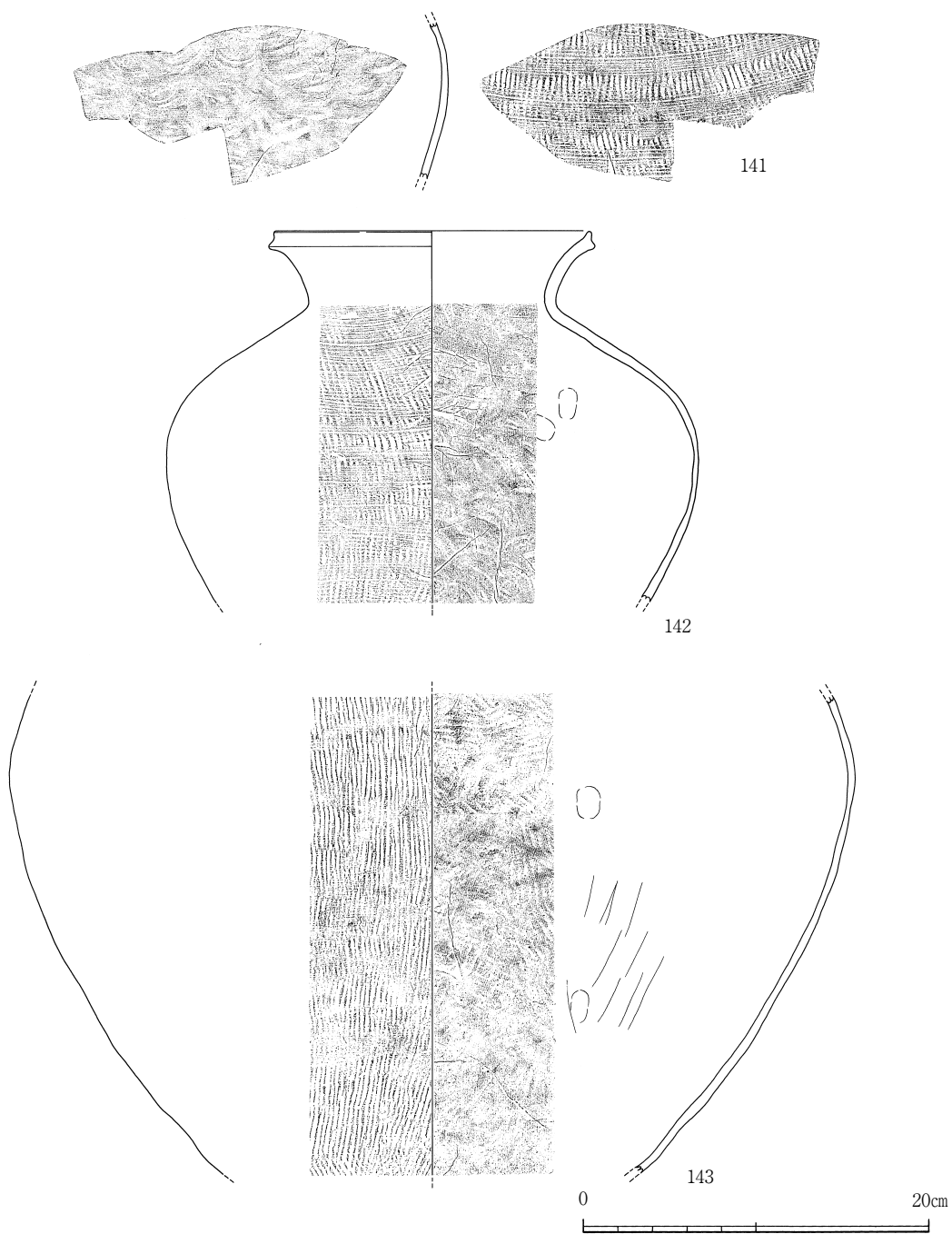


Fig. 32 SR 3 出土遺物実測図11

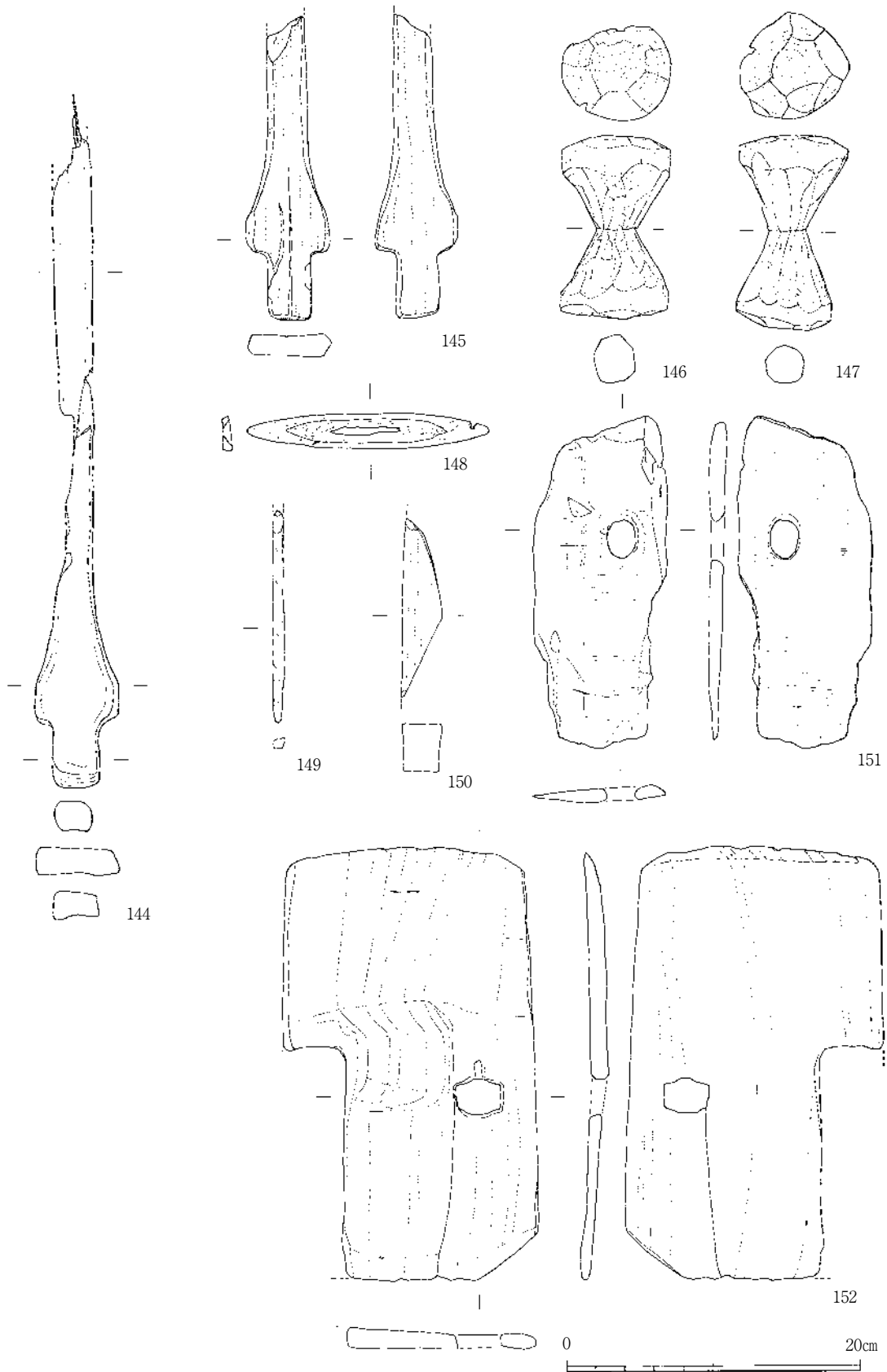


Fig. 33 SR 3 出土遺物実測図12

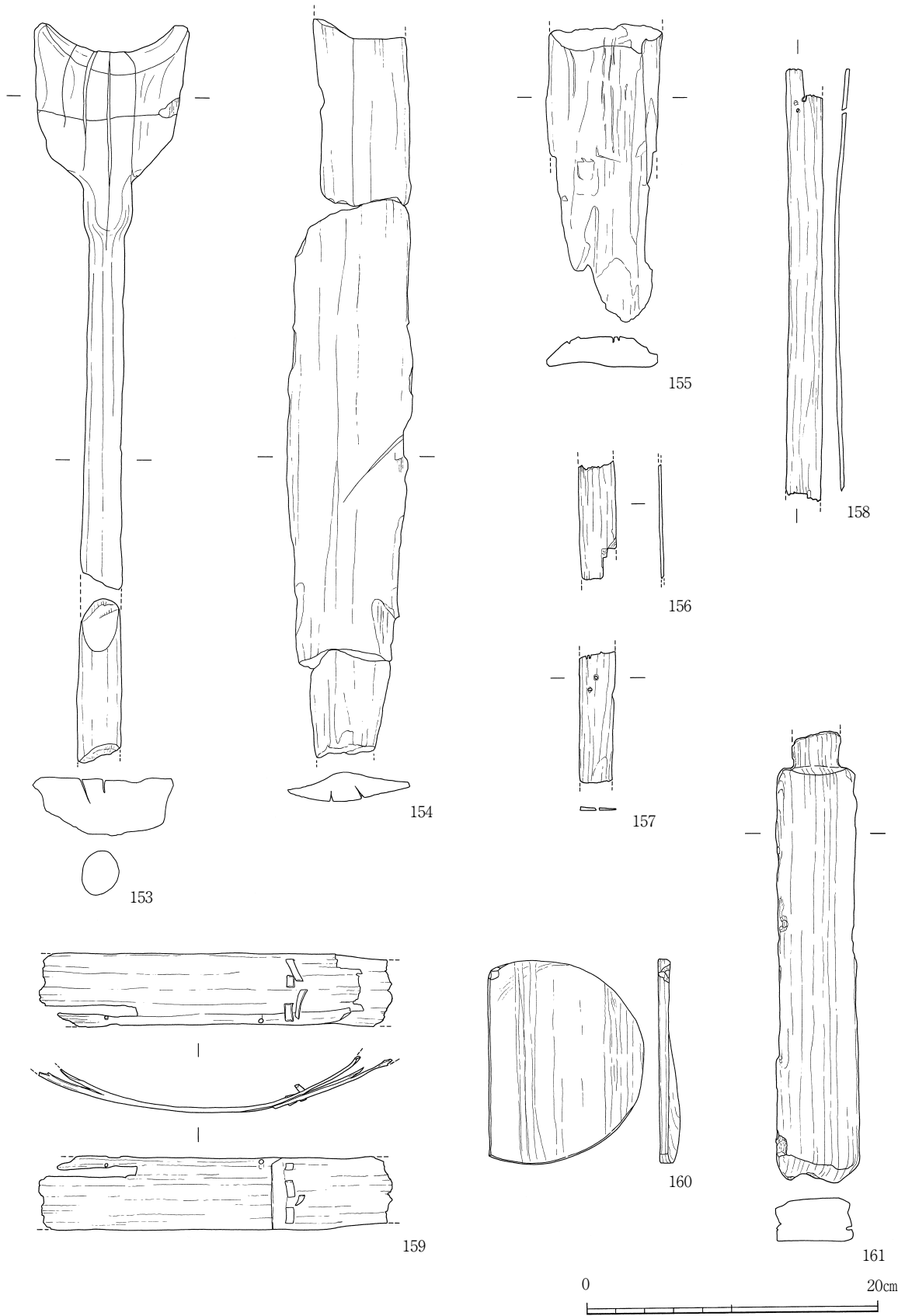


Fig. 34 SR 3 出土遺物実測図13 (木製品)

る。164は、壺であるが口縁部が欠損している。胴上部外面に6条のクシガキが2段に施され、その間にハケ状工具による列点文が斜位に施される。165・166は底部破片であるが、底部は平坦で166はやや広めの底部である。165は外面にハケ目が残る。

5) SF1

167・168は手捏ね土器である。いずれも底部は平坦で、内面に指頭圧痕が残る。169・170は椀である。169は、丸底気味で口縁部は内弯する。全体的に摩耗して調整不明瞭であるが、口縁部内外面ヨコナデ内面ヘラナデ外面はナデ調整である。170は、平底気味で口縁部は内弯する。口縁部内外面ヨコナデ体部内面ヘラナデ。外面は全体的に摩耗して調整不明。小礫を多く含む。171は高杯で脚裾部欠損している。脚部は屈曲して「ハ」の字状に開く。坏部は、緩やかな稜を持ち口縁部は直線的に外傾する。口縁部はヨコナデ。柱状部は外面ナデ、内面はヘラ削り。全体的に摩耗が著しい。172~183は甕である。177・178は、やや小振りの甕である。口縁部が残存しているものは、「く」の字状に外反する172・177・180・181や、緩やかに外反する173・174・178・179がある。胴部の最大径はいずれも中位にある。175・176・182・183は底部の破片で丸底を呈する。184は、壺であるが口縁部が欠損している。丸底の底部から胴部は球胴形を呈し胴部中位に最大径を有する。全体的に摩耗が著しく調整不明であるが、一部にヘラナデが認められる。

6) 包含層出土遺物

①土師器

185は椀で丸底の底部である。口縁部は内弯気味に外上方に立ち上がる。口縁部内外面ヨコナデ体部内面ヘラナデ。186も椀で高台をもち、体部は外上方に口縁部は上方に立ち上がる。内面はヘラナデ、外面は指頭圧痕が残る。187・188は高杯の脚部で、下方で屈曲し裾へ開く。脚部は外面摩

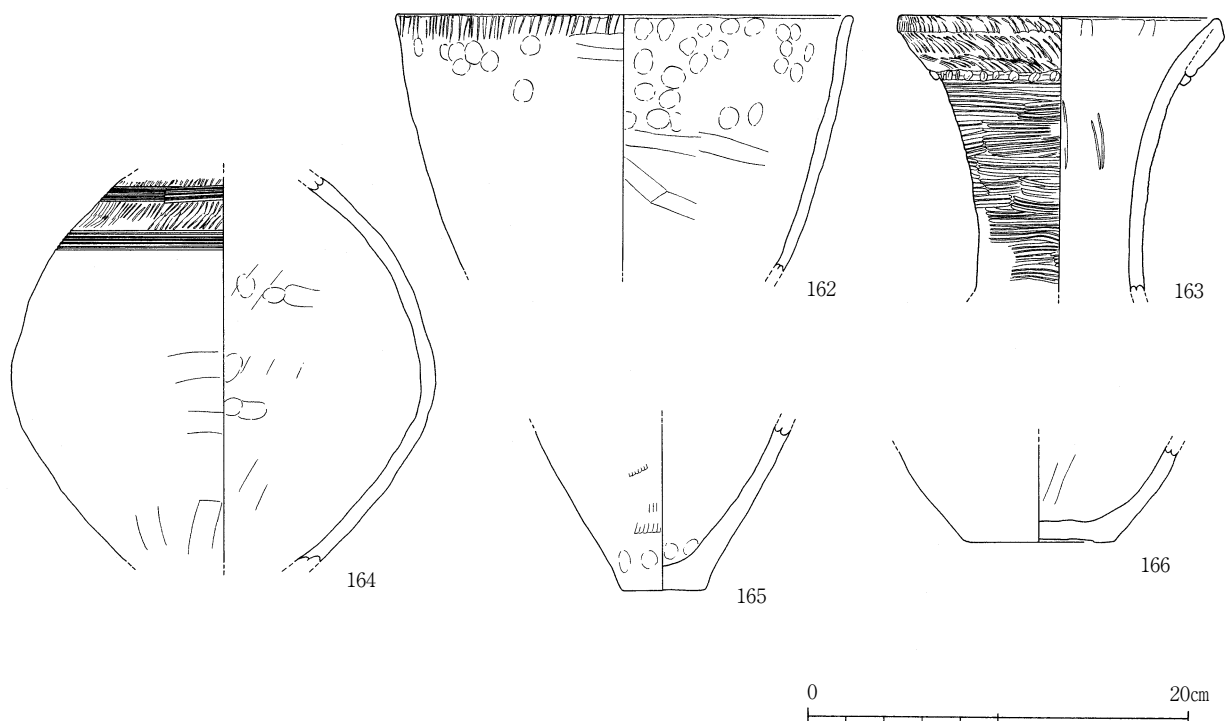


Fig. 35 SR 4 出土遺物実測図 1

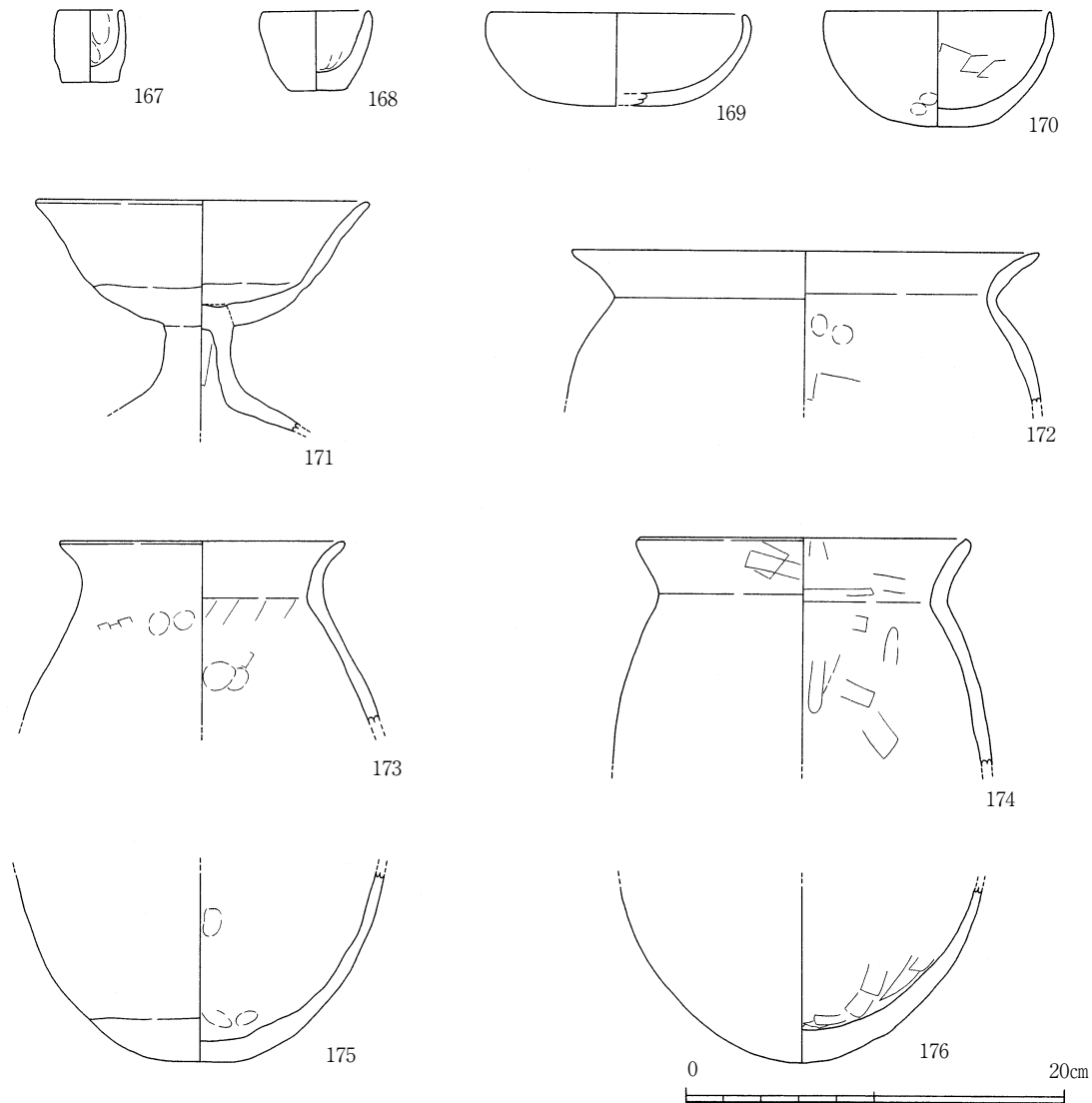


Fig. 36 SF1 出土遺物実測図1

耗著しく内面はヘラナデ調整である。189は甕の底部であるが、外面に平行叩きが残る。190も甕であるが、胴部中位に最大径を有し、口縁部は「く」の字状に大きく外反する。内面は全体的に横位のハケ目。外面は、横位から斜位の平行叩きが施される。191～194も甕であるが、口縁部は緩やかに外反するタイプで、193をみると胴部最大径が中位にある。内外面ヘラナデされるものが多い。

②須恵器

195～201は杯蓋である。195の口縁部は、内弯気味に下方に下がり端部は内傾する凹面をなす。断面三角形の稜をなし、天井部は丸く扁平なつまみを付す。天井部は2/3に回転ヘラ削り他は回転ナデ調整である。196～200の口縁部は、外下方に下がり端部は内傾する。断面三角形の稜をなし、天井部は平坦気味なものから丸みを有するものがある。全体的に天井部は2/3に回転ヘラ削り他は回転ナデ調整である。201は、口縁部が外下方に下がり端部は内傾する。稜は浅い凹線を巡らしている。天井部は欠損しているが平坦気味で回転ナデ調整である。202・203は杯身である。立ち

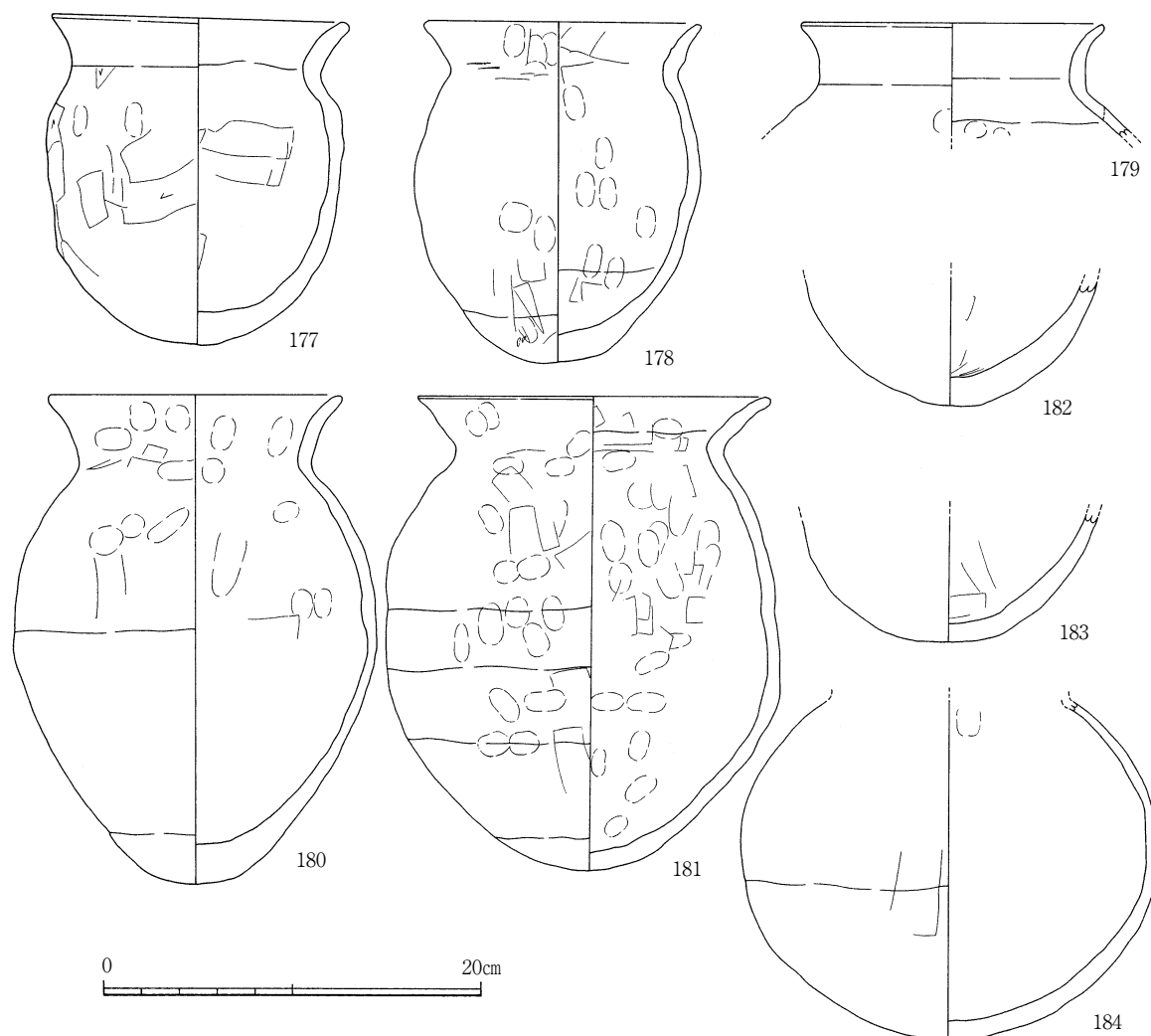


Fig. 37 SF1 出土遺物実測図 2

上がりは内傾してのび端部は内傾する。受部は水平に開き底部は丸みを有し2/3に回転ヘラ削りが施され他は回転ナデ調整である。

③石製品

204は、叩き石である。楕円形の自然礫を利用しており表裏中央部全体を敲打し、上下側縁もわずかに敲打痕が見られる。全長11.7cm、幅7.2cm、厚8cm、重量955gで砂岩製である。205は、滑石製白玉で径5mm、厚3~4mm、孔径2mm、重量0.1g程のものである。206は、石製勾玉である。扁平な板石を加工しコの字型に整形したもので、頭部に一孔を穿ち蛇紋岩製で製作時の擦痕が顕著に残る。全長3.7cm、幅1.9cm、厚0.7cm、重量7.4gを測る。

④金属製品

207は鉄剣である。SR4の流路の肩部分から出土した。関はやや斜めに落ち、茎は比較的緩やかに幅を狭めその先は幅が一定になり茎尻に至る。全長84.1cm、幅4.9cm、厚0.8cm、重量450gである。208・210は不明製品である。208は、扁平な金属板で先端部が尖っている。全長13.8cm、幅2.3cm、厚0.5cm、重量9.8gである。209・213は鉄鏃である。209は、平根系鏃で鏃身の形から方頭式で茎は

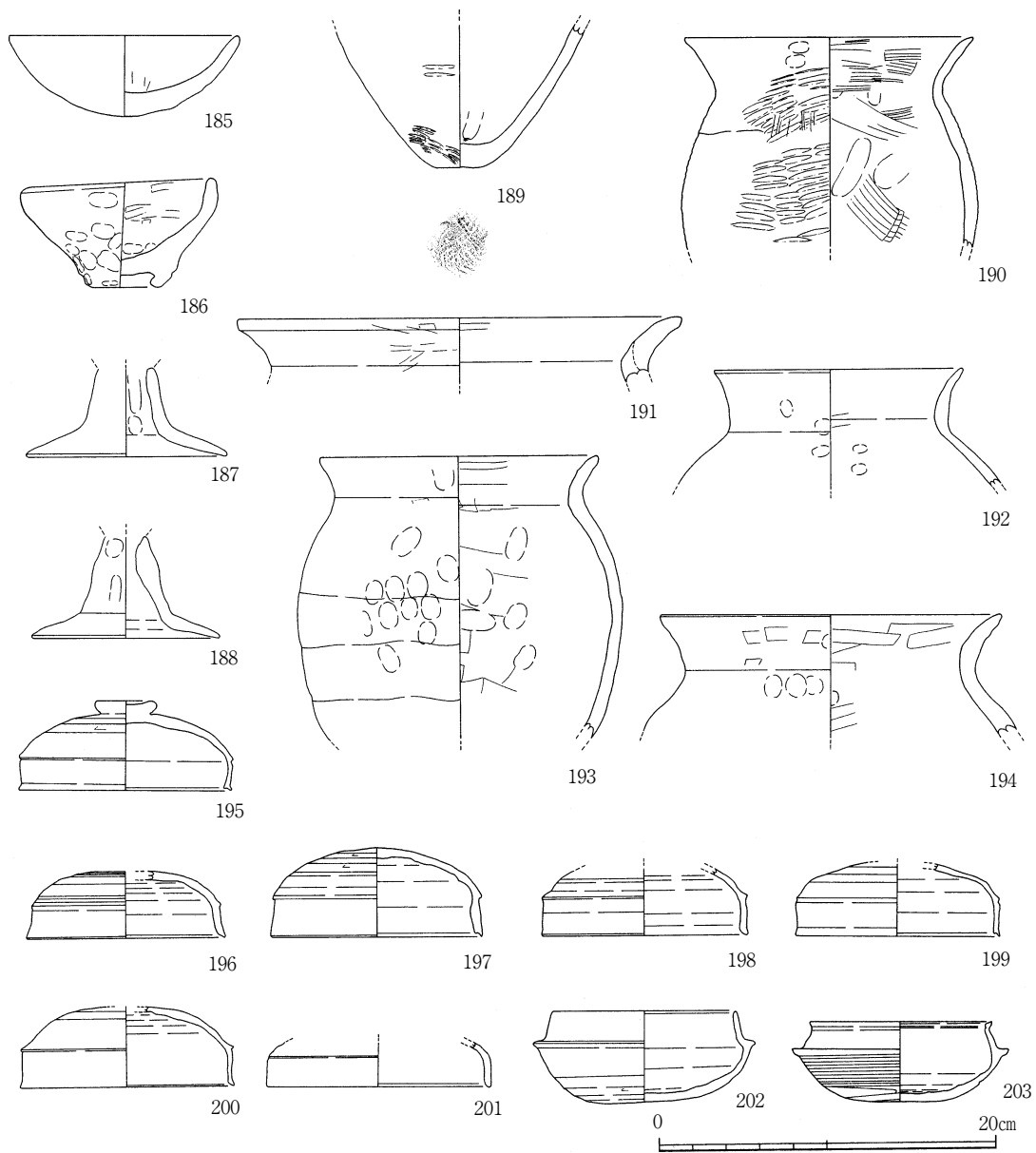


Fig. 38 包含層出土遺物実測図

断面方形である。全長9.8cm、幅2.2cm、厚0.3cm、重量15.2gである。213は平根系柳葉式で、全長7.2cm、幅2.7cm、厚0.3cm、重量12.8gである。211・212は、不明鉄製品でT字状の形態で断面方形を呈する。

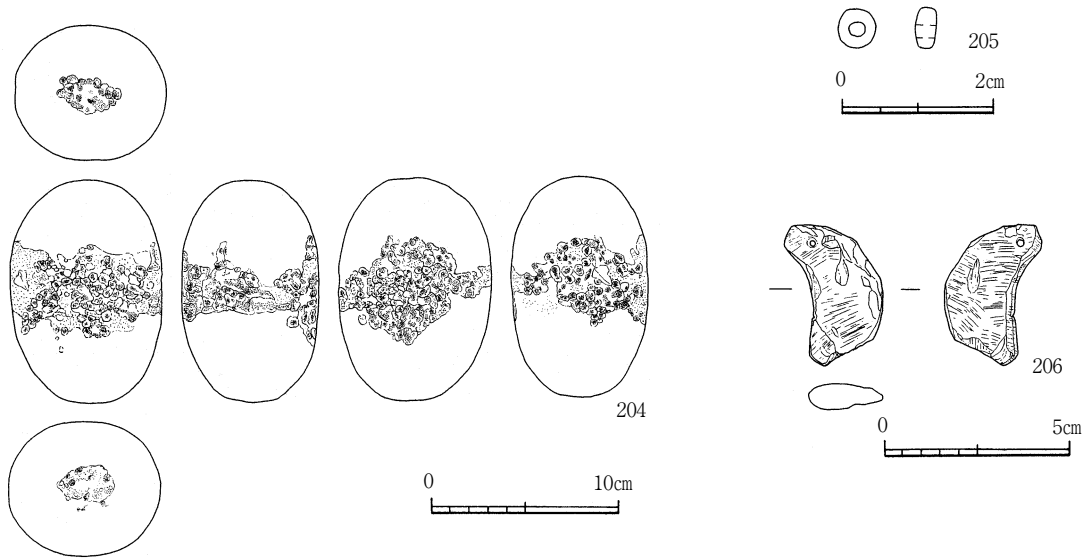


Fig. 39 石製品出土遺物実測図

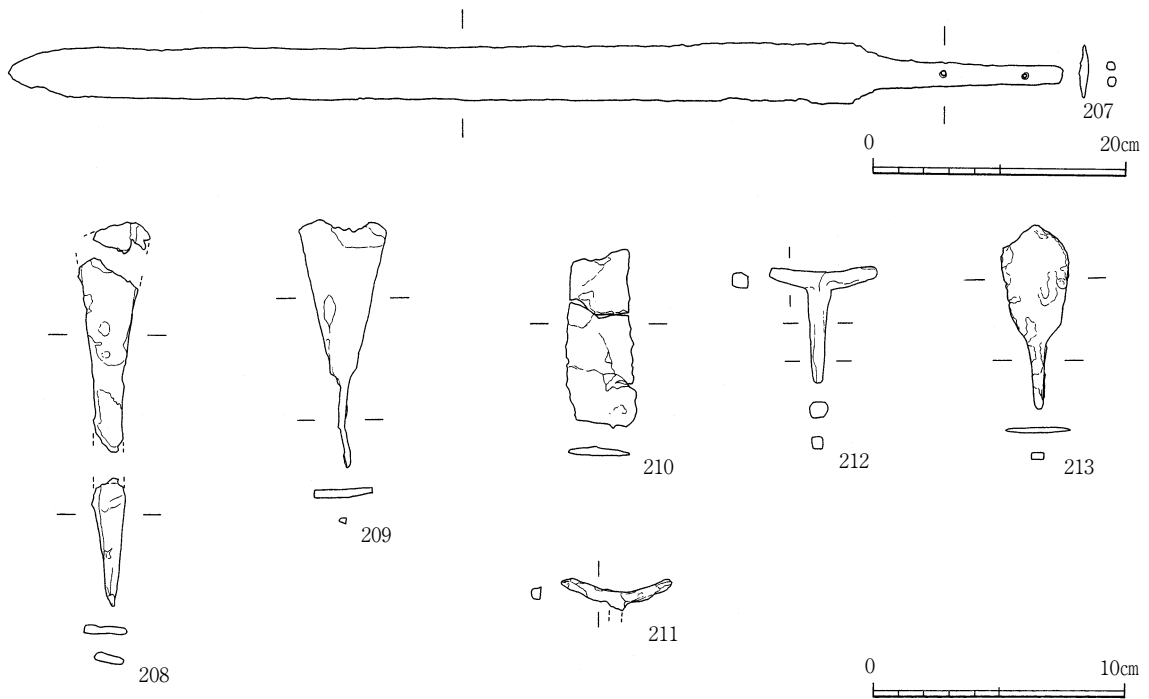


Fig. 40 金属製品出土遺物実測図

Tab. 1 SR3 出土土器観察表 1

(X軸は3200代、Y軸は55300代)

図版 NO	種類	器種	特徴	法量 (cm) ・ 色調				遺物取上 NO	部位	X軸	Y軸	H (m)	数
				口径	器高	胴径	底径						
37	土師器	手捏ね	底部片。丸底風。内面に指頭圧痕が多く残る。		(1.5)			714	底部	-24.792	-57.432	0.724	1
				内:5YR 6/4にぶい橙色 外:5YR7/2明褐色									
38	土師器	手捏ね	底部片。平底。内面に指頭圧痕が多く残る。	(3.5)	3.2			62	底部	-24.460	-59.090	0.615	1
				内:10YR 6/2灰黄褐色 外:7.5YR7/6褐色									
39	土師器	手捏ね	底部欠損。体部から内弯気味に立ち上がる。砂粒を含む。内外指頭圧痕が残る。	7.4	(3.0)			DSB5					
				内:5YR 5/1褐色 外:5YR 5/1褐色									
40	土師器	脚付椀	椀部欠損。脚部は「ハ」の字状に開く。内面はヘラナデ。外面はナデ調整。砂粒を多く含む。		(4.0)		8.0	700	脚	-27.107	-56.216	0.871	1
				内:7.5YR 5/6明褐色 外:7.5YR 5/6明褐色									
41	土師器	椀	平底気味で、口縁部は直線的。口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ナデ。外面はヘラナデ調整。小礫を若干含む。	11.9	(3.8)			308	体部	-18.302	-62.785	0.241	1
				内:2.5YR7/2灰黄色 外:2.5YR6/1黄灰色				308	口縁				3
42	土師器	椀	平底で、口縁部は直線的。口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ナデ。外面はヘラナデ調整。砂粒を多く含む。	11.0	6.5			786 957	口縁 体部	-18.369 -19.327	-64.106 -61.810	0.450 0.556	3 2
				内:5YR6/6褐色 外:同上				967 632	口縁 体部				1 1
43	土師器	椀	平底で、口縁部は直線的。口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ナデ。外面はナデ調整及び一部指頭圧痕。小礫を含む。	12.4	5.0			673	口縁	-24.823	-52.596	0.525	5
				内:10YR7/1灰白色 外:7.5YR7/4にぶい橙色				673	体部				3
44	土師器	椀	底部は平坦で、口縁部は直線的に立ち上がる。口縁部内外面ヨコナデ。内面ナデ。底部外面に板状圧痕。	13.4	5.8			54 70 172 172	口縁 口縁 口縁 体部	-23.169 -22.783 -23.068	-58.525 -60.071 -58.213	0.476 0.414 0.426	1 1 1 1
				内:5YR3/7にぶい橙色 外:2.5YR7/4淡赤褐色									
45	土師器	椀	丸底気味で、口縁部は内弯する。口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ調整、外面に一部指頭圧痕。小礫を多く含む。	13.6	(5.5)			70	口縁	-22.783	-60.071	0.414	1
				内:5YR7/3にぶい橙色 外:5YR7/3にぶい橙色									
46	土師器	椀	丸底で、口縁部は内弯する。口縁部内外面ヨコナデ。体部内面一部ヘラナデ調整だが、全体的に摩耗。精選された胎土。	13.4	6.4			61 608 703 839 853 855	口縁～体部 底部 口縁～体部 底～体 体部 口縁～体部	-24.166 -24.623 -24.400 -25.887 -25.165	-59.039 -55.676 -57.034 -57.699 -57.238	0.532 0.746 0.664 0.859 0.719	2 1 2 4 1 4
				内:7.5YR 7/4にぶい橙色 外:同上									
47	土師器	椀	丸底で、口縁部は内弯する。口縁部内外面ヨコナデ。内外面ナデ調整。25	14.8	6.7			4 13 17 189 266 990 997	底部 底部 口縁 口縁 口縁 体部 体部	-24.155 -23.338 -23.618 -23.872 -23.808 -24.978 -24.790	-54.378 -55.353 -55.512 -56.064 -57.470 -54.272 -55.289	0.501 0.416 0.398 0.405 0.396 0.576 0.489	1 1 2 1 2 1 1
				内:7.5YR7/2明褐色 外:7.5YR7/3にぶい橙色									
48	土師器	椀	平底で、口縁部は直線的。口縁部は面取り。口縁部内外面ヨコナデ。内面ヘラナデ。外面はナデ及びヘラナデ調整。24	15.0	7.0			27 180 184 265 266 267	底部 口縁 口縁 口縁 口縁 口縁	-23.384 -23.239 -23.550 -23.563 -23.808 -23.114	-56.803 -57.415 -56.998 -57.246 -57.470 -57.457	0.416 0.401 0.410 0.373 0.391 0.368	1 1 1 2 1 1
				内:5YR6/1灰色 外:10YR6/1褐色									
49	土師器	椀	丸底で、口縁部は内弯する。口縁部内外面ヨコナデ。内面ヘラナデ。外面はナデ調整。23	12.4	6.4			154 205	口縁 口縁	-21.850 -22.554	-59.939 -60.507	0.374 0.371	1 1
				内:5YR7/4にぶい橙色 外:5YR7/4にぶい橙色									
50	土師器	椀	平底気味で、口縁部は内弯する。口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ナデ。外面はナデ調整及び一部指頭圧痕。小礫を多く含む。28	13.2	6.4			27 269 273	体部 口縁 口縁	-23.384 -23.131 -23.068	-56.803 -57.856 -58.194	0.416 0.405 0.421	1 1 1
				内:10YR6/2灰黄褐色 外:同上									
51	土師器	椀	底部は平坦。体部はやや内弯して立ち上がり、口縁部は外反する。口縁部内外面はヨコナデ。体部内外面は不定方向のナデ調整。底部外面にヘラ削りと指頭圧痕。砂礫を含む。	15.9	6.6		5.5	150	全体	-20.543	-60.910	0.285	1
				内:7.5 Y R 6/4にぶい橙色 外:同上									
52	土師器	椀	丸みを帯びる底部から、体部は内弯して立ち上がり口縁部は短く外反する。口縁部ヨコナデ。その他は不定方向のナデ。白色小礫を含む。	13.1	8.1			370 370 370 384	口縁～底部 口縁部	-13.797 -23.846	-36.947 -55.238	0.331 0.571	14 1
				内:7.5YR7/8黄褐色 外:同上									

() は現存値及び復元値

Tab. 2 SR3 出土土器観察表 2

(X軸は3200代、Y軸は55300代)

図版 NO	種類	器種	特徴	法量 (cm) ・ 色調				遺物取上 NO	部位	X軸	Y軸	H (m)	数	
				口径	器高	胴径	底径							
53	土師器	高坏	脚部欠損。坏部下方に段を有し口縁部にかけて直線的に立ち上がり端部は若干外反する。口縁部内外面横ナデ。小礫を多く含む。	(19.0)	(5.8)			70	口縁	-22.783	-60.071	0.414	2	
								208	口縁	-23.155	-59.766	0.410	1	
								430	体部	-23.206	-58.341	0.367	1	
54	土師器	高坏	脚部欠損。坏部下方に緩い稜を有し口縁部にかけて直線的に外傾して立ち上がる。口縁部内外面横ナデ。小礫を多く含む。	17.7	6			166	口縁・体部	-23.102	-59.039	0.422	2	
								167	体部	-23.513	-59.004	0.436	1	
								171	体部	-22.971	-58.487	0.413	1	
								173	口縁	-23.173	-58.352	0.403	1	
								271	口縁	-23.431	-58.176	0.399	1	
								430	口縁	-23.206	-58.341	0.367	1	
55	土師器	高坏	坏部は欠損。脚部は下方で屈曲し裾へ開く。外面はナデ、裾は内面横ナデ。柱状部内面はヘラ削り。小礫を若干含む。		(7.0)		11.0	160	脚	-22.010	-59.498	0.371	1	
56	土師器	高坏	坏部は欠損。脚部は下方で屈曲し裾へ開く。外面はナデ、裾は内面横ナデ。柱状部内面はヘラ削り。小礫を若干含む。		(5.7)		11.6	69	脚	-23.263	-60.017	0.459	1	
								161	脚	-22.698	-59.824	0.373	1	
57	土師器	高坏	坏部欠損。脚部はなだらかに「ハ」の字状に裾に開く。柱状部は外面ナデ、内面はヘラ削り。裾部は横ナデ調整。小礫を多く含む。		(7.3)		12.5	49	裾	-23.066	-57.539	0.496	1	
								55	裾	-22.810	-58.761	0.480	1	
								155	脚	-21.774	-59.674	0.362	1	
								179	脚	-22.944	-57.310	0.442	1	
								209	裾	-23.279	-59.293	0.416	1	
								205	裾	-22.554	-60.507	0.371	1	
58	土師器	高坏	脚部欠損。坏部下方に稜を有し口縁部にかけて直線的に外傾して立ち上がる。口縁部内外面横ナデ。小礫を少し含む。	16.2	(7.6)			90	口縁・体部	-21.670	-62.804	0.483	2	
								110	底部	-19.507	-64.631	0.490	1	
								141	底部	-22.209	-62.220	0.470	3	
								164	口縁	-22.658	-58.797	0.399	1	
								205	口縁・体部	-22.554	-60.507	0.371	2	
								287	体部	-22.392	-60.782	0.343	1	
								917	底部	-22.885	-62.420	0.622	1	
								920	口縁・体部	-21.853	-63.012	0.553	3	
								921	口縁・体部	-21.681	-63.049	0.522	3	
59	土師器	高坏	脚部欠損。坏部下方に緩い稜を有し口縁部にかけて直線的に外傾して立ち上がり口縁部は外反する。口縁部内外面横ナデ。小礫を少し含む。	18.2	(6.7)			81	底部	-23.733	-60.699	0.599	2	
								95	底部	-19.724	-62.766	0.440	1	
								631	口縁					
								648	口縁	-17.937	-66.025	0.552	1	
								787	底部	-19.043	-64.343	0.491	1	
								799	底部	-20.517	-65.288	0.674	1	
								946	口縁	-19.476	-63.479	0.463	1	
								948	底部	-20.440	-63.112	0.521	1	
								971	体部	-18.095	-63.635	0.438	1	
60	土師器	高坏	脚部欠損。坏部下方に段を有し口縁部にかけて直線的に立ち上がり端部は若干外反する。口縁部内外面横ナデ。下半はナデ調整。小礫を多く含む。	(17.2)	(13.0)			89	口縁	-21.965	-62.727	0.519	1	
								205	底部	-22.554	-60.507	0.371	1	
61	土師器	高坏	脚部欠損。坏部下方に稜を有し口縁部にかけて直線的に立ち上がり端部は若干外反する。口縁部内外面横ナデ。小礫を少し含む。	16.6	(7.7)			704	坏	-22.731	-56.201	0.709	1	
62	土師器	高坏	脚部一部欠損。坏部下方に段を有し口縁部にかけて直線的に外傾して立ち上がり口縁部は外反する。口縁部内外面横ナデ。脚部はナデ。小礫を少し含む。	17.4	(10.2)			4	口縁	-24.155	-54.378	0.501	1	
								6	脚	-23.643	-54.485	0.411	1	
								10	体部	-23.355	-55.054	0.410	1	
								673	口縁	-24.823	-52.596	0.525	3	
63	土師器	高坏	脚部一部欠損。坏部下方に段を有し口縁部にかけて直線的に外傾して立ち上がる。口縁部内外面横ナデ。脚部は外面ナデ、内面ヘラ削り。小礫を多く含む。	18.0	(11.8)			60	体部	-23.676	-59.092	0.500	1	
								68	口・体	-23.513	-59.826	0.478	4	
								165	口縁	-22.853	-58.919	0.431	1	
								168	口縁	-23.139	-58.764	0.413	1	
								174	体部	-23.331	-58.116	0.399	1	
								175	底部	-23.590	-58.521	0.408	1	
								199	体部	-23.440	-59.521	0.447	1	
								270	体部	-23.371	-58.035	0.408	1	
64	土師器	高坏	脚部一部欠損。坏部はゆるい稜を有し口縁部にかけて外傾する。内面は摩耗して調整不明。外面は横ナデ・ナデ調整。小礫を多量に含む。	(21)	(10.8)			782	体部	-18.161	-65.304	0.505	1	
								788	底部	-18.825	-63.951	0.476	1	
								803	口縁	-20.788	-64.477	0.606	1	
								810	脚	-21.777	-63.285	0.584	1	
								920	底部	-21.853	-63.012	0.553	1	
								946	口縁	-19.476	-63.479	0.463	1	
								950	体部	-20.461	-62.405	0.526	1	
								957	体部	-19.327	-61.810	0.556	1	
								971	体部	-18.095	-63.635	0.438	1	

() は現存値及び復元値

Tab. 3 SR3出土土器観察表3

(X軸は3200代、Y軸は55300代)

図版 NO	種類	器種	特徴	法量 (cm) ・ 色調				遺物取上 NO	部位	X軸	Y軸	H (m)	数	
				口径	器高	胴径	底径							
65	土師器	高杯	脚部は屈曲し「ハ」の字状に裾が開く。坏部は段を有し体部から口縁にかけて外傾する。坏部は横ナデで内面一部ヘラナデがされる。脚部外面ヘラナデと横ナデ。内面ヘラ削り。小礫を多く含む。	16.2	11.7		11.0	374	口縁部	-12.064	-35.193	0.377	14	
				内:5YR6/6橙色 外:10YR6/1褐灰色				374	裾部					1
								374	脚部					1
								374	底部					7
								374	体部					3
								382	裾部	-12.586	-34.844	0.399	2	
66	土師器	高杯	脚部は下方で屈曲し裾開く。坏部は稜を持ち口縁部は内湾し外傾する。体部から口縁部内外面は横ナデ。脚部はナデ・裾横ナデ調整。内面はヘラ削り、圧痕。胎土は小礫を少し含む。	16.0	14.0		11.3	205	裾部	-22.554	-60.507	0.371	1	
				内:10YR 7/2にぶい黄橙色 外:10YR 6/4にぶい黄橙色				275	体部					1
67	土師器	高杯	脚部は下方で屈曲し裾開く。坏部は段を持ち口縁部は外反する。坏部体部から口縁部内外面は横ナデ。脚部はナデ調整。内面はヘラ削り。胎土は小礫を多く含む。	19.5	14.4		11.9	331	口縁	-21.575	-48.339	0.433	1	
				内:5YR 7/4 橙色 外:同上				335	口縁	-21.622	-47.945	0.416	1	
								339	口縁	-21.639	-47.548	0.404	1	
								345	口縁~底部	-21.093	-46.881	0.451	8	
								353	脚	-20.575	-45.941	0.399	1	
								379	口縁	-21.225	-46.732	0.419	1	
								388	口縁・体部	-20.272	-45.577	0.398	3	
								520	口縁・体部	-21.694	-47.623	0.388	4	
68	土師器	高杯	脚部は下方で屈曲し裾開く。坏部は段を持ち口縁部は外傾する。口縁部内外面は横ナデ。脚部はナデ調整。内面はヘラ削り。胎土は小礫を含む。	17.6	12.5		10.8	82	裾部	-23.794	-60.457	0.621	1	
				色調・備考 内:7.5YR 7/6 橙色 外:7.5YR 8/4 浅黄色				653	脚・坏	-23.173	-56.222	0.783	8	
								723	裾部	-25.186	-58.227	0.863	2	
								871	脚部	-23.065	-58.492	0.622	1	
								909	裾部	-23.542	-60.441	0.656	1	
69	土師器	高杯	脚部はなだらかに「ハ」の字状に裾に開く。段を有し坏部は体部から口縁にかけて外傾する。坏部は横ナデで内面一部ヘラナデがされる。脚部外面ヘラナデと横ナデ。内面ヘラ削り。小礫を多く含む。	19.1	14.4		12.4	69	坏部	-23.263	-60.017	0.459	1	
				内:7.5YR 7/3 にぶい橙色 外:同上				70	底部	-22.783	-60.071	0.414	1	
								162	脚	-23.044	-59.469	0.402	1	
								165	底部	-22.853	-58.919	0.431	1	
								208	口縁~底部	-23.155	-59.766	0.410	3	
								279	口縁	-23.030	-60.333	0.412	1	
70	土師器	高杯	脚部はなだらかに「ハ」の字状に裾に開く。段を有し坏部は体部から口縁にかけて外傾する。坏部は横ナデで内面一部ヘラナデがされる。脚部外面ヘラナデと横ナデ。内面ヘラ削り。小礫を多く含む。	25.6	14.05		13.5	647	裾部	-19.006	-67.078	0.760	1	
				内:7.5YR 7/3にぶい橙色 外:同上				763	底部	-22.392	-65.054	0.794	1	
								794	裾部	-20.299	-65.642	0.680	1	
								962	底部	-20.031	-63.113	0.488	1	
								964	裾部	-19.632	-63.197	0.466	1	
								967	底部	-18.953	-63.372	0.467	2	
								971	体部	-18.095	-63.635	0.438	1	
								973	底部	-17.295	-63.782	0.402	1	
								973	裾部				1	
71	土師器	高杯	脚部は下方で屈曲し裾開く。坏部は段を持ち口縁部は外傾する。口縁部内外面は横ナデ。脚部はナデ・裾横ナデ調整。内面はヘラ削り圧痕。胎土は小礫を少し含む。	18.4	14.4		11.8	70	体部・脚部	-22.783	-60.071	0.414	2	
				内:10YR 7/4にぶい黄橙色 外:同上				165	口縁・体部	-22.853	-58.919	0.439	2	
								168	口縁	-23.139	-58.764	0.413	1	
								181	体部	-22.923	-56.780	0.458	1	
								427	口縁	-22.825	-57.486	0.335	1	
72	土師器	高杯	脚部は下方で屈曲し裾開く。坏部は段を持ち口縁部は直線的に外傾する。体部から口縁部内外面は横ナデ。脚部はナデ調整。内面はヘラ削り。胎土は小礫を多く含む。	18.5	14.6		12.0	6	口縁	-23.643	-54.485	0.411	1	
				内:10YR 7/3にぶい橙色 外:同上				19	口縁~体部	-23.520	-55.682	0.423	1	
								27	口縁	-23.384	-56.803	0.416	1	
								175	口縁				1	
								190	口縁				1	
								273	体部	-23.068	-58.194	0.421	1	
								481	口縁	-24.064	-58.192	0.465	1	
								673	口縁	-24.823	-52.596	0.525	1	
73	土師器	高杯	脚部はなだらかに「ハ」の字状に袖に開く。坏部は下半で稜を有し体部から内湾し口縁は外傾する。坏部は横ナデで内面一部ヘラナデがされる。脚部外面ヘラナデと横ナデ。内面ヘラ削り。小礫を多く含む。	18.2	14.8		12.8	357	口縁	-20.876	-44.805	0.647	1	
				内:5YR 7/4 にぶい橙色 外:同上				373	口縁	-21.126	-48.932	0.359	1	
								387	坏部	-19.928	-45.640	0.404	1	
								392	脚部	-20.200	-44.278	0.426	7	
								393	体部	-20.659	-43.859	0.532	1	
								403	口縁	-19.395	-43.458	0.359	1	
								422	坏部	-19.277	-42.070	0.477	1	
								423	体部	-19.766	-41.913	0.486	1	
								505	裾	-20.215	-44.208	0.386	2	
74	土師器	高杯	脚部は下方で屈曲し裾開く。坏部は稜を持ち口縁部は内湾し外傾する。体部から口縁部内外面は横ナデ。脚部はナデ・裾横ナデ調整。内面はヘラ削り。胎土は小礫を多く含む。	17.0	14.8		11.2	70	裾	-22.783	-60.071	0.414	1	
				内:7.5YR 6/3にぶい橙色 外:同上				160	体部	-22.410	-59.498	0.371	1	
								164	体部	-22.658	-58.797	0.399	1	
								165	口縁~底部	-22.853	-58.919	0.439	3	
								276	底部	-22.736	-58.711	0.376	1	
								277	体部・脚部	-22.243	-58.913	0.375	4	

() は現存値及び復元値

Tab. 4 SR3 出土土器観察表 4

(X軸は3200代、Y軸は55300代)

図版 NO	種類	器種	特徴	法量 (cm) ・ 色調				遺物取上 NO	部位	X軸	Y軸	H (m)	数
				口径	器高	胴径	底径						
75	土師器	高杯	脚部は下方で屈曲し裾開く。坏部は段を持ち口縁部は外反する。口縁部内外面は横ナデ。脚部はナデ調整。内面はヘラ削り。胎土は小礫を若干含む。	17.3	12.4		10.5	14	坏部	-23.607	-55.193	0.400	1
								484	口縁	-23.873	-57.041	0.405	1
								673	脚	-24.823	-52.596	0.525	1
								673	裾				1
								673	坏				1
								673	口縁				1
76	弥生	甗?	底部片で、外面から焼成後楕円状に直径8mmの穿孔。外面荒いハケ調整。内面指頭圧痕と煤付着。角尖石を含む。		(3.1)		4.0	405	底部	-18.697	-43.503	0.330	1
77	土師器	甗	底部欠損。頸部は、上方の立ち上がり口縁部はやや外傾する。胴部中位下半に煤付着。胴部中位に最大径。全体的にヘラナデ及びナデ調整。	19.0	14.2	18.2		387	口縁・体部	-13.065	-30.835	0.457	2
								392	体部	-12.372	-30.551	0.442	4
								393	口縁	-13.101	-30.824	0.411	1
								394	体部	-12.912	-30.424	0.452	1
								395	体部	-12.571	-30.437	0.440	2
								396	口縁~体部	-12.013	-30.449	0.396	6
								397	体部	-12.533	-30.456	0.384	1
								398	体部	-12.991	-30.461	0.410	1
								399	体部	-12.477	-29.910	0.370	1
								400	口縁~頸部	-12.312	-29.967	0.394	3
								401	口縁~体部	-12.548	-29.554	0.352	2
								402	体部	-12.377	-29.615	0.336	5
								404	頸部	-12.171	-27.782	0.467	1
								405	体部	-12.141	-27.701	0.483	1
								406	口縁	-12.130	-27.826	0.468	1
								407	体部	-11.699	-27.882	0.475	1
								408	体部	-11.504	-27.834	0.524	1
				409	体部	-12.180	-28.446	0.410	1				
				410	口縁・体部	-12.637	-29.412	0.373	2				
				411	体部	-12.941	-29.392	0.385	1				
				412	体部	-13.013	-29.949	0.378	2				
				413	体部	-12.459	-29.325	0.362	1				
78	土師器	甗	口縁部は緩やかに外反。口縁部はヨコナデ。外面煤付着。小礫・砂粒を多く含む。	13.4	(3.9)			835	口縁部	-24.067	-55.449	0.638	1
								50	頸部	-22.307	-57.335	0.498	1
								50	頸部				1
79	土師器	甗	口縁部は「く」の字状外反。口縁部内面ヘラナデ外面はナデ。外面煤付着。小礫・砂粒を多く含む。	24.2	(3.9)			477	口縁	-23.194	-59.218	0.370	1
80	土師器	甗	口縁部は緩やかに外反。口縁部はヨコナデ。内外面ヘラナデ。外面煤付着。小礫・砂粒を多く含む。	13.0	(4.6)			DSB	口縁				2
81	土師器	甗	口縁部は「く」の字状に外反。口縁部はヨコナデ。外面は煤が付着。砂粒を多く含む。	14.9	(5.4)			442	口縁	-20.328	-64.014	0.438	1
82	土師器	甗	口縁部は「く」の字状に外反。口縁部はヨコナデ・ヘラナデ。肩部内面はヘラナデ、外面は煤が付着。砂粒を多く含む。75	12.8	(4.8)			214	体部	-22.559	-50.518	0.423	2
								484	口縁	-23.873	-57.041	0.405	1
83	土師器	甗	口縁部緩やかに外反。口縁部ヨコナデの後ヘラナデ。胴部内外面ヘラナデ。砂粒を多く含む。	13.4	(6.5)			180	口縁~頸部	-23.239	-57.415	0.401	1
84	土師器	甗	口縁部は緩やかに外反。口縁部はヨコナデ・ヘラナデ。砂粒を多く含む。	15.6	(3.8)			72	頸部	-21.839	-60.484	0.570	2
								749	口縁	-23.979	-59.738	0.752	1
								806	口縁	-21.141	-64.405	0.637	2
								924	口縁	-21.158	-63.466	0.528	1
85	土師器	甗	口縁部緩やかに外反。口縁部ヨコナデ。頸部内面ヘラナデ。外面に煤付着。砂粒を多く含む。	18.0	(4.7)			DSB	口縁				4
86	土師器	甗	口縁部「く」の字状に外反。口縁部内外面ヨコナデ。	14.8	(4.7)			145	口縁	-21.360	-61.741	0.272	1
								204	口縁	-22.284	-60.908	0.319	1
								455	口縁	-20.957	-61.968	0.246	1
87	土師器	甗	口縁部は緩やかに外反。口縁部内外面ヨコナデ。砂粒を多く含む。	15.2	(5.1)			27	口縁~頸部	-23.384	-56.803	0.416	1
								183	口縁~頸部	-23.218	-56.783	0.396	1
								183	口縁				1

() は現存値及び復元値

Tab. 5 SR3出土土器観察表5

(X軸は3200代、Y軸は55300代)

図版 NO	種類	器種	特徴	法量 (cm) ・ 色調				遺物取上 NO	部位	X軸	Y軸	H (m)	数								
				口径	器高	胴径	底径														
88	土師器	甕	口縁部緩やかに外反。口縁部ヨコナデ。頸部内外面ヘラナデ。胴部外面に煤附着。砂粒を多く含む。	18.6	(6.1)			57 267	口縁 口縁～頸部	-23.246 -23.114	-59.257 -57.457	0.477 0.368	1 1								
				内:5YR7/2明褐色 外:5YR7/3にぶい橙色																	
89	土師器	甕	口縁部は、「く」の字状に外反。口縁部内外面ヨコナデの後ヘラナデ。頸部内外面ヘラナデ。砂粒を含む。	16.2	(5.6)			70 208	口縁 口縁	-22.783 -23.155	-60.071 -59.766	0.414 0.410	1 1								
				内:2.5Y R6/1黄灰色 外:同上																	
90	器	甕	口縁部緩やかに外反。口縁部ヨコナデ。頸部内面強いヘラナデ。胴部外面に煤附着。砂粒を多く含む。					278	口縁～頸部	-22.183	-59.177	0.334	1								
91	土師器	甕	口縁部は「く」の字状外反。口縁部はヨコナデ及びヘラナデ。頸部内面ヘラナデ。胴部内外面ヘラナデ。外面煤附着。小礫・砂粒を多く含む。	17.0	(9.8)			690		-25.977	-55.467	0.894									
				内:5YR5/3にぶい赤褐色 外:5YR5/4にぶい赤褐色																	
92	土師器	甕	口縁部は「く」の字状に外反する。胴部中位に最大径。口縁部はヨコナデの後ヘラナデ。胴部は、内面横位のヘラナデ、外面ヘラナデ。口縁部・胴部外面煤附着。砂粒を多く含む。	15.0	11.2	16.7		683 686 686 689 690 693 30 39 577 581	頸部 体部 口縁 口縁 体部 体部 口縁～頸部 口縁 体部 体部	-26.235 -26.210 -25.530 -25.977 -26.083 -24.422 -24.522	-53.859 -54.274 -55.091 -55.467 -56.110 -56.636 -57.490	0.908 0.913 0.844 0.894 0.904 0.489 0.512	1 1 1 2 4 2 1 1 1 1								
				内:7.5YR5/2灰褐色 外:7.5YR5/4にぶい褐色																	
				93	土師器	甕	口縁部は緩やかに外反。端部は面どる。全体的にヨコナデ・ヘラナデが施され外面煤附着。小礫・砂粒を多く含む。	16.2	(9.8)			430	口縁	-23.206	-58.341	0.367	1				
								内:5YR6/4にぶい橙色 外:同上													
				94	土師器	甕	口縁部は「く」の字状に外反。口縁部はヨコナデ・ヘラナデ。胴部内面は横位ヘラナデ、外面は煤が附着。砂粒を多く含む。	13.6	(8.3)			192 192	口縁 体部	-24.195	-55.435	0.446	1 4				
								内:10YR6/2灰黄褐色 外:10YR6/1褐色													
				95	土師器	甕	口縁部は緩やかに外反。口縁部はヨコナデ・ヘラナデ。胴部内面は横位のヘラナデ外面は煤が厚く附着。砂粒を多く含む。	19.0	-8.5	21.2		259	体部	-20.562	-56.494	0.386	2				
				96	土師器	甕	口縁部は緩やかに外反。端部は若干肥厚する。外面はヘラナデ。内面はナデ調整で指頭圧痕が残る。内外面とも煤が附着している。	14.8	8.5			C-10 23 264 254 12 181 178 179		-23.355 -23.199 -22.955 -23.371 -23.015 -22.923 -23.052 -22.944	-55.054 -56.201 -57.084 -55.972 -55.469 -56.780 -57.674 -57.310	0.410 0.424 0.397 0.330 0.421 0.458 0.428 0.442					
								内:7.5YR5/2灰褐色 外:7.5YR6/4にぶい橙色													
								97	土師器	甕	口縁部は緩やかに外反。口縁部はヨコナデ・ヘラナデ。胴部内面ヘラナデ、外面斜位のヘラナデ。外面に煤附着。砂粒を多く含む。	15.7	(11.0)			70 208	口縁 口縁	-22.783 -23.155	-60.071 -59.766	0.414 0.410	1 1
内:10YR6/2灰黄褐色 外:同上																					
98	土師器	甕	口縁部「く」の字状に外反。口縁部ヨコナデの後ヘラナデ。胴部内外面ヘラナデ。全面に煤附着。砂粒を多く含む。					15.4	(12.0)			58 64 69 167 183 203 205 207 265 279	頸部 口縁 口縁 体部 口縁 口縁 体部 体部 体部 体部	-23.532 -24.172 -23.263 -23.513 -23.218 -22.793 -22.554 -23.101 -23.563 -23.030	-59.169 -59.468 -60.017 -59.004 -56.783 -61.266 -60.507 -60.315 -57.246 -60.333	0.567 0.568 0.459 0.436 0.396 0.514 0.371 0.444 0.373 0.412	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1				
								内:2.5Y6/2灰黄色 外:10YR7/3にぶい黄褐色													
								99	土師器	甕	口縁部は「く」の字状外反。口縁部はヨコナデ。胴部外面ヘラナデ内面縦位ヘラナデ。小礫・砂粒を多く含む。	9.6	(11.8)			43 705 705 719	口縁～頸部 口縁～頸部 体部 口縁～頸部	-24.312 -24.562 -24.562 -23.906	-58.299 -56.715 -56.715 -57.722	0.500 0.682 0.682 0.747	1 2 2 1
												内:10YR7/3にぶい黄褐色 外:10YR6/3にぶい黄褐色									

() は現存値及び復元値

Tab. 6 SR 3 出土土器観察表 6

(X軸は3200代、Y軸は55300代)

図版 NO	種類	器種	特徴	法量 (cm) ・ 色調				遺物取上 NO	部位	X軸	Y軸	H (m)	数	
				口径	器高	胴径	底径							
100	土師器	甕	口縁部は肥厚し「く」の字状に外反する。口縁部はヨコナデの後ヘラナデ。胴部は、内面横位のヘラナデ外面縦位のヘラナデ。小礫を多く含む。	内:5YR4/3にぶい赤褐色 外:5YR6/4にぶい橙色	17.0	(12.7)			682	体部	-26.488	-53.424	0.920	1
									803	体部	-20.788	-64.477	0.606	1
									28	体部	-23.784	-57.055	0.448	6
									29	体部	-23.944	-56.942	0.457	1
									30	体部・底部	-24.422	-56.636	0.489	15
									45	口縁～体部	-23.709	-57.298	0.462	11
									47	体部	-23.818	-57.579	0.470	1
									48	体部	-23.421	-57.705	0.488	53
									49	体部	-23.066	-57.539	0.496	10
									75	口縁～頸部	-22.676	-60.523	0.541	1
									177	体部	-23.329	-57.698	0.409	1
180	体部	-23.239	-57.415	0.401	1									
101	土師器	甕	口縁部緩やかに外反。口縁部ヨコナデの後ヘラナデ。胴部内外面ヘラナデ。全体的に煤付着。	内:7.5YR7/3にぶい橙色 外:同上	16.4	(13.0)			31	口縁	-24.202	-56.423	0.494	2
102	土師器	甕	口縁部「く」の字状に外反。口縁部ヨコナデの後ヘラナデ。胴部内外面ヘラナデで一部ハケ目。砂粒を多く含む。	内:10YR6/3にぶい黄褐色 外:7.5YR6/4にぶい橙色	15.2	(9.6)			346	体部	-18.968	-37.187	0.555	1
									349	頸部	-19.009	-37.489	0.743	1
									352	体部	-18.864	-36.559	0.715	2
									354	口縁	-18.890	-36.557	0.755	1
									349	口縁	-20.516	-46.715	0.501	1
103	土師器	甕	口縁部緩やかに外反。口縁部ヨコナデの後ヘラナデ。胴部内外面ヘラナデ。外面全体的に煤付着。	内:7.5Y7/2明褐色 外:5YR7/2明褐色	17.7	(7.35)			173	口縁～頸部	-23.173	-58.352	0.403	1
104	土師器	甕	口縁部は緩やかに外反する。胴部中位に最大径を持つ。口縁部内外面ヨコナデ。胴部は、内面ヘラナデ。全体的に煤付着。	内:10YR6/3にぶい黄褐色 外:同上	16.2	(12.5)	19.2		159	体部	-22.255	-59.489	0.385	1
									163	口縁～体部	-22.072	-59.093	0.379	1
105	土師器	甕	口縁部は緩やかに外反。口縁部内外面ヨコナデ。胴部内外面ヘラナデ。頸部を除き外面煤付着。砂粒を多く含む。	内:7.5YR6/3にぶい褐色 外:同上	16.8	(9.8)			DSB	口縁～体部				
106	土師器	甕	胴部から底部欠損。口縁部は「く」の字状に外反する全体的に口縁部から胴部にかけてヘラナデ調整。小礫を多く含む。外面に煤付着。	内:10YR6/3にぶい黄褐色 外:同上	15.2	(12.3)			938	体部	-19.786	-64.424	0.508	1
									102	口縁	-19.711	-64.537	0.496	1
									112	頸部	-19.942	-64.167	0.475	1
									117	口縁	-20.530	-63.402	0.365	1
									117	頸部				2
									127	体部	-21.123	-62.586	0.335	1
									136	体部	-20.916	-61.814	0.241	3
107	土師器	甕	口縁部緩やかに外反。口縁部ヨコナデの後ヘラナデ。胴部内外面ヘラナデ。頸部内面に指頭圧痕。胴部外面に煤付着。	内:10YR8/2灰白色 外:10YR8/3浅黄褐色	19.0	(13.0)			390	体部	-13.652	-32.088	0.350	1
									403	口縁	-12.386	-29.550	0.359	1
									403	体部				1
									352	体部	-20.829	-46.201	0.433	3
									354	体部	-20.172	-46.192	0.401	2
									386	体部	-20.043	-45.806	0.414	1
									406	口縁	-18.328	-43.635	0.396	2
									406	頸部				1
									406	体部				5
108	土師器	甕	口縁部は「く」の字状に外反。胴部中位に最大径。口縁部はヨコナデ及びヘラナデ。胴部内面ヘラナデ外面は斜位ヘラナデ。砂粒を多含む。	内:7.5YR5/4にぶい褐色 外:5YR5/4にぶい黄褐色	17.4	(19.1)			827		-25.149	-55.222	0.624	
									822		-25.127	-54.488	0.714	
									832		-25.325	-55.758	0.642	
									991		-25.043	-54.556	0.571	
									19		-23.520	-55.682	0.423	
109	土師器	甕	口縁部は緩やかに外反。胴部中位に最大径。口縁部はヨコナデ及びヘラナデ胴部内面横位のヘラナデ外面はヘラナデ。外面煤付着。小礫・砂粒を多く含む。	内:7.5YR6/4にぶい褐色 外:5YR6/6褐色	18.3	(18.5)	24.0		673	体部	-24.823	-52.596	0.525	1
									682	体部	-26.488	-53.424	0.920	1
									687	体部	-26.126	-54.665	0.920	2
									693	体部	-26.083	-56.110	0.904	1
									676	体部	-24.929	-52.413	0.102	1
									789	口縁～頸部	-18.893	-64.969	0.500	1
									794	体部	-20.299	-65.642	0.680	1
									819	口縁～頸部	-24.911	-54.321	0.600	2
									821	体部	-25.150	-54.325	0.619	1
									827	口縁	-25.149	-55.222	0.624	2
									828	体部	-25.144	-55.367	0.692	3
									848	口縁	-26.899	-55.217	0.848	2
									989	体部	-24.960	-54.056	0.510	1
									990	体部	-24.978	-54.272	0.576	1
									994	体部	-25.147	-54.819	0.602	2
									198	体部	-25.871	-53.939	0.644	1

() は現存値及び復元値

Tab. 7 SR3出土土器観察表7

(X軸は3200代、Y軸は55300代)

図版 NO	種類	器種	特徴	法量 (cm) ・ 色調				遺物取上 NO	部位	X軸	Y軸	H (m)	数	
				口径	器高	胴径	底径							
110	土師器	甕	口縁部は緩やかに外反する。胴部中位に最大径を持つ。口縁部内外面ヨコナデの後ヘラナデ。胴部は、内面横位のヘラナデ外面縦位のヘラナデと指頭圧痕が残る。全体的に煤付着内面粘土帯接合痕が残る。	16.5	(22.8)	27.0		内:5YR6/6橙色 外:同上	673	口縁	-24.823	-52.596	0.525	2
									6	口縁	-23.643	-54.485	0.411	2
									8	体部	-23.744	-54.781	0.378	2
									15	体部	-23.899	-55.252	0.458	1
									16	体部	-23.747	-55.423	0.381	1
									22	体部	-23.576	-56.167	0.387	1
									24	胴部	-23.421	-56.315	0.404	1
									32	体部	-24.323	-55.827	0.487	1
									37	体部	-25.735	-58.692	0.745	1
									42	体部	-24.353	-57.840	0.494	2
									176	体部	-23.799	-58.710	0.466	1
									184	体部	-23.550	-56.998	0.410	1
									187	体部	-23.882	-56.441	0.407	1
									266	体部	-23.808	-57.470	0.396	1
									360	底部	-20.741	-43.323	0.729	2
431	体部	-23.928	-58.894	0.463	1									
485	体部	-23.833	-56.008	0.396	2									
111	土師器	甕	口縁部は緩やかに外反。口縁部はヨコナデ。外面縦位のヘラナデ内面ヘラナデ。外面煤付着。粘土帯接合痕跡あり。小礫・砂粒を多く含む。	11.5	(11.2)	12.5	内:5YR7/6橙色 外:同上	C-266	口縁～頸部	-23.808	-57.470	0.396	2	
								C-25	口縁～体部	-23.682	-56.465	0.398	1	
112	土師器	甕	底部丸底。胴部は張りがなく口縁部は上方に直線的に立ち上がる。口縁部内外面ヘラナデ。胴部はナデ及びヘラナデ調整。砂粒多く含む。	8.0	13.2	10.6		982	全体	-22.955	-49.533	0.797	7	
113	土師器	甕	底部は厚丸底。胴部中位に最大径を有し、口縁部は「く」の字状に外反する。口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面縦方向のヘラナデ。内面横方向のヘラナデ。底部を除き全面に煤付着。	14.3	18.1	15.7	内:5YR 7/4橙色 外:同上	375	口縁	-20.811	-48.039	0.366	3	
								375	頸部					
								375	体部				26	
								375	底部				2	
								376	口縁	-21.313	-47.875	0.393	2	
376	体部				3									
114	土師器	甕	底部は厚丸底。胴部上位に最大径を有し、口縁部は「く」の字状に外反する。口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面縦方向のヘラナデ。内面横方向のヘラナデ。小礫を含む。	14.1	19.6	15.9	内:5YR 7/4にぶい橙色 外:同上	959	口縁	-19.282	-62.482	0.475	3	
								959	頸部				1	
								959	体部				3	
								94	口縁	-19.219	-62.397	0.412	6	
								94	体部				39	
94	底部				6									
115	土師器	甕	胴上部から口縁部が欠損。最大径を胴部中位に持つ。内外面ヘラナデ。内面に指頭圧痕が残る。内外面煤付着。砂粒を多く含む。	(20.3)	19.8		内:5YR5/4にぶい赤褐色 外:2.5YR6/6橙色	645	体部	-25.595	-57.900	0.866	1	
								669	体部	-23.041	-53.388	0.280	1	
								673	体部	-24.823	-52.596	0.525	6	
								10	体部	-23.355	-55.054	0.410	2	
								12	口縁	-23.015	-55.469	0.421	1	
								13	体部	-23.338	-55.353	0.416	2	
								17	体部	-23.618	-55.512	0.398	3	
								20	体部	-23.634	-55.766	0.377	1	
								23	口縁・体部	-23.199	-56.201	0.424	4	
								27	体部	-23.384	-56.803	0.416	1	
								62	頸部	-24.460	-59.090	0.615	1	
								168	体部	-23.139	-58.764	0.413	1	
								170	体・底	-22.775	-58.362	0.381	3	
								178	口縁～頸部	-23.052	-57.674	0.428	1	
								179	体部	-22.944	-57.310	0.442	1	
								180	体部	-23.239	-57.415	0.401	1	
								181	体部	-22.923	-56.780	0.458	1	
								188	体部	-23.528	-56.262	0.406	1	
								191	体部	-23.942	-55.720	0.414	1	
								193	体部	-23.986	-55.231	0.403	2	
								201	体部	-23.071	-61.053	0.495	2	
								209	体部	-23.279	-59.293	0.416	1	
								252	体部	-23.652	-55.190	0.353	1	
								254	体部	-23.371	-55.972	0.330	1	
								264	体部	-22.955	-57.084	0.397	1	
								266	体部	-23.808	-57.470	0.396	1	
								269	口縁・体部	-23.114	-57.457	0.368	2	
								271	体部	-23.431	-58.176	0.399	1	
								272	頸部	-22.699	-58.126	0.394	2	
								276	体部	-22.736	-58.711	0.376	1	
								475	底部	-23.163	-59.598	0.397	3	
								478	口縁	-23.318	-58.225	0.342	1	
								485	体部	-23.833	-56.008	0.396	2	

() は現存値及び復元値

Tab. 8 SR 3 出土土器観察表 8

(X軸は3200代、Y軸は55300代)

図版 NO	種類	器種	特徴	法量 (cm) ・ 色調				遺物取上 NO	部位	X軸	Y軸	H (m)	数
				口径	器高	胴径	底径						
116	土師器	甕	底部は厚く丸い。底部内面に炭化物付着。外面は煤付着。外面ヘラナデ。砂粒を多く含む。	内:N3/暗灰色 外:10YR 8 /3 浅黄橙色			331	体部	-21.575	-48.339	0.433	1	
							333	体部	-21.496	-48.104	0.412	1	
							336	体部	-21.468	-47.893	0.451	1	
							340	体部	-21.482	-47.435	0.396	1	
							342	体部・底部	-21.168	-47.365	0.422	5	
							343	体部	-20.923	-47.752	0.397	1	
							345	体部	-21.093	-46.881	0.451	1	
							348	体部	-20.855	-46.646	0.433	2	
117	土師器	甕	胴部中位に最大径。胴部は内面横位のヘラナデ、外面縦位のヘラナデ。底部外面に一部ヘラ削り。底部内面に炭化物が残る。小礫を多く含む。		(28.8)	(24.6)	28	体部	-23.784	-57.055	0.448		
							30	体・底部	-24.422	-56.636	0.489		
							45	体部	-23.709	-57.298	0.462		
							47	体部	-23.818	-57.579	0.470		
							48	体部	-23.421	-57.705	0.488		
							49	体部	-23.066	-57.539	0.496		
118	土師器	甕	口縁部は緩やかに外反。端部面どる。胴部中位に最大径。口縁部はヨコナデ及びヘラナデ。胴部内面横位のヘラナデ外面はヘラナデ。外面煤付着。小礫・砂粒を多く含む。	内:5YR6/2灰褐色 外:5YR6/4にぶい橙色	17.0	(19.4)	22.8	DSB	口縁			20	
119	土師器	甕	底部は厚く丸底。胴部中位に最大径を有し、口縁部は緩やかに外反する。口縁部内外面ヨコナデ。胴部内外面ナデ・ヘラナデ調整。底部を除き全面に煤付着。小礫を多く含む。	内: 2.5YR 7 / 6 橙色 外: 5YR 7 / 6 橙色	16.6	23.95	19.1	211	体部	-23.036	-50.261	0.424	3
								212	体部	-22.791	-50.255	0.405	2
								213	体部	-22.836	-50.072	0.413	3
								218	体部	-22.640	-49.789	0.396	1
								219	体部	-22.355	-49.508	0.404	6
								220	体部	-22.777	-49.582	0.436	8
								222	体部	-22.475	-49.367	0.419	2
								327	体部	-22.549	-48.935	0.422	1
								329	口縁	-22.157	-48.579	0.382	1
								335	口縁	-21.622	-47.945	0.416	1
								336	体部	-21.468	-47.893	0.451	1
								337	体部・頸部	-21.690	-47.722	0.390	3
								340	口縁～頸部	-21.482	-47.435	0.396	2
								342	底部	-21.168	-47.365	0.422	1
								349	底部	-20.516	-46.715	0.501	2
								358	体部	-20.891	-44.630	0.587	1
								372	底部	-20.518	-49.943	0.294	2
								383	底部	-20.066	-46.143	0.364	1
408	口縁～体部	-17.751	-43.176	0.325	3								
409	口縁～体部	-17.654	-42.525	0.327	2								
521	底部	-21.517	-48.460	0.362	1								
522	底部	-22.571	-49.358	0.423	1								
603	体部	-20.534	-51.517	0.233	2								
120	土師器	甕	底部は厚く丸底。胴部中位に最大径を有し、口縁部は緩やかに外反する。全体的に内外面ナデ・ヘラナデ調整。底部を除き全面に煤付着。砂粒を多く含む。	内: 10YR 3 / 3 暗褐色 外: 7.5YR 6 / 4 にぶい褐色	14.2	23.9	19.9	153	体部	-21.799	-60.190	0.351	3
								DSB					
121	土師器	甕	底部は厚く丸底。胴部中位に最大径を有し、口縁部は [く] の字状に外反する。口縁部内外面はヨコナデで一部外面にヘラナデが施される。胴部内外面ヘラナデ及び一部ハケ目。外面は、底部・口縁部を除き全面に煤付着。砂粒を多く含む。	内: 7.5YR 6 / 3 にぶい褐色 外: 同上	19.8	(29.5)	25.9	673	口部・体部	-24.823	-52.596	0.525	7
								6	体部	-23.643	-54.485	0.411	1
								7	体部	-23.349	-54.581	0.378	1
								9	体部	-23.360	-54.764	0.392	4
								10	体部	-23.355	-55.054	0.410	1
								11	体部	-23.177	-55.209	0.451	1
								17	体部	-23.618	-55.512	0.398	1
								170	底部	-22.775	-58.362	0.381	1
								171	体部	-22.971	-58.487	0.413	1
								178	体部	-23.052	-57.674	0.428	1
								179	体部	-22.944	-57.310	0.442	1
								180	体部	-23.239	-57.415	0.401	1
								189	体部	-23.872	-56.064	0.405	1
								217	体部	-22.421	-49.918	0.408	1
								273	底部	-23.068	-58.194	0.421	2
								274	底部	-22.836	-58.305	0.367	1
								342	体部	-21.168	-47.365	0.422	4
								348	体部	-20.855	-46.646	0.433	1
								351	体部	-20.691	-46.284	0.435	1
								355	口部～体部	-19.871	-45.882	0.426	2
								381	体部	-20.926	-46.495	0.409	5
								383	体部	-20.066	-46.143	0.364	1
								389	体部	-19.434	-45.208	0.404	1
								397	口縁～頸部	-19.330	-44.714	0.378	1
								398	体部	-18.977	-44.465	0.395	3
								413	口縁～頸部	-17.221	-41.769	0.313	1
485	体部	-23.833	-56.008	0.396	1								
520	体部	-21.694	-47.623	0.388	2								

() は現存値及び復元値

Tab. 9 SR3出土土器観察表9

(X軸は3200代、Y軸は55300代)

図版 NO	種類	器種	特徴	法量 (cm) ・ 色調				遺物取上 NO	部位	X軸	Y軸	H (m)	数
				口径	器高	胴径	底径						
122	土師器	甕	口縁部は緩やかに外反する。口縁部内外面ヨコナデの後ヘラナデ。胴部から底部にかけて内外面ヘラナデ。底部を除き外面煤付着。	14.8	23.8	21.0		673	体部	-24.823	-52.596	0.525	4
								693	体部	-26.083	-56.110	0.904	1
								13	口縁～体部	-23.338	-55.353	0.416	2
								18	体部	-23.322	-55.698	0.405	4
								23	体部	-23.199	-56.201	0.424	1
								24	体部	-23.421	-56.315	0.404	1
								51	体部	-22.882	-56.703	0.467	1
								70	体部	-22.783	-60.071	0.414	1
								166	底部	-23.102	-59.039	0.422	2
								171	体部	-22.971	-58.487	0.413	1
								178	口縁～底部	-23.052	-57.674	0.428	5
								179	口縁～底部	-22.944	-57.310	0.442	11
								180	体部	-23.239	-57.415	0.401	3
								183	底部	-23.218	-56.783	0.396	1
								264	体部	-22.955	-57.084	0.397	5
								265	体部	-23.563	-57.246	0.373	1
								267	体部	-23.114	-57.457	0.368	2
								268	体部	-22.863	-57.814	0.402	1
								269	口縁	-23.131	-57.856	0.405	1
								272	体部	-22.699	-58.126	0.394	1
275	口縁	-22.639	-58.454	0.359	2								
324	体部	-22.550	-50.258	0.444	1								
356	底部	-18.830	-45.593	0.462	1								
397	底部	-19.330	-44.714	0.378	1								
468	体部	-23.183	-61.029	0.505	1								
123	土師器	壺	胴部欠損。口縁部外傾し直線的。内外面ヨコナデ。小礫を含む。	10.1	(4.75)			23	口縁	-23.199	-56.201	0.424	1
								252	頸部	-23.652	-55.190	0.353	1
								265	口縁～頸部	-23.563	-57.246	0.373	1
								327	頸部	-22.549	-48.935	0.422	1
124	土師器	壺	口縁部のみ残存。外傾して直線的。内外面ヨコナデ。小礫を含む。	11.2	(5.5)			31	口縁～頸部	-24.202	-56.423	0.494	1
								31	頸部				4
								52	頸部	-23.174	-58.168	0.482	1
								52	口縁～頸部				1
125	土師器	壺	胴部欠損。口縁部は上方に直立して立ち上がる。内外面ヨコナデ。小礫を含む。	12.4	(4.9)			69	口縁～頸部	-23.263	-60.017	0.459	1
								70	口縁～頸部	-22.783	-60.071	0.414	1
								142	口縁～頸部	-22.566	-61.763	0.519	2
								172	口縁～頸部	-23.068	-58.213	0.426	1
								207	口縁～頸部	-23.101	-60.315	0.444	1
								209	口縁	-23.279	-59.293	0.416	1
279	頸部	-23.030	-60.333	0.412	1								
126	土師器	壺	口縁部は外傾する。肩部が張る。口縁部内外面ヨコナデの後ヘラナデ。肩部内外面ヘラナデ。	10.6	(6.2)			304	口縁	-18.716	-62.424	0.224	1
								311	体部	-18.176	-63.005	0.200	1
127	土師器	壺	底部は丸底。胴部は、球形を呈する。口縁部は、上方に内湾気味に立ち上がり端部はやや肥厚し内傾する面を有する。口縁部内外面ヨコナデ。胴部内外面はナデ及びヘラナデ調整。内面に粘土帯接合痕が残る。小礫を多く含む。	11.2	23.7	20.8		46	底部	-23.940	-57.489	0.492	1
								55	体部	-22.810	-58.761	0.480	1
								60	体部	-23.676	-59.092	0.500	1
								61	体部	-24.166	-59.039	0.532	1
								64	底部	-24.172	-59.468	0.568	3
								66	体部	-23.579	-59.446	0.462	1
								67	体部	-23.762	-59.705	0.529	2
								68	体部	-23.531	-59.826	0.478	1
								69	口縁～底部	-23.263	-60.017	0.459	2
								70	口縁～体部	-22.783	-60.071	0.414	6
								78	体部	-23.224	-60.480	0.507	1
								82	体・底部	-23.794	-60.457	0.621	2
								86	体部	-23.066	-62.894	0.671	1
								141	体部	-22.209	-62.220	0.470	1
								200	体部	-23.485	-60.760	0.521	1
								202	体部	-22.662	-61.143	0.494	1
								205	口縁～底部	-22.554	-60.507	0.371	21
207	口縁～体部	-23.101	-60.315	0.444	3								
475	体部	-23.163	-59.598	0.397	1								
128	土師器	壺	口縁部欠損。丸底で胴部は張りがあり球形を呈する。胴部中位に最大径を有する。外面ナデ調整。	(10.3)	14.4			11	体部	-23.177	-55.209	0.451	1
								385	底部	-11.585	-30.591	0.508	1
								385	体部				13
								673	体部	-24.823	-52.596	0.525	1

() は現存値及び復元値

Tab. 10 SR3 出土土器観察表10

(X軸は3200代、Y軸は55300代)

図版 NO	種類	器種	特徴	法量 (cm) ・ 色調				遺物取上 NO	部位	X軸	Y軸	H (m)	数
				口径	器高	胴径	底径						
129	土師器	壺	口縁部と底部欠損。丸底で胴部は張りがあり球胴形を呈する。内外面ナデ及びヘラナデ調整が施される。小礫を多く含む。	内: 5YR 8/3淡橙色 外: 5YR7/6橙色				5	体部	-23.874	-54.412	0.403	1
								9	体部	-23.360	-54.764	0.392	1
								10	体部	-23.355	-55.054	0.410	4
								13	体部	-23.338	-55.353	0.416	1
								17	体部	-23.618	-55.512	0.398	2
								19	体部	-23.520	-55.682	0.423	1
								21	体部	-23.578	-55.927	0.402	1
								23	体部	-23.199	-56.201	0.424	1
								27	体部	-23.384	-56.803	0.416	2
								183	体部	-23.218	-56.783	0.396	1
								184	体部	-23.550	-56.998	0.410	1
								190	体部	-23.635	-55.753	0.363	3
								194	体部	-23.630	-55.156	0.388	1
253	体部	-23.366	-55.629	0.351	1								
266	体部	-23.808	-57.470	0.396	1								
130	土師器	壺	胴上部から口縁部欠損。底部は丸底。胴部は張りがあり球胴形。内外面ナデ及びヘラナデ調整。砂粒を含む。	内: 10YR 7/3にぶい黄橙色 外: 5YR6/3にぶい橙色	(9.5)	13.6		129	体部	-20.430	-62.463	0.260	2
								130	体部	-20.508	-62.351	0.432	1
								960	底部	-19.467	-62.803	0.442	1
								960	体部				4
131	土師器	壺	口縁部欠損。丸底の底部から球形の胴部。外面肩部はヨコナデ、胴部は内外面丁寧なヘラナデ。底部外面に黒斑。	内: 7.5 Y R 6/4にぶい橙色 外: 同上	(11.1)	15.5		834	体部	-23.846	-55.238	0.571	4
								835	体部	-24.067	-55.449	0.638	2
								836	底部	-24.193	-55.796	0.556	2
								836	体部				10
								837	体部	-24.213	-56.128	0.578	4
132	須恵器	坏蓋	口縁部は、直線的に下方に下がり端部は平坦。断面三角形の稜をなし、天井部はほぼ平坦。天井部は3/5に回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。天井部の一部に自然釉。	内: N4/1 暗オリーブ灰色 外: 同上 断: 10R4/3赤褐色	12.0	4.3		C-156		-22.019	-59.674	0.373	
133	須恵器	杯蓋	口縁部は、内湾気味に下方に下がり端部は内傾する凹面をなす。断面三角形の稜をなし、天井部は丸く高い。天井部は2/3に回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	内: N5/ 灰色 外: 同上	12.4	5.45		84	口縁部	-23.694	-60.183	0.533	1
								730	口縁部	-25.178	-58.704	0.803	2
								737	底部	-25.005	-59.077	0.820	3
								856	口縁部	-24.793	-57.948	0.713	1
								874	体部	-23.321	-59.250	0.673	1
								876	口縁部	-23.818	-59.189	0.637	1
								884	底部	-24.963	-59.599	0.764	1
								895	口縁部	-23.496	-59.975	0.610	1
								900	体部	-23.209	-60.011	0.636	1
								742	口縁部	-24.615	-59.568	0.790	1
134	須恵器	坏蓋	口縁部は、やや外傾し下方に下がり端部は平坦。断面三角形の稜をなすが鋭くない。天井部は欠損するが回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	内: N4/1 暗オリーブ灰色 外: 同上 断: 10R4/3赤褐色	(13.4)	(3.2)		C-157		-22.015	-59.443	0.374	
135	須恵器	杯身	立ち上がりは内傾してのび、端部は内傾する。受部は水平に開く。底部はややいびつで丸みを持ち2/3に回転ヘラ削りが施される。外底に「/」状のヘラ記号を持つ。他は回転ナデ調整。	内: 5PB6/1青灰色 外: 5PB5/1青灰色	10.8		5.6	9	全体	-23.360	-54.764	0.392	1
136	須恵器	坏身	立ち上がりは内傾してのび、端部は内傾する。受部は水平に開く。底部は、平坦で2/3に回転ヘラ削りが施される。他は回転ナデ調整。	内: N5/0 灰色 外: 同上	10.8	4.7		Dトレ					
137	須恵器	坏身	立ち上がりは内傾してのび、端部は内傾し凹面をなす。受部は水平に開き断面三角形を呈する。底部は丸みを持ち2/3に回転ヘラ削りが施される。他は回転ナデ調整。	内: N5/ 灰色 外: 同上	10.7	4.8		606		-25.252	-54.184	0.789	
								684					
138	須恵器	杯身	立ち上がりは内傾してのび、端部は丸くおさめる。受部は水平に開く。底部は、平坦で4/5に回転ヘラ削りが施される。他は回転ナデ調整。	内: 7.5YR6/4にぶい橙色 外: N4/0 灰色 断: 7.5YR6/4にぶい橙色	11.1	5.2		673		-24.823	-52.596	0.525	
								C-6		-23.643	-54.485	0.411	
								C-210		-22.227	-58.932	0.425	
								C-205		-22.554	-60.507	0.371	
139	須恵器	甌	口縁部で屈曲し、直線的に外傾し端部は内面に浅い凹線をなす。口縁部外面に5本単位の波状文。頸部外面に刺突文を施す。	内: 10YR2/1黒色 外: 5YR3/3暗赤褐色	(12.2)	(2.8)		C-128	口縁	-20.807	-62.390	0.251	1
								C-120	口縁	-20.734	-63.136	0.340	1
								982	口縁	-22.955	-49.533	0.797	1
140	須恵器	高杯	坏下部から脚上部残存。脚部中位に一条の凸線が巡る。脚部の一部に自然釉。	内: 2.5YR3/1暗赤灰色 外: N2/0黒色 断: 2.5YR3/1暗赤灰色	(5.8)			391	坏-脚	-20.635	-44.659	0.467	

() は現存値及び復元値

Tab. 11 SR3 出土土器観察表11

(X軸は3200代、Y軸は55300代)

図版 NO	種類	器種	特徴	法量 (cm) ・ 色調				遺物取上 NO	部位	X軸	Y軸	H (m)	数
				口径	器高	胴径	底径						
141	須恵器	甕	胴部破片。外面平行叩きの後カキ目調整。内面同心円文がナデ消される。					671	体部	-19.463	-56.019	0.212	1
								971	体部	-18.095	-63.635	0.438	1
								C-298	体部	-19.412	-62.072	0.230	1
								C-302 DSB	体部	-19.125	-62.447	0.217	
142	須恵器	甕	口頸部は外反して立ち上がり,端部は拡張され外傾する凹面をなす。肩部は緩やかに下り胴部上位に最大径を有す。胴部下位は欠損。頸部から口縁部にかけて回転ナデ調整。胴部外面平行叩きの後カキ目調整。内面同心円文の後ナデ。	18.2	(21.6)	30.7		962		-20.031	-63.113	0.488	
								798		-20.478	-64.624	0.600	
143	須恵器	甕	胴部破片。外面平行叩き。内面ナデ調整。					255					
								371	体部	-13.955	-36.796	0.279	3
								372	体部	-13.442	-36.296	0.248	10
								373	体部	-13.794	-36.069	0.247	6
								668	体部	-24.135	-54.088	0.411	1
								990	体部	-24.978	-54.272	0.576	1
								C-20	体部	-23.634	-55.766	0.374	4
								C-25	体部	-23.682	-56.465	0.398	3
								C-190	体部	-23.635	-55.753	0.363	2
				C-265	体部	-23.563	-57.246	0.373	1				

() は現存値及び復元値

Tab. 12 SF 1 出土土器観察表1

図版 遺物	種類	器種	特徴	法量 (cm) ・ 色調			
				口径	器高	胴径	底径
167	土師器	手捏ね	平坦な底部で、口縁部は上方に立ち上がる。外面はナデ調整。内面は指頭圧痕が残る。砂粒を多く含む。	(3.4)	3.8		3
				内:2.5YR5/1黄灰色 外:10YR8/3浅黄褐色			
168	土師器	手捏ね	平坦な底部で、口縁部は外傾して上方に立ち上がる。外面はナデ調整。内面はヘラナデ調整されているが指頭圧痕が残る。砂粒を多く含む。	5.6	4.2		2.8
				内: 7.5YR8/4浅黄褐色 外: 10YR6/2灰黄褐色			
169	土師器	椀	丸底気味で、口縁部は内湾する。全体的に摩耗して調整不明瞭であるが、口縁部内外面ヨコナデ内面ヘラナデ。外面はナデ調整。	13.4	4.9		
				内:7.5YR7/4にぶい橙色 外:7.5YR7/2明褐色			
170	土師器	椀	平底気味で、口縁部は内湾する。口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ヘラナデ。外面は全体的に摩耗して調整不明。小礫を多く含む。	11.7	6.1		4.0
				内: 7.5YR 6/4にぶい橙色 外: 同上			
171	土師器	高杯	脚袖部欠損。脚部は屈曲して「ハ」の字状に開く。坏部は、緩やかな稜を持ち口縁部は直線的に外傾する。口縁部はヨコナデ。柱状部は外面ナデ、内面は鋭削り。全体的に摩耗が著しい。小礫を多く含む。	17.2	(12.2)		
				内: 5YR 7/6橙色 外: 同上			
172	土師器	甕	口縁部は「く」の字状の外反する。全体的に摩耗して調整不明。	25.0	(8.0)		
				内: 10YR 6/3にぶい黄褐色 外: 同上 139			
173	土師器	甕	口縁部は「く」の字状に外反する。口縁部は内外面ヨコナデ。胴部は、内外面ヘラナデ。外面ナデの後ヘラナデ。砂粒を多く含む。	15.0	(9.5)		
				内: 10YR 6/2灰黄褐色 外: 2.5YR5/6 明赤褐色			
174	土師器	甕	口縁部は「く」の字状に外反する。胴部中位に最大径。口縁部はヨコナデの後ヘラナデ。胴部は、内外面ヘラナデ。砂粒を多く含む。	17.1	(11.5)		
				内: 5YR 6/6橙色 外: 7.5YR 6/4にぶい橙色			
175	土師器	甕	丸底の底部。全体的に摩耗して調整不明。砂礫・砂粒を多く含む。		(10.0)		
				内: 5YR 7/6橙色 外: 10YR 6/3にぶい黄褐色			
176	土師器	甕	丸底の底部で、胴部中位から欠損。内面はヘラナデ。外面ナデ調整。		(9.2)		
				内:7.5YR4/3褐色 外:5YR4/4にぶい赤褐色 断:5YR4/1褐灰色			
177	土師器	甕	丸底の厚い底部で、同上部に最大径を有する。口縁部は「く」の字状に外反する。内外面共にヘラナデ調整。胴部外面に煤付着。	15.2	17.7	15.7	
				内: 7.5YR6/3にぶい褐色 外: 5YR6/6橙色			
178	土師器	甕	底部は厚く丸底。胴部中位に最大径を有し、口縁部は緩やかに外反する。口縁部外面ヨコナデ、内面ヘラナデ。胴部内外面ナデ・ヘラナデ調整であるが摩耗が著しい。砂粒を多く含む。	14.1	18.25	15.0	
				内: 2.5YR 6/8橙色 外: 同上			
179	土師器	甕	頸部は上方に立ち上がり、口縁部は外反する。外面ナデおよびヘラナデ。内面は摩耗が著しく不明。	15.9	(6.0)		
				内: 7.5YR 7/4にぶい橙色 外: 7.5YR 7/6橙色			
180	土師器	甕	底部は厚く丸底。胴部中位に最大径を有し、口縁部は緩やかに外反する。口縁部外面ヨコナデ、内面ヘラナデ。胴部内外面ナデ・ヘラナデ調整であるが全体的に摩耗が著しい。小礫を多く含む。	15.4	25.8	19.2	
				内: 7.5YR 7/3にぶい橙色 外: 10YR 6/2灰黄褐色			
181	土師器	甕	底部は丸底。胴部中位に最大径を有し、口縁部は「く」の字状に大きく外反する。口縁部内外面ヨコ方向のヘラナデ。胴部外面縦方向のヘラナデおよびナデ調整。内面横方向のヘラナデ。内外面指頭圧痕が残る。小礫を含む。	18.4	25.0	20.7	
				内: 7.5YR 6/4にぶい橙色 外: 同上			
182	土師器	甕	丸底の厚い底部で、胴部中位から欠損。内面はヘラナデ。外面ナデ調整であるが全体的に摩耗が著しい。		(6.6)		
				内: 10YR 4/2灰黄褐色 外: 2.5Y5/1暗灰黄色			
183	土師器	甕	丸底の底部で、胴部中位から欠損。内面はヘラナデ。外面ナデ調整であるが全体的に摩耗が著しい。		(6.8)		
				内: 5YR 7/4にぶい橙色 外: 2.5YR6/4 にぶい橙色			
184	土師器	壺	口縁部欠損。丸底の底部から胴部は球形を呈する。全体的に摩耗が著しく調整不明であるが、一部にヘラナデが認められる。砂粒を多く含む。		18.0	21.9	
				内: 5YR 7/ 4 橙色 外: 5YR6/4にぶい橙色			

() は現存値及び復元値

Tab. 13 SF 1 出土土器観察表2

図版 遺物	種類	器種	特徴	法量 (cm) ・ 色調			
				口径	器高	胴径	底径
185	土師器	椀	丸底の底部で、口縁部は内湾気味に外上方に立ち上がる。口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ヘラナデ。砂粒を含む。	13.5	4.8		
				内: 7.5YR 6/4にぶい橙色 外: 2.5YR6/3 にぶい橙色			
186	土師器	椀	高台をもち、体部は外上方に口縁部は上方に立ち上がる。内面はヘラナデ、外面は指頭圧痕が残る。砂粒を含む。	10.8	6.2		4.3
				内: 2.5YR6/6橙色 外: 同上			
187	土師器	高杯	脚部は下方で屈曲し裾開く。脚部は外面摩擦著しい。内面はヘラナデ。胎土は小礫を若干含む。		(5.3)		11.8
				内: 10YR 8/4浅黄褐色 外: 7.5YR 7/6褐色			
188	土師器	高杯	脚部は下方で屈曲し裾開く。脚部は外面ナデ調整。内面はヘラ削り。胎土は小礫を若干含む。		(6.1)		11.0
				内: 5YR 7/6褐色 外: 5YR 7/4にぶい橙色			
189	土師器	甕	やや平底気味の底部。胴部は、直線的に外傾して立ち上がる。内面ヘラナデおよびナデ調整。外面平行叩き。砂粒を多く含む。		(8.4)		
				内: 7.5YR 5/3にぶい褐色 外: 5YR 7/6褐色			
190	土師器	甕	底部は欠損。胴部中位に最大径を有し、口縁部は「く」の字状に大きく外反する。内面は全体的に横位のハケ目。外面は、横位から斜位の平行叩き。胎土に小礫を多く含む。胴部中位に煤附着。	(17.0)	(7.5)	(17.5)	
				内: 7.5YR 7/3にぶい橙色 外: 同上			
191	土師器		口縁部は「く」の字状に外反する。内外面はヨコナデ。全体的に磨耗が著しい。	(26.2)	(3.9)		
				内: 5YR4/2灰褐色 外: 同上			
192	土師器	甕	胴部は欠損。頸部は上方に立ち上がり口縁部は外傾する。口縁部内外面ヨコナデ。全体的に磨耗が著しい。砂粒を多く含む。	15.6	(7.1)		
				内: 10YR 5/2灰黄褐色 外: 同上			
193	土師器	甕	底部欠損。頸部は、上方の立ち上がり口縁部は外傾する。胴部中位に煤附着。胴部中位に最大径。全体的にヘラナデ及びナデ調整。内外面指頭圧痕が残る。砂粒を多く含む。	(16.4)	(16.8)	(19.2)	
				内: 2.5YR 5/6明赤褐色 外: 同上			
194	土師器	甕	胴部は欠損。頸部は上方に立ち上がり口縁部は外反する。口縁部内外面ヘラナデ。全体的に磨耗が著しい。砂粒を多く含む。	20.0	(7.3)		
				内: 5YR 6/6褐色 外: 5YR 5/6明赤褐色			
195	須恵器	坏蓋	口縁部は、内湾気味に下方に下がり端部は内傾する凹面をなす。断面三角形の稜をなし、天井部は丸く扁平なつまみを付す。天井部は2/3に回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	12.5	5.3		
				内: N5/灰色 外: N6/灰色 断: 7.5R5/2灰赤色			
196	須恵器	坏蓋	口縁部は、外下方に下がり端部は内傾する。断面三角形の稜をなし、天井部は平坦気味。天井部は2/3に回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	(11.5)	(6.8)		
				内: N6 / 灰色 外: N5/ 灰色 断: 5R4/1暗赤灰色			
197	須恵器	坏蓋	口縁部は、下方に下がり端部は内傾する凹面をなす。断面は稜をなし、天井部は丸く高い。天井部は2/3に回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。天井部の一部に自然釉。	12.4	5.3		
				内: N8/灰色 外: 2.5GY8/1 灰色 断: N8/灰色			
198	須恵器	坏蓋	口縁部は、下方に下がり端部は内傾する。断面三角形の稜をなし、天井部欠損。天井部は残存部に回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	12.0	(4.0)		
				内: 7.5Y5/1灰色 外: 同上			
199	須恵器	坏蓋	口縁部は、下方に下がり端部は内傾し凹面をなす。断面は稜をなし、天井部は平坦気味。天井部は2/3に回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	12.0	(4.3)		
				内: N 6/灰色 外: 同上			
200	須恵器	坏蓋	口縁部は、下方に下がり端部は内傾する。断面三角形の稜をなし、天井部は丸く高い。天井部は2/3に回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	12.6	(4.8)		
				内: N 6/1灰色 外: 同上			
201	須恵器	坏蓋	口縁部は、外下方に下がり端部は内傾する。稜は浅い凹線を巡らしている。天井部は欠損しているが平坦気味。回転ナデ調整。	13.1	(2.4)		
				内: N6/灰色 外: 5G5/1緑灰色			
202	須恵器	坏身	立ち上がりは内傾してのび、端部は内傾する。受部は水平に開く。底部は丸みを有し2/3に回転ヘラ削りが施される。他は回転ナデ調整。底部外面に「/」状のヘラ記号を持つ。	10.8	5.6		
				内: 5PB6/1青灰色 外: 5PB5/1青灰色 断: 5RP4/1暗紫灰色須坏身			
203	須恵器	坏身	立ち上がりは内傾してのび、端部はやや肥厚し内傾する。受部は水平にのびる。底部は丸みを有し2/3に回転ヘラ削りが施される。他は回転ナデ調整。底部外面に回転ナデ調整痕。	9.8	4.8		
				内: N7/灰白色 外: N6/灰色 断: 7.5YR7/1明褐色			

() は現存値及び復元値

Tab. 14 木製品法量表

図版番号	遺構名	品名	全長	全幅	全厚	樹種
11	SR 1	木 刀	(16.6)	2.7	1.3	ブナ科コナラ
12	SR 1	木製品	13.3	2.8	1.2	マツ科モミ属
13	SR 1	木製品	11.5	3.3	0.2	ヒノキ科ヒノキ
14	SR 1	木製品	14.9	1.6	0.2	ヒノキ科ヒノキ
21	SR 2	曲 物	(19.6)		0.7	ヒノキ科ヒノキ
22	SR 2	木製品	18.6	4.3	0.5	ヒノキ科ヒノキ
23	SR 2	木製品	18.6	1.8	1.7	ヒノキ科ヒノキ
24	SR 2	杭	36.2	5.3	5.3	バラ科ヤマザクラ
25	SR 2	杭	29.6	5.4	5.7	ツバキ科ツバキ
26	SR 2	杭	30.1	4.1	4.0	ツバキ科ツバキ
27	SR 2	杭	28.0	6.0	5.5	ツゲ科ツゲ
28	SR 2	杭	28.7	6.0	6.6	ツバキ科ツバキ
29	SR 2	杭	31.0	4.0	4.2	バラ科ヤマザクラ
30	SR 2	杭	41.0	5.5	5.7	ツバキ科ツバキ
31	SR 2	杭	61.2	9.2	9.2	ツバキ科ツバキ
32	SR 2	杭	55.7	(4.7)	(5.4)	ミズキ科ミズキ
33	SR 2	杭	44.2	3.7	3.8	クワ科イヌビワ
34	SR 2	杭	31.8	2.9	3.9	ツバキ科ツバキ
35	SR 2	杭	23.5	6.5	6.4	ツバキ科ツバキ
36	SR 2	杭	25.4	3.6	3.6	ツバキ科ツバキ
144	SR 3	木 刀	47.3	5.7	5.7	スギ科スギ
145	SR 3	木 刀	(20.8)	5.7	5.7	ヒノキ科ヒノキ
146	SR 3	木製品	12.5	7.4	7.4	イチイ科イチイ
147	SR 3	木製品	13.3	7.4	7.4	イチイ科イチイ
148	SR 3	木製品	16.6	2.4	2.4	スギ科スギ
149	SR 3	木製品	(14.4)	0.8	0.8	スギ科スギ
150	SR 3	木製品	12.1	3.4	3.4	ニレ科ハルニレ
151	SR 3	木製品	22.6	9.0	9.0	ヒノキ科ヒノキ
152	SR 3	木製品	29.7	12.9	12.9	
153	SR 3	櫨	50.9	9.9	9.9	ツバキ科サカキ
154	SR 3	櫨	50.7	8.5	8.5	ツバキ科サカキ
155	SR 3	櫨	20.4	7.6	7.6	ニレ科ハルニレ
156	SR 3	木製品	(8.2)	2.5	2.5	ヒノキ科ヒノキ
157	SR 3	木製品	(9.0)	2.4	2.4	ヒノキ科ヒノキ
158	SR 3	木製品	(29.6)	2.6	2.6	ヒノキ科ヒノキ
159	SR 3	曲 物	(24.3)	4.9	4.9	ヒノキ科ヒノキ
160	SR 3	底 板	14.1	10.5	10.5	ヒノキ科ヒノキ
161	SR 3	木製品	(30.9)	5.5	5.5	ヒノキ科ヒノキ

() は現存値及び復元値

第Ⅳ章 第Ⅱ区の調査

第1節 調査の方法

第Ⅱ区では、本調査発掘に先立ち県道具同下ノ加江線の北側路肩より2.5mの間隔を保ちつつ、対象の沿線75.3mに渡り鉄製矢板を施設して同線擁護の備えとした。この鉄製矢板施設範囲内73.7mを南限長辺とし、幅23.3mに設定した長方形を呈する本調査実施区画（元田地：総面積1717.2m²）は、北側の田地に対して幅3.5mの保田帯兼重機移動用通路を余す。



遺跡遠景

現地の堆積層は粒径約1/20mm以下のシルトを主体に形成するが、降雨湧水によって地盤が軟弱な状況に応じ、調査区四端の掘方は、表土層より第Ⅴ層半ば（標高+4.40m前後～+2.70m前後）に至る堆積部分を勾配約26度の緩斜面に留め、以下第Ⅻ層（標高-0.10m前後～）に至る部分については、勾配80度強の壁面と狭幅の平場を反復する段掘とし、土留めを要する箇所には木の端材を仮設して本調査発掘を実施した。各過程に於ける調査方法の概略は、順次以下の如くである。

(1) 上部無遺物層の除去

まず、前年度試掘調査時に遺物の分布を見なかった表土を始めとする上部堆積に対し、重機を用いて全面的除去を行い、表土下約1.70mの第Ⅴ層半ばに至って燃焼の結果と見られる炭化物微細片の水平分布を検出し、この作業を停止する。

(2) 中央トレンチの開削

地層堆積及び遺物包含の概況把握を目的として、調査区中央から西半に及ぶT字形トレンチを重機によって開削する。

(3) 調査小区の設定

基本的に調査区の長軸及び短軸方向に従う方形区画とし、中央トレンチ以東を順次A区・B区・C区、中央トレンチ以北をD区、以南をE区とする。

(4) 包含層の剥除及び遺物・遺構の検出

包含層の剥除に当たっては、排水兼土層観察用の補助トレンチ（幅0.5m前後）を縦横に掘深しつつ、それら区画内部の手掘りを反復する。検出した遺物については写真撮影・光波システムによる地点測量の後、取り上げを行い、遺構については検出及び完掘写真撮影の後、平板と水準機を用いて遺構プランの測量を行う。

(5) 土壌サンプルの採取

人工遺物堆積年代前後の古環境情報取得を目的とし、当時の珪藻プランクトンや植物花粉・珪酸体の遺留する可能性を持つ堆積土壌に対してサンプル採取を行う。D区北壁の2地点に設定した連続採取ポイントは、いずれも標高-0.3m以上、10cm毎の垂直間隔で分布する。パリオ・サーヴェイ(株)に委託した花粉分析の成果は、付編に収録した。(武吉)

第2節 調査の成果

1. 第II区の概要

第II区は、対象調査区範囲内の中央部を走る市道を挟んだ東側に位置し、南北23.1m、東西74.5mの約1720m²の調査区である。中筋川が蛇行を繰り返す屈曲部に形成された自然堤防帯に位置しており、第II区から中筋川現流左岸の堤防までの距離は約150m前後である。中筋平野における下流域は冠水が有名である。また、長い間に繰り返された氾濫の結果、非常に堆積の厚い沖積平野を形成している。具同中山地区一帯は、現在でも洪水・氾濫の痕跡のために、現河川に近い方が標高が高い状況を生み出している。この為、地域の用排水は河川より遠方へ、或は下流より上流へと流出する現象が生じている。これを反映して、第II区の標高は約4.4mを測り、第I区よりも若干低い数値を示している。今次調査対象区は、これら河川によって形成された氾濫原であり、シルト・粘土から形成されている。周辺一帯は、現在ほとんどが水田として土地利用されている。(山崎)



調査区及びその周辺の土地利用

2. 基本層序

(1) 層位区分

土壌体積の層位的把握に当たっては、調査区北辺の断面を基準とし、表土から掘削最深部の順に下記の分層を行った。層相の分類名称は、パリオ・サーヴェイ(株)による分析結果に準拠する。また、遊離鉄の酸化・還元や集積・溶脱の状況、および有機物の混在や土性に関連する若干の項目は、フィールド観察の記録に基づく。

- I層：褐灰色シルト（水田耕作土）：酸化鉄の集積がやや目立ち、植物の根系が多繁する。
- II層：褐灰色シルト（水田床土）：植物の根系に酸化鉄が多く集積する。土壌の締めりは強い。
- III層：褐灰色シルト質粘土（水田床土）：植物の細根を散見し、酸化鉄の集積は弱めである。
- IV層：灰褐色シルト（集積層）：酸化鉄の集積が極めて多い。土壌は締めりが弱く、脆い。
- V層：青灰色砂質シルト（グライ層）：極細粒砂を多含するが、土壌の締めりや粘性は非常に強く、炭化物や植物遺体等の有機成分が特に少ない。

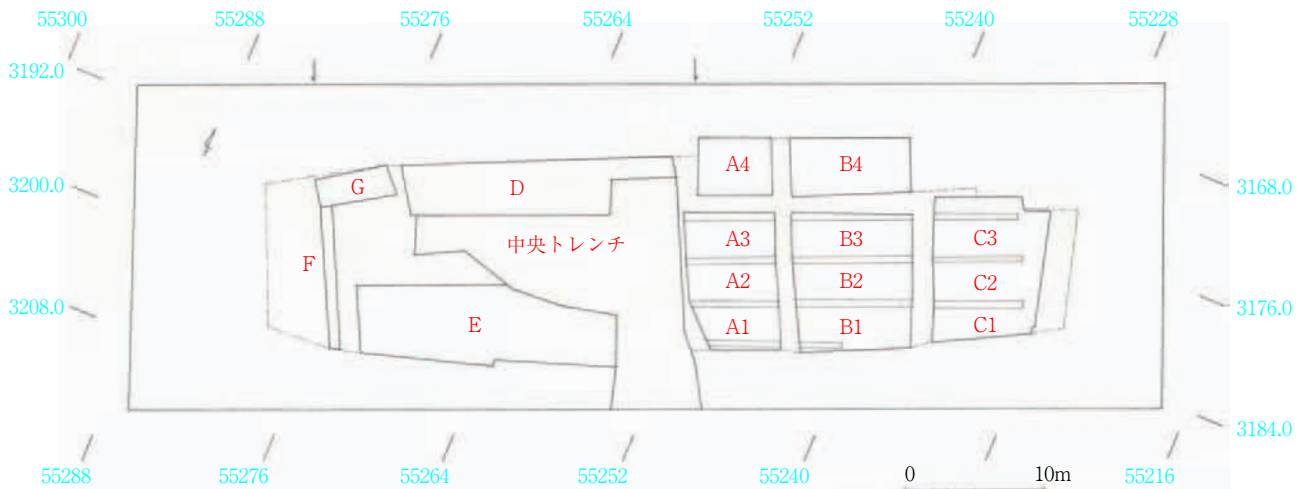


Fig. 41 第Ⅱ区の区割り

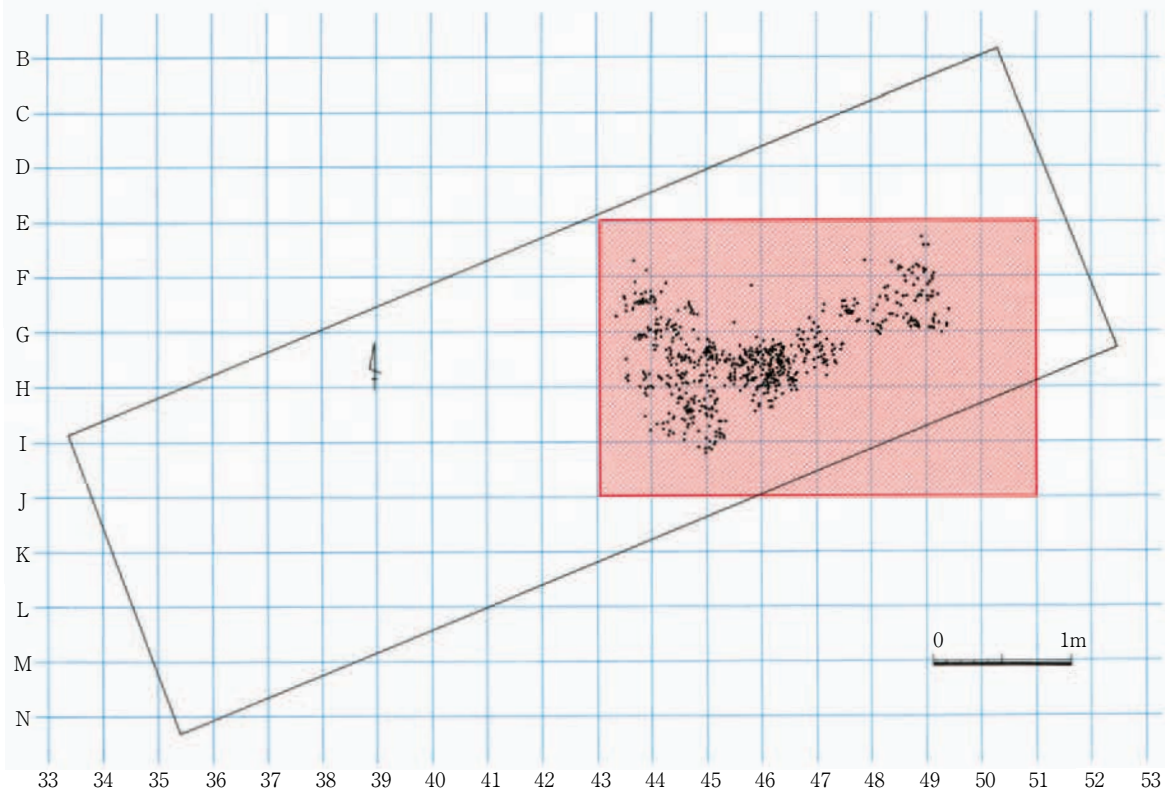
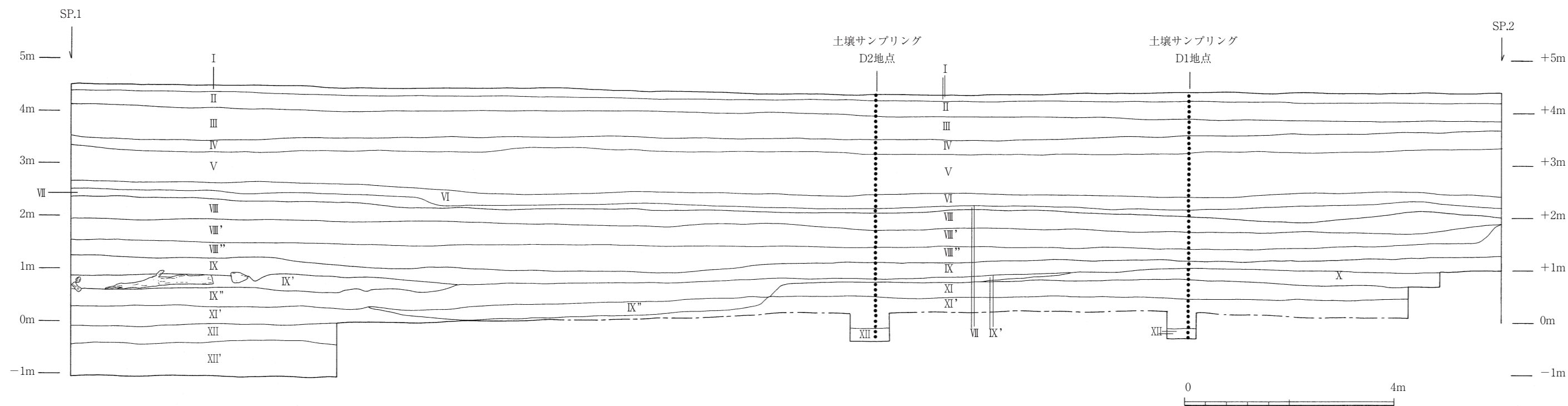


Fig. 42 第Ⅱ区グリッド設定図

Ⅵ層：灰色シルト質粘土（グライ層）：細粒砂を多含するが、粘性は強めであり、土壤の締まりは強い。炭化物の混在が相対的に多い。

Ⅶ層：灰色シルト質粘土（グライ層）：炭化物が多く含まれる。炭化物の集中箇所以外では、土壤の粘性が極めて弱い。

Ⅷ層：灰オリーブ色粘土（グライ層）：細粒砂を交えるが、土壤の締まりは強い。炭化物の混在が



I層：褐灰色シルト（水田耕作土）
 II層：褐灰色シルト（水田床土）
 III層：褐灰色シルト質粘土（水田床土）
 IV層：灰褐色シルト（集積層）
 V層：青灰色砂質シルト（グライ層）
 VI層：灰色シルト質粘土（グライ層）

VII層：灰色シルト質粘土（グライ層）
 VIII層：灰オリーブ色粘土（グライ層）
 VIII'層：灰オリーブ色粘土（グライ層）
 VIII''層：灰オリーブ色シルト質粘土（擬似グライ層）
 IX層：灰オリーブ色シルト（擬似グライ層）
 IX'層：灰オリーブ色シルト（擬似グライ層）

X層：灰色シルト質粘土（グライ層）
 XI層：灰色シルト質粘土（グライ層）
 XI'層：灰色植物遺体混じり粘土（グライ層～半泥炭質層）
 XII層：黒褐色植物遺体混じり粘土（半泥炭質重粘土層）
 XII'層：褐黄色植物遺体混じり粘土（半泥炭質重粘土層）

Fig. 43 第II区 北壁の堆積状況（基本層序）

やや多い。

VIII'層：灰オリーブ色粘土（グライ層）：細粒砂を交えるが、土壌の締まりは強い。炭化物の粒子を散見する。

VIII''層：灰オリーブ色シルト質粘土（擬似グライ層）：細粒砂を交え、土壌の締まりが弱めである。特に含砂の多い箇所では、酸化鉄の集積度が高い。炭化物を散見する。



北壁セクション

IX層：灰オリーブ色シルト（擬似グライ層）：粗粒砂を交え、土質は脆い。酸化鉄の集積度が高めであり、炭化物を散見する。

IX'層：灰オリーブ色シルト（擬似グライ層）：粗粒砂を交え、土質は脆い。酸化鉄の集積度が高めであり、若干の植物遺体や流木等を含む。

X層：灰色シルト質粘土（グライ層）：細粒砂を交えるが、土壌の締まりは強い。微量の炭化物を含む。

XI層：灰色シルト質粘土（グライ層）：細粒砂を交え、土壌の締まりは弱めである。藍鉄鉱の集積を散見し、極微量の炭化物を含む。

XI'層：灰色植物遺体混じり粘土（グライ層～半泥炭質層）：XI層との層界に灰白色化した漂白粘土の薄層が挟在するほかは、概ねXI層に等しい。ここでは、層準の低下に伴い植物遺体の分布密度が増す。

XII層：黒褐色植物遺体混じり粘土（半泥炭質重粘土層）：半炭化状態の植物遺体が黒泥化した粘土中に水平堆積する。

XII'層：褐黄色植物遺体混じり粘土（半泥炭質重粘土層）：半炭化状態の植物遺体が黒泥化した粘土中に水平堆積する。

XII''層：暗灰色植物遺体混じり粘土（半泥炭質重粘土層）：半炭化状態の植物遺体が黒泥化した粘土中に水平堆積する。

(2) 堆積の概要

第II区の全域に渡り、標高-0.10m前後を境に半泥炭質の重粘土層（XII各層）から還元状態の粘土～シルト層（XI各層～V層）へと漸移し、更に酸化鉄の集積を生じたシルト層（IV層～表土層）が覆う堆積相が見られる。湿地性植物の埋没した様相を示すXII各層は、わずかに東高西低の水準変化を留める。その直上を覆うXI各層も概ね前者の水準変化に従うが、ここでは植物遺体の分布密度が漸減しており、基本的には中筋川河畔の湿泥地から自然堤防へと地形変化する初層と見られる。本区の調査では、このXI層からVI層に至るグライ（還元）層より人工の遺物が出土している。

3. 遺物の分布状況

土器片を主とする遺物の分布は調査区の東半に多く、概ね標高0mから+1m前後にかけての層準（XI層～IX層下位）と+2m前後の水準（VIII層～VII層）に集中する。前者のグループは縄文晩期から弥生前期に跨り、特に木製品の分布状況からは、堆積面の緩斜に沿う西から東への水流の影響が推測される。後者のグループは弥生中期から後期の範疇に属し、A1～3小区のVIII層で検出された小型ピット群付近の上下の水準に分布するが、ピット群との関係は不明である。

出土した土器片の水平分布とその接合関係、および垂直分布の状況は、Fig.43に示す通りである。（武吉）

4. 検出遺構

第Ⅱ区で検出した遺構は、一定の狭い範囲においてピット状の遺構を9基確認したのみである。調査区ほぼ中央部に位置しているA1～A3の地点であり、確認したピット一帯は、周りよりも地形がやや高くなっているような状況を呈していた。検出面は第VIII層上面で、埋土は暗灰色粘質土単純一層である。これらは、幅14～23cmの円形及び楕円形プランを有し、その深さは12～27cmと比較的小規模なものばかりであった。これらのピットは、すべて半截を行って断面の確認を行った。不自然ではあるが、ほぼ垂直方向に掘られていた。いずれのピットも炭化物を多く含んでいたが、その性格は不明である。また、周辺での土器集中や石包丁の出土等から、配列等に規則性がないか更に検討を行ったが、見いだすことができなかった。（山崎）



検出したピット群

ピットNo.	平面規模 (cm)	深さ (cm)	平面形態
P1	径12.0	21.6	円形
P2	径14.0	18.0	円形
P3	22.0×16.0	15.9	楕円形
P4	22.0×16.0	13.3	楕円形
P5	径20.0	13.5	円形
P6	径22.0	27.0	円形
P7	22.0×18.0	13.2	楕円形
P8	径20.0	13.2	円形
P9	径16.0	12.1	半円形

Tab. 27 ピット計測表

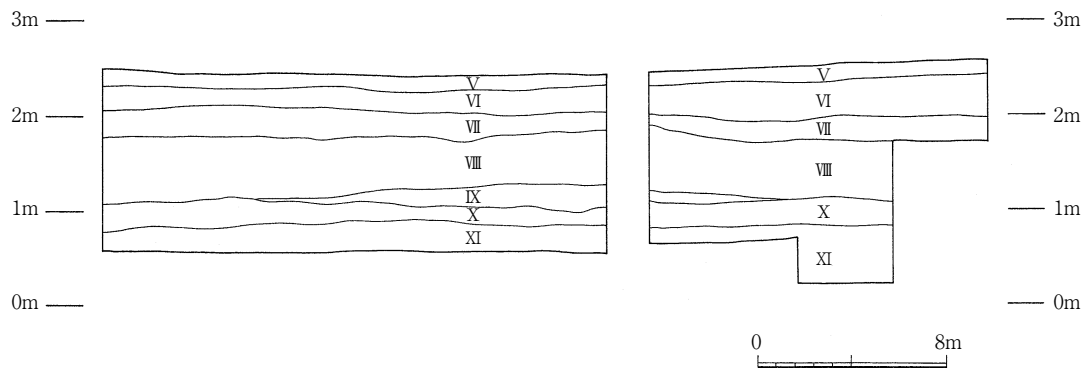


Fig. 44 中央バンク西壁の堆積状況

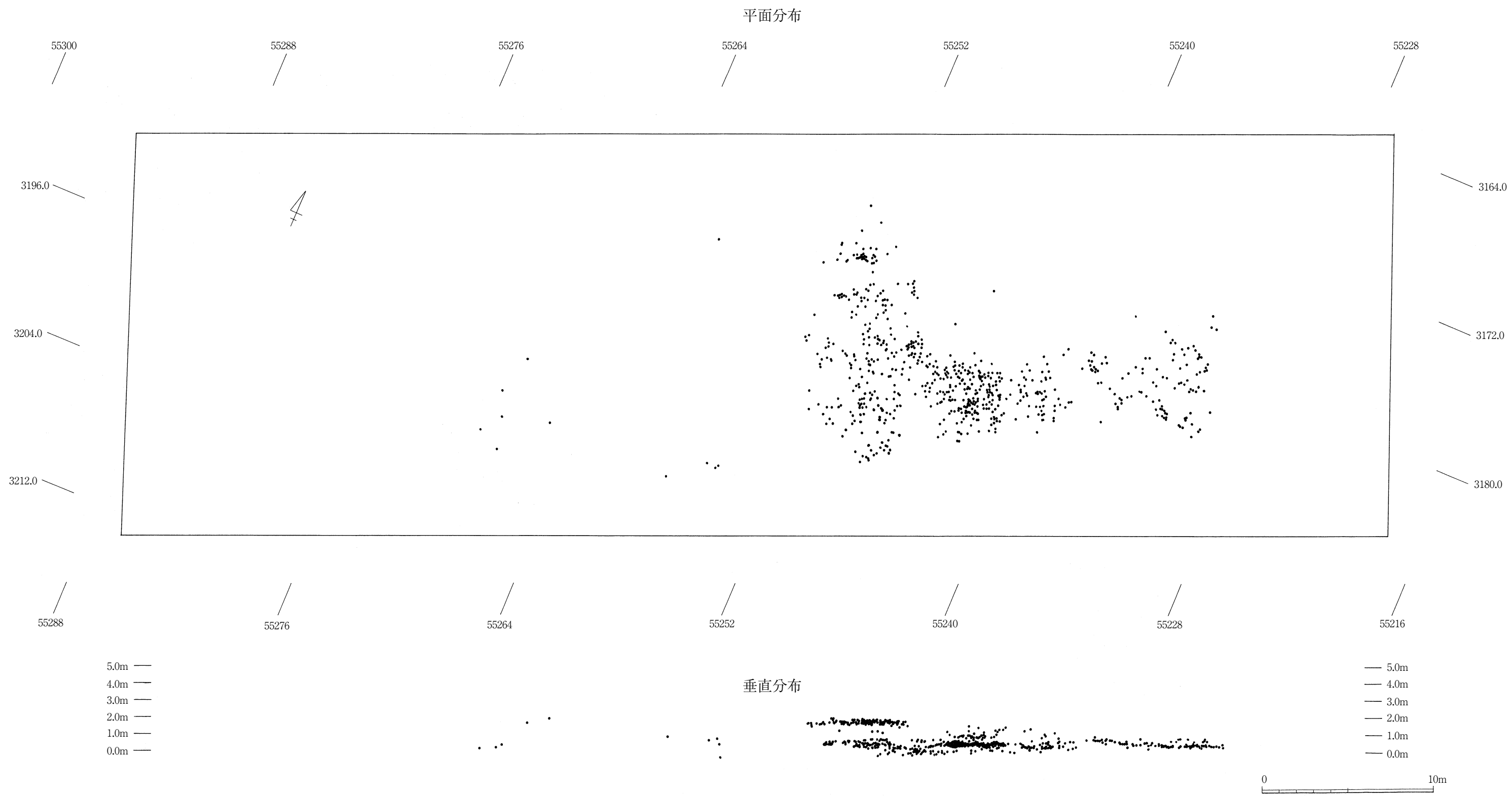


Fig. 45 第II区 遺物分布状況図

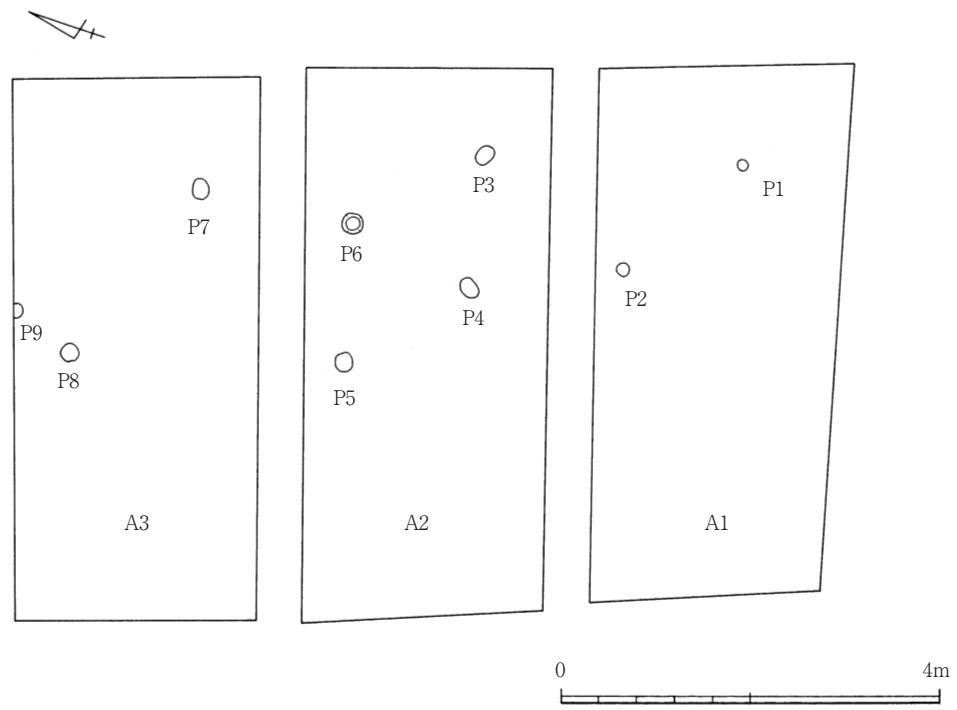


Fig. 46 遺構配置図

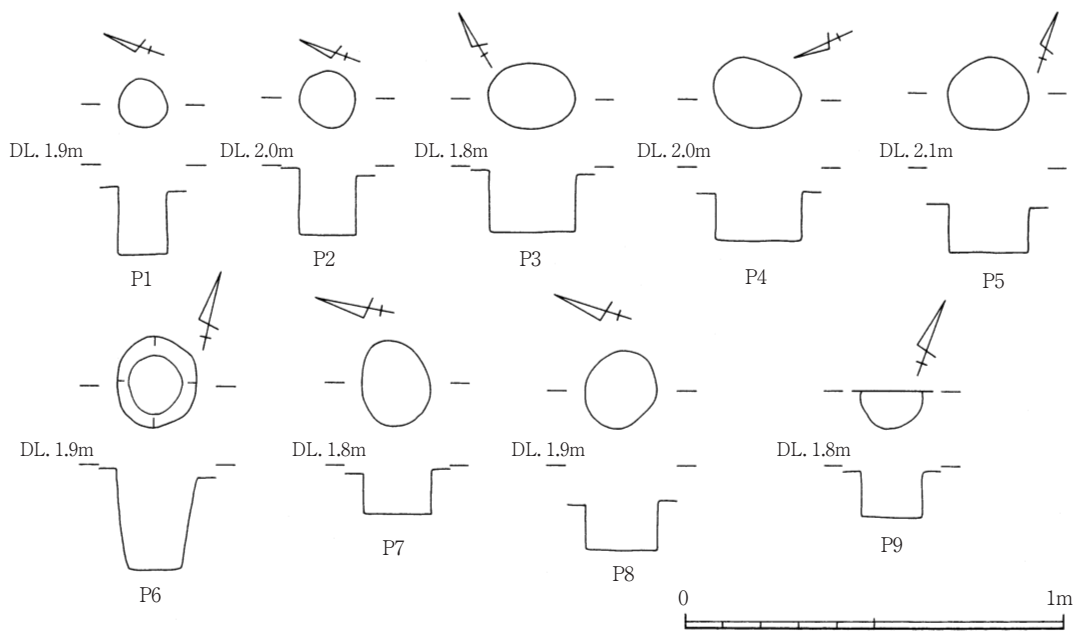


Fig. 47 遺構平面図及び断面図

5. VII～VIII層の出土遺物

(1) 弥生土器・土師器 (Fig48-214～234)

調査区中央部周辺で比較的まとまって出土したもので、周辺部においてはその出土を認めることができなかつた。214～225は口縁部ないし口縁から胴部へかけての個体であり、226～234は底部ないし底部から胴部へかけての個体である。全般的に指頭によるナデや、縦・斜め方向のハケ調整を施すものが目立つ。

①壺 (Fig48-225・232)

225は、口縁部に粘土帯を貼付して肥厚させている。232は、小さな平底から若干丸みを帯びながら外方へ立ち上がっていく。内外面しっかりナデ調整を施すが、外面にタタキが残りハケ調整が施されている。

②甕 (Fig48-214～224・226～231・233・234)

214・215は口縁部に最大径を持つもので、上胴部から大きくカーブを描いて外反し、口縁端部は面取る。内外面共にハケ調整を施すが、口縁部周辺は特に顕著である。218も内外面共に口縁部のハケ調整が顕著であり、面取った端部にまで及ぶ所もある。216・217のハケ調整は、原体が細く他に比べて丁寧である。口縁端部は丸く仕上げる。220～222は最大径を胴部に持ち、やや球形に膨らむタイプである。口縁部の指頭圧痕が顕著であり、端部は丸く収める。222は外反する口頸部に粘土を貼り付けている。内面は木理の粗いハケ調整が顕著であるが、外面はほとんどがナデ消されている。また、内面に若干砂粒の動いた部分が認められる所もあり、弱い削りを施しているようである。220・221は粘土帯の接合部がハッキリしており、外傾接合が認められる。その為か外面の剥離が多く見られる。窪んだ口頸部以外は、外面全体に煤の付着が顕著に見られる。223は「く」字状に外反するものであり、内外面共に強いナデを施す。224は大きく外反する口縁部であり、端部は面取る。他のものとは色調・胎土が大きく異なる。228～230は長胴を有するタイプで、内外面共にハケ調整及び指頭圧痕が顕著である。また、外面の剥離が多く見られる。231は砲弾型と呼ばれるタイプで、外面にはタタキが施されている。233は内外面ハケ調整が見られる。外面の剥離も目立つ。234は鉢の可能性もある。底面を丸く窪ませている。底部はすべて平底の範疇で捉えることができるが、大きめのしっかりした底部を呈するもの (226・227)、やや小振りの底部を呈するもの (228～230)、小さな底部を呈するもの (231・233) がある。

(2) 石器 (Fig56-301・302)

301は半月形直線刃の磨製石包丁である。片刃である。全長4.3cm・全幅8.5cm・全厚0.8cm・重量27.7gである。頁岩製で、自然面を多く残す。刃部のみ両面を磨いている。両面穿孔により、2つの孔穴を有する。302は管玉である。全長2.8cm・全幅0.8cm・重量2.9gである。石質は、俗名で軟玉と言われるもので、鉞物名として滑石と呼ばれることもあるが、正式名はタルクである。

6. IX～XI層の出土遺物

(1) 縄文土器

① 深鉢

I 類 (Fig49・50-235～244)

下方から開いて立ち上がったものが、上胴部で「く」の字状に屈曲し、なめらかに外弯するタイプである。口縁部に最大径を持つ。突帯を有するタイプ（I-a類）と突帯を有しないタイプ（I-b類）に分けられる。

I-a類 (Fig49-235～243)

口縁部の突帯が付く位置が若干異なり、口縁端部から施されているものと（235・236・239～242）、口縁端部よりやや下がった所に施されているもの（237・238・243）があるが、ここでは一括する。また、胴部に突帯が施されるものは、すべて2条突帯である。これらの突帯はすべて刻目突帯である。それらの中には、屈曲後にわずかに内傾して立ち上がるもの（235・236等）と、口頸部が、ほぼ直線的に立ち上がるもの（237・238等）がある。235・236は2条突帯を有する。口縁部と屈曲する胴部に突帯を施した後、ナデ調整を行う。施される横方向の強いナデによって、235のように突帯上方が面をなしたり、胴部の突帯の上下が凹状をなすものもある。突帯に施されている刻目は、横長のO状をなすもの（236～240・242・243）、菱形状をなすもの（235）、ヘラ状原体での右下がりのもの（241）がある。器面は、条痕・ナデを施して調整する。235は内面に斜め方向の条痕が顕著である。外面はナデを施しているが、若干条痕が残る。236は外面に横位の条痕を施す。この2点は外面に煤が多く付着する。共に口径34～36cm強を測り、特に236は器壁が厚く、しかも焼成堅緻である。237・238は共に内外面に横位の条痕が顕著である。口縁部周辺は横方向にナデ調整を行う。237の口縁部下には焼成後円孔を穿つ。239は口径40cm弱の大きめの個体である。下方から外方へ立ち上がり、胴部で屈曲して直線的に立ち上がり、口縁部でわずかに外反する。胴部の屈曲部は突帯状に厚くなっている。全体を比較的丁寧なナデ調整で仕上げているものの、部分的に横位の条痕が残っている。240～243は口縁部細片である。横方向の強いナデが見られる。口唇に刻みを施すものは皆無である。

I-b類 (Fig50-244)

244は、下方から外方へ直線的に立ち上がり、胴部で「く」の字状に屈曲し、垂直方向へ直線的に立ち上がりながら口頸部で若干外反する。口縁部の作りは一定せずに凹凸があり、端部が外側に突出する所さえもある。内外面共に横・斜め方向の貝殻条痕が顕著である。粗製深鉢である。

II 類 (Fig50-245)

下方から開いて立ち上がったものが、胴部の屈曲部から一転内傾して立ち上がり、口縁部が短く外反するものである。口縁端部が部分的に突帯状になっている箇所が見られる。胴部に最大径を持つ。他の刻目突帯を有する土器と比べると異質である。突帯は、口縁直下と胴部屈曲部下方に施されており、口縁部周辺は横方向のナデが顕著である。刻目はヘラ状の原体で施し

ているが、間隔が一定しないなど雑である。内外面に横位の強い擦痕が見られる。また、その上をナデ調整する。器壁は厚く焼成堅緻である。煤の付着が顕著である。

② 胴部 (Fig50-247~251)

247~249は突帯を施した屈曲部である。247の突帯は丁寧に施されており、刻目も規則正しい。内外面共に横位の条痕を施す。248の突帯は指で摘んでおり雑である。249は胎土が他のものとは異なり、搬入品と考えられる。250・251は内外面の条痕が顕著である。施されている条痕及び器壁は雑である。突帯を有するものは深鉢 I-a類で、粗製の条痕地のものは深鉢 I-b類であろう。

③ (浅) 鉢 (Fig50-246)

下方から外方へ立ち上がり、胴部で屈曲する。更に、外方へわずかに傾きながら立ち上がり、口縁部で若干外反する。端部は丸く収める。

(2) 弥生土器

① 壺 (Fig51-252~255)

252は体部が大きく膨らむ胴部片である。上胴部に段部を有し、その部分に沈線を巡らす。器面調整は、内外面共全面に横方向のヘラ磨きを施している。内面は、指頭圧痕が残る。内外面共に煤の付着が顕著に見られる。253も胴部片であるが、下胴部に最大径を持つ。屈曲部上方に4条の沈線を巡らしている。また、斜め方向に4条単位の沈線を配している。外面は磨耗が激しい所もあるが、横方向のヘラ磨きを施す。内面はナデ調整を施す。指頭圧痕が残る。外面は煤の付着が多量に見られる。254は、胴部の最大径の部分に2条の沈線を巡らす。また、その下方に3条を単位とする上弦の重弧文を施している。内外面ナデ調整を行うが、外面は丁寧である。内面にはヘラ状の原体で調整した跡が見られる。外面に煤が付着する。255は、器壁の厚い口縁部片である。大きく外反し、端部は丸く収める。丁寧なナデ調整を施す。

② 甕 (Fig51-54-256~290)

今回出土した資料の中で最も多い。形態的には、大きく分けると口縁部が如意状に短く外反するタイプと、上胴部から大きくカーブを描いて口縁部に至るタイプがある。更に、器壁が薄く胎土が他のものと異なるタイプを含めると3つの系統に分類できる。しかし、ここでは沈線や突帯、或は刻目といった属性に着目して分類を行った。中には、更にそれらを細分できるものもある。

I 類 (Fig51-256~265)

如意状またはそれに近い外反を有するタイプである。更に口縁部に刻目を施すもの(I-a類)、無刻のもの(I-b類)、上胴部に沈線帯を有するもの(I-c類)に細分できる。

I-a類 (Fig51-256~258)

256は、平底の底部から外方へ立ち上がって行く。口縁端部を丸く収めるものの、細い沈線を部分的に施す。器高が低い。257は、直線的に立ち上がる胴部から、一旦内弯気味にすばま

りながら口縁が外反していく。胴径と口径がほぼ同じである。外面の縦方向へのハケが顕著である。258は上胴部で直線的に立ち上がったものが、そのまま外反していく。口唇部を丸く収めるもの(256・257)と面取るもの(258)があり、これらは総じて口縁下半または下端にヘラ状原体で刻目を施す。調整は内外面共にナデ調整を主とするが、特に口縁部周辺は横方向の強いナデを施す。また、指頭圧痕が顕著であり、中でも256の外面の頸部及び内面には、それが顕著に見られる。すべて外面が煤ける。

I-b類 (Fig51-259・260)

259は、直線的に立ち上がる胴部から、口縁部に外反していく。内外面の指頭圧痕が顕著である。260は口縁部の外反が強い。いずれもナデ調整を施し、口縁端部は丸く収める。外面は煤ける。

I-c類 (Fig51・52-261~265)

頸部に沈線帯を有する一群である。これらは例外なく口唇部に刻目を有する。261は、6~7条のヘラ描沈線帯を有し、その下に刺突列点文を2列にわたって配す。口唇部全面に刻目を施す。ハケ調整が顕著で、外面には縦方向のハケが全面に、内面には横方向のハケが外反した口縁部に施されている。262は、底部から口縁にかけて復元可能となった。厚い底部を有し、外方へ立ち上がりながら上胴部で膨らみ、口縁部は如意状に外反する。頸部には4条のヘラ描沈線帯を有し、口唇部全面に刻目を施す。外面に若干ハケが見られるが、全体的にはナデ調整を施す。外面胴部上方に煤が付着する。263~265もほぼ同じ形態であろう。尚、263・264は同一個体と考えられる。264は沈線が4条、265は2条確認できる。施されている刻目は非常に丁寧である。特に263は、粘土をきれいに取り除き、菱形状をなす。ハケの原体はきめが細かく、しかも丁寧である。焼成・胎土も他の土器とは異なり、搬入品と考えられる。

II類 (Fig52-266・267)

上胴部から大きなカーブを描いて口縁部に至るタイプである。266は、丸く膨らんだ胴部から大きくカーブを描いて外反していく。頸部に2本単位の沈線を、2ヶ所ヘラで巡らす。沈線が合わない所がある。ナデ調整を主とするが、外面には斜め方向に擦痕が残る。部分的に個体の歪みが見られる。外面の煤付着が顕著である。267は、やや厚めの器壁を持ち口縁端部は面取る。共に内外面の指頭圧痕が顕著である。

III類 (Fig52・53・54-268~288)

突帯文系の土器群である。突帯の形状から、しっかりした大きめの突帯を有した無刻のタイプ(III-a類)、細い微隆起帯状のもので、無刻のタイプ(III-b類)、突帯に刻目が施されているもの(III-c類)に分けることができる。

III-a類 (Fig52-268~270)

II類と共通したプロポーションである。268~270のいずれも頸部から大きなカーブを描いて外反する口縁部を有している。若干形態が異なり、268が口径と胴径がほぼ同じで、269が

口径に、270が胴径に最大径を持つ。頸部のくびれも各々異なる。268は、口頸部と胴部に、それぞれ3条の突帯を施す。また、その突帯の上下に沈線を施す部分がある。269は、口頸部に3条の突帯を貼付する。270は、口頸部と胴部にそれぞれ2条の突帯を貼付する。いずれの突帯も貼付後、強い横ナデを加えて強調するが、特に269と270の突帯は断面三角形でシャープである。総じてナデによって器面調整を行うが、268や269は強い擦痕が残る。269の底部は、断面台形状を呈する。煤の付着が顕著で、269と270の内面には、煮炊きの際の炭化物が多く残存する。

Ⅲ-b類 (Fig53-271~284)

いずれも口縁直下または上胴部に細い粘土紐を貼付し、指先で摘んで細い微隆起帯状に作出し、更に横方向のナデを施す。やや異なるものが2点あるが、個体が少ないので今回は一括した。貼り付ける突帯は、口縁直下が1~2条、上胴部は3~5条である。これらは総じて、大きなカーブを描く口縁部を有するが、胴部が張り、極端に頸部のくびれが強いもの(273・275~280)と、余りくびれず外弯するもの(271・272・274・281・282)がある。また、280のように器壁が厚く焼成堅緻なものも存在するが、全体的に見ると器壁の薄いものが大半を占める。煤が付着する。

Ⅲ-c類 (Fig54-285~288)

285は、上胴部に刻目突帯を施し、その下方に不規則な山形状の文様帯を有している。沈線は、2種類の原体で描かれる。286は厚みのある底部から、ゆるやかに立ち上がって行くものの、歪みが生じている。上部に文様帯を有す。器面はナデによって調整するが、外面に圧痕が残る。この285・286は同一個体である。煤の付着が著しい。内傾接合である。今回は、胎土等によって弥生土器に分類したが、縄文晩期の可能性を持つ。287は、残存部分で34cm弱を測る大きな個体である。頸部に3条のシャープな刻目突帯を施す。内外面に強い擦痕が認められる。内傾接合である。288は、口縁直下に2条、上胴部に2条の細い刻目突帯を貼付する。更に、それを繋ぐかのように頸部にも3条単位で垂下させる。小型である。

Ⅳ類 (Fig54-289・290)

289・290は、逆L字状口縁を呈し、口唇部に刻目を施す。所謂阿方式と言われる瀬戸内系の土器である。外面にハケが顕著である。この2点は同一個体の可能性がある。

③底部 (Fig55-291~300)

10点図示したが、平底のもの(291~295)、断面台形状のもの(296~299)、側部で踏ん張って、やや上げ底状を呈するもの(300)に分けられる。これらは総じて煤が付着しており、中には内面に煮炊きの炭化物が多く残存するものさえある。内底部分を平にするものと、丸くするものが見られる。

平底のタイプの291は、大きく外方へひらいて行く。磨耗・剥離が激しいが、丁寧なナデを施していたものと認められる。胎土・色調を他のものと異にする。壺である。292~295は甕である。

立ち上がりは、ほぼ同じ様相を示す。底面側部が断面台形状のタイプはすべて甕である。外方へ大きくひらいていくものと、ゆるやかに立ち上がるものがある。これらは、底面周辺の指頭圧痕が見られる。特に296は底面が厚く、内外面共にそれが顕著である。胴部にかけてはナデを主とするが、297のように擦痕が見られるものがある。298には網代圧痕が付き、297には筵の圧痕が付く。296・299にも何らかの圧痕が付いており、このタイプは、例外なく外底に圧痕が認められる。

(4) 石器 (Fig56-303~306)

303は磨石であり、両面磨きがかかっている。全長13.7cm・全幅11.3cm・全厚5.5cm・重量1.3kgである。石質は花崗岩である。304は叩石であり、下方側面に敲打痕が認められる。また、磨石としても併用しているようである。全長11.4cm・全幅9.6cm・全厚4.3cm・重量554gである。石質は砂岩である。305は扁平な円礫の上に僅かに擦痕が認められる。306は自然面を多く残し、雑な剥離を施す。全長7.6cm・全幅3.6cm・全厚1.1cm・重量46.2gである。石斧の可能性はある。石質は頁岩であるが、やや軟質である。(山崎)

第3節 小結

1. 調査に際して

中村宿毛道路の建設に伴った発掘調査で、光波システムが導入されて調査が行われたのは、今次調査(1994)が船戸遺跡(1993)に次いで2遺跡目となった。また、その後の具同中山遺跡群Ⅱ-1(1995)、Ⅲ-1(1996)と継続がなされている。このコンピューターシステムによる遺物の地点測量方法の導入は、高知県においては初めての取り組みであると同時に、調査の迅速化や作業の軽減等が図られる、まさに画期的なものと期待が持たれた。半面、それに対するデメリットも多く、様々な矛盾を抱えている。一方、導入以後、このシステムについての成果は報告されておらず、調査方法についての検討もなされていないのが現状である。そうした意味からして今次調査の成果は、先駆的で貴重なものになったと言える。特に、第II区の遺物出土状況は、範囲が拡散しておらず、しかも取り上げ番号が666点という限られたものであった為に、その成果報告データを全面的に掲載することがほぼ可能となり、システム導入の成果を最大限に生かされたものとなった。今後の調査・整理作業に対して、大きな検討・指針をもたらすものと考えられる。

第II区の遺物は、VI層より2点、VII~VIII層より808点、IX~XI層より1204点の出土である。極力細かい単位での取り上げを行ったが、ひとつのドットで別の個体が共伴する場合もある。取り上げ番号を控えて、着目する属性を多く持つことに努めながら、考古学的手法によって分類を行った。その後、全ての接合関係を確認した結果、VII~VIII層から21個体、IX~XI層から66個体の実測可能な土器を抽出することができた。これらのレベルはそれぞれ一定の高さを保っており、平面的にも近い範囲での接合が認められた。このことは、一括性の高い資料を示唆していると見られるものの、IX~XI層中で、南四国の編年序列からすると整合性のない出土状況を呈しており、必ずしも評価の高いものとは言えない。このことは土壤分析の結果からも窺える。パリーノ・サーヴェイ^{注1}(株)の花粉分析

結果は、遺跡周辺の古環境の復元に留まらず、調査区内の土壤堆積状況の手がかりを示す結果を与^{注2}えている。これを遺物の出土状況に当てはめれば、縄文・弥生時代の生活の展開を当てはめることは得策とは言えず、氾濫原内において、流れ込みによる土器の二次堆積という傾向性を示した方が説得力がある。このような調査対象地において、光波システムによって細かい単位で遺物を取り上げることが調査方法上で決して効果的とは言えず、その使い次第によっては、多くの危険性さえ持ち合わせている。今後の大きな課題である。勿論、その取り扱いや様々な工夫によって、成果や意義を見いだすことは可能である。また、光波システムの持つ多くの利点や機能及び特色は、調査を実施する上で、時代・位置・性格・出土遺物の内容・出土量等の諸要素が噛み合えば、大きな効力を発揮することは言うまでもない。その為にも、調査対象区においての様々な情報の見極めが十分に必要であり、一定の方向性をもって調査に当たる事が要求される。近年における、膨大な緊急発掘調査の増加は、こうした当然の事までも麻痺させてしまう。遺跡にやさしい調整・体制・調査が叫ばれている。一方、調査員の高いレベルの認識・責任・行動が必要なことは、自ずと知れたことである。何れにせよ、今次調査の成果は、高知県における埋蔵文化財発掘調査上での、一つの画期であると同時に、今後の様々な取り扱いについて一石を投じるものとなろう。新たな取り組みと繰り返される反省は、考古学や調査組織及び調査員が前進して行く上で欠かせないものである。

2. 遺物について

(1) 弥生中期・後期土器・(古墳土師器)

Ⅶ～Ⅷ層出土の弥生土器は、バリエーションが豊富であるが、器面にハケ調整が明瞭に施されている。また、底部は形態が異なるものの、概ね平底段階のものと把握できる。中には、県中央部のヒビノキ段階を示すタタキ成形の砲弾型の甕が見られ、内面を軽いヘラ削りするものさえある。これらは、弥生後期中葉から後期末にかけての資料^{注3}と考えられる。一部、土師器の範疇に入る可能性があるものが混じる。口縁部を中心とした指先での調整は、当地の伝統であろうか。また、弥生中期を示す口縁部粘土帯貼付手法を持つものや、神西式土器の胎土を持つものも見られる。石包丁は刃部を磨いているものの、非常に粗雑であり、他地域の模倣品という感を受ける。片刃であることから、中期以降の時間が想定できる。

(2) 縄文土器

Ⅸ～Ⅺ層から出土している縄文土器と弥生土器の割合は、縄文土器（20%）：弥生土器（80%）である。縄文土器深鉢Ⅰ-a類は、上胴部で屈曲して立ち上がっていく。また、口縁部或いは口縁部及び胴部に刻目突帯を有し、斜め方向を主体とした条痕を施す。中には239のような器面をナデ調整するものも見られる。これらは典型的な入田B式土器である。入田B式土器は、先学によって細かく分類^{注4}がなされており、木村氏の分類からすると、概ね235・236等が第1類、237・238等が第3類と見られる。Ⅰ-b類の粗製深鉢もプロポーションが似通っている。Ⅰ-b類の粗製深鉢や浅鉢も器種粗製を構成する資料と考えられる。割合は、突帯を有する深鉢（76%）：粗製深鉢（18%）：浅鉢（6%）である。これら縄文土器群は、すべて縄文晩期終末の入田B式の範疇で捉えなければならない。し

かし胴部で屈曲後、内径して立ち上がり口縁部で短く外反するⅡ類は初見である。施された突帯や強い擦痕が残る器面調整は異質である。晩期終末に位置付けられると考えられるが、こうした土器を如何に解釈するかが今後の大きな課題である。刻目に施された原体は従来のように、棒状・ヘラ状の2種類があるが、棒状の原体が圧倒的に多い。

(3) 弥生前期土器

弥生土器の割合を見ると、壺（7%）：甕（93%）であり、圧倒的に甕の割合が高い。西ノ谷遺跡^{注5}においても器種組成上、甕が9割以上を占めており、弥生前期における県西部における一つの様相を示している。

壺は、底部片であるが291のような在地のものが見られるものの、古い要素を持つものはバリエーションに富む。所謂遠賀川系土器で、段部や沈線の特徴からして、県中央部の編年^{注6}で言うところの西見当Ⅱ式段階である。入田遺跡^{注7}においては、このような遠賀川系土器と上記の入田B式土器が相伴して出土しており、入田Ⅰ式土器は最古の弥生土器として、その位置付けがなされてきた。しかしながら、近年の研究^{注8}では県西部の遠賀川系土器の出土状況は、弥生土器成立期のものではなく、斉一性の強い遠賀川式土器が確立した段階のものと指摘されている。当地域は遠賀川土器が伝播する幹線ルートから外れた周辺部の現象^{注9}（縄文文化と弥生文化が併存した二重構造^{注10}）と見るべきであろうか。今回出土した遠賀川系土器はすべて壺であり、搬入品と考えられるものもある。これらの壺は、上記深鉢の補完関係^{注11}が指摘されているが、すべての壺の器面に煤が多く付着している点や壺の割合の比率から言えば、本来の壺としての機能を果たしていない状況を示している。こうした点に着目しても、弥生文化の後進性、又は西南四国の固有の文化（縄文文化）が強固なものであった証しであると考えられる。西南四国は、地域社会に根差した独自の土器文化圏を形成しており、これらはコンセプトを持つ西南四国甕^{注12}と併せて、今後この地域の生業や文化、或いは土器製作を考察する上で貴重なウエートを占めそうである。

甕は大きく、口縁部が如意状に外反するタイプ（Ⅰ類）、上胴部から口縁にかけて大きくカーブを描くタイプ（Ⅱ類・Ⅲ-a類・Ⅲ-c類の一部）、器壁が薄いタイプ（Ⅲ-b類）、逆L字状口縁のタイプ（4類）に大別できる。その割合は、(29%)：(26%)：(40%)：(5%)である。これらは、沈線の多条化や微隆起帯を多条に貼付すること、或いは口縁部や底部の形状から、県中央部における田村編年^{注13}のⅠ期-4段階に、西部では西ノ谷遺跡^{注14}に併行関係を求めることのできる前期末の一群である。文様に注目すると、無文（17%）、沈線を有するもの（20%）、突帯及び微隆起帯を有するもの（63%）であり、口縁部の形態との関連が見られる。即ち、大きくカーブを描いていくタイプに突帯及び微隆起帯が施されるのである。全体の約3割を占めるⅠ類は、所謂遠賀川土器の系譜を引くものである。一方、大きくカーブを描く口縁を有する形態は、以後「土佐型甕」^{注15}に繋がるものである。Ⅰ類は口縁部に刻目を有するものと有しないものが、ほぼ同じ割合で存在する。国見遺跡^{注16}においても同様である。Ⅰ-c類は上胴部に多条沈線帯を有し、261のような瀬戸内的な多条沈線+列点文のものもある。これらは遠賀川土器の影響下にある。しかし、Ⅱ類266のように描く沈線が雑であり、口縁部及び器面調整の形態が異なる中間的要素を持ったものもある。Ⅲ類は在地的色彩を多く持つ。

Ⅲ-a類・Ⅲ-c類は、しっかりした突帯を有している。縄文晩期土器の系譜を引いた結果と看取できる。285も刻目突帯を有しながら、沈線によって文様を描いており異質である。Ⅲ-b類は、口縁下及び上胴部に細い粘土紐を貼り付け、指で摘んで作出し、横ナデで仕上げる。中には多条微隆起帯とも言える、上胴部に4~5条貼り付けるものもある。これは、多条沈線に対応していると考えられる。また、Ⅲ-b類は全般的に器壁が薄く、形態・調整・色調等からすると、所謂「薄手式土器」^{注17}である。273のプロポーシオンは弥生中期の永野Ⅱ式^{注18}、更に神西式段階^{注19}まで続くものである。これらの甕が展開している時間では、すでに入田B式は払拭されているものの、その伝統は土器の製作技法上で大きく関与している。突帯（微隆起帯）を貼付することや、上げ底や平底を呈する底部の側部が横に突っ張ること等は、明らかに縄文晩期の成形技法が残ったものである。また、縄文系底部の外底には何らかの圧痕が付いている。当地域の形態であろうか。また、内傾接合や器面調整で横位の圧痕が残るものもある。今次資料が示す特徴は、県西部の縄文晩期におけるそれぞれの土器の系譜、新生文化や他地域の影響等を受けた結果によるものと考えられる。同時に県中央部とは異なった弥生文化の展開を示唆している。地域の伝統や地域間交流は、弥生社会が展開して行く上で大きな活力となっている。

高知県における縄文遺跡の分布は、近年中央部での資料が増加しつつあるものの、県西部の占める割合が変わらず高い状況を示している。^{注20}逆に、弥生遺跡の分布は、高知平野を中心とする県中央部・東部に集中しており、約8割が占めていると言っても過言ではない。特に、良好な多くの資料に恵まれた南四国最大の拠点集落である田村遺跡^{注21}の発掘調査以来、弥生文化全般にわたって大きな研究の進展を見せている。また、岡本健児・出原恵三両氏ら先学によって組まれた弥生土器編年は、体系化されたものが出来上がっている。中でも、東松木式・西見当Ⅰ式・西見当Ⅱ式・大篠式と移り変わる前期の資料は、斉一性の強い遠賀川式土器の確立・推移及び在地土器との関係を示しており、稲作・金属器・石器・集落等と併せて弥生文化の成立・展開という格好の資料となっている。そのうち東松木式の存在は、縄文的要素と弥生的要素を兼ねた移行期の状態を示しており興味深い。同時にこのことは、従来の県西部からの稲作伝播論に対して一石を投じる結果となっている。一方、弥生遺跡の発掘調査は、文化圏の異なる県西部においても、近年徐々に調査のメスが入られるようになってきている。入田遺跡^{注22}の調査以来多くの成果を収めており、国見遺跡^{注23}からは前期中葉、西ノ谷遺跡^{注24}からは前期末の資料が得られ、県西部の編年の空白のステージを埋めるもの、或は一時期の様相を知る一括性の高い資料として注目されている。これらによって、更なる検討がなされているところである。県西部の全体的な土器編年は確立していないものの、その在り方が徐々に解明されはじめている。^{注25}(山崎)

【注】

- (1) 縄文晩期土器と弥生土器の古段階及び新段階の資料が混同している。
- (2) 『具同中山遺跡群Ⅰ・自然科学分析業務報告』 パリノ・サーヴェイ株式会社
- (3) 出原恵三「土佐の弥生後期土器編年」『瀬戸内の弥生後期土器の編年と地域性』
(古代学協会四国支部・第4回大会資料)
- (4) 木村剛朗「高知県入田遺跡出土の入田B式土器」『遺跡』第27号 遺跡発行会 1985年
- (5) 出原恵三『西ノ谷遺跡』 高知県教育委員会・(財)高知県埋蔵文化財センター 1993年
- (6) 出原恵三「初期農耕集落の構造」『考古学研究』第34巻第3号 1987年
- (7) 岡本健児「入田遺跡」『日本農耕文化の生成』日本考古学協会編 1961年
- (8) 出原恵三「四国西南部における弥生文化の成立」『文化財学論集』文化財学論集刊行会 1994年
- (9) 出原恵三「南四国における弥生文化の成立」『土佐史談』1996年
- (10) 高橋 護「遠賀川式土器」『弥生文化の研究4』 雄山閣 1987年
- (11) 岡本健児「四国」『弥生土器Ⅰ』 ニューサイエンス社 1983年
- (12) 柴田昌児氏が全国埋蔵文化財法人連絡協議会研究部会「中期弥生土器の地域色」1995年の中で触れられている
- (13) 『田村遺跡群』高知県教育委員会 1986年
- (14) (5) に同じ
- (15) 出原恵三「土佐型甕の提唱とその意義」『遺跡』第32号 遺跡刊行会 1990年
- (16) 曾我貴行『国見遺跡』 高知県中村市教育委員会 1994年
- (17) 出原恵三「<薄手土器>の展開とその意義」『南国史談』第7号 南国史談会 1989年
- (18) 岡本健児『永野遺跡』 高知県葉山村教育委員会 1984年
- (19) 岡本健児「神西式土器の再検討」『高知女子大学紀要 人文・社会科学編』第20巻 1971年
- (20) 山崎正明『北川遺跡』 高知県東津野村教育委員会 1995年
- (21) (13) に同じ
- (22) (7) に同じ
- (23) (16) に同じ
- (24) (5) に同じ
- (25) 山崎正明「中村宿毛道路埋蔵文化財発掘調査概報」『具同中山遺跡群Ⅱ－Ⅰ』
(財)高知県埋蔵文化財センター 1996年

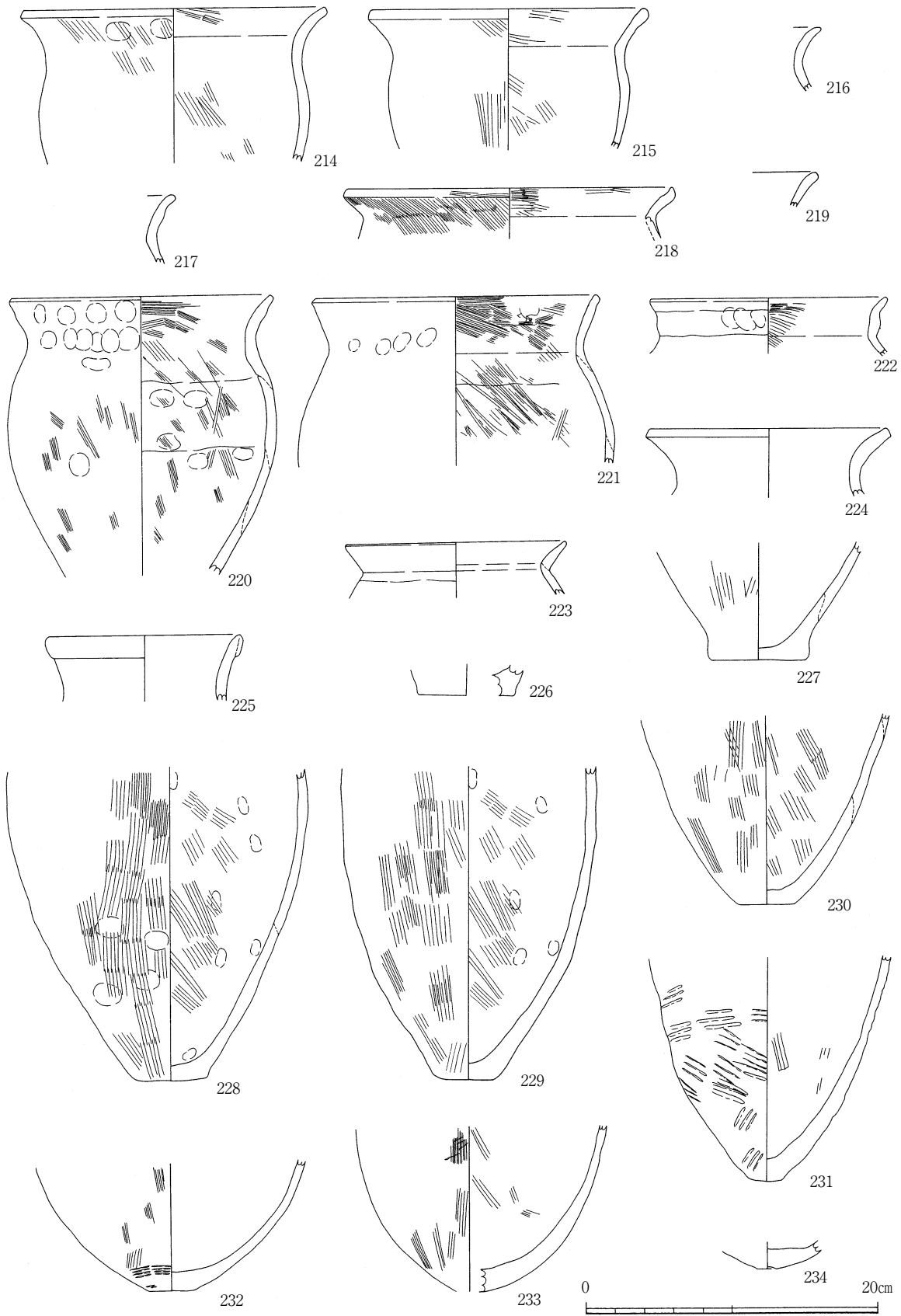


Fig. 48 弥生中期・後期土器 (VII~VIII層出土遺物214~234)

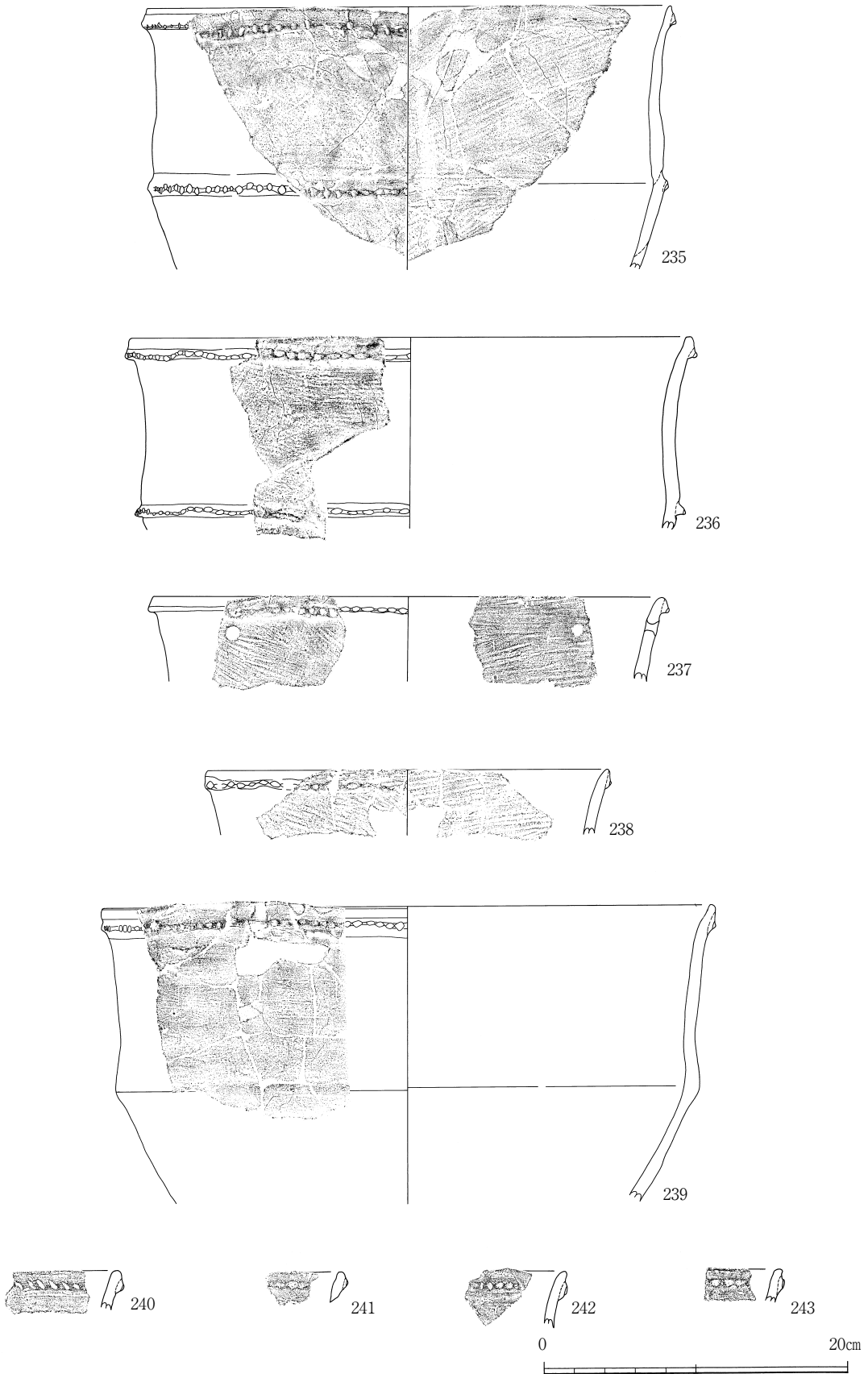


Fig. 49 縄文晩期土器 (IX～XI層出土遺物235～243)

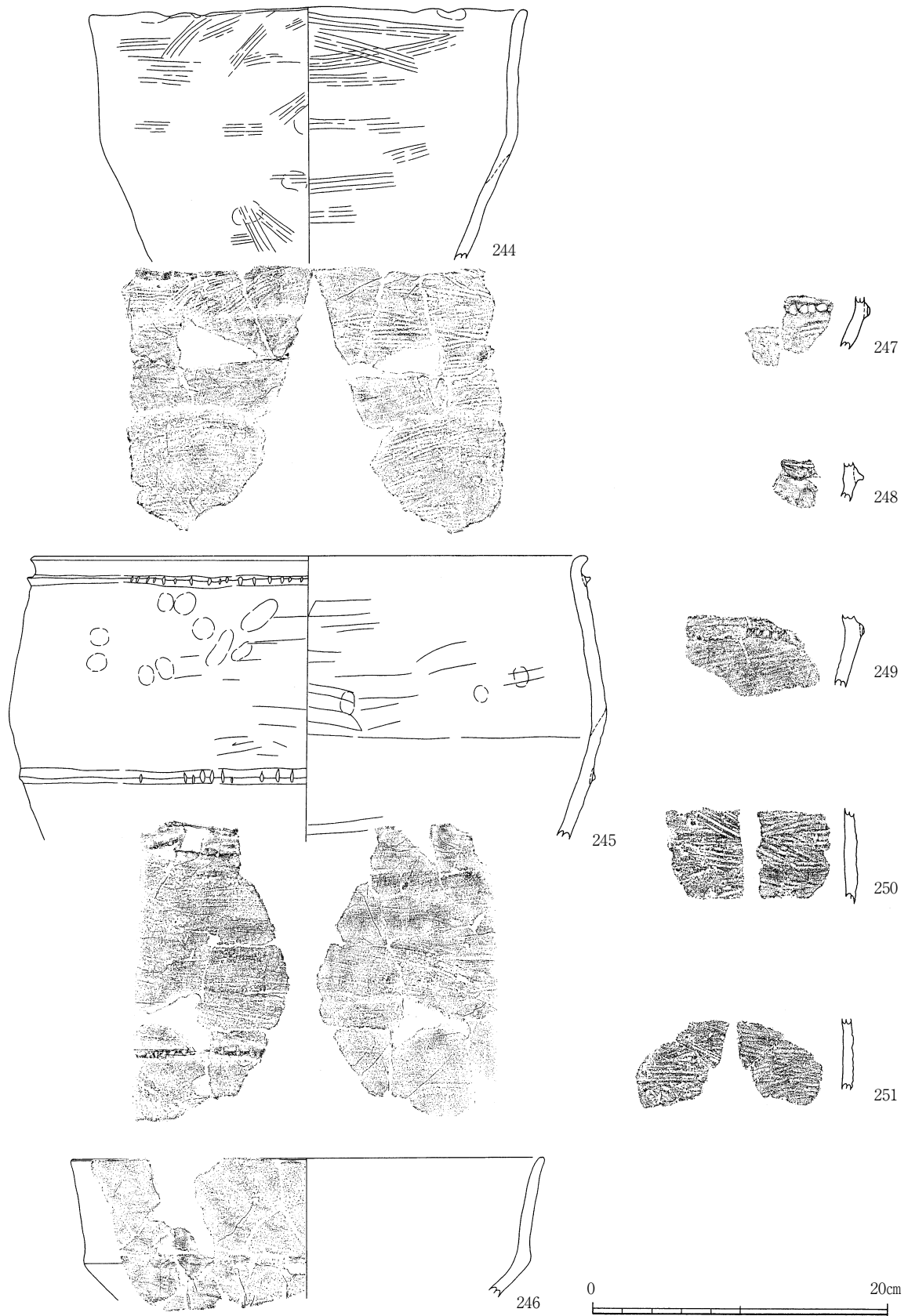


Fig. 50 縄文晩期土器 (IX~XI層出土遺物244~251)

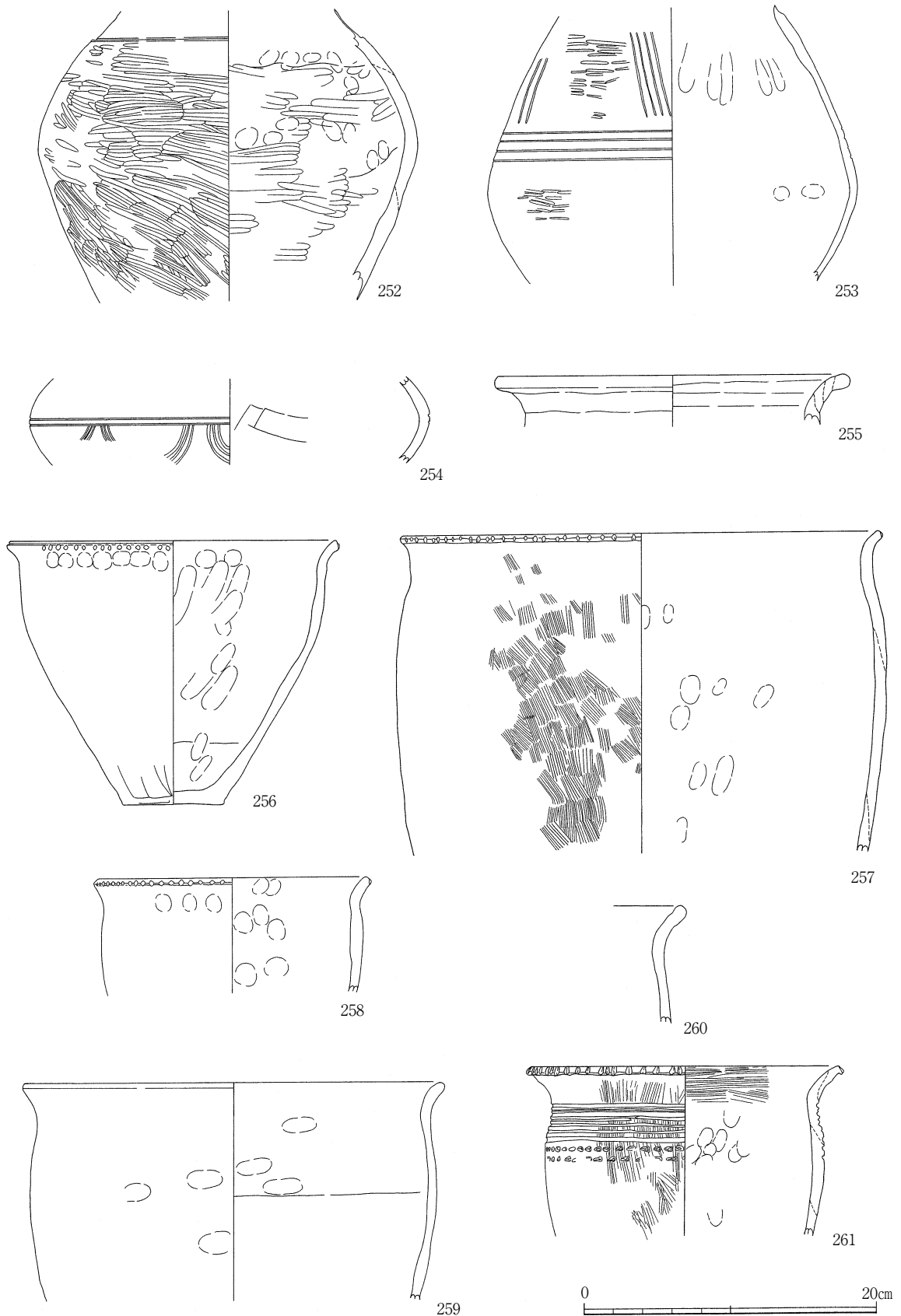


Fig. 51 弥生前期土器 (IX~XI層出土遺物252~261)

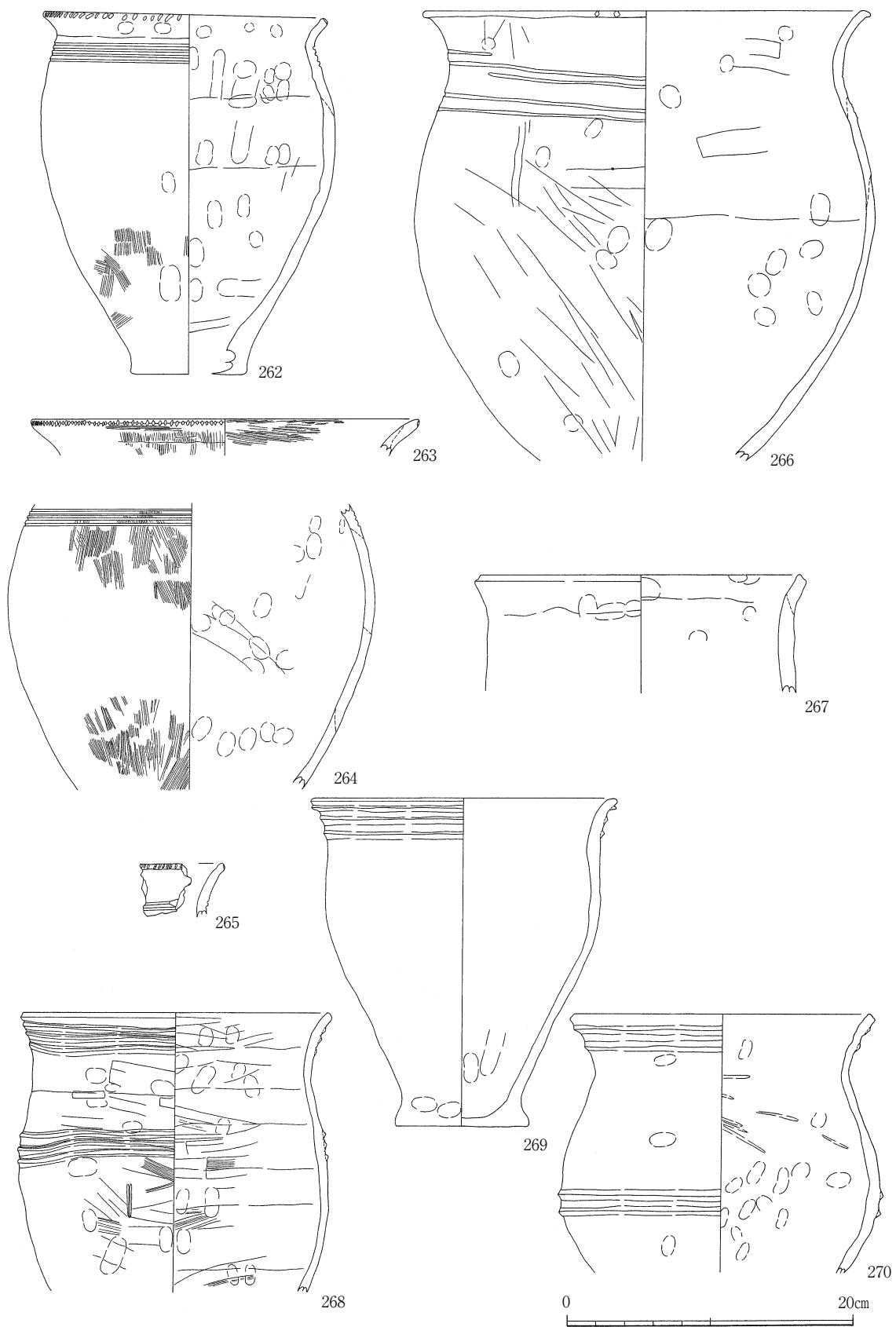


Fig. 52 弥生前期土器 (IX~XI層出土遺物262~270)

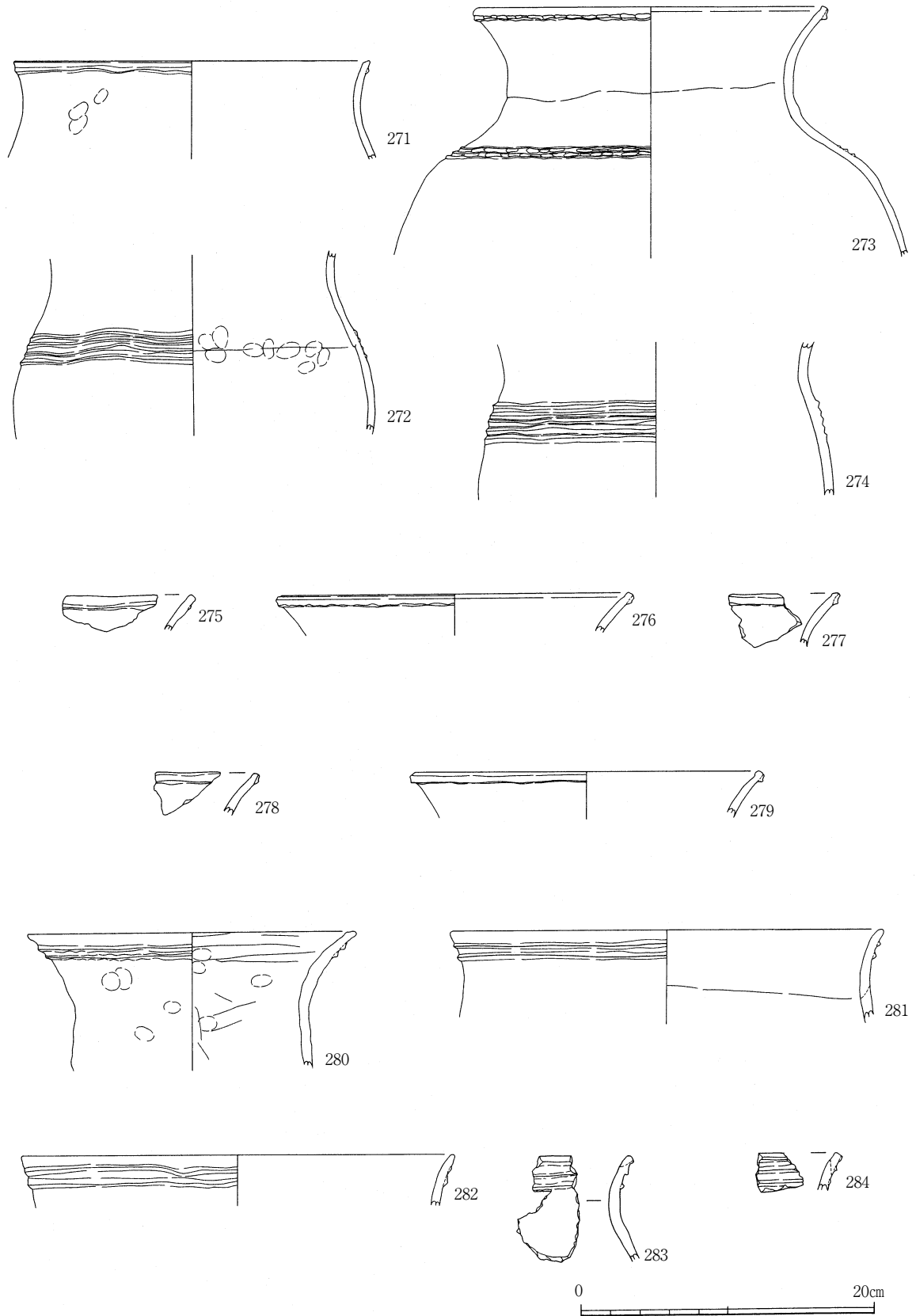


Fig. 53 弥生前期土器 (IX～XI層出土遺物271～284)

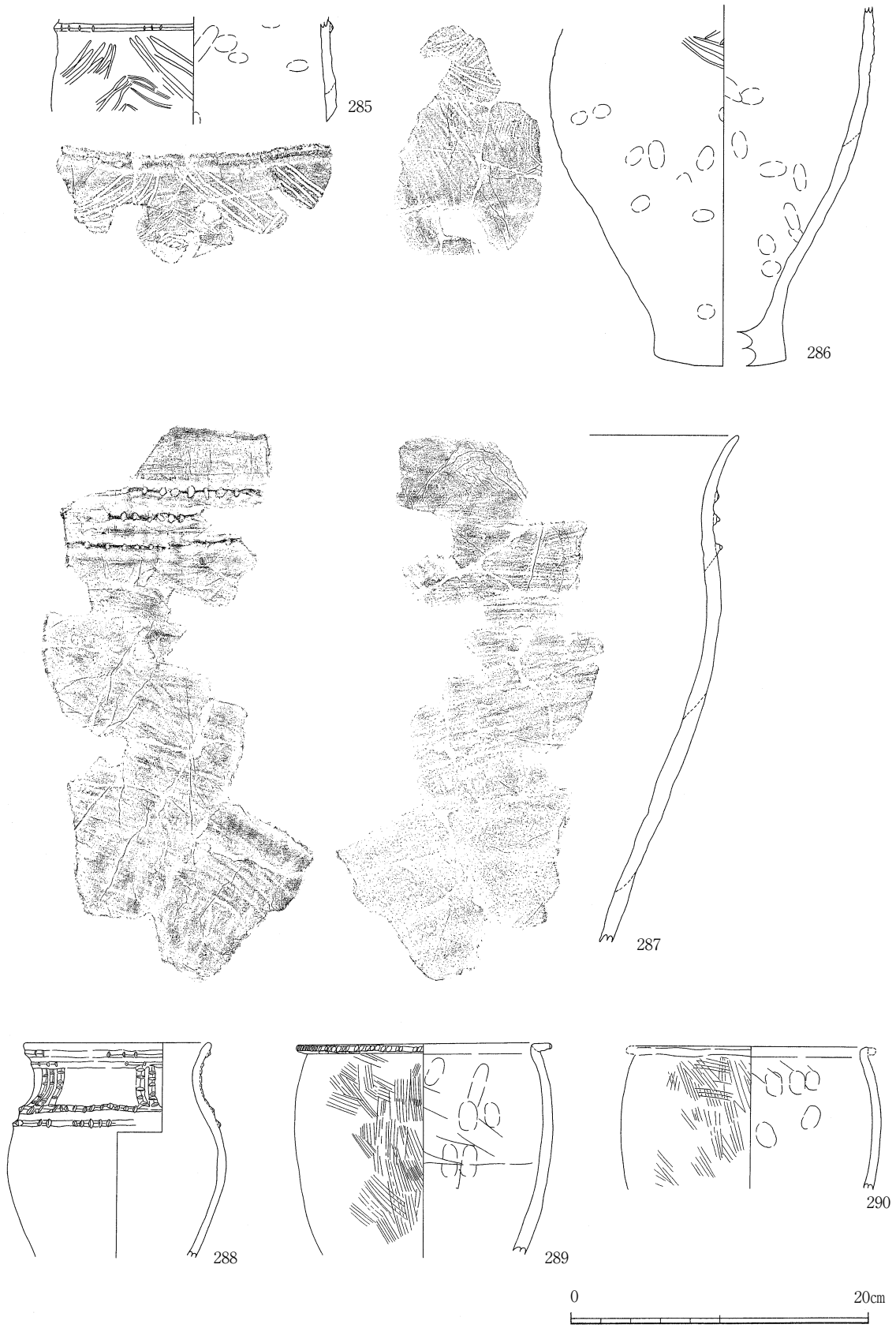


Fig. 54 弥生前期土器 (IX~XI層出土遺物285~290)

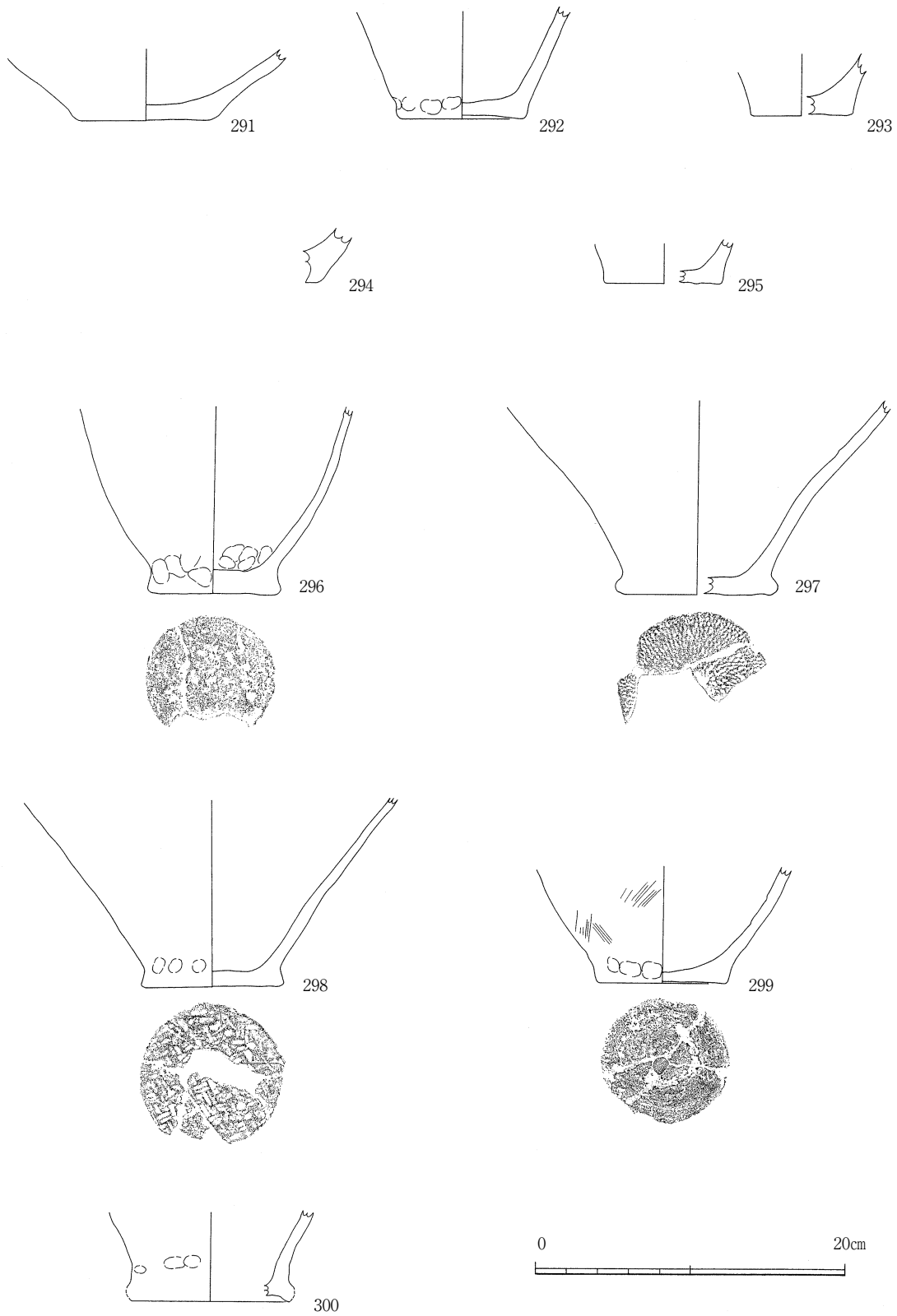


Fig. 55 弥生前期土器 (IX~XI層出土遺物291~300)

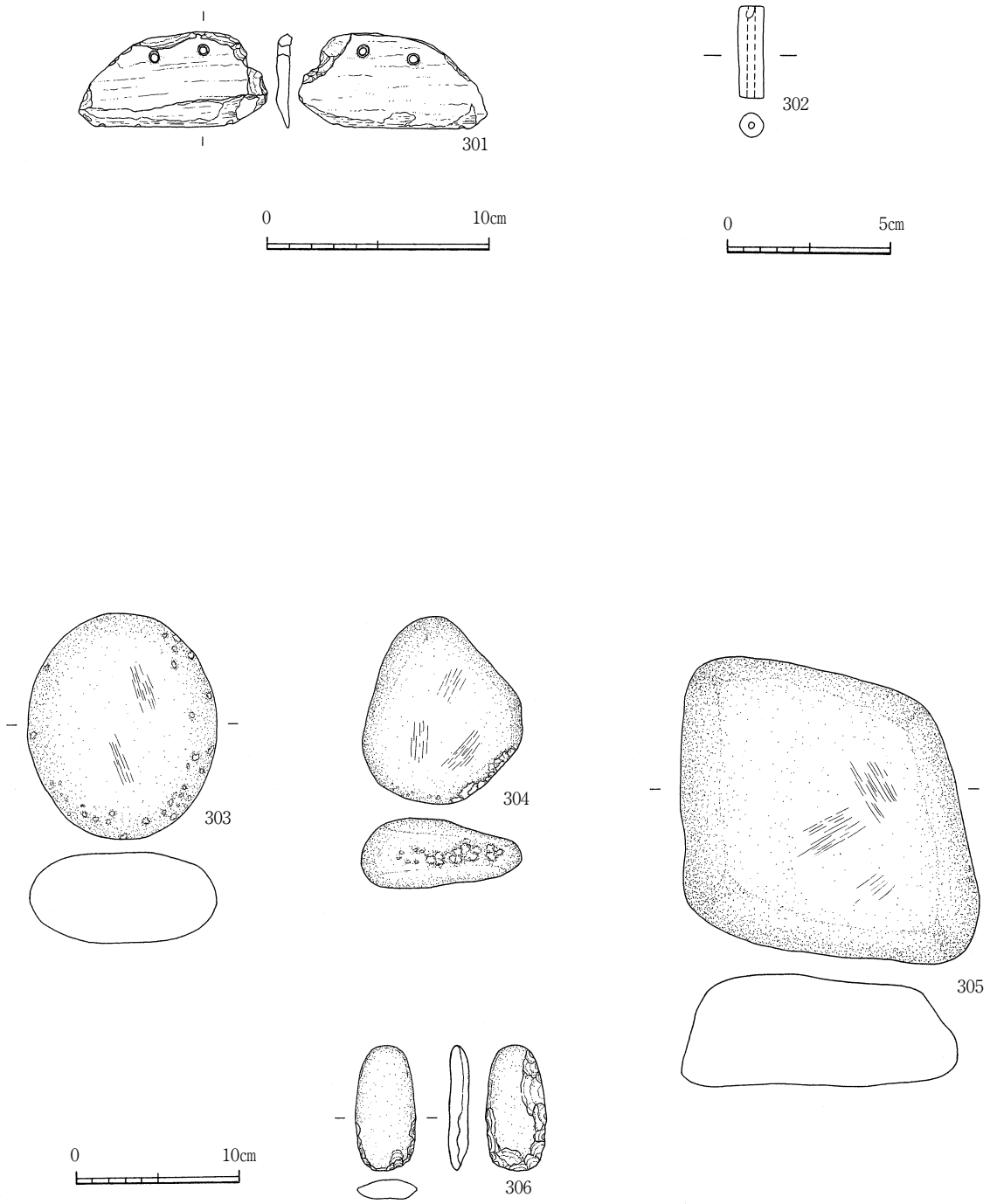


Fig. 56 石器 (VII~VIII層出土遺物301・302)
(IX~XI層出土遺物303~306)

Tab. 15 遺物観察表 1

Fig. No	挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)				特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
48	214	G-44	甕	20.4	(10.5)	18.3	上胴部から更にか-ブを描いて外反する。口縁端部は面どる。その直下から斜め方向にハケ調整を行う。その後ナデ。内面もハケ・ナデ。粗砂多い。長石・雲母・赤色風化土の小礫。	外面煤付着。	
48	215	H-43	甕	18.5	(9.5)	16.4	口縁端部を面どる。内外面共にハケ・ナデ調整を行う。外面口縁下は斜め方向・胴部は縦方向に施す。内面口縁は横方向・胴部は斜め方向に施す。粗砂多い。長石・雲母・赤色風化土の小礫。	外面煤付着。	
48	216	I-44	甕		(4.3)		口縁部片。端部は丸く仕上げる。内外面共にハケ調整を行うが原体が細くてつくりが丁寧。砂粒・長石・雲母。		
48	217	I-45	甕		(4.6)		同上		
48	218	H-43	甕	22	(3.4)		口縁部片。ハケ調整が顕著で面どった口縁端部までも施す。細砂・粗砂多め。長石・雲母・赤色風化土の小礫。	外面煤付着。	
48	219	H-43	甕		(2.3)		口縁部片。外面ハケ・ナデ。内面ナデ。砂粒・長石・石英・雲母。		
48	220	H-43	甕	17.6	(19.0)	18.2	体部がやや丸くなる。口縁部は指で調整した後ナデ。内面はハケ。胴部は内外面共に縦方向のハケ・ナデ。粗砂多い。雲母・長石・赤色風化土の小礫。	外傾接合。外面剥離部分あり。外面煤付着顕著。	
48	221	H-43	甕	19	(11.5)	21.4	同上	同上	
48	222	H-45	甕	16	(4.0)		口縁部片。指で調整した後ナデ。内面はハケ・ナデ。粗砂多い。長石・雲母。		
48	223	G-43	甕	15	(3.6)		「く」字状に外反する口縁部片。内外面共に横方向のナデ調整。粗砂・長石粒多い。		
48	224	H-45	甕	16	(4.5)		外反の強い口縁部片。端部は面どる。粗砂・長石粒多量。		
48	225	H-44	壺	12.8	(4.5)		口縁部に粘土帯を貼付して肥厚させる。粗砂・長石粒多量。雲母・赤色風化土の小礫。		
48	226	H-45	甕		(2.1)	6.4	しっかりした平底。内外面ナデ。砂粒・雲母・長石。		
48	227	一括	甕		(8.0)	6.3	しっかりした平底。外面縦方向のハケ。内外ナデ。粗砂多い。長石・雲母・赤色風化土の小礫。	外傾接合。外面煤付着。	
48	228	H-43	甕		(21.1)	4.8	長胴を有する。内外面共に縦方向のハケ調整顕著。指頭圧痕・ナデ。細砂・粗砂・雲母・長石・赤色風化土の小礫。	外傾接合。外面剥離部分あり。外面上方及び内面下方に煤付着。	

Tab. 16 遺物観察表 2

Fig. No	挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)				特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
48	229	H-43	甕		(21.2)		3.4	長胴を有する。内外面共に縦方向のハケ調整顕著。指頭圧痕・ナデ。細砂・粗砂・雲母・長石・赤色風化土の小礫。	外面剥離部分あり。外面上方煤付着。
48	230	一括	甕		(12.7)		3.6	同上	外傾接合。内外面煤付着。
48	231	G-45	甕		(15.2)		1.6	小さな平底。砲弾型を呈する。外面タタキが顕著。内外面ナデ。細砂・粗砂多い。シャーモット・赤色風化土の小礫・長石・雲母。	外面煤付着。
48	232	G-43	壺		(8.6)		3.2	小さな平底から球形の胴部へ立ち上がる。外面にハケ・タタキが残る。内外面ナデ。粗砂多い。石英・雲母・シャーモット。	内外面煤付着。
48	233	H-45	甕		(11.2)		1.8	小さな平底。内外面縦方向のハケ。その後ナデ。細砂・粗砂・長石・雲母・赤色風化土の小礫。	外面煤付着。外面剥離部分あり。
48	234	H-45	鉢		(1.8)		1.3	底面を窪ませる。外面ハケ・ナデ。内面ナデ。砂粒・長石。	
49	235	G-44 G-45	深鉢	34	(17.1)	34		口縁部と上胴部に2条の刻目突帯を施す。口縁部ナデ・内面条痕。外面条痕後ナデ。砂粒・雲母・長石・石英。	内傾接合。外面上方に煤付着。
49	236	J-39	深鉢	36.2	(12.6)	36		口縁部に刻目突帯を施す。口縁部及び内面ナデ・外面条痕後ナデ。長石・石英多い。焼成堅緻。	外面上方に煤付着。
49	237	H-46	深鉢	33.2	(5.5)			口縁部に刻目突帯を施す。内外面共に条痕。口縁部ナデ。雲母多い・砂粒・長石・石英。焼成堅緻。	焼成後に円孔を穿つ。
49	238	G-46	深鉢	26	(4.1)			口縁部に刻目突帯を施す。内面条痕。外面条痕後ナデ。口縁部ナデ。砂粒・雲母・石英。	
49	239	G-45 G-46	深鉢	39.6	(19.4)	38		口縁端よりやや下がった所に刻目突帯を施す。内外面ナデ。長石・石英多量。砂粒・雲母。	外面煤付着。
49	240	G-45	深鉢		(2.6)			口縁部片。刻目突帯を施す。内外面ナデ。長石・石英・雲母多い。焼成堅緻。	外面煤付着。
49	241	G-46	深鉢		(2.1)			口縁部片。刻目突帯を施す。砂粒・石英・長石。	外面煤付着。
49	242	G-45	深鉢		(2.5)			口縁部片。口縁端よりやや下がった所に刻目突帯を施す。砂粒・長石・石英。	
49	243	G-45	深鉢		(2.2)			口縁部片。口縁端よりやや下がった所に刻目突帯を施す。砂粒・石英・長石。	外面煤付着。

Tab. 17 遺物観察表 3

Fig. No	挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)				特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
50	244	F-44	深鉢	28.8	(17.2)	28		粗雑である。胴部から直線的に立ちあがり口縁部はやや外反する。内外面共に条痕が顕著。粗砂・赤色風化土の小礫多い。石英・長石・雲母。	内傾接合。内外面煤付着。
50	245	F-48 F-49	深鉢	36.6	(19.0)	39.8		口縁端は摘み出し外反する。口縁下と胴部に刻目突帯を施す。内外面共に横方向の強い擦痕及びナデ。器壁厚い。砂粒・長石・石英・シャーマット。	内傾接合。外面上方に煤付着。
50	246	F-44 G-45	鉢	31.6	(9.0)	30		胴部から若干外方へ直線的に立ち上がって行く。端部は丸く収める。細砂・長石多め。	
50	247	G-45	深鉢		(3.5)			胴部片。刻目突帯を施す。内外面共に条痕。	
50	248	H-45	深鉢		(2.6)			胴部片。突帯を貼付し指でつまみ出している。砂粒・雲母・石英。	
50	249	F-49	深鉢		(4.9)			胴部片。刻目突帯を施す。外面条痕。石英・長石・雲母多量。	搬入品。
50	250	H-45	深鉢		(6.4)			胴部片。内外面共に条痕顕著。砂粒・石英・雲母。	
50	251	G-46	深鉢		(4.8)			同上	
52	252	G-44	壺		(19.7)	25.6		上胴部に段を有し沈線が1条巡る。内外面共に磨きを施す。指頭圧痕。砂粒・雲母・長石。	外傾接合。内外面煤付着。
52	253	F-48	壺		(18.6)	24.9		胴部に4条の沈線を施す。また山形文状に沈線有り。外面磨き。砂粒・石英・長石。	外面煤付着。
52	254	F-46 G-46	壺		(5.9)	27		胴部に2条の沈線が回り3条の重弧文を施す。長石・石英多い。細砂・雲母。	外面煤付着。
52	255	G-39	壺	23	(3.4)			外反する口縁部片。器壁厚い。長石・石英・雲母・細砂。	
52	256	G-46 G-47	甕	22	17.9	19.8	6.6	口縁部を指頭で摘み出して作出し横方向にナデる。口縁部外端に刻み。胴部は内外面共に縦方向のナデ。指頭圧痕顕著。砂粒・雲母・長石。	内外面共に上方に煤付着。
52	257	G-46	甕	32	(21.7)	32.8		口縁部の外端に刻み。外面は縦方向のハケ調整。頸部は横方向にナデ。指頭圧痕顕著。砂粒・長石・雲母・赤色風化土の小礫。	外傾接合。外面煤付着顕著。
52	258	G-46	甕	18	(7.9)			指頭で摘み出し作出した口縁部の外端に刻み。口縁部周辺は横ナデ・胴部は斜め方向にナデる。指頭圧痕顕著。赤色風化土の小礫・雲母多め。細砂・長石。	外面全体に煤付着。
52	259	G-46	甕	28.1	(14.8)	27.4		上胴部でくびれて外反する。端部は丸く収める。内外面ナデ。指頭圧痕顕著。細砂多量。長石・雲母・赤色風化土の小礫。	外傾接合。外面下方に煤付着。

Tab. 18 遺物観察表 4

Fig. No	挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)				特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
51	260	G-46	甕	28	(6.0)			外反する口縁部片。No259番と同一個体の可能性。	外面煤付着。
51	261	G-46	甕	20.4	(11.5)	18.8		上胴部に多条沈線及び列点文を施す。口縁端部には刻目。外面は縦方向のハケ・口縁部内面は横方向のハケ。指頭圧痕。砂粒・長石・石英・雲母。	外傾接合。外面煤付着。
52	262	F-44 G-44 F-48	甕	19.3	25.3	20.3	8	如意状の口縁を持ち端部に刻目を施す。頸部に4条の沈線を施す。外面ハケ・ナデ。内面ナデ。指頭圧痕顕著。砂粒・長石・雲母・シャーモット。	外傾接合。外面煤の付着顕著。
52	263	J-42	甕	26.2	(2.5)			口縁部片。端部には丁寧な刻目を施す。外面は縦方向・内面は横方向のハケ。細かい長石多め。細砂・石英・雲母・赤色粒子。	搬入品。
52	264	J-42	甕		(19.8)	25.2		上胴部に4条の沈線を施す。外面縦方向のハケ調整。内面ナデ・指頭圧痕。非常に丁寧なつくり。細かい長石多め。細砂・石英・雲母・赤色粒子。	No263と同一個体の可能性。搬入品。外傾接合。
52	265	J-42 J-43	甕		(3.7)			口縁部片。沈線が2条確認できる。端部には丁寧な刻目。内面横方向のハケの後ナデ。細かい長石多め。細砂・石英・雲母。	搬入品。
52	266	F-43 F-44	甕	30	(31.3)	31.5		頸部に2本単位の沈線を施す。外面は斜め方向の強い擦痕の後ナデを施す。指頭圧痕顕著。砂粒多量。長石・雲母。	内傾接合。外面煤付着顕著。
52	267	G-45	甕	16.4	(6.1)			口縁端部は面どる。指頭による調整後ナデ。砂粒・長石・雲母。	外面煤付着。
52	268	F-47	甕	21	(19.3)	21.4		口縁下と上胴部に3条の突帯を貼付する。内外面共に横方向の擦痕及びナデ。指頭圧痕顕著。粘土帯の幅は約3cmである。細砂・長石・雲母・赤色風化土の小礫。	外面煤付着。
52	269	G-44 G-45	甕	20.6	22.8	20.8	9.2	口縁下に3条の突帯を貼付し横ナデ。内外面共に横方向の擦痕及びナデ。底部は横に突っ張る。粗砂多い。石英・雲母・赤色風化土の小礫。	外面煤付着。内面底に炭化物残存。
52	270	F-48 F-49	甕	20.4	(18.0)	22.6		口縁下と胴部に2条の突帯を貼付し横方向に強くナデる。指頭圧痕顕著。砂粒多め。長石・雲母。	外面煤付着顕著。
53	271	G-46 H-44	甕	24	(6.7)			口縁下に1条の微隆起帯を貼付。指で作出。内外面横ナデ。雲母・細砂・赤色風化土の小礫多め。器壁が薄い。	煤付着。
53	272	G-46	甕		(12.4)	24.3		上胴部に4条の微隆起帯を貼付。強い横ナデによって途切れる所あり。粘土帯接合部を指で調整。砂粒・雲母。器壁が薄い。	No271と同一個体の可能性。煤付着。

Tab. 19 遺物観察表 5

Fig. No.	挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)				特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
52	273	G-44	甕	23.2	(17.0)			口縁下に1条・上胴部に3条の微隆起帯を貼付。指で摘んで作出し横ナデ。内外面ナデ。細砂・粗砂多め。	煤付着。
52	274	F-47	甕		(10.4)	24		上胴部に4条の微隆起帯を貼付。指で作出して横ナデ。粗砂多い。	煤付着。
53	275	G-46	甕		(2.4)			口縁部片。口縁下に1条の微隆起帯を貼付して横ナデ。砂粒・雲母・長石。器壁が薄い。	
53	276	G-44	甕	23.2	(2.7)			同上	煤付着。
53	277	G-44	甕		(3.6)			同上	煤付着。
53	278	G-44	甕		(2.9)			同上	
53	279	G-44	甕	23.2	(3.1)			同上	煤付着。
53	280	G-45	甕	22	(9.2)			口縁下に2条の微隆起帯を貼付。指で摘んで作出し横ナデ。内面はヘラ状の原体で調整する。砂粒・長石・雲母。器壁が厚い。	
53	281	G-44	甕	28.8	(6.3)			口縁下に2条の微隆起帯を貼付。指で作出。細砂・長石・赤色風化土の小礫。	内傾接合。外面煤付着顕著。
53	282	F-43	甕	28.8	(3.5)			同上	外面煤付着顕著。
53	283	E-48	甕		(7.2)			口縁下に2条の微隆起帯を貼付して横ナデ。また口縁外端を指で摘みだす。内外面共に横ナデ。砂粒・雲母多め。	煤付着。
53	284	E-48	甕		(2.6)			同上	
54	285	G-45 G-46 H-46	甕		(7.1)			上胴部に刻目突帯を施す。そこから下方に沈線を数条巡らして文様を形成。内外面ナデ調整。砂粒・赤色風化土の小礫・雲母・長石。	内傾接合。外面煤付着顕著。
54	286	G-45 G-46 H-46	甕		(24.1)	21.4	8.8	上胴部に沈線を数条施す。指頭圧痕顕著。内外面共にナデ調整。砂粒・赤色風化土の小礫・雲母・長石。形が歪んでいる。	内傾接合。外面上方に煤付着顕著。No285と同一個体。
54	287	G-46 H-46	甕		(33.8)			頸部に断面三角形の刻目突帯を施す。内外面共に強い擦痕の後ナデ調整。特に内面は擦痕顕著。突帯周辺及び口縁部は横ナデ。細砂・雲母・長石多い。	内傾接合。外面上方に煤付着。内面下方に炭化物残存。
54	288	F-43	甕	12.2	(14.5)	14.6		口縁下と上胴部に2条の刻目突帯を施す。またそれを繋ぐように3条の刻目突帯が3ヶ所見られる。内外面共にナデ調整。砂粒・赤色風化土の小礫・雲母・長石。	

Tab. 20 遺物観察表 6

Fig. No	挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)				特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
54	289	F-47	甕	16.4	(14.1)	17.2		口縁部が逆L字状を呈し刻目を施す。外面ハケ・ナデ調整。内面指で調整の後ナデ。細砂・粗砂多量。	煤付着顕著。
54	290	F-47	甕		(9.4)	17.2		同上。口縁部は欠損。	No289と同一個体の可能性大。
55	291	E-49	壺		(4.5)		8	平底。大きく開いて立ち上がる。砂粒・長石・石英多量。剥離が激しい。色調が他の物と大きく異なる。	
55	292	F-44	甕		(7.2)		7.6	平底。やや中央が窪む。内外面ナデ。雲母多め。砂粒・長石・石英。	内面に炭化物残存。
55	293	E-47 E-48	甕		(4.0)		6.4	平底。粗砂多め。雲母・長石。	
55	294	H-44	甕		(3.5)			同上	
55	295	H-45	甕		(2.8)		7.2	同上	内面に炭化物残存。
55	296	F-43 F-44 G-44	甕		(12.1)		8.4	底部端が横に突っ張る。底部は指による調整後に横方向のナデ。細砂・雲母・長石・赤色風化土の小礫。	底面に網状圧痕。
55	297	G-45	甕		(12.5)		9.2	底部端が横に突っ張る。内外面擦痕後ナデ。底部は横ナデ。砂粒・雲母・長石。	底面に筵状の圧痕。内面に炭化物残存。
55	298	H-44	甕		(12.0)		8.4	底部端が横に突っ張る。内外面ナデ。底部内面は指頭圧痕顕著・外面は指による調整後横ナデ。砂粒・雲母・長石。	底面に圧痕。内面に炭化物残存。
55	299	G-46	甕		(7.5)		8.1	底部端がやや突っ張る。底部を指によって作出した後ナデ調整。内外面ナデ。細砂・粗砂多め。長石・雲母。	底面に圧痕。底面・外面に煤付着。
55	300	H-45	甕		(5.9)		10	上底。剥離しているが横に突っ張る。外面ナデ調整。	内面炭化物が顕著。

Tab. 21 遺物データ表1

取り上げ番号	X軸	Y軸	レベル (m)	層位	種別	器種	部位	点数	実測No
001				VII	弥生		胴部	1	
002				VII	弥生	甕	口縁	2	220
003				VII	弥生	甕	胴部	1	221
004				VII	弥生	甕	胴部	1	
005				VII	弥生	甕	胴部	4	
006				VII	弥生	甕	口縁・胴部	50	
007				VI	古代	(須恵器)	胴部	1	
008				VI	古代	(須恵器)	胴部	1	
009	-3192.161	-55248.537	2.043	VI	弥生	甕	胴部	5	
010	-3192.230	-55248.032	1.970	VI	弥生	甕	口縁・胴部	8	216
011	-3192.212	-55247.785	1.956	VI	弥生	甕	胴部	5	
012	-3191.737	-55247.733	1.951	VI	弥生	甕	胴部	1	
013	-3191.909	-55247.459	1.936	VI	弥生	甕	胴部	2	
014	-3191.762	-55247.349	2.045	VI	弥生	甕	胴部	1	
015	-3191.445	-55247.010	1.900	VI	弥生	甕	胴部	3	
016	-3191.492	-55246.715	1.899	VI	弥生	甕	胴部	15	233
017	-3191.281	-55246.708	1.925	VI	弥生		胴部	1	233
018	-3191.149	-55246.934	1.926	VI	弥生	甕	胴部	2	233
019	-3191.147	-55247.042	1.934	VI	弥生	甕	底部・胴部	30	233
020	-3191.070	-55247.308	2.003	VI	弥生	甕	口縁・胴部	10	222
021	-3190.803	-55246.991	1.961	VI	弥生	甕	胴部	1	233
022	-3190.284	-55246.555	1.968	VI	弥生	甕	胴部	1	
023	-3190.276	-55246.937	1.918	VI	弥生	鉢	胴部	1	234
024	-3189.503	-55247.228	1.999						
025	-3189.374	-55247.738	2.087	VI	弥生	甕	胴部	4	
026	-3189.059	-55247.347	2.008	VI	弥生	甕	胴部	1	
027	-3186.958	-55247.783	1.951	VI	弥生	甕	胴部	1	231
028	-3190.523	-55249.289	2.085	VI	弥生	甕	胴部	2	
029	-3187.122	-55252.376	2.171	VI	弥生	甕	胴部	1	231
030	-3187.289	-55253.708	1.912	VI	弥生	甕	胴部	1	
031	-3187.125	-55253.844	1.900	VI	弥生	甕	胴部	4	
032	-3186.933	-55253.685	1.917	VI	弥生	甕	胴部	4	
033	-3189.268	-55249.501	2.146	VI	弥生	甕	胴部	4	
034	-3189.054	-55248.909	2.083	VI	弥生	甕	胴部	2	
035	-3188.018	-55249.912	2.092	VI	弥生	甕	胴部	4	
036	-3187.500	-55249.423	2.043	VI	弥生	甕	胴部	11	
037	-3187.181	-55249.696	2.004	VI	弥生	甕	胴部	7	
038	-3187.398	-55248.884	1.969	VI	弥生	甕	胴部	2	
039	-3187.638	-55250.715	2.102	VI	弥生	甕	胴部	2	
040	-3187.835	-55251.920	2.166	VI	弥生	甕	胴部	2	
041	-3192.314	-55247.616	1.915	VIII	弥生	甕	胴部	5	
042	-3192.233	-55247.676	1.879	VIII	弥生	甕	胴部	2	
043	-3192.226	-55247.852	1.938	VIII	弥生	甕	口縁・胴部	12	217
044	-3189.163	-55248.349	1.816	VIII	弥生	壺	口縁	2	225
045	-3189.498	-55248.979	2.090	VIII	弥生	甕	胴部	2	
046	-3189.602	-55249.147	2.044	VIII	弥生	甕	胴部	5	
047	-3189.691	-55249.320	2.069	VIII	弥生	甕	胴部	5	
048	-3189.401	-55249.165	2.067	VIII	弥生	甕	胴部	2	
049	-3189.456	-55249.313	2.077	VIII	弥生	甕	胴部	2	
050	-3189.502	-55249.454	2.058	VIII	弥生	甕	胴部	1	
051	-3189.582	-55249.338	1.864	VIII	弥生		胴部	1	
052	-3190.144	-55250.460	1.852	VIII	弥生	甕	胴部	1	
053	-3190.329	-55250.837	1.892	VIII	弥生	甕	胴部	2	
054	-3190.462	-55251.604	1.845	VIII	弥生	甕	胴部	1	
055	-3185.907	-55248.587	1.629	VIII	弥生	甕	胴部	1	
056	-3186.612	-55250.122	1.864	VIII	弥生	甕	胴部	10	
057	-3187.042	-55250.781	1.860	VIII	弥生	甕	口縁	1	214
058	-3186.993	-55250.811	1.811	VIII	弥生	甕	胴部	1	214
059	-3187.197	-55251.187	1.800	VIII	弥生	甕	胴部	3	

Tab. 22 遺物データ表 2

取り上げ番号	X軸	Y軸	レベル (m)	層位	種別	器種	部位	点数	実測No
060	-3187.138	-55251.293	1.816	VIII	弥生	甕	胴部	1	
061	-3187.775	-55252.803	1.818	VIII	弥生	甕	胴部	39	
062	-3184.142	-55252.344	1.885	VIII	弥生	甕	胴部	5	
063	-3184.020	-55252.584	1.913	VIII	弥生	壺	胴部	1	232
064	-3184.030	-55252.702	1.953	VIII	弥生	甕	胴部	2	
065	-3184.184	-55252.768	1.959	VIII	弥生	甕・壺	胴部	8	232
066	-3184.295	-55252.883	1.978	VIII	弥生	甕・壺	胴部	13	232
067	-3183.997	-55252.817	2.008	VIII	弥生	甕	胴部	1	
068	-3184.102	-55252.949	1.994	VIII	弥生	甕・壺	胴部・口縁	40	223・232
069	-3184.186	-55253.000	2.002	VIII	弥生	甕	胴部	8	232
070	-3184.239	-55253.206	2.027	VIII	弥生	甕・壺	底部・胴部	16	232
071	-3192.601	-55248.075	1.910	VIII	弥生	甕	胴部	6	
072	-3185.968	-55245.407	1.182	IX	弥生	甕	口縁	2	267
073	-3188.435	-55244.518	1.364	IX	弥生	甕	口縁・胴部	4	224
074	-3190.292	-55247.031	1.900	VIII	弥生	甕	胴部	10	
075	-3189.786	-55247.643	2.045	VIII	弥生	甕	胴部	6	
076	-3189.301	-55248.040	2.079	VIII	弥生	甕	胴部	2	
077	-3191.538	-55247.968	1.916	VIII	弥生	甕	胴部	3	
078	-3188.083	-55247.534	1.830	VIII	弥生		底部	2	
079	-3188.477	-55247.664	1.825	VIII	弥生	甕	底部	1	226
080	-3188.082	-55247.790	1.849	VIII					
081	-3187.710	-55247.944	1.893	VIII					
082	-3188.631	-55248.072	1.881	VIII	弥生	甕	胴部	1	
083	-3188.819	-55248.558	2.029	VIII	弥生	甕	胴部	1	
084	-3188.736	-55248.939	1.964	VIII	弥生	甕	胴部	6	
085	-3188.979	-55248.923	2.053	VIII	弥生	甕	胴部	1	
086	-3188.680	-55249.089	2.007	VIII	弥生	甕	胴部	1	
087	-3188.826	-55249.360	2.065	VIII	弥生	甕	胴部	1	
088	-3188.208	-55249.459	2.066	VIII	弥生	甕	胴部	1	
089	-3187.541	-55249.336	1.952	VIII	弥生		胴部	1	
090	-3186.740	-55249.434	1.932	VIII	弥生	甕	胴部	5	
091	-3186.827	-55249.754	1.943	VIII	弥生	甕	胴部	1	
092	-3187.159	-55249.772	1.974	VIII	弥生	甕	胴部	2	
093	-3186.878	-55250.032	1.951	VIII	弥生	甕	胴部	1	
094	-3187.609	-55250.151	2.032	VIII	弥生	甕	胴部	1	
095	-3188.345	-55250.524	2.093	VIII	弥生	甕	胴部	1	
096	-3187.783	-55250.680	2.049	VIII	弥生	甕	胴部	1	
097	-3187.550	-55250.856	2.042	VIII	弥生	甕	胴部	1	
098	-3187.762	-55251.999	2.079	VIII	弥生	甕	胴部	4	231
099	-3188.402	-55252.347	1.930	VIII	弥生	甕	胴部	7	231
100	-3188.275	-55252.422	1.940	VIII	弥生	甕	胴部	1	
101	-3186.961	-55243.009	1.143						261
102	-3186.676	-55243.183	1.156	IX	弥生	甕	口縁	1	261
103	-3186.279	-55242.337	1.200	IX	弥生	甕	胴部	2	
104	-3186.219	-55243.345	1.131	IX	弥生	甕	胴部	4	
105	-3186.524	-55243.895	1.160	IX	弥生	甕	口縁・胴部	11	271・272
106	-3186.167	-55243.796	1.273	IX	弥生	甕	胴部	1	
107	-3186.207	-55243.851	1.087	IX	弥生	甕	胴部	1	272
108	-3186.256	-55243.970	1.112	IX	弥生	甕	口縁・胴部	6	271・272
109	-3186.018	-55244.214	1.150	IX	弥生	甕	胴部	1	
110	-3186.144	-55244.449	1.134	IX	弥生	甕	胴部	2	
111	-3185.826	-55244.629	1.072	IX	弥生	甕	胴部	1	
112	-3185.820	-55244.707	1.137	IX	弥生	甕	胴部	4	
113	-3186.000	-55245.066	1.075	IX	弥生	甕	胴部	1	
114	-3185.682	-55244.886	1.096	IX	弥生	甕	胴部	3	
115	-3185.481	-55244.799	1.084	IX	弥生	甕	胴部	1	
116	-3185.781	-55243.310	1.327	IX	弥生	甕	胴部	1	
117	-3185.492	-55242.577	1.366	IX	弥生	甕	口縁	1	
118	-3186.130	-55243.483	1.052	X	弥生	甕	口縁	1	275

Tab. 23 遺物データ表3

取り上げ番号	X軸	軸Y	レベル (m)	層位	種別	器種	部位	点数	実測No
119	-3185.485	-55243.353	1.099	X	弥生	甕	胴部	1	
120	-3185.123	-55242.955	1.053	X	弥生	甕	胴部	1	
121	-3185.064	-55243.120	1.021	X	弥生	甕	胴部	1	
122	-3185.400	-55243.486	1.057	X	弥生	甕	胴部	1	
123	-3186.131	-55243.949	1.006	X	弥生	甕	胴部	1	275
124	-3185.250	-55244.010	1.037	X	弥生	甕	胴部	1	
125	-3185.306	-55244.173	1.040	X	弥生	甕	胴部	1	
126	-3185.255	-55244.312	1.018	X	弥生	甕	胴部	1	
127	-3185.032	-55244.289	1.011	X	弥生	甕	胴部	3	
128	-3184.430	-55243.827	1.017	X	弥生	甕	胴部	1	
129	-3185.204	-55244.685	0.985	X	弥生	甕	胴部	4	
130	-3185.528	-55245.032	1.051	X	弥生	甕	胴部	6	
131	-3185.282	-55245.124	1.034	X	弥生	甕	胴部	1	
132	-3185.067	-55245.224	1.014	X	弥生	甕	胴部	2	
133	-3184.166	-55244.352	1.003	X	弥生	甕	胴部	2	
134	-3183.045	-55246.033	0.838	X	弥生	甕	胴部	5	
135	-3184.834	-55245.602	0.639	X	弥生	甕	胴部	1	297
136	-3185.000	-55244.736	0.659	XI	弥生	甕	胴部	1	
137	-3185.165	-55244.900	0.659	XI	弥生	甕	胴部	3	297
138	-3185.371	-55245.178	0.757	XI	弥生	甕	胴部	1	
139	-3185.595	-55245.547	0.666	XI	弥生	甕	胴部	1	262
140	-3185.751	-55245.573	0.671	XI	弥生	甕	胴部	1	297
141	-3185.920	-55245.484	0.680	XI	弥生	甕	胴部	1	
142	-3185.806	-55245.407	0.709	XI	弥生	甕	胴部	2	
143	-3185.840	-55245.306	0.690	XI	弥生	甕	胴部	1	297
144	-3185.978	-55245.393	0.626	XI	弥生	甕	胴部	1	
145	-3186.074	-55245.268	0.684	XI	弥生	甕	胴部	2	
146	-3186.260	-55245.446	0.704	XI	弥生	甕	胴部	1	
147	-3186.423	-55244.941	0.684	XI	弥生	甕	胴部	5	
148	-3186.528	-55244.922	0.715	XI	弥生	甕	胴部	2	
149	-3186.827	-55244.867	0.649	XI	弥生	甕	胴部	1	
150	-3186.891	-55244.977	0.636	XI	弥生	甕	胴部	2	
151	-3186.986	-55245.166	0.673	XI	弥生	甕	胴部	1	
152	-3187.086	-55245.060	0.612	XI	弥生	甕	胴部	2	
153	-3187.320	-55244.969	0.749	XI	弥生	甕	胴部	1	
154	-3187.080	-55244.678	0.669	XI	弥生	甕	胴部	3	286
155	-3187.262	-55244.578	0.619	XI	弥生	甕	胴部	2	
156	-3187.118	-55244.339	0.641	XI	弥生	甕	胴部	2	
157	-3186.358	-55244.629	0.713	XI	弥生	甕	胴部	2	
158	-3185.928	-55244.425	0.700	XI	弥生	甕	胴部	1	286
159	-3185.846	-55244.391	0.560	XI	弥生	甕	胴部	2	
160	-3185.467	-55244.274	0.554	XI	縄文	深鉢	胴部	2	239
161	-3185.308	-55244.219	0.546	XI	縄文	深鉢	胴部	1	239
162	-3185.706	-55243.998	0.702	XI	弥生	甕	胴部	1	
163	-3185.461	-55243.885	0.555	XI	縄文	深鉢	胴部	1	239
164	-3184.783	-55244.068	0.559	XI	弥生	甕	胴部	1	
165	-3185.043	-55243.721	0.564	XI	縄文	深鉢	口縁	1	241
166	-3185.266	-55243.631	0.554	XI	弥生	甕	胴部	1	259
167	-3185.364	-55243.556	0.553	XI	縄文	深鉢	胴部	1	239
168	-3185.284	-55243.493	0.599	XI	縄文	深鉢	口縁	1	239
169	-3185.211	-55243.444	0.558	XI	縄文	深鉢	胴部	2	239
170	-3185.073	-55243.355	0.570	XI	縄文	深鉢	胴部	1	239
171	-3185.237	-55243.242	0.632	XI	縄文	深鉢	胴部	4	239
172	-3184.889	-55243.188	0.553	XI	縄文	深鉢	胴部	1	239
173	-3185.656	-55243.207	0.574	XI	弥生	甕	口縁・胴部	4	259
174	-3185.489	-55242.901	0.697	XI	弥生	甕	胴部	2	285
175	-3185.608	-55242.821	0.625	XI	弥生	甕	胴部	1	287
176	-3185.479	-55242.647	0.698	XI	弥生	甕	胴部	4	286
177	-3185.622	-55242.347	0.557	XI	弥生	甕	底部	5	256

Tab. 24 遺物データ表 4

取り上げ番号	X軸	Y軸	レベル (m)	層位	種別	器種	部位	点数	実測No
178	-3185.851	-55242.862	0.589	XI	弥生	甕	口縁	1	257
179	-3185.769	-55242.736	0.661	XI	弥生	甕	胴部	2	
180	-3185.857	-55242.669	0.772	XI	弥生	甕	胴部	1	257
181	-3185.931	-55242.669	0.666	XI	縄文	深鉢	胴部	3	239
182	-3185.967	-55242.765	0.687	XI	弥生	甕	胴部	1	
183	-3186.001	-55242.799	0.644	XI	縄文	深鉢	胴部	1	239
184	-3185.901	-55242.521	0.696	XI	弥生	甕	胴部	2	
185	-3185.940	-55242.499	0.694	XI	弥生	甕	胴部	1	
186	-3185.987	-55242.467	0.688	XI	弥生	甕	胴部	1	
187	-3186.015	-55242.505	0.679	XI	弥生	甕	胴部	2	
188	-3185.872	-55242.139	0.672	XI	弥生	甕	胴部	1	
189	-3185.941	-55242.039	0.668	XI	弥生	甕	胴部	1	
190	-3184.776	-55241.775	0.611	XI	弥生	甕	胴部	1	
191	-3184.856	-55241.249	0.565	XI	弥生	甕	胴部	2	299
192	-3184.791	-55240.930	0.515	XI	弥生	甕	胴部	1	
193	-3185.100	-55241.070	0.493	XI	弥生	甕	胴部	2	
194	-3184.910	-55240.160	0.578	XI	弥生	甕	胴部	1	256
195	-3184.165	-55240.116	0.467	XI	弥生	甕	口縁	1	258
196	-3183.880	-55239.953	0.523	XI	弥生	甕	胴部	1	
197	-3183.973	-55239.889	0.527	XI	弥生	甕	胴部	1	
198	-3185.078	-55239.596	0.671	XI	弥生	甕	胴部	6	
199	-3185.156	-55239.648	0.674	XI	弥生	甕	胴部	6	
200	-3185.991	-55243.304	0.686	XI	弥生	甕	胴部	1	
201	-3186.162	-55243.350	0.670	XI	弥生	甕	胴部	1	
202	-3185.878	-55243.802	0.618	XI	縄文	深鉢	胴部	5	239
203	-3186.333	-55244.105	0.674	XI	縄文	深鉢	胴部	1	239
204	-3186.149	-55243.900	0.681	XI	弥生	甕	胴部	1	285
205	-3186.970	-55243.898	0.632	XI	弥生	甕	底部	1	286
206	-3186.892	-55243.903	0.664	XI	弥生	甕	胴部	1	
207	-3186.810	-55243.554	0.675	XI	弥生	甕	胴部	3	286
208	-3187.035	-55243.507	0.664	XI	弥生	甕	胴部	3	286
209	-3186.870	-55243.350	0.630	XI	弥生	甕	胴部	3	286
210	-3186.797	-55243.195	0.675	XI	弥生	甕	胴部	8	
211	-3186.671	-55243.133	0.677	XI	弥生	甕	胴部	2	286
212	-3187.806	-55244.319	0.591	XI	弥生	甕	胴部	1	286
213	-3187.733	-55244.121	0.608	XI	弥生	甕	胴部	1	286
214	-3187.482	-55243.948	0.654	XI	弥生	甕	胴部	2	285
215	-3187.447	-55243.845	0.643	XI	弥生	甕	胴部	1	
216	-3187.259	-55243.702	0.617	XI	弥生	甕	胴部	3	
217	-3186.782	-55243.660	0.578	XI	弥生	甕	胴部	5	
218	-3186.889	-55243.610	0.630	XI	弥生	甕	胴部	1	
219	-3186.827	-55243.521	0.586	XI	弥生	甕	胴部	1	286
220	-3186.903	-55243.452	0.691	XI	弥生	甕	胴部	1	287
221	-3186.755	-55243.318	0.768	XI	弥生	甕	胴部	3	
222	-3186.618	-55243.412	0.633	XI	弥生	甕	胴部	1	286
223	-3186.617	-55243.165	0.652	XI	弥生	甕	胴部	1	286
224	-3186.914	-55243.224	0.645	XI	弥生	甕	胴部	3	285
225	-3186.408	-55242.822	0.683	XI	弥生	甕	胴部	1	287
226	-3186.220	-55242.641	0.658	XI	弥生	甕	胴部	2	
227	-3186.514	-55242.293	0.622	XI	弥生	甕	胴部	1	287
228	-3186.784	-55242.351	0.663	XI	弥生	甕	胴部	2	287
229	-3186.845	-55242.463	0.639	XI	弥生	甕	胴部	1	287
230	-3186.935	-55242.647	0.633	XI	弥生	甕	胴部	1	
231	-3186.903	-55242.068	0.755	XI	弥生	甕	胴部	1	
232	-3187.117	-55241.865	0.610	XI	弥生	甕	胴部	1	287
233	-3187.168	-55241.701	0.622	XI	弥生	甕	胴部	1	287
234	-3187.239	-55241.807	0.572	XI	弥生	甕	胴部	1	287
235	-3187.298	-55241.629	0.648	XI	弥生	甕	胴部	1	287
236	-3187.258	-55241.455	0.624	XI	弥生	甕	胴部	2	287

Tab. 25 遺物データ表5

取り上げ番号	X軸	Y軸	レベル (m)	層位	種別	器種	部位	点数	実測No
237	-3187.305	-55241.993	0.619	XI	弥生	甕	胴部	2	287
238	-3187.462	-55241.746	0.681	XI	弥生	甕	胴部	2	287
239	-3187.644	-55241.859	0.614	XI	弥生	甕	胴部	1	287
240	-3187.728	-55241.544	0.658	XI	弥生	甕	胴部	2	
241	-3187.926	-55241.427	0.661	XI	弥生	甕	胴部	1	287
242	-3188.012	-55241.836	0.644	XI	弥生	甕	口縁・胴部	4	287
243	-3188.262	-55242.408	0.594	XI	弥生	甕	胴部	1	
244	-3188.802	-55243.281	0.593	XI	弥生	甕	胴部	2	
245	-3188.804	-55243.477	0.574	XI	弥生	甕	胴部	1	286
246	-3189.024	-55244.160	0.578	XI	弥生	甕	胴部	2	
247	-3188.341	-55243.765	0.534	XI	弥生	甕	底部	2	286
248	-3188.140	-55243.526	0.529	XI	弥生	甕	底部	1	286
249	-3187.992	-55243.471	0.584	XI	弥生	甕	底部	1	286
250	-3187.707	-55243.436	0.619	XI	弥生	甕	胴部	3	
251	-3187.723	-55242.957	0.620	XI	弥生	甕	胴部	5	286
252	-3187.689	-55242.739	0.608	XI	弥生	甕	胴部	1	285
253	-3187.509	-55243.102	0.655	XI	弥生	甕	胴部	1	
254	-3187.494	-55243.326	0.597	XI	弥生	甕	胴部	1	286
255	-3187.499	-55243.434	0.643	XI	弥生	甕	底部	1	286
256	-3187.438	-55243.350	0.576	XI	弥生	甕	胴部	1	286
257	-3187.671	-55243.722	0.624	XI	弥生	甕	胴部	1	
258	-3187.269	-55243.602	0.617	XI	弥生	甕	胴部	1	286
259	-3187.215	-55243.544	0.566	XI	弥生	甕	胴部	2	
260	-3187.198	-55243.238	0.594	XI	弥生	甕	胴部	1	286
261	-3187.252	-55243.060	0.639	XI	弥生	甕	胴部	4	286
262	-3187.301	-55242.908	0.619	XI	弥生	甕	胴部	1	286
263	-3187.601	-55243.534	0.536	XI	弥生	甕	胴部	1	286
264	-3187.608	-55243.935	0.817	X	弥生	甕	胴部	3	
265	-3187.466	-55243.559	0.822	X	弥生	甕	胴部	1	
266	-3187.091	-55243.563	1.001	X	弥生	甕	口縁	1	261
267	-3187.064	-55243.610	1.010	X	弥生	甕	胴部	1	261
268	-3187.072	-55243.446	0.894	X	弥生	甕	胴部	1	
269	-3186.939	-55243.348	0.792	X	弥生	甕	胴部	1	
270	-3186.941	-55243.298	0.578	XI	弥生	甕	胴部	1	
271	-3186.956	-55243.611	0.611	XI	弥生	甕	胴部	1	
272	-3187.635	-55242.651	0.979	X	弥生	甕	胴部	1	
273	-3187.328	-55242.813	0.902	X	弥生	甕	胴部	6	261
274	-3186.019	-55239.519	0.678	XI	弥生	甕	胴部	4	
275	-3185.964	-55239.337	0.680	XI	弥生	甕	胴部	3	
276	-3185.740	-55239.450	0.678	XI	弥生	甕	胴部	4	
277	-3185.438	-55239.451	0.597	XI	弥生	甕	胴部	5	
278	-3185.860	-55238.643	0.687	XI	弥生	甕	胴部	4	
279	-3185.181	-55238.845	0.777	XI	弥生	甕	胴部	4	
280	-3184.999	-55238.586	0.694	XI	弥生	甕	胴部	1	
281	-3185.038	-55238.251	0.761	XI	弥生	甕	胴部	2	
282	-3184.680	-55238.184	0.749	XI	弥生	甕	胴部	1	
283	-3181.449	-55251.756	1.424	VIII	弥生	甕	胴部	1	
284	-3180.864	-55252.346	1.417	VIII	弥生	甕	胴部	1	
285	-3180.248	-55250.994	0.475	XI	弥生	甕	胴部	1	
286	-3180.827	-55251.294	0.487	XI	弥生	甕	胴部	1	
287	-3180.810	-55252.026	0.430	XI	弥生	甕	口縁	2	257
288	-3181.311	-55251.959	0.726	XI	弥生	甕	胴部	1	
289	-3181.402	-55252.053	0.721	XI	弥生	甕	胴部	2	288
290	-3181.220	-55251.981	0.564	XI	弥生	甕	口縁	1	266
291	-3181.231	-55252.049	0.495	XI	弥生	甕	胴部	1	266
292	-3181.685	-55251.949	0.668	XI	弥生	甕	胴部	1	
293	-3181.671	-55252.209	0.561	XI	弥生	甕	胴部	2	266
294	-3181.618	-55252.322	0.714	XI	弥生	甕	胴部	1	288
295	-3181.547	-55252.417	0.715	XI	弥生	甕	胴部	1	288

Tab. 26 遺物データ表6

取り上げ番号	X軸	Y軸	レベル (m)	層位	種別	器種	部位	点数	実測No
296	-3181.458	-55252.388	0.693	XI	弥生	甕	胴部	1	288
297	-3181.444	-55252.464	0.684	XI	弥生	甕	口縁	1	288
298	-3181.366	-55252.613	0.687	XI	弥生	甕	胴部	1	288
299	-3181.477	-55252.678	0.713	XI	弥生	甕	胴部	3	288
300	-3181.542	-55252.633	0.713	XI	弥生	甕	胴部	1	288
301	-3181.620	-55252.526	0.727	XI	弥生	甕	胴部	1	
302	-3181.696	-55252.559	0.880	XI	弥生	甕	胴部	1	
303	-3181.554	-55252.529	0.704	XI	弥生	甕	胴部	1	
304	-3180.143	-55253.190	0.696	XI	弥生	甕	胴部	1	262
305	-3181.092	-55252.735	0.885	X	弥生	甕	胴部	1	
306	-3180.936	-55253.229	0.515	XI	弥生	甕	胴部	11	266
307	-3181.244	-55253.973	0.818	XI	弥生	甕	胴部	1	
308	-3181.370	-55253.957	0.786	X	弥生	甕	胴部	1	
309	-3182.729	-55254.542	0.683	XI	弥生	甕	口縁	1	282
310	-3182.677	-55254.557	0.662	XI	弥生	甕	胴部	2	282
311	-3181.866	-55253.828	0.747	X	弥生	甕	胴部	1	288
312	-3182.173	-55253.332	0.806	X	弥生	甕	胴部	1	
313	-3182.128	-55253.364	0.857	X	弥生	甕	口縁	1	288
314	-3182.069	-55253.321	0.838	X	弥生	甕	口縁・胴部	5	288
315	-3181.677	-55253.160	0.845	X	弥生	甕	胴部	1	
316	-3181.648	-55253.081	0.803	X	弥生	甕	胴部	2	
317	-3181.555	-55252.907	0.828	X	弥生	甕	胴部	1	
318	-3181.744	-55252.851	0.794	XI	弥生	甕	胴部	4	288
319	-3181.699	-55252.774	0.754	XI	弥生	甕	胴部	5	288
320	-3181.627	-55252.687	0.717	XI	弥生	甕	胴部	3	288
321	-3185.752	-55253.841	1.880	VIII	弥生	甕	胴部	1	
322	-3186.221	-55250.562	1.804	VIII	弥生	甕	胴部	1	
323	-3186.123	-55250.209	1.787	VIII	弥生	甕	胴部	1	
324	-3187.381	-55248.458	1.726	VIII	弥生	甕	胴部	1	
325	-3186.705	-55249.444	1.810	VIII	弥生	甕	胴部	1	
326	-3186.997	-55249.883	1.868	VIII	弥生	甕	胴部	1	
327	-3186.925	-55250.063	1.830	VIII	弥生	甕	胴部	1	
328	-3187.513	-55249.649	1.815	VIII	弥生	甕	胴部	1	
329	-3188.859	-55249.343	1.940	VIII	弥生	甕	胴部	13	
330	-3189.139	-55249.304	1.949	VIII	弥生	甕	胴部	1	
331	-3189.194	-55249.389	1.933	VIII	弥生	甕	胴部	2	
332	-3188.487	-55249.886	1.894	VIII	弥生	甕	胴部	1	
333	-3188.625	-55250.019	1.901	VIII	弥生	甕	胴部	4	
334	-3188.960	-55250.047	1.957	VIII	弥生	甕	底部	1	294
335	-3187.236	-55250.606	1.853	VIII	弥生	甕	口縁・胴部	21	214
336	-3187.768	-55251.941	1.944	VIII	弥生	甕	底部・胴部	56	231
337	-3187.757	-55252.220	1.928	VIII	弥生	甕	胴部	2	
338	-3187.959	-55252.439	1.825	VIII	弥生	甕	胴部	1	
339	-3189.720	-55250.673	1.973	VIII	弥生	甕	胴部	1	
340	-3190.153	-55249.713	1.925	VIII	弥生	甕	胴部	2	
341	-3190.729	-55249.346	1.915	VIII	弥生	甕	胴部	4	
342	-3189.975	-55248.936	1.866	VIII	弥生	甕	胴部	2	
343	-3190.434	-55248.943	1.872	VIII	弥生	甕	胴部	1	
344	-3189.754	-55248.021	1.935	VIII	弥生	甕	胴部	2	
345	-3189.289	-55247.562	1.865	VIII	弥生	甕	胴部	3	
346	-3191.386	-55247.295	1.798	VIII	弥生	甕	胴部	4	
347	-3183.023	-55236.259	0.756	X	弥生	甕	胴部	4	
348	-3183.183	-55235.890	0.694	X	弥生	甕	胴部	5	
349	-3183.305	-55235.517	0.621	XI	弥生	甕	胴部	1	
350	-3183.683	-55235.634	0.653	XI	弥生	甕	底部	1	262
351	-3183.809	-55235.458	0.642	XI	弥生	甕	胴部	1	262
352	-3183.897	-55235.385	0.629	XI	弥生	甕	胴部	1	262
353	-3183.524	-55235.313	0.621	XI	弥生	甕	胴部	1	
354	-3183.324	-55235.400	0.775	X	弥生	甕	胴部	2	262

Tab. 27 遺物データ表7

取り上げ番号	X軸	Y軸	レベル (m)	層位	種別	器種	部位	点数	実測No
355	-3183.061	-55235.140	0.621						
356	-3182.502	-55234.613	0.651	XI	弥生	甕	口縁・胴部	3	287
357	-3182.488	-55234.502	0.678	XI	弥生	甕	胴部	4	287
358	-3182.595	-55234.116	0.676	XI	弥生	甕	胴部	4	287
359	-3181.774	-55235.612	0.538	XI	弥生	甕	胴部	2	
360	-3181.260	-55235.373	0.552	XI	弥生	甕	胴部	1	
361	-3181.438	-55234.833	0.514	XI	弥生	甕	胴部	1	
362	-3180.884	-55234.150	0.522	XI	弥生	甕	胴部	1	
363	-3181.825	-55233.820	0.560	XI	弥生	甕	胴部	3	
364	-3182.736	-55233.643	0.650	XI	弥生	甕	胴部	1	287
365	-3182.498	-55233.346	0.511	XI	弥生	甕	口縁	1	270
366	-3180.335	-55232.930	0.587	XI	縄文	深鉢	胴部	1	245
367	-3179.961	-55232.661	0.600	XI	弥生	甕	胴部	1	
368	-3180.101	-55231.788	0.518	XI	縄文	深鉢	胴部	1	245
369	-3181.031	-55231.182	0.495	XI	弥生	甕	胴部	1	
370	-3180.906	-55231.561	0.481	XI	弥生	甕	胴部	1	
371	-3181.220	-55231.566	0.502	XI	縄文	深鉢	胴部	1	245
372	-3181.207	-55231.760	0.467	XI	縄文	深鉢	胴部	1	245
373	-3181.210	-55231.894	0.566	XI	縄文	深鉢	胴部	2	245
374	-3181.383	-55231.919	0.506	XI	弥生・縄文	甕・深鉢	胴部	2	
375	-3182.038	-55230.342	0.457	XI	縄文	深鉢	胴部	1	249
376	-3182.500	-55231.365	0.469	XI	弥生	甕	胴部	2	253
377	-3183.064	-55231.058	0.452	XI	弥生	甕	胴部	1	270
378	-3183.164	-55230.518	0.431	XI	弥生	甕	胴部	1	270
379	-3183.316	-55230.542	0.480	XI	弥生	甕	口縁・胴部	3	270
380	-3183.762	-55230.826	0.480	XI	弥生	甕	口縁	1	270
381	-3183.439	-55231.465	0.481	XI	弥生	甕	胴部	1	270
382	-3183.004	-55231.482	0.435	XI	弥生	甕	口縁	1	270
383	-3182.842	-55231.476	0.484	XI	弥生	甕	胴部	1	270
384	-3182.877	-55231.557	0.493	XI	弥生	甕	胴部	3	270
385	-3183.453	-55231.621	0.433	XI	弥生	甕	胴部	1	270
386	-3183.417	-55231.739	0.435	XI	弥生	甕	口縁	1	270
387	-3183.272	-55232.572	0.435	XI	弥生	壺	胴部	1	253
388	-3183.064	-55232.613	0.458	XI	弥生	壺	胴部	1	
389	-3183.349	-55232.675	0.448	XI	弥生	甕	胴部	4	253
390	-3183.335	-55233.106	0.449	XI	弥生	甕	胴部	3	
391	-3183.300	-55232.833	0.446	XI	弥生	甕	胴部	3	270・253
392	-3182.941	-55233.091	0.443	XI	弥生	壺	胴部	2	
393	-3183.088	-55232.711	0.443	XI	弥生	甕	胴部	1	270
394	-3183.397	-55232.536	0.431	XI	弥生	甕	胴部	1	270
395	-3183.090	-55233.314	0.436	XI	弥生	壺	胴部	2	
396	-3182.959	-55232.813	0.440	XI	弥生	甕	胴部	1	270
397	-3182.948	-55232.974	0.433	XI	弥生	甕	胴部	1	
398	-3182.777	-55233.055	0.446	XI	弥生	壺	胴部	1	
399	-3181.662	-55252.293	0.600	XI	弥生	甕	胴部	4	266
400	-3181.244	-55251.882	0.536	XI	弥生	甕	胴部	1	266・286
401	-3181.416	-55251.744	0.470	XI	弥生	甕	胴部	6	266
402	-3181.631	-55251.846	0.423	XI	弥生	甕	口縁・胴部	2	266
403	-3178.609	-55253.282	0.437	XI	弥生	甕	胴部	1	
404	-3179.916	-55231.560	0.418	XI	弥生	甕	胴部	2	291
405	-3179.720	-55231.592	0.428	XI	弥生	甕	底部	3	291
406	-3189.924	-55252.420	1.712	VIII	弥生	甕	口縁・底部・胴部	220	91・92・96
407	-3181.693	-55237.009	0.830	X	弥生	甕	胴部	2	274
408	-3189.244	-55243.348	0.520	XI	弥生	甕	胴部	2	286
409	-3189.248	-55243.235	0.530	XI	弥生	甕	胴部	1	
410	-3188.789	-55243.435	0.519	XI	弥生	甕	胴部	1	286
411	-3187.968	-55244.356	0.571	XI	弥生	甕	胴部	1	297
412	-3188.164	-55243.537	0.529	XI	弥生	甕	底部	1	286
413	-3187.928	-55243.529	0.557	XI	弥生	甕	胴部	1	

Tab. 28 遺物データ表 8

取り上げ番号	X軸	Y軸	レベル (m)	層位	種別	器種	部位	点数	実測No
414	-3187.594	-55243.572	0.528	XI					
415	-3187.484	-55243.463	0.593	XI	弥生	甕	胴部	12	286・285
416	-3187.713	-55242.969	0.605	XI	弥生	甕	胴部	3	286
417	-3187.673	-55242.698	0.613	XI	弥生	甕	胴部	1	
418	-3186.202	-55239.198	0.702	XI	弥生	甕	胴部	1	
419	-3186.309	-55243.401	0.495	XI	弥生	甕	口縁・胴部	2	
420	-3185.531	-55244.647	0.549	XI	縄文	深鉢	口縁・胴部	4	242
421	-3185.428	-55244.249	0.549	XI	縄文	深鉢	胴部	2	239
422	-3185.085	-55243.646	0.558	XI	弥生	甕	胴部	1	
423	-3185.212	-55243.413	0.527	XI	縄文	深鉢	胴部	1	
424	-3185.213	-55243.273	0.564	XI	縄文	深鉢	口縁	1	239
425	-3184.352	-55243.198	0.530	XI	弥生	甕	胴部	1	
426	-3184.819	-55242.983	0.555	XI	縄文	深鉢	口縁・胴部	2	239
427	-3184.706	-55242.703	0.546	XI	縄文	深鉢	胴部	3	239
428	-3184.653	-55242.569	0.508	XI	縄文	深鉢	胴部	3	239
429	-3184.908	-55242.513	0.555	XI	縄文	深鉢	胴部	2	239
430	-3184.889	-55242.347	0.532	XI	縄文	深鉢	胴部	1	239
431	-3185.368	-55242.510	0.563	XI	縄文	深鉢	口縁	2	239
432	-3185.816	-55242.065	0.525	XI	縄文	深鉢	口縁	1	239
433	-3186.431	-55242.471	0.457	XI	弥生	甕	胴部	1	257
434	-3185.782	-55240.213	0.403	XI	弥生	甕	胴部	3	299
435	-3184.807	-55239.846	0.357	XI	弥生	甕	胴部	2	256
436	-3184.868	-55239.533	0.382	XI	弥生	甕	口縁	1	256
437	-3184.604	-55239.706	0.450	XI	弥生	甕	胴部	2	
438	-3183.837	-55240.997	0.512	XI	弥生	甕	胴部	1	256
439	-3183.642	-55240.306	0.439	XI	弥生	甕	胴部	1	
440	-3183.463	-55239.942	0.464	XI	弥生	甕	胴部	1	256
441	-3181.517	-55232.779	0.475	XI	弥生	甕	胴部	2	
442	-3181.174	-55232.655	0.464	XI	縄文	深鉢	口縁・胴部	3	245
443	-3181.082	-55232.559	0.458	XI	縄文	深鉢	胴部	1	245
444	-3181.091	-55232.364	0.447	XI	縄文	深鉢	口縁	4	245
445	-3180.805	-55232.286	0.466	XI	縄文	深鉢	口縁	4	245
446	-3180.298	-55231.913	0.456	XI	縄文	深鉢	胴部	1	245
447	-3179.838	-55231.494	0.426	XI	弥生	甕	胴部	2	
448	-3184.605	-55238.061	0.429	XI	弥生	甕	胴部	2	256
449	-3184.717	-55238.802	0.477	XI	弥生	甕	胴部	2	256
450	-3184.314	-55239.225	0.399	XI	弥生	甕	胴部	2	
451	-3184.914	-55240.059	0.379	XI	弥生	甕	口縁・胴部	2	256
452	-3184.798	-55240.088	0.488	XI	弥生	甕	底部・胴部	7	256・299
453	-3184.326	-55240.626	0.332	XI	弥生	壺	胴部	1	254
454	-3184.348	-55241.137	0.474	XI	弥生	甕	底部	7	299
455	-3184.079	-55241.388	0.468	XI	弥生	甕	胴部	6	
456	-3184.771	-55239.940	0.385	XI	弥生	甕	胴部	4	256
457	-3185.156	-55240.663	0.413	XI	弥生	甕	胴部	1	256
458	-3185.255	-55240.552	0.444	XI	弥生	甕	胴部	7	256・299
459	-3185.394	-55240.757	0.380	XI	弥生	甕	胴部	1	299
460	-3185.654	-55240.816	0.424	XI	弥生	甕	胴部	2	299
461	-3185.904	-55240.896	0.429	XI	弥生	甕	胴部	1	299
462	-3186.191	-55239.165	0.632	XI	弥生	甕	胴部	1	
463	-3186.705	-55241.996	0.410	XI	弥生	甕	胴部	1	257
464	-3186.641	-55242.602	0.414	XI	弥生	甕	胴部	3	257
465	-3186.738	-55242.758	0.414	XI	弥生	甕	胴部	2	257
466	-3188.765	-55244.624	0.783	XI	弥生	甕	底部	1	295
467	-3187.528	-55245.028	0.608	XI	弥生	甕	胴部	1	
468	-3187.588	-55245.080	0.553	XI	弥生	甕	底部・胴部	2	297
469	-3187.727	-55245.219	0.687	XI	弥生	甕	胴部	4	
470	-3186.996	-55245.324	0.596	XI	弥生	甕	胴部	3	
471	-3187.173	-55245.448	0.553	XI	弥生	甕	胴部	4	
472	-3187.262	-55245.954	0.528	XI	弥生	甕	胴部	2	297

Tab. 29 遺物データ表9

取り上げ番号	X軸	Y軸	レベル (m)	層位	種別	器種	部位	点数	実測No
473	-3187.047	-55245.983	0.546	XI	弥生	甕	胴部	2	
474	-3186.759	-55245.962	0.59	XI	弥生	甕	胴部	3	
475	-3186.520	-55245.896	0.619	XI	弥生	甕	胴部	1	
476	-3186.124	-55245.912	0.646	XI	弥生	甕	胴部	1	
477	-3186.121	-55246.062	0.641	XI	弥生	甕	胴部	12	
478	-3185.773	-55246.038	0.902	XI	弥生	甕	胴部	2	
479	-3185.815	-55246.306	0.621	XI	弥生	甕	胴部	4	
480	-3185.465	-55246.264	0.641	XI	弥生	甕	底部・胴部	4	297
481	-3186.852	-55246.228	0.571	XI	弥生	甕	胴部	7	297
482	-3187.023	-55246.269	0.538	XI	弥生	甕	底部・胴部	5	297
483	-3187.723	-55246.647	0.531	XI	弥生	甕	底部	3	297
484	-3188.776	-55247.323	0.529	XI	弥生	甕	底部	4	300
485	-3191.632	-55249.598	0.767						
486	-3191.212	-55249.561	0.767	XI	弥生	甕	胴部	1	
487	-3191.134	-55250.399	0.848	XI	弥生	甕	底部	29	298
488	-3191.328	-55250.742	0.845	XI	弥生	甕	胴部	2	298
489	-3190.996	-55250.667	0.831	XI	弥生	甕	胴部	2	
490	-3190.879	-55251.138	0.801	XI	弥生	甕	口縁	1	271
491	-3190.419	-55251.113	0.809	XI	弥生	甕	口縁	1	271
492	-3187.246	-55252.507	0.667	XI	弥生	甕	胴部	2	
493	-3186.887	-55252.441	0.687	XI	弥生	甕	胴部	2	
494	-3186.695	-55252.605	0.656	XI	弥生	甕	胴部	3	
495	-3187.032	-55251.502	0.670	XI	弥生	甕	口縁・胴部	4	298・281・277
496	-3185.410	-55250.607	0.935	XI	弥生	甕	胴部	1	
497	-3185.234	-55250.559	0.939	XI	弥生	甕	口縁・胴部	5	279
498	-3185.578	-55250.107	0.919	XI	弥生	甕	口縁・胴部	6	
499	-3185.449	-55249.974	0.924	XI	弥生	甕	胴部	6	
500	-3185.604	-55249.874	0.940	XI	弥生	甕	口縁	2	273・276
501	-3185.642	-55249.762	0.901	XI	弥生	甕	口縁・胴部	4	273・278
502	-3185.868	-55249.825	0.843	XI	弥生	甕	胴部	2	273
503	-3185.839	-55249.568	0.879	XI	弥生	甕	胴部	1	273
504	-3185.561	-55249.517	0.945	XI	弥生	甕	胴部	2	
505	-3185.690	-55249.503	0.902	XI	弥生	甕	口縁・胴部	20	273
506	-3185.686	-55249.269	0.752	XI	弥生	甕	胴部	1	269
507	-3185.367	-55248.043	0.875	XI	弥生	甕	胴部	5	269
508	-3185.214	-55248.079	0.887	XI	弥生	甕	口縁・胴部	14	269
509	-3185.254	-55247.698	0.908	XI	弥生	甕	胴部	1	269
510	-3184.969	-55247.882	0.800	XI	弥生	甕	口縁・底部・胴部	5	269
511	-3185.091	-55247.364	0.782	XI	弥生	甕	胴部	1	
512	-3184.935	-55247.597	0.872	XI	弥生	甕	胴部	2	
513	-3184.879	-55247.413	0.825	XI	弥生	甕	底部	2	269
514	-3184.627	-55247.525	0.787	XI	弥生	甕	胴部	1	269
515	-3184.534	-55247.769	0.778	XI	弥生	甕	胴部	2	269
516	-3184.360	-55247.866	0.768	XI	弥生	甕	胴部	2	269
517	-3185.239	-55246.741	0.903	XI	弥生	甕	口縁	1	280
518	-3186.411	-55248.898	0.628	XI	弥生	甕	胴部	1	262
519	-3187.615	-55246.001	0.485	XI	弥生	甕	胴部	1	
520	-3182.123	-55251.670	0.667	XI	弥生	甕	胴部	2	262
521	-3183.494	-55252.312	0.561	XI	弥生	甕	底部	1	296
522	-3183.750	-55252.167	0.668	XI	弥生	甕	胴部	1	262
523	-3183.687	-55252.086	0.615	XI	弥生	甕	胴部	1	262
524	-3183.584	-55252.041	0.597	XI	弥生	甕	口縁	1	262
525	-3183.949	-55251.640	0.602	XI	弥生	甕	口縁・胴部	2	262
526	-3183.210	-55251.643	0.404	XI	弥生	甕	胴部	1	266
527	-3183.250	-55251.500	0.607	XI	弥生	甕	底部	1	296
528	-3182.878	-55251.542	0.380	XI	弥生	甕	胴部	1	292
529	-3182.776	-55251.355	0.427	XI	弥生	甕	胴部	9	262・292
530	-3182.913	-55250.710	0.626	XI	弥生	甕	胴部	1	262
531	-3183.107	-55250.787	0.666	XI	弥生	甕	胴部	1	262

Tab. 30 遺物データ表10

取り上げ番号	X軸	Y軸	レベル (m)	層位	種別	器種	部位	点数	実測No
532	-3183.315	-55250.883	0.639	XI	弥生	甕	胴部	4	262
533	-3183.616	-55250.868	0.652	XI	弥生	甕	胴部	5	262
534	-3183.412	-55250.511	0.632	XI	弥生	甕	胴部	5	262
535	-3183.333	-55250.433	0.777	XI	弥生	甕	口縁	1	269
536	-3183.289	-55250.284	0.609	XI	弥生	甕	胴部	4	262・296
537	-3183.475	-55249.915	0.614	XI	弥生	甕	胴部	1	262
538	-3183.880	-55250.112	0.665	XI	弥生	甕	胴部	1	262
539	-3184.079	-55250.201	0.571	XI	弥生	甕	胴部	1	
540	-3184.514	-55250.449	0.646	XI	弥生	甕	胴部	1	262
541	-3184.170	-55251.284	0.679	XI	弥生	甕	口縁・胴部	4	262
542	-3184.780	-55251.605	0.554	XI	弥生	甕	胴部	2	262
543	-3184.741	-55251.887	0.544	XI	弥生	甕	胴部	2	262
544	-3185.046	-55251.803	0.508	XI	弥生	甕	胴部	1	
545	-3185.138	-55250.901	0.577	XI	弥生	甕	胴部	2	262
546	-3184.961	-55250.665	0.628	XI	弥生	甕	胴部	2	262
547	-3184.308	-55249.832	0.595	XI	弥生	甕	胴部	1	
548	-3185.062	-55249.276	0.606	XI	弥生	甕	胴部	1	
549	-3185.705	-55247.725	0.553	XI	弥生	甕	口縁	1	
550	-3184.299	-55251.716	0.487	XI	弥生	甕	胴部	9	296
551	-3183.745	-55251.327	0.591	XI	弥生	甕	胴部	1	296
552	-3183.707	-55251.558	0.525	XI	弥生	甕	胴部	1	
553	-3183.763	-55251.706	0.498	XI	弥生	甕	胴部	6	296
554	-3187.326	-55246.192	0.474	XI	弥生	甕	胴部	1	297
555	-3187.119	-55246.438	0.466	XI	弥生	甕	胴部	1	297
556	-3182.197	-55250.057	0.376	XI	縄文	深鉢	口縁	1	244
557	-3181.980	-55249.521	0.341	XI	縄文	深鉢	口縁	1	244
558	-3181.672	-55249.256	0.305	XI	縄文	鉢	胴部	4	246
559	-3181.838	-55249.264	0.292	XI	縄文	鉢	胴部	1	246
560	-3182.020	-55249.123	0.292	XI	縄文	鉢	口縁	1	246
561	-3182.210	-55249.032	0.346	XI	縄文	深鉢	口縁	1	244
562	-3182.414	-55248.945	0.327	XI	縄文	深鉢	胴部	4	244
563	-3182.508	-55248.691	0.352	XI	縄文	深鉢	胴部	1	244
564	-3184.746	-55249.440	0.434	XI	弥生	甕	胴部	14	296・252
565	-3184.931	-55248.009	0.365	XI	縄文	深鉢	胴部	2	235
566	-3184.984	-55248.001	0.286	XI	縄文	深鉢	胴部	1	235
567	-3184.872	-55247.774	0.240	XI	弥生・縄文	壺・深鉢	胴部	2	235
568	-3185.114	-55247.967	0.221	XI	縄文	鉢	口縁・胴部	2	246
569	-3185.183	-55247.813	0.250	XI	縄文	深鉢	胴部	1	235
570	-3185.243	-55247.876	0.186	XI	縄文	鉢	胴部	1	246
571	-3185.271	-55247.716	0.261	XI	縄文	深鉢	胴部	1	235
572	-3185.493	-55248.054	0.103	XI			胴部	1	
573	-3185.808	-55247.838	0.368	XI	縄文	鉢	胴部	1	246
574	-3185.597	-55247.744	0.210	XI			胴部	2	
575	-3185.775	-55247.568	0.213	XI	縄文	深鉢	口縁	1	235
576	-3185.573	-55247.558	0.151	XI			胴部	1	
577	-3185.847	-55247.241	0.147	XI	縄文	鉢	口縁	4	246
578	-3185.654	-55247.229	0.215	XI	縄文	深鉢	口縁・胴部	2	235
579	-3185.439	-55247.265	0.296	XI	縄文	深鉢	胴部	1	235
580	-3185.838	-55247.023	0.215	XI	縄文	鉢	胴部	2	246
581	-3185.999	-55246.610	0.228	XI	縄文	深鉢	胴部	1	235
582	-3185.928	-55246.668	0.267	XI	縄文	深鉢	口縁	1	243
583	-3185.775	-55246.529	0.237	XI	縄文	深鉢	胴部	1	235
584	-3185.211	-55248.973	0.495	XI	弥生	甕	胴部	2	
585	-3185.657	-55248.373	0.443	XI	弥生	甕	胴部	1	
586	-3185.931	-55249.186	0.384	XI	弥生	甕	胴部	1	
587	-3186.015	-55248.827	0.392	XI	弥生	甕	胴部	1	
588	-3186.171	-55248.620	0.374	XI	弥生	甕	胴部	1	
589	-3186.412	-55247.493	0.173	XI	縄文	深鉢	胴部	1	235
590	-3186.642	-55247.900	0.405	XI			胴部	2	

Tab. 31 遺物データ表11

取り上げ番号	X軸	Y軸	レベル (m)	層位	種別	器種	部位	点数	実測No
591	-3186.848	-55248.235	0.407	XI			胴部	1	
592	-3186.909	-55248.449	0.167	XI	縄文	深鉢	口縁	1	235
593	-3187.306	-55248.397	0.280	XI	縄文	鉢	口縁	1	
594	-3186.002	-55249.199	0.135	XI	縄文	深鉢	胴部	1	
595	-3185.939	-55250.647	0.510	XI	弥生	甕	胴部	1	
596	-3185.687	-55250.796	0.472	XI	弥生	甕	胴部	2	
597	-3184.289	-55250.454	0.049	XI	弥生	甕	胴部	1	
598	-3183.647	-55250.241	0.060	XI			胴部	1	
599	-3183.670	-55250.379	0.267	XI	縄文	深鉢	胴部	1	244
600	-3183.297	-55250.272	0.613	XI	弥生	甕	胴部	1	292
601	-3180.389	-55244.725	0.372	XI	弥生	甕	胴部	15	293
602	-3178.541	-55236.512	0.900	XI	弥生	甕	底部	1	293
603	-3178.664	-55234.563	0.743	XI	弥生	甕	胴部	1	
604	-3178.971	-55233.992	0.889	XI	弥生	甕	胴部	2	
605	-3179.171	-55234.029	0.748	XI	弥生	甕	胴部	1	
606	-3179.064	-55233.789	0.883	XI	弥生	甕	胴部	3	
607	-3179.285	-55233.261	0.861	XI	弥生	甕	底部	7	293
608	-3179.054	-55232.975	0.712	XI	弥生	甕	胴部	1	
609	-3178.828	-55232.725	0.395	XI			胴部	2	
610	-3179.704	-55233.591	0.867	XI	弥生	甕	胴部	1	
611	-3179.498	-55233.020	0.343	XI	縄文	深鉢	胴部	2	
612	-3180.472	-55234.803	0.524	XI	弥生	甕	胴部	1	
613	-3180.563	-55235.049	0.570	XI	弥生	甕	胴部	1	
614	-3181.394	-55237.215	0.855	XI	弥生	甕	胴部	1	274
615	-3181.504	-55238.103	0.820	XI	弥生	甕	口縁	1	290
616	-3182.784	-55240.545	0.385	XI	弥生	甕	胴部	1	256
617	-3183.112	-55240.189	0.406	XI	弥生	壺	胴部	1	254
618	-3184.852	-55240.069	0.354	XI	弥生	甕	胴部	1	256
619	-3186.554	-55243.152	0.329	XI	弥生	甕	胴部	3	
620	-3187.158	-55243.566	0.263	XI	縄文	深鉢	口縁	1	238
621	-3187.161	-55244.487	0.237	XI	縄文	深鉢	口縁	1	240
622	-3186.677	-55244.662	0.249	XI	弥生	甕	胴部	1	
623	-3186.542	-55244.900	0.203	XI	弥生	甕	胴部	1	259
624	-3187.261	-55244.664	0.202	XI	縄文	深鉢	胴部	2	247
625	-3186.644	-55242.570	0.232	XI	縄文	深鉢	胴部	1	238・251
626	-3186.444	-55241.905	0.209	XI	弥生	甕	胴部	1	
627	-3185.901	-55241.637	0.146	XI	縄文	深鉢	胴部	2	238
628	-3184.413	-55241.015	0.257	XI	縄文	深鉢	底部・胴部	6	251
629	-3185.766	-55247.574	0.074	XI	縄文	鉢	胴部	4	
630	-3186.151	-55245.816	0.228	XI	縄文	鉢	胴部	1	246
631	-3196.213	-55255.710	0.972	XI	弥生	甕	胴部	1	265
632	-3196.129	-55256.264	0.865	XI	弥生	甕	口縁・胴部	17	265・263・264
633	-3197.768	-55258.165	1.027						
634	-3196.849	-55268.933	0.502	XI	弥生	壺	口縁	1	255
635	-3181.554	-55237.897	0.834	X	弥生	甕	胴部	1	
636	-3181.978	-55238.041	0.877	X	弥生	甕	胴部	1	
637	-3185.571	-55241.499	0.107	XI	縄文	深鉢	口縁	1	238
638	-3182.988	-55237.044	0.717	XI	弥生	甕	口縁・胴部	21	268
639	-3182.393	-55237.730	0.850	XI	弥生	甕	胴部	3	289・274
640	-3182.447	-55237.456	0.809	XI	弥生	甕	胴部	2	
641	-3182.300	-55237.496	0.827	XI	弥生	甕	口縁・胴部	6	289
642	-3182.213	-55237.627	0.852	XI	弥生	甕	胴部	1	290
643	-3181.949	-55237.846	0.856	XI	弥生	甕	胴部	1	289
644	-3182.562	-55238.226	0.851	XI	弥生	甕	胴部	3	289
645	-3181.832	-55237.264	0.911	XI	弥生	甕	胴部	2	
646	-3182.333	-55237.342	0.884	XI	弥生	甕	胴部	2	
647	-3182.893	-55236.883	0.837	XI	弥生	甕	胴部	2	
648	-3184.990	-55236.006	0.618	XI	弥生	甕	胴部	1	
649	-3188.106	-55242.932	0.220	XI	縄文	深鉢	口縁	1	238

Tab. 32 遺物データ表12

取り上げ番号	X軸	Y軸	レベル (m)	層位	種別	器種	部位	点数	実測No
650	-3188.647	-55242.944	0.100	XI	縄文	深鉢	口縁	1	237
651	-3189.206	-55244.205	0.193	XI	縄文	深鉢	胴部	2	248
652	-3189.501	-55244.435	0.141	XI	縄文	深鉢	胴部	1	250
653	-3186.236	-55246.130	0.049	XI			胴部	1	
654	-3186.066	-55246.053	0.192	XI			胴部	1	
655	-3200.143	-55267.940	0.348	X	縄文	深鉢	口縁	1	236
656	-3199.453	-55269.240	0.284	X	縄文	深鉢	胴部	4	236
657	-3183.860	-55260.681	0.633	XI	弥生	甕	胴部	4	
658	-3179.423	-55232.233	0.705	XI	弥生	甕	口縁・胴部	3	283・284
659	-3179.245	-55232.086	0.727	XI	弥生	甕	口縁・胴部	4	283
660	-3179.290	-55232.193	0.761	XI	弥生	甕	胴部	1	
661	-3179.148	-55232.233	0.868	XI	弥生	甕	胴部	1	
662	-3182.436	-55237.653	0.828	XI	弥生	甕	胴部	3	
663	-3176.793	-55232.339	0.397	XI	弥生	甕	胴部	1	
664	-3177.435	-55232.200	0.426	XI	弥生	甕	胴部	4	
665	-3177.438	-55231.836	0.359	XI	弥生	甕	胴部	2	
666	-3179.488	-55231.546	0.431	XI	弥生	甕	胴部	25	271

第V章 まとめ

1. 調査成果から

具同中山遺跡群は、弥生時代から中世にかけて中村市では最も広範囲に認められる遺跡群である。中筋川改修による昭和61年度からの調査では、大規模な古墳時代の祭祀跡や鎌倉時代を中心とした集落跡を検出している。今回の調査区は、これら祭祀跡や集落跡のひろがりを確認することや、中筋川対岸に位置する船戸遺跡との関連を掴むことを重要なポイントとして押さえていた。調査の結果、第Ⅰ区では弥生時代から鎌倉時代までの自然流路や、古墳時代の小規模ではあるが祭祀跡を検出することができた。各時代の流路跡は、東から西方向の流路で中筋川に流れ込んでいる。所謂中筋川の支流として弥生時代から連綿として鎌倉時代まで存続している。本流と支流の間の自然堤防上には、生活の痕跡が確認できるのである。特に古墳時代の祭祀跡は、流路跡にも祭祀行為終了後支流にも投げ込まれており、本流に近い場所ほど遺物が多いことがわかった。第Ⅱ区では、自然流路は確認できず南側に流路方向を取るものと考えられる。

第Ⅱ区では縄文時代晩期から弥生時代前期の遺物集中地点を検出した。さらに遺物では、弥生時代中期後半から後期にかけての土器や石包丁の石器、古代の土器等が出土しており、周辺での生活環境を窺わせることができる。縄文時代の遺物では、晩期終末の入田B式土器が比較的まとまって出土しており、対岸の船戸遺跡では後期の遺物が出土していることからその繋がりを考えることができる。さらに弥生時代前期の土器群は、幡多地方では類例も少なく高知中央部の田村遺跡などと共に県内の前期社会を解明していく上で貴重な資料である。第Ⅱ区の縄文時代から弥生時代の調査成果の詳細は、第Ⅳ章の小結に譲ることとする。

2. 中筋川流域の地形観察と遺跡

具同中山遺跡群は、その一部しか調査が進んでおらず遺跡の性格も各時代ごと多彩で不明な点が多いが、今回の調査で生活の痕跡が縄文時代晩期まで遡ることが確認できた。さらに船戸遺跡との関連では、古墳時代から鎌倉時代までの流路は第Ⅰ区の流路とほぼ同時期であり、今後環境復元をしていく上でも貴重な資料を提供することができた。今回の調査で、遺構としては流路が3条同じ方向で検出できており、周辺の現地形も考慮し流路復元を行い調査区周辺の古墳から中世にかけての古地形をみていきたい。

今回調査を実施した地点は、Fig.57のA地点で、中筋川の左岸に位置する場所である。標高は、5.2mで、対岸の船戸遺跡が6.4mと比較するとやや左岸側が低い。周辺で具同中山遺跡群として発掘調査が実施されている場所を見れば、B地点とした場所周辺は、昭和61年から平成3年にかけて調査されている。標高7.7mと具同中山遺跡群の中では最も標高が高い場所である。この調査区は、古墳時代の5世紀代を中心とした祭祀遺構と古代末から中世の鎌倉期を中心とした集落が検出されている。この場所が具同中山遺跡群の中では、安定した自然堤防状の地形を呈していたと考えられる。中筋川の左岸際は、標高が5~6mで北西側に行くに従い標高が下がる。H地点は、標高が4.2mで、試

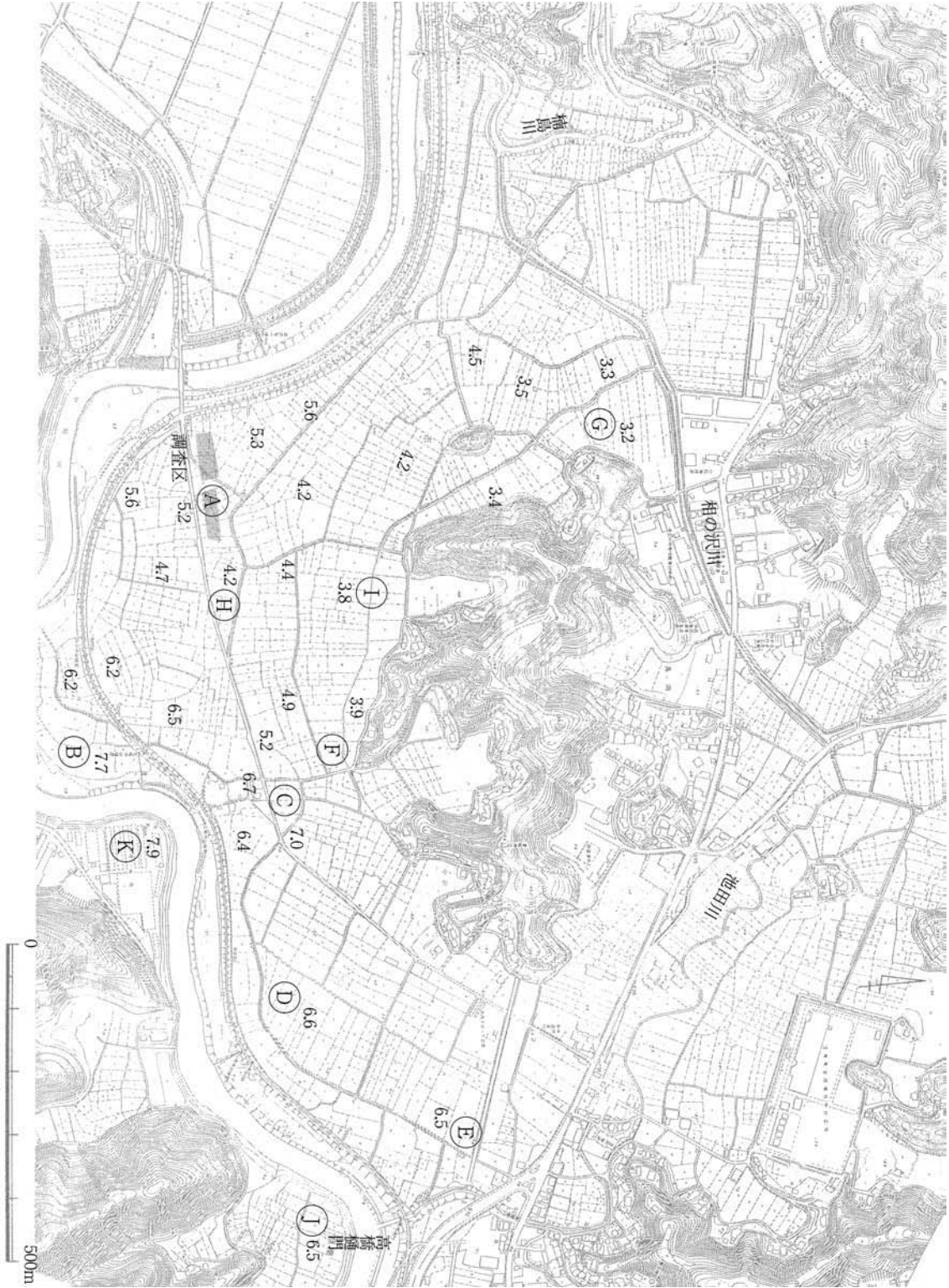


Fig.57 具同中山遺跡群周辺地形図

掘調査の結果では遺構・遺物とも検出は皆無である。さらに北側のI地点では標高を下げ3.8mとなっている。I地点からやや東側のF地点から北西部のG地点に向けて現在小流路が流れ、相の沢川に合流する。この相の沢川は、近沢城跡という中世山城が構築されている独立丘陵の北側を流れ池田川と合流しE地点の東側で中筋川に合流している。C地点は、B地点から続く自然堤防状の地形を呈していたと考えられるが、この地点付近で標高を下げる。この地点周辺は試掘調査の結果古墳時代の遺物が検出され、平成7年度に本調査が実施されている。現在報告書作成途中であるが概要報告では、古墳時代の自然流路の始まりの遺構が検出されている。C地点から東側のD地点に向かうと標高6.6mと高い地点に移る。この調査地点の試掘調査結果では、古墳時代から中世の遺物が出土しており本調査の必要性があるところである。さらにD地点から北東部のE地点も6.6mと標高の高い部分が続く。E地点対岸のJ地点は具重遺跡が位置するところで標高6.5mでE地点の標高と変わらない。具重遺跡は、発掘調査は実施されていないが一部工事中に表採されている遺物を見ると古墳時代から中世にかけての遺跡である。B地点の具同中山遺跡と同じ性格を持つ遺跡と考えられる。B地点の対岸に位置するK地点は、アゾノ遺跡で既に発掘調査が実施され報告書も刊行されている。アゾノ遺跡も標高7.9mと高くB地点とかわらない標高で、古墳時代から中世の集落跡が検出されている。

具同中山遺跡群及び周辺の遺跡は、中筋川流域の遺跡群として広く埋蔵文化財包蔵地として囲んでいる。その中でも現在までの発掘調査で、各地点の自然地形で各地点各時代の遺構・遺物に関する情報を得ることができる。まず中筋川流域の両岸際に位置するB・K・D・E・J地点はこの地域の平坦地では最も標高の高いところである。この場所は、B・K地点の発掘調査、D地点の試掘調査、J地点の表採遺物からしてこの地域の最も広く安定した自然堤防状の地形を呈し、古墳時代の祭祀遺構や古代から中世の集落跡が連綿として存在していることがわかる。さらにE地点も同様なことが言えるであろう。A・C地点付近は、やや標高が低く中世の集落を営むにはやや地形的に低く、古墳時代の祭祀が一時的に行われる程度の遺跡であることが予想される。F・I・G地点付近になると標高も低く現在も小河川が流れていることから当時は湿地であった可能性が強い。

今回の検出した自然流路も、南東部から北西部に流路方向を取っている。北西部からそのまま中筋川に流れ込んでいるのか、G地点に向けて流れ込んでいるのか不明であるが、いずれにしても今回の調査地点付近は、小規模な自然流路が幾筋も流れ北側地域は荒廃湿地となり、古墳時代には一時的な自然堤防状の地形で祭祀行為が行われていたことが想定できる。

3. 第I区の自然流路と祭祀

第I区では、主な遺構として自然流路があげられる。SR4の弥生時代からSR1の鎌倉時代まで、各時代を通して連綿としてほぼ同位置で同方向に流路が流れている。中でもSR3とした古墳時代を中心に流れていた流路からは、多量の遺物が出土している。古墳時代の流路跡から多量に遺物が出土している点は、当時頻繁に周辺で行われていた祭祀との関連を考えなければならない。自然流路という遺構の性格上、遺物の出土状態を詳細に記録に留める必要があるかどうか判断に苦しんだが、SR3出土でまとめて取上げるより、地点・レベルだけでも押さえて取上げることにし時間的労力を削減するために光波測量システムを利用した。その成果として、破片の接合関係とその距離・位置



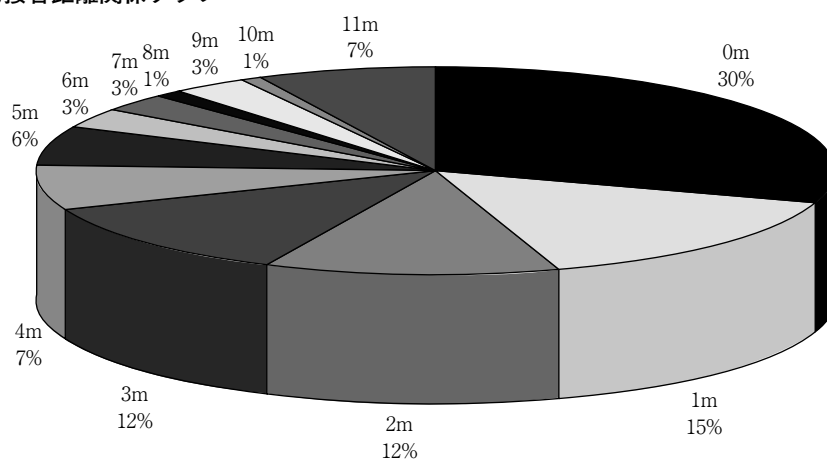
Fig. 58 SR3 遺物出土傾向

Tab. 33 出土遺物接合距離関係表及びグラフ

SR3 出土遺物接合距離関係表

最大距離（以内）	0m	1m	2m	3m	4m	5m	6m	7m	8m	9m	10m	11m
実測遺物点数	28	15	12	12	7	6	3	3	1	3	1	7

SR3 出土遺物接合距離関係グラフ



関係を掴むことができた。第58図のSR3遺物出土傾向をみると、流路の西部からの出土が多く特にSF1とした祭祀遺構の近くからの出土が多い。このことから、SF1及び鉄剣出土の付近で祭祀行為が行われ、その後SR3に投棄された結果と考えるのが妥当と考えられる。Tab. 33は、出土遺物の接合距離関係のグラフであるが、実測した遺物の中で約98点の接合距離関係を示した。約70%の遺物が3m以内で接合できていることがわかる。これらのことから投棄された遺物は、破碎された物が多いがさほど流水されることなく投棄された地点に残されていることがわかる。今回の調査で、自然流路が中心の遺構である場合の調査方法、遺物の取上げ方法等問題も多く内在してると考えるが今後の課題としておきたい。

付 編 1

具同中山遺跡群における自然科学分析

バリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

具同中山遺跡群（高知県中村市具同に所在）は、中筋川と四万十川の合流部付近の氾濫原上に位置する。中筋川下流域には、縄文時代中期以降の遺跡が分布し、とくに流路沿いには古墳時代～中世の遺跡が確認されている。本調査区でも、古墳時代の祭祀跡や弥生時代～鎌倉時代の自然流路などが確認されており、さらに縄文時代晩期～弥生時代前期の遺物が集中して検出される地点も見られた。

今回は、縄文時代晩期以降における本遺跡周辺の堆積環境を検討するために珪藻分析を実施し、周辺の古植生を検討するために花粉分析・植物珪酸体分析を実施した。

1. 調査区内部の層序と試料

今回の発掘調査では第Ⅰ調査区と第Ⅱ調査区が設定され、第Ⅱ調査区が分析調査の対象とされた。第Ⅱ調査区の層序は、大きく12層に分層される（上位からⅠ層～Ⅻ層）。各層の層相は、最下部のⅫ層が黒褐色植物遺体混じり粘土、Ⅺ層が灰色シルト～粘土（下部で植物遺体が混じる）、Ⅹ層～Ⅵ層が灰色～灰オリーブ色を呈するシルト～粘土、Ⅴ層が青灰色砂質シルト、Ⅳ層が灰褐色シルト、Ⅲ層～Ⅰ層が褐灰色シルト～粘土である。

発掘調査の結果、Ⅸ層よりⅪ層にかけては、縄文晩期から弥生前期の遺物が、Ⅶ層よりⅧ層にかけては、弥生中期から後期にかけての遺物がそれぞれ出土している。Ⅴ層より上位は、無遺物層である。

第Ⅱ調査区D区北壁においてD1地点・D2地点が設定され、両地点ともⅠ層～Ⅻ層を対象にして約10cm連続で試料が採取された。採取された試料の点数は、両地点とも47試料（下位より試料番号1～47）、合計94試料である。珪藻分析・花粉分析・植物珪酸体分析は、D1地点で採取された試料の中から11試料（試料番号1・4・10・13・15・19・22・25・27・29・37）を選択した（図1）。なお、分析の際には、各試料を分割して行った。

2. 分析方法

(1) 珪藻分析

試料を湿重で約5g秤量し、過酸化水素水、塩酸の順に化学処理し、試料の泥化と有機物の分解・漂白を行う。自然沈降法で粘土分、傾斜法で砂分を除去した後、適当量を計り取り、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プレウラックスで封入する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージで任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存す

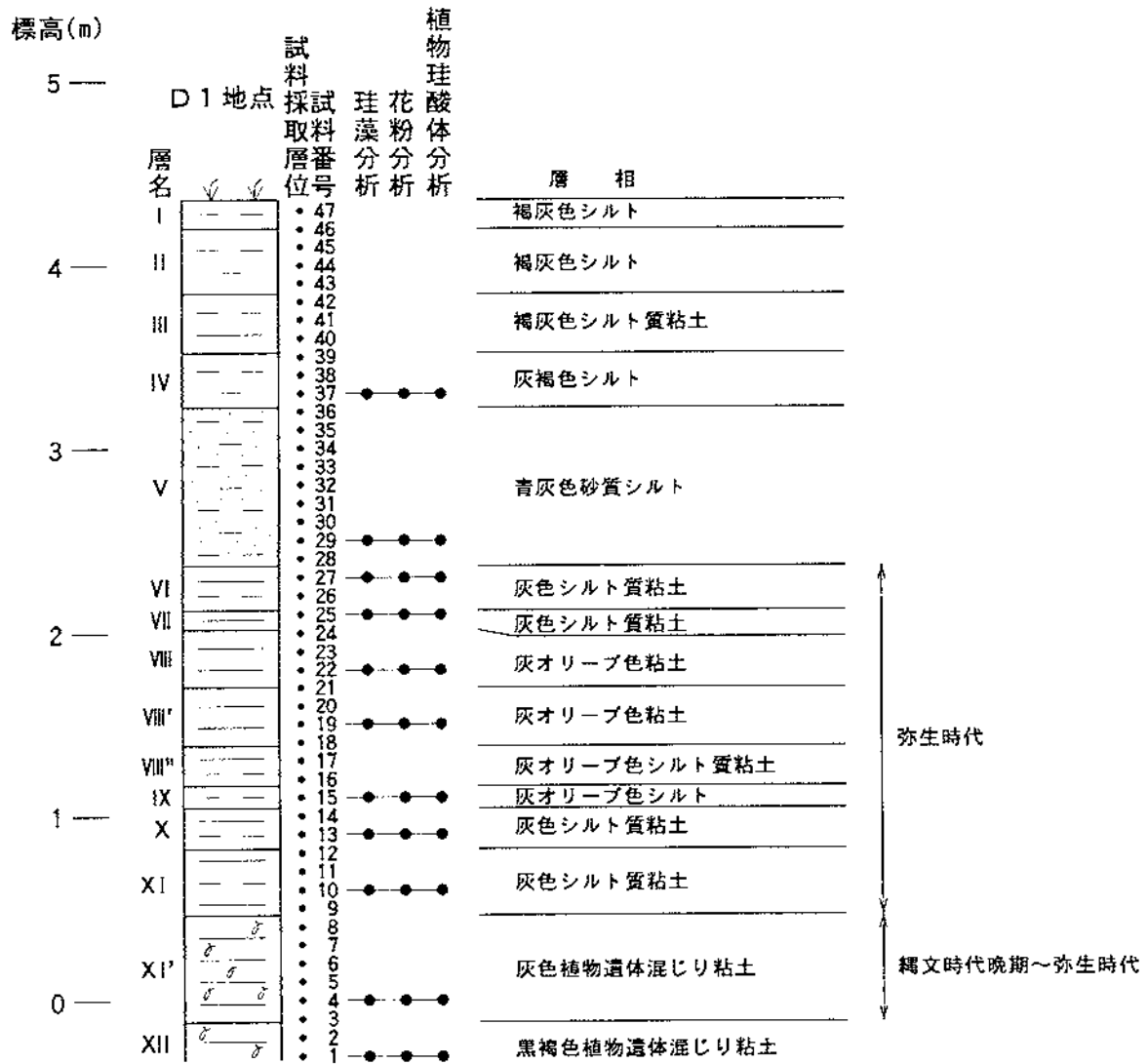


図1 第II調査区D1地点の模式柱状図および分析位置

るものを対象に200個体以上同定・計数する（珪藻化石の少ない試料はこの限りではない）。種の同定は、K. Krammer and Lange-Bertalot（1986；1988；1991a, b）、K. Krammer（1992）などを用いる。

同定結果は、産出種をアルファベット順に並べた一覧表で示す。堆積環境の解析に当たり、塩分濃度に対する適応性から産出種を海水生種、海水～汽水生種、淡水生種に分類し、淡水生種については更に塩分・水素イオン濃度（pH）・流水に対する適応性に基づいて生態区分する。また、産出した珪藻化石が現地性の化石か、他の場所から運搬・堆積した化石か判断する目安として完形殻の出現率を求め考察の際に考慮する。主要な分類群について、主要珪藻化石群集の変遷図を作成する。図中の海水～淡水生種の比率と各種産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数とした相対頻度で算出する。なお、●は1%未満の産出、○は100個体未満の試料における産出を示す。堆積環境の解析に当たっては、小杉（1988）、安藤（1990）、伊藤・堀内（1991）の環境指標種などを参考とする。

(2) 花粉分析

花粉・胞子化石は、湿重約10gの試料について水酸化カリウム処理、重液分離（臭化亜鉛、比重2.2）、フッ化水素酸処理、アセトリシス処理（無水酢酸：濃硫酸＝9：1）の順に物理・科学的な処理を施して、試料から分離・濃集する。処理後の残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製した後、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査しながら、出現する全ての種類について同定・計数を行う。

結果は同定・計数結果の一覧表および主要花粉化石群集の変遷図として表示する。図中の出現率は、木本花粉が木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子が総花粉・胞子数より不明花粉を除いた数をそれぞれ基数とした百分率で算出した。なお、図表中で複数の種類をハイフオン（-）で結んだものは、種類間の区別が困難なものである。

(3) 植物珪酸体分析

植物珪酸体は、湿重5g前後の試料について過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理（70W, 250KHz, 1分間）、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、分離・濃集する。これを検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥する。乾燥後、プリユラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤・佐瀬（1986）の分類に基づいて同定・計数する。結果は、検出された種類とその個数の一覧表で示す。

3. 微化石の参状

(1) 珪藻化石

結果は、表1・図2に示す。珪藻化石は、試料番号1・10の2試料だけしか産出しない。これ以外の9試料では、41個体以下と少ない。産出分類群数は、合計で21属80分類群であり、完形殻の出現率は

40～50%である。

淡水生種の生態性は試料番号1・10とも近似しており、貧塩—不定性種、真・好アルカリ性種、真・好流水性種がそれぞれ優先する。産出種も近似しており、好流水性の*Comphonema clevei*が多産し、中～下流性河川指標種の*Cymbella turgidula*、*C. sinuata*、好流水性の*Cocconeis placentula* var. *euglypta*、流水不定性の*Cocconeis placentula*、*Rhopalodia gibberula*、沼沢湿地付着生種であり陸生珪藻B群でもある*Eunotia praerupta* var. *bidens*、陸性珪藻のA群の*Navicula mutica*などが産出する。

(2) 花粉化石

結果は、表2・図3に示す。全体的に検出される花粉化石は保存状態が悪く、花粉外膜が溶けて薄くなっていたり、壊れていたたりするものが含まれる。とくに試料番号15・19・22・25・27・29・37の7試料では、花粉化石の検出個体数が少ない。

試料番号1・4・10・13の4試料の花粉化石群集は、コナラ属アカガシ亜属が多産し、次いでマキ属・ツガ属・シノキ属が検出される。この他にもモミ属・マツ属・コウヤマキ属・クマシデ属—アサダ属・アカメガシワ属・ツタ属・グミ属・ツツジ属・カキ属・ハイノキ属などが検出される。

草本花粉では、イネ科・カヤツリグサ科・サナエタデ節—ウナギツカミ節などが検出される。この内、サナエタデ節—ウナギツカミ節が試料番号1・4で多産し、イネ科が試料番号10で多産する。この他、ガマ属・オモダカ属・ミズアオイ属・ミズワラビ属が検出される。

(3) 植物珪酸体

結果は表3に示す。各試料とも植物珪酸体は保存状態が悪く、しかも検出個数が少ない。検出される種類は、タケ亜科やウシクサ族、イチゴツナギ亜科などである。

4. 堆積環境

全般的に珪藻化石の産出数が少なく、環境解析に十分な数だけ産出したのは下位のXII層、XI層に限られる。また、化石の保存状態はやや悪い～普通であり、他の場所から二次的に混入した異地性種も多く含まれると考えられる。両層では好流水性種が優占し、中でも中～下流性河川指標種が多産した。また、これらの層に挟まれるXI'層も産出化石数が少ないものの、XII層・XI層とはほぼ同様な種類が検出された。これらのことから、XII層～XI層は、流水の影響下で堆積したことが推定される。すなわち、縄文時代晩期～弥生時代の頃は、調査地点の堆積域は流水の影響を受けるような場所であったとみられる。現在、周辺は中筋川や四万十川の氾濫の影響を受けるような場所であるが、当時も河川の氾濫の影響を受けていたことが推定される。

X層以浅の堆積環境については、珪藻化石の産出が非常に少ないことから検討が不可能である。砂などの粗粒堆積物が堆積するような流速の速い場所では、珪藻殻は粘土粒子とともに流失するとされている(小杉, 1989)。しかし、本地点の場合は層相が粘土やシルトを主体としていることから、流速よりも堆積速度が極めて速かったために相対的に含まれる量が少なかったのかもしれない。

5. 縄文時代晩期以降の遺跡周辺植生

調査地点が中筋川下流域に位置し、珪藻分析の結果でも河川の影響を受けていたと考えられるこ

表1 硅藻分析結果(1)

種 類	生 態 性			環 境 指 標 值	37	29	27	25	22	19	15	13	10	4	1
	塩分	pH	流水												
Cyclotella striata (Kuetz.)Grunow	Euh-Meh												1		
Diploneis smithii (Breb.)Cleve	Euh-Meh												1		
Fragilaria fasciculata (Agardh)Lange-B.	Meh												1		
Navicula peregrina (Ehr.)Kuetzing	Meh														2
Synedra fasciculata (Ag.)Kuetzing	Meh														1
Thalassiosira lacustris (Grun.)Hasle	Meh												1		
Achnanthes convergens H.Kobayasi	Ogh-ind	ind	r-ph	T									1		
Achnanthes crenulata Grunow	Ogh-hil	al-bi	l-ph	T				1				2	1	1	3
Achnanthes inflata (Kuetz.)Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	T								1		1	1
Achnanthes lanceolata (Breb.)Grunow	Ogh-ind	ind	r-ph	K,T									5		
Achnanthes subhudsonis Hustedt	Ogh-ind	ind	r-ph	T									2		
Amphora normanii Rabenhorst	Ogh-ind	ind	ind	RB									1		
Amphora ovalis var. affinis (Kuetz.)V.Heurck	Ogh-ind	al-il	ind	U									2		1
Amphora pediculus (Kuetz.)Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	T									2		
Aulacoseira granulata (Ehr.)Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-ph	M,U									13		
Aulacoseira pensacolata (A.S.)Simonsen	Ogh-hob	ac-il	r-ph											2	
Cocconeis disculus Schwann	Ogh-ind	al-il	l-bi										1		
Cocconeis placentula (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	U									6		3
Cocconeis placentula var. euglypta (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	T									13	1	7
Cocconeis placentula var. lineata (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	T									1		1
Cybella aspera (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	O,T									1		
Cybella cistula (Ehr.)Kirchner	Ogh-ind	al-il	l-ph	O,T									1		
Cybella cuspidata Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind											4	
Cybella japonica Reichelt	Ogh-unk	unk	unk	T									1		
Cybella lacustris (Ag.)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	T									2		
Cybella minuta Hilse ex Rabh.	Ogh-ind	ind	r-ph	K,T									1		
Cybella naviculiformis Auerswald	Ogh-ind	ind	ind	O									1		1
Cybella silesiaca Bleisch	Ogh-ind	ind	ind	T									1		2
Cybella sinuata Gregory	Ogh-ind	ind	r-ph	K,T				1	1				4		2
Cybella tumida (Breb. ex Kuetz.)V.Heurck	Ogh-ind	al-il	ind	T									4	2	2
Cybella turgidula Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,T									21	2	10
Cybella turgidula var. nipponica Skvortzow	Ogh-ind	al-il	r-ph	T									9		
Diploneis parva Cleve	Ogh-ind	ind	ind												1
Diploneis spp.	Ogh-unk	unk	unk												1
Epithemia adnata (Kuetz.)Brebisson	Ogh-ind	al-bi	ind										2	1	1
Epithemia turgida (Ehr.)Kuetzing	Ogh-ind	al-il	l-ph	T									2		
Epithemia spp.	Ogh-unk	unk	unk											1	
Eunotia biserialoides H.Kobayasi	Ogh-ind	ind	ind	RA									1		
Eunotia gracilis Meister	Ogh-hob	ind	l-bi										1		1
Eunotia incisa W.Smith ex Gregory	Ogh-hob	ac-il	ind	O									1		
Eunotia pectinalis var. minor (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	O					1				2		1
Eunotia praerupta Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	RB,O,T									2		1
Eunotia praerupta var. bidens Grunow	Ogh-hob	ac-il	l-ph	RB,O									4	1	3
Eunotia spp.	Ogh-unk	unk	unk												1
Fragilaria vaucheriae (Kuetz.)Petersen	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,T									1		
Gomphonema angustum Agardh	Ogh-ind	al-il	ind										1		
Gomphonema clevei Fricke	Ogh-ind	al-bi	r-ph	T									1	48	20
Gomphonema clevei var. inaequilongum H.Kobayasi	Ogh-ind	ind	r-ph										4		1
Gomphonema gracile Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	O,U									2		
Gomphonema grovei var. lingulatum (Hust.)Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	l-ph												1
Gomphonema parvulum Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U									1		1
Gomphonema pseudosphaerophorum H.Kobayasi	Ogh-ind	al-il	l-ph												1
Gomphonema pusillum (Grun.)Reichardt & Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind										3	1	
Gomphonema sumatrense Fricke	Ogh-ind	ind	r-bi	J									1	2	2
Gomphonema truncatum Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	T											2
Gomphonema spp.	Ogh-unk	unk	unk											1	
Hantzschia amphioxys (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,U										1	1
Navicula americana Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph										1		
Navicula cohnii (Hilse)Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-bi	ind	RI											1
Navicula elginensis var. cuneata H.Kobayasi	Ogh-ind	al-il	ind												1
Navicula mutica Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	RA,S					1				12	1	3
Navicula plausibilis Hustedt	Ogh-ind	ind	ind												1
Navicula saxophila Bock	Ogh-ind	ind	ind	RB									1		
Nitzschia brevissima Grunow	Ogh-hil	al-il	ind	RB,U											3
Nitzschia sinuata var. delognei (Grun.)Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	l-ph	U									1		

表1 珪藻分析結果(2)

種 類	生態性			環境指標種	37	29	27	25	22	19	15	13	10	4	1
	塩分	pH	淡水												
<i>Orthoseira roeseana</i> (Rabh.) O'Meara	Ogh-ind	ind	ind	RA	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia brevicostata</i> Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind		-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-
<i>Pinnularia gibba</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ac-il	ind	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	5
<i>Pinnularia gibba</i> var. <i>linearis</i> Hustedt	Ogh-hob	ac-il	ind		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Pinnularia imperatrix</i> Mills	Ogh-hob	ac-il	l-ph		-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Pinnularia rupestris</i> Mantsch	Ogh-ind	ind	ind		-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	3
<i>Pinnularia stomatophora</i> (Grun.) Cleve	Ogh-ind	ac-il	l-ph		-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-
<i>Pinnularia subcapitata</i> Gregory	Ogh-ind	ac-il	ind	RB,S	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
<i>Pinnularia viridis</i> (Nitz.) Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	0	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	1
<i>Pinnularia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	-	-	-	-	-	2	7	3
<i>Rhoicosphenia abbreviata</i> (Ag.) Lange Bertalot	Ogh-hil	al-il	r-ph	K,T	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	4
<i>Rhopalodia gibberula</i> (Ehr.) O.Müller	Ogh-hil	al-il	ind		-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	4
<i>Stauroneis acuta</i> F. Smith	Ogh-ind	al-il	l-ph		-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Stauroneis obtusa</i> Lagerst	Ogh-ind	ind	ind	RB	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Stauroneis phoenicenteron</i> (Nitz.) Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
<i>Stauroneis phoenicenteron</i> fo. <i>gracilis</i> (Ehr.) Hustedt	Ogh-ind	ind	l-ph	0	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Stauroneis phoenicenteron</i> var. <i>signata</i> Meister	Ogh-ind	ind	ind		-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Stauroneis</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	1
<i>Synedra uina</i> (Kuetz.) Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	-	-	-	-	-	1	3	1
海水生種合計					0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
海水・汽水生種合計					0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0
汽水生種合計					0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	3
淡水生種合計					2	0	1	2	3	0	2	4	203	41	104
珪藻化石総数					2	0	1	2	3	0	2	4	207	41	107

凡例

H.R.:塩分濃度に対する適応性	pH:水素イオン濃度に対する適応性	C.R.:流水に対する適応性
Euh-Meh:海水生種-汽水生種	al-bi:真好塩性種	l-bi:真止水性種
Meh:汽水生種	al-il:好塩性種	l-ph:好止水性種
Ogh-hil:貧塩好塩性種	ind: pH不定性種	ind:流水不定性種
Ogh-ind:貧塩不定性種	ac-il:好酸性種	r-ph:好流水性種
Ogh-hob:貧塩嫌塩性種	unk: pH不明種	r-bi:真流水性種
Ogh-unk:貧塩不明種		unk:流水不明種

環境指標種

J:上流性河川指標種 K:中〜下流性河川指標種 M:潮沼浮遊性種 O:沼沢湿地付着生種 (以上は安藤, 1990)
 S:好汚濁性種 U:広適応性種 T:好流水性種 (以上はAsai, K. & Watanabe, T. 1995)
 R1:陸生珪藻 (RA:A群, RB:B群、伊藤・堀内, 1991)

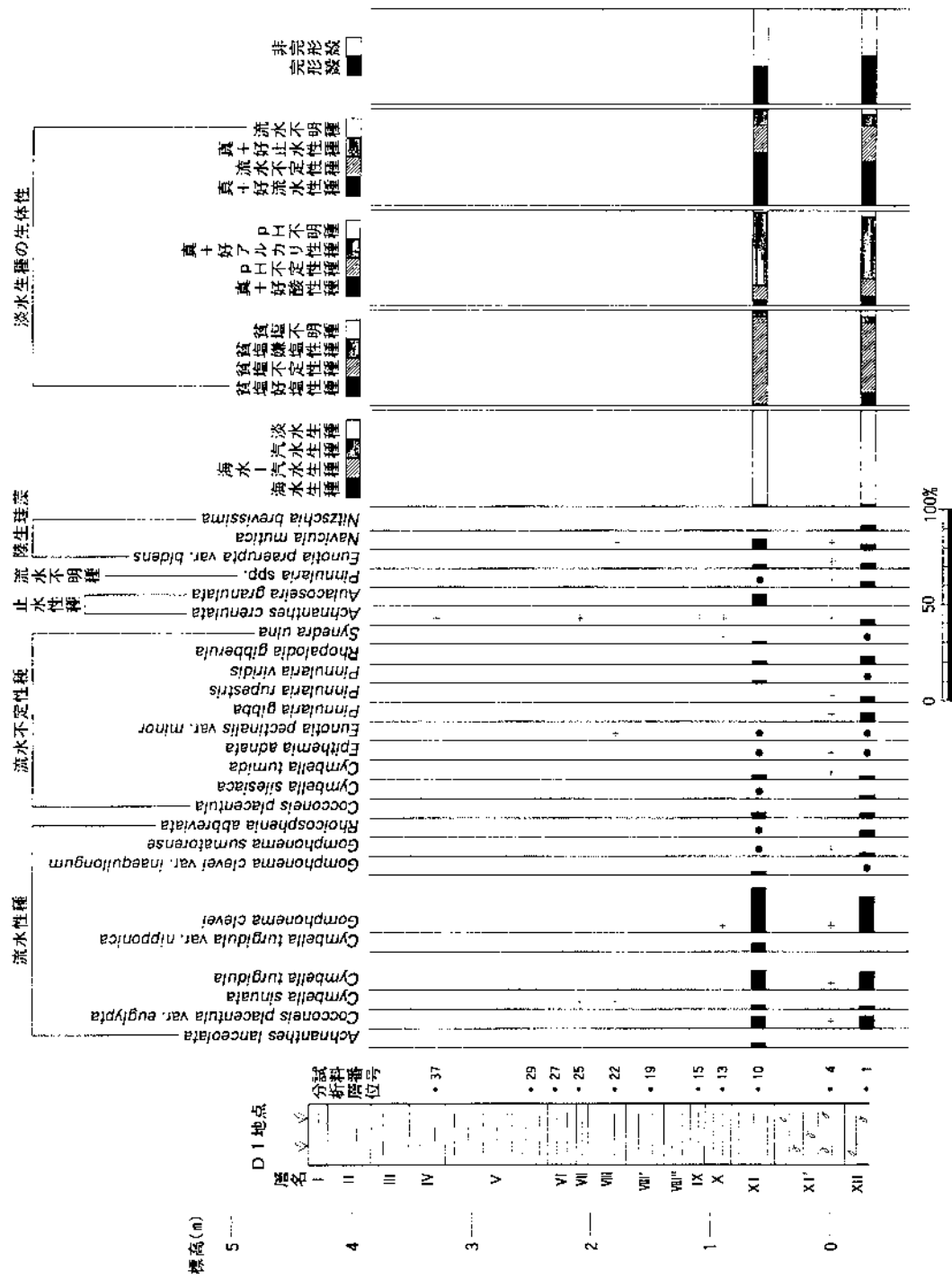


図2 D1地点における主要珪藻化石群集の変遷
 海水-汽水-淡水生種産出率・各種産出率・完形産出率は全体基数、淡水生種の生体性の比率は、淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。なお、●は1%未満、+は100個体未満の試料について検出した種類を示す。

表2 花粉分析結果

種類	試料番号	37	29	27	25	22	19	15	13	10	4	1
木本花粉												
マキ属		-	-	-	-	-	-	-	13	29	9	24
モミ属		-	-	-	-	-	-	-	4	13	31	5
ツガ属		-	-	-	-	-	-	-	34	35	81	27
マツ属		8	-	-	-	-	-	-	12	4	8	24
コウヤマキ属		-	-	-	-	-	-	-	14	6	8	15
スギ属		-	-	-	-	-	-	-	5	5	1	4
イチイ科 イヌガヤ科-ヒノキ科		-	-	-	-	-	-	-	4	1	2	7
ヤマモモ属		-	-	-	-	-	-	-	3	1	-	1
サワグルミ属		-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-
クルミ属		-	-	-	-	-	-	-	3	1	-	1
クマシデ属-アサダ属		1	-	-	-	-	-	-	7	1	2	7
ハンノキ属		1	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-
ブナ属		-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	1
コナラ属コナラ亜属		-	-	-	-	-	-	-	3	1	2	1
コナラ属アカガシ亜属		-	-	-	-	-	-	1	93	111	46	66
クリ属		-	-	-	-	-	-	-	1	1	3	-
シノキ属		-	-	-	-	-	-	-	25	32	31	33
ニレ属-ケヤキ属		-	-	-	-	-	-	-	1	6	1	2
エノキ属-ムクノキ属		-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
シキミ属		-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
アカメガシワ属		-	-	-	-	-	-	-	1	1	1	-
シラキ属		-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
モチノキ属		-	-	-	-	-	-	-	2	1	-	-
ニシキギ属		-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
ツタ属		-	-	-	-	-	-	-	3	1	1	1
ノブドウ属		-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-
ツバキ属		-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-
グミ属		-	-	-	-	-	-	-	1	1	1	-
ウコギ科		-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-
ミズキ属		-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-
ツツジ科		-	-	-	-	-	-	-	2	2	-	1
カキ属		-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	2
ハイノキ属		-	-	-	-	-	-	-	3	1	-	1
イボタノキ属		-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-
草本花粉												
ガマ属		-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
オモダカ属		-	-	-	-	-	-	-	-	3	2	-
イネ科		8	-	-	-	-	-	2	59	157	51	37
カヤツリグサ科		-	-	-	-	-	-	1	28	39	28	52
ミズアオイ属		-	-	-	-	-	-	-	-	3	5	-
タワ科		-	-	-	-	-	-	-	1	5	1	3
ギンギン属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
サナエタデ節-ウナギツカミ節		-	-	-	-	-	-	-	15	14	144	105
タデ属		-	-	-	-	-	-	-	2	1	-	-
ナデシコ科		-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-
キンポウゲ科		-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
バラ科		-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	2
マメ科		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
トウダイグサ科		-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
セリ科		-	-	-	-	-	-	-	2	3	2	4
ヨモギ属		-	-	-	-	-	-	-	2	1	1	3
他のキク亜科		-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1
不明花粉		-	-	-	-	-	-	-	18	31	14	14
シダ類孢子												
ミズワラビ属		3	-	-	-	-	-	-	15	8	5	-
他のシダ類孢子		346	262	52	57	17	11	260	552	226	229	148
合計												
木本花粉		10	0	0	1	0	0	1	242	255	231	223
草本花粉		8	0	0	0	0	0	3	112	231	234	209
不明花粉		0	0	0	0	0	0	0	18	31	14	14
シダ類孢子		349	262	52	57	17	11	260	567	234	234	148
総計(不明を除く)		367	262	52	58	17	11	264	921	720	699	580

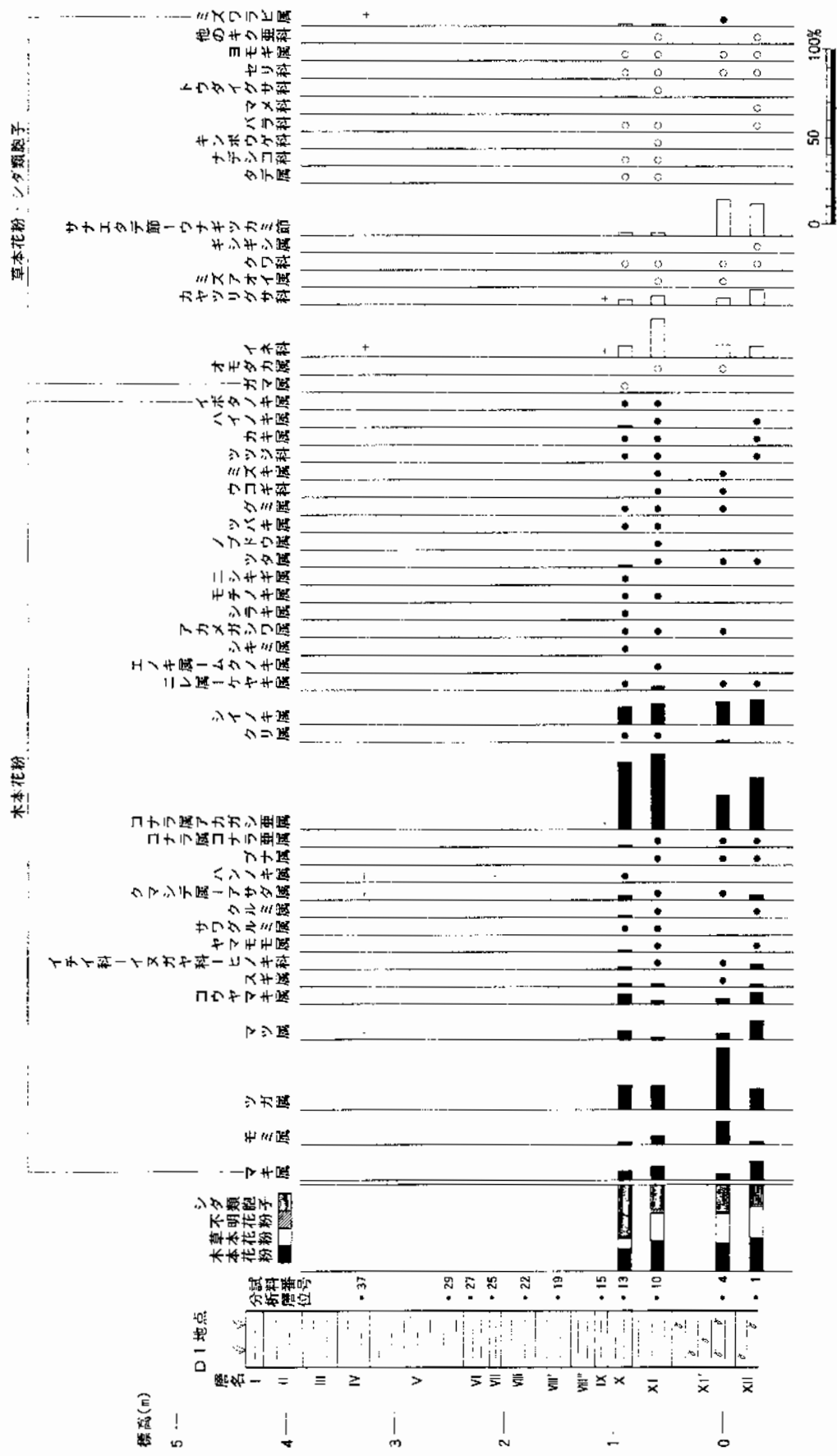


図3 D1地点における主要花粉化石群集の変遷
 出現率は、木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉は総花粉・孢子数より木本花粉を除いた数をそれぞれ基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満、+は木本花粉100個体未満の試料において検出される相類を示す。

表3 植物珪酸体分析結果

種 類	試料番号	37	29	27	25	22	19	15	13	10	4	1
イネ科葉部短細胞珪酸体												
タケ亜科		2	-	-	1		1	-	-	1	1	1
イチゴツナギ亜科		-	-		1	-	-	-	-	-	-	-
不明ヒゲシバ型		-	-	-	-	-	-	-	-	-		2
不明ダンチク型		-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
イネ科葉身機動細胞珪酸体												
タケ亜科		8	6	10	3	2	-	1	1	2	1	1
ウシクサ族		-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
不明		5	-	7	2	-	-	-	-	-	1	-
合 計												
イネ科葉部短細胞珪酸体		2	0	0	2	0	1	0	0	2	1	3
イネ科葉身機動細胞珪酸体		13	6	18	5	2	0	1	1	2	2	1
総 計		15	6	18	7	2	1	1	1	4	3	4

とから、ここで検出された花粉化石・植物珪酸体は、基本的に他の場所から堆積物とともに運搬・堆積したものと考えられる。したがって、花粉化石・植物珪酸体は、比較的広い範囲の植生を反映していると考えられる。

XII層～X層で検出された木本花粉化石群集は、暖温帯常緑広葉樹林（照葉樹林）の主要構成要素であるアカガシ亜属が高率に出現することが特徴である。このほかマキ属、ヤマモモ属、シイノキ属、アカメガシワ属、ハイノキ属などの暖温帯性要素が伴隨する。また、モミ属・ツガ属・コウヤマキ属・スギ属・イチイ科ーイヌガヤ科ーヒノキ科などの温帯性針葉樹の産状が目立つことも特徴の一つである。

このような花粉化石群集の特徴により、縄文時代晩期～弥生時代にかけて、周辺の森林植生は、アカガシ亜属・シイノキ属などからなる暖温帯性の広葉樹林であったと推定される。森林構成要素としてはマキ属・ヤマモモ属・アカメガシワ属などの高木となる種類が認められたであろう。また、モチノキ属・ツバキ属・グミ属・ウコギ科・ツツジ科・イボタノキ属などの低木類、ツタ属・ノブドウ属といったツル性木本類などの種類は、虫媒花で花粉生産量が少なく、照葉樹林の林内部や林縁部などでよくみられる種類であることから、当時も林内や林縁部などに成育していた可能性がある。

また、モミ属・ツガ属などの温帯針葉樹は、現在の高知県下では暖温帯上部においてカシ類とともに混成しており、針広混成林を形成し、また暖温帯～冷温帯の移行帯においても森林構成要素としてみられる（山中，1978）。このことを考慮すると、ここでの温帯性針葉樹もカシ類などの分布域上部あるいはそれより標高の高い場所に分布していたものに由来する可能性が強い。

高知県内では、高知平野中央部の岡豊低湿地において、花粉分析により古植生が推定されている（山中ほか，1992）。それによると、約7,000年前～約2,000年前の時期は、照葉樹林が優勢であったと推定されている。このような植生は、今回の結果と類似しており、距離的にはなれた場所において、同時期に同様な森林植生が成立していたことが示唆される。

一方、調査地点周辺の低地には、ウシクサ族やイチゴツナギ亜科などのイネ科、カヤツリグサ科、サナエタデ節ーウナギツカミ節などの草本類が成育しており、湿った場所にはガマ族・オモダカ属・ミズアオイ属・ミズアオイ属などの水生植物が成育していたと推定される。

6. まとめ

今回の調査では、縄文時代晩期～弥生時代の層準（XII層～X層）において古環境に関する情報が得られた。すなわち、当時の調査地点は河川の氾濫の影響を受ける場所であったことが推定された。また、その堆積域にはオモダカ属、ガマ属、カヤツリグサ科、ミズアオイ属などの水湿地性植物が成育する湿地のような場所が存在していたことが推定された。

第I調査区の流路内からは、弥生時代～古墳時代の土器とともに農耕具（鋤・鍬）や第II調査区で有二孔穴直刀磨製石包丁が検出されているから、当時の中筋川流域低地において稲作が行われていたことが推測される。しかし、今回の調査ではこのことを裏付ける栽培種のイネ属由来の化石の産出は認められなかった。上記したように調査地点が河川の氾濫の影響を受ける場所であったこと

から、稲作地として適当な場所ではなかった可能性もあり、今後、氾濫原の中でも比較的静穏な堆積環境が推定される後背湿地などにおける発掘調査およびそれに伴う自然科学分析調査により検討していくことが必要であろう。なお、本地域では、本遺跡に隣接する船戸遺跡において縄文時代後期～近世の古植生復元を目的とした花粉分析が行われているが、花粉化石がほとんど検出されなかったことから古植生については不明であった。今回の結果はこの船戸遺跡における古植生を検討する上でも有効な情報となるであろう。

〈引用文献〉

安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用．東北地理，42，p. 73-88.

Asai, K. & Watanabe, T. (1995) Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Oranic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. *Diatom*, 10, 35-47.

Hustedt, F. (1937-1938) Systematische und ökologische Untersuchungen uder die Diatomeen-Flora von Java, Bali und Sumatra Nach dem Material der Deutschen limnologischen Sunda-Espedition. Teil I ~ III, Band. 15, p. 131-506, Band. 16, p. 1-155, 274-394.

近藤鍊三・佐瀬隆（1986）植物珪酸体分析，その特性と応用．第四紀研究，25，p. 31-64. 小杉正人（1989）珪藻化石群集の形成過程と古生態解析．日本ペントス研究会誌，35/36，p. 17-28.

Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1986) Bacillariophyceae, Teil 1, Naviculaceae. Band 2/1 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 876p., Gustav Fischer Verlag.

Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1988) Bacillariophyceae, Teil 2, Epithemiaceae, Bacillariaceae, Surirellaceae. Band 2/2 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 536., Gustav Fischer Verlag.

Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1991a) Bacillariophyceae, Teil 3, Centrales, Fragilariaceae, Eunotiaceae. Band 2/3 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 230., Gustav Fischer Verlag.

Krammer, K. and Lange-Bertaloto, H. (1991b) Bacillariophyceae, Teil 4, Achnanthaceae, Kritische Ergaenzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema. Band 2/4 von: Die Suesswasserflora von Mitterleuropa, 248p., Gustav Fischer Verlag.

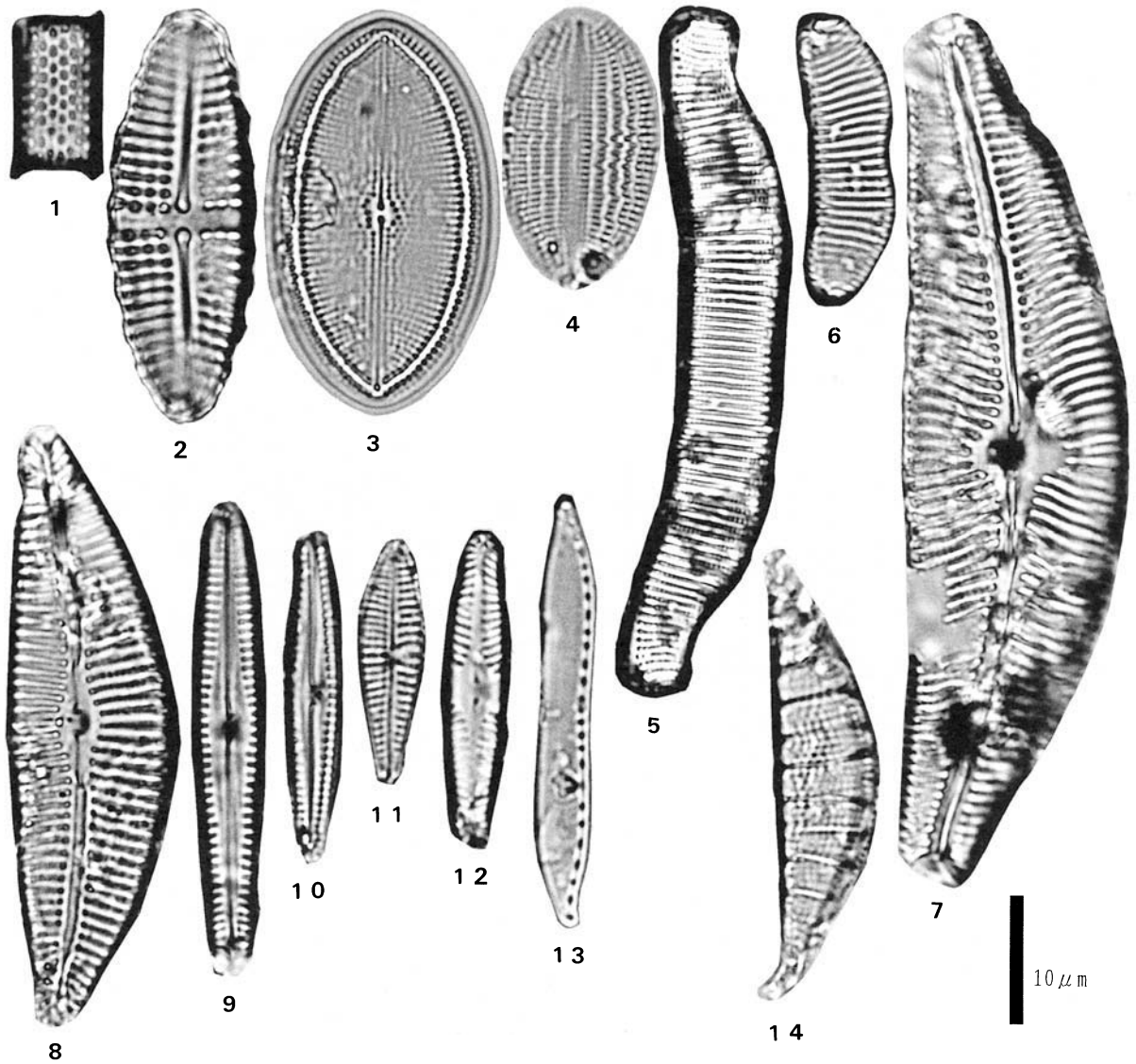
Krammer, K. (1992) PINNULARIA, eine Monographie der europäischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND 26. p. 1-353. BERLIN · STUTTGART.

伊藤良水・堀内誠示（1991）陸生珪藻の現在における分布と古環境解析への応用．珪藻学会誌，5，p. 23-45.

Lowe, R. L. (1974) Environmental Requirements and pollution Tolerance of Fresh-water Diatoms. 334p. In Environmental Monitoring Ser. EPA Report 670/4-74-005. Nat. Environmental Res. Center Office of Res. Develop., U. S. Environ. Protect. Agency, Cincinati.

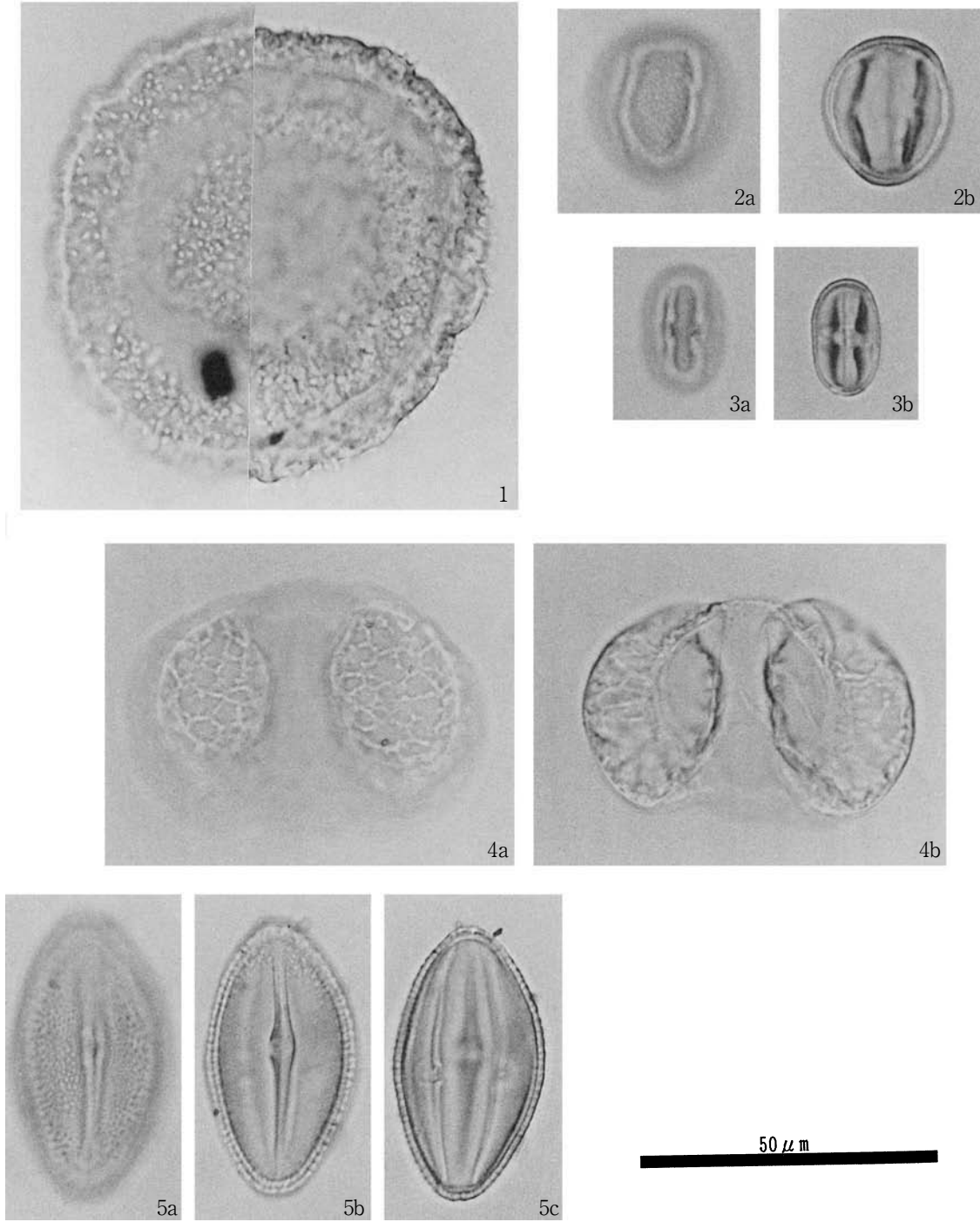
山中三男・伊藤由美子・石川愼吾（1992）高知平野の岡豊低湿地観申請堆積物の花粉分析．

図版1 珪藻化石



1. *Aulacoseira granulata* (Ehr.) Simonsen (D 1 地点; 試料番号10)
2. *Achnanthes crenulata* Grunow (D 1 地点; 試料番号4)
3. *Cocconeis placentula* (Ehr.) Cleve (D 1 地点; 試料番号4)
4. *Cocconeis placentula* var. *euglypta* (Ehr.) Cleve (D 1 地点; 試料番号10)
5. *Eunotia praerupta* var. *bidens* Grunow (D 1 地点; 試料番号4)
6. *Eunotia praerupta* var. *bidens* Grunow (D 1 地点; 試料番号1)
7. *Cymbella tumida* (Breb.) V. Heurck (D 1 地点; 試料番号4)
8. *Cymbella turgidula* Grunow (D 1 地点; 試料番号4)
9. *Gomphonema clevei* Fricke (D 1 地点; 試料番号10)
10. *Gomphonema clevei* Fricke (D 1 地点; 試料番号1)
11. *Gomphonema parvulum* Kuetzing (D 1 地点; 試料番号1)
12. *Pinnularia subcapitata* Gregory (D 1 地点; 試料番号7)
13. *Nitzschia brevissima* Grunow (D 1 地点; 試料番号1)
14. *Rhopalodia gibberula* (Ehr.) O. Muller (D 1 地点; 試料番号4)

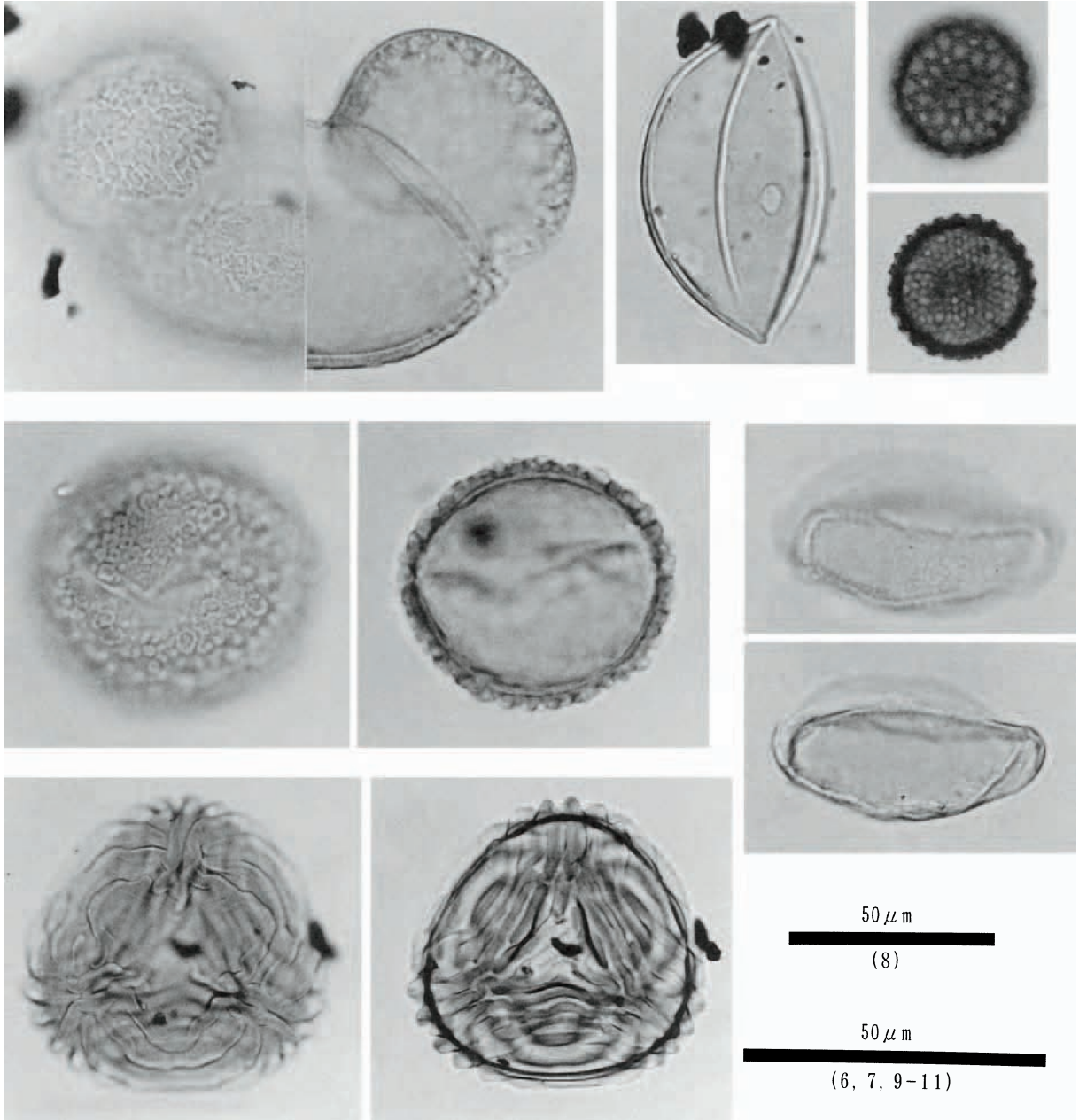
図版2 花粉化石(1)



- 1. ツガ属 (D 1 地点; 試料番号10)
- 3. シイノキ属 (D 1 地点; 試料番号10)
- 5. ツタ属 (D 1 地点; 試料番号10)

- 2. アカガシ亜属 (D 1 地点; 試料番号10)
- 4. マキ属 (D 1 地点; 試料番号10)

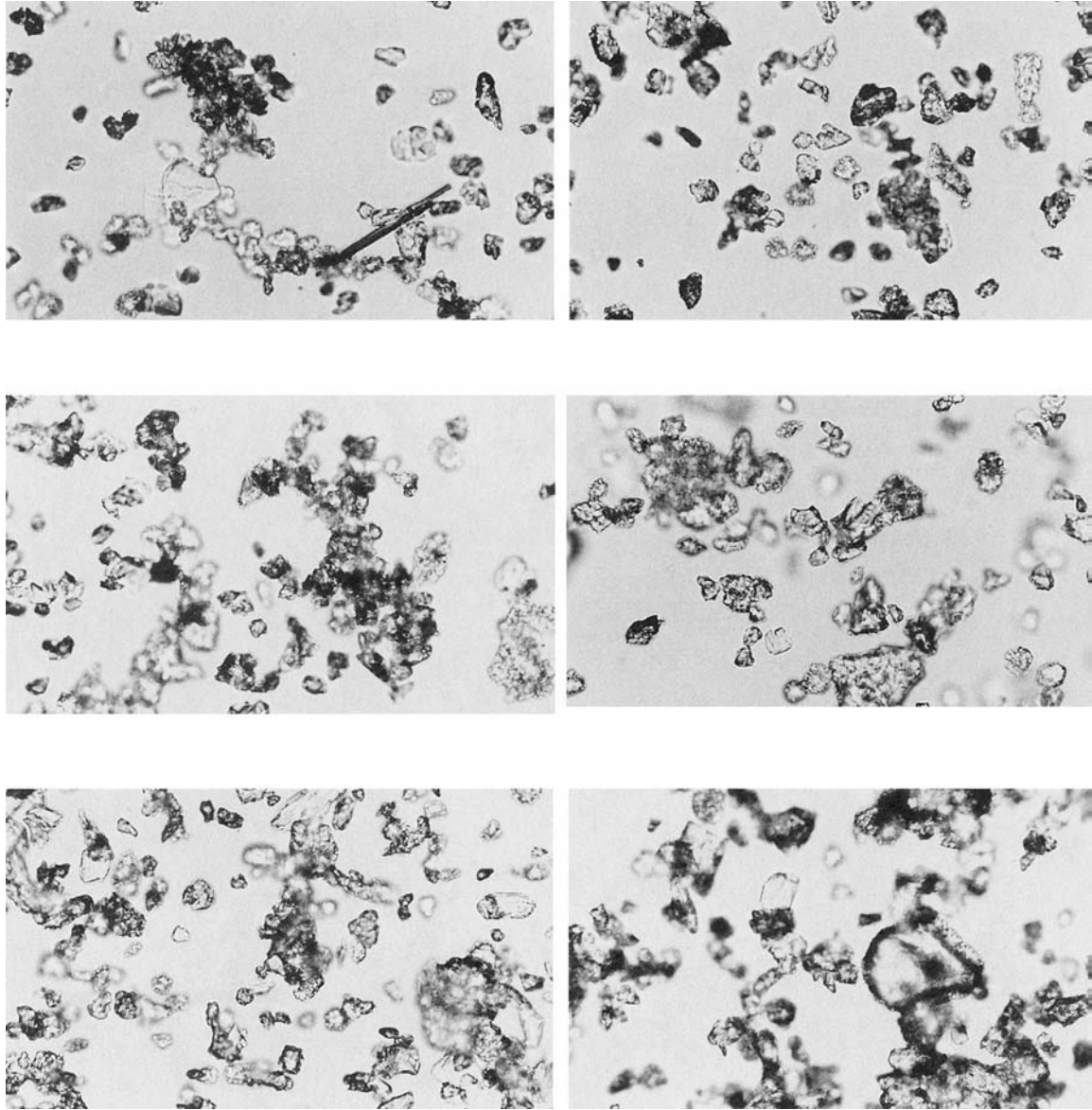
図版3 花粉化石(2)



- 6. マツ属 (D 1 地点; 試料番号10)
- 8. サナエテデ節-ウナギツカミ節 (D 1 地点; 試料番号10)
- 10. ミズアオイ属 (D 1 地点; 試料番号10)

- 7. イネ科 (D 1 地点; 試料番号10)
- 9. コウヤマキ属 (D 1 地点; 試料番号10)
- 11. ミズワラビ属 (D 1 地点; 試料番号10)

図版4 植物珪酸体



100 μ m

1. 状況写真 (D 1 地点; 試料番号1)
2. 状況写真 (D 1 地点; 試料番号4)
3. 状況写真 (D 1 地点; 試料番号15)
4. 状況写真 (D 1 地点; 試料番号22)
5. 状況写真 (D 1 地点; 試料番号29)
6. 状況写真 (D 1 地点; 試料番号37)

付 編 2

具同中山遺跡の古代、中世の動物遺存体について

菊池直樹

具同中山遺跡の古代から中世にかけての自然流路からは多くの動物遺存体が出土している。それらはすべて哺乳類のものであり、ウマ、ウシ、シカ、イノシシ、タヌキである。古代～中世にかけての動物遺存体の出土は高知県下では今までに例が無く最初であり、同時代の動物利用について知る上で重要な資料である。ここでは遺存体とその出土状況等について報告する。

1) 出土状況

具同中山遺跡から出土した動物遺存体は古代から中世にかけて存在した自然流路を埋積した3つの流路埋積堆積物から検出されたものである。これらの流路埋積堆積物は厚さが薄く、ややシルト勝ちの灰色粘土であり、葉理は見られず、塊状である。また植物遺体に富んでおり、掃き寄せと思われる産上を呈する。植物遺体はいずれも水平に堆積している。植物遺体の保存は非常に良く、分解されて泥化したような形跡は見られない。木器等の有機質遺物にも富む。このような堆積物は堆積物や植物の産状、保存状態からみてよどんだ停水域で形成されたものではなく増水時に流路を埋積したものであると思われる。この堆積物において植物遺体、木器、動物遺存体等の有機物に富む理由としてはこれらの比重が互いに近いため、水流により淘汰され掃き寄せられたということが考えられる。このことからこれらの遺存体は廃棄された場所からやや移動している可能性がある。この掃き寄せにおいてはサイズの選択がよく起こる。そのため、流路堆積物から検出される動物遺存体の組成が廃棄時の組成と違っている可能性がある。このため出土部位の偏りから動物利用を考える時に問題がある。しかしながらSR-3においてはウシ、ウマはそれぞれ別々にまとまって見つかったようであり、大きく遺存体の組成を変えるような強い水流による埋積ではなかったのではないだろうか。また掃き寄せられた植物遺存体は草本類のものがほとんどであり、幹などの大きなサイズの植物遺体は見られないことはこのことに整合的である。

2) 出土動物遺存体

各遺構から以下の動物遺存体が出土している。

SR-3 (自然流路) : シカ、イノシシ、タヌキ、ウマ

SR-2 (自然流路) : ウマ

SR-1 (自然流路) : ウマ、ウシ

シカ

シカはSR-3から出土している。出土部位は四肢部に偏る傾向があるが、頭部、胴部、腰部などを構成する部分も検出されている。四肢部を構成する長管骨はすべて破断されている。しかしな

がら解体時に形成される解体痕はほとんど見られない（一部に見られるが発掘時のものである可能性がある）。頭部としては側頭骨と下顎骨が出土しているが側頭骨はほぼ完全のものであるが下顎骨は関節部と吻部が失われている。寛骨は寛骨臼付近が残されているものがほとんどで腸骨、恥骨、座骨等はへし折られている。シカの骨はそのほとんどが破壊されていると言って良いであろう。骨のモディフィケーションについては後ほどイノシシを含めて触れる。最小個体数は左寛骨が重複することから3個体である。

イノシシ

イノシシはそれほど多くはないが、SR-3から頭部、四肢部を構成する骨が出土している。脊椎骨などの胴部を構成する部位は全く検出されていない。イノシシの四肢骨もまた破断されており、解体痕は見られない。頭部を構成するものとしては臼歯を残した上顎骨片が2つと側頭骨片が1つ得られている。破片化しており自然に壊れたものではなく人為的に破壊されたものと思われる。

シカ、イノシシの加工について

シカやイノシシの四肢骨はすべて破断されている。これは割れ口からみて横方向から打撃することによって破壊されたものと思われ、人為的に割られたものであると思われる。この破壊は長管骨を2つに分断するものである。破断位置は骨幹部の中央、遠位部付近で見られる。このため保存されている長官骨の部分は骨の中央部で破断されたもの、遠位端部のみを欠くもの、遠位端部のみものの3タイプである。骨角器としてよく利用される部位である骨幹部が必ず欠如するわけでもなく、また横方向からの打撃により破壊されていることからみて、骨角器としての利用を考えた物とは思えない。むしろ骨髄の採取を目的とした破壊であった可能性が高いと思われる。

これらの遺存体には解体痕が見られない（切痕は発掘時のものであると思われる）。解体痕は解体時に腱や靭帯を切断するときに骨の表面に形成される。この解体法は、外側から骨に刃物を叩きつけるように腱や靭帯を切断する方法である。これはあまり効率的ではないのではないだろうか。むしろ筋肉と骨の間に刃物を入れて、筋肉と骨を分離し、関節部に向けて刃物を移動させながら勢い良く近位から切断した方が効率よく切断することができる。もしこの方法がとられたならば解体痕を残すことはないのではないだろう。

また遺存体には犬によるとと思われる多くの噛み痕が見られる。解体後、犬に与えられたか、もしくは廃棄後にスガベンジャー（腐肉食動物）により荒らされたのであろう。

タヌキ

SR-3からタヌキの右側の前顎骨、上顎骨が出土している。上顎骨の背部は欠損している。歯はよく残っており、P₂が欠如しているほかは揃っている。すべて永久歯であるがあまり咬耗しておらず、若い個体であると思われる。

ウマ

ウマの遺存体は本遺跡で最も多く検出された遺存体であり、また各時代の遺構を通じて検出されている。遺構ごとに述べる。

SR-3からはシカ、イノシシに伴ってウマの臼歯片が1個得られているのみであり他の遺構のように長管骨等は出土していない。

SR-2からは臼歯、下顎骨、中手骨、末節骨などの頭部と四肢部を構成する部位が出土している。頸部、胴部、腰部を構成する部位は検出されていない。どれも非常に保存が悪く、脆い。藍鉄鉱が析出している。SR-2出土の動物遺存体はウマのみである。

SR-1からは多くの部位が見つまっているが頸部、胴部、腰部を構成する部位は全く検出されおらず、出土部位はSR-2のものによく似ている。この様な部位の偏向は柳田遺跡（古墳時代）においても見られた。出土した部位は表の通りである。骨の保存は比較的良好である。下顎骨はかなり老齢の個体のものである。ウシとはやや離れた位置から見つまっている。

ウシ

このウシの遺存体は今のところ高知県下最古のものである。ウシの頭蓋骨においては脳の摘出等が行われた形跡はない。ウマとは対照的に脊椎骨、肋骨等が出土しており、四肢骨等はほとんど出土していない（頸骨が1点のみ）。そのため流路に廃棄された部分は頭部から胴部のブロックであった可能性もある。解体痕と思われる切痕は見られない。

これらの資料は中世に中村平野においてウシの導入と飼育が行われていたことを示している。ウシの用途としては耕運、荷駄等であろう。またその死後は河川等に廃棄されたことが文献等に記されている。皮革、肉などを採取した後に廃棄した場合もあったようである。最小個体数は頭骨の重複から2個体である。

3) 具同中山遺跡における動物利用について（遺存体組成の時代的変遷）

SR-3においてはシカ、イノシシ、タヌキといった各時代を通じて狩猟対象となった動物の遺存体が卓越しており、家畜動物であるウマは1点検出されているだけである。また先ほども触れたように、シカ、イノシシの遺存体は人為的に破壊されたものが多く見られ、食用として利用されたものであろう。同時代の本地域においては狩猟が盛んに行われていたものと思われる。

ウマはSR-3～SR-1のすべての遺構から出土している。しかし、SR-3においては臼歯片が若干得られたにすぎないが、SR-2においてはウマのみが見られる単純な組成となり、SR-1においてはウシとほぼ同量の遺存体出土している。高知市の柳田遺跡から古墳時代後期の遺存体が知られており、本遺跡の資料から古代～中世にかけても飼育されていたことがわかる。

SR-3の堆積物からはウマの他にウシが見られる。これは高知県下では最も古いウシの遺存体である。層位がはっきりとしている日本最古のウシは東京都にある伊皿子貝塚より出土した弥生時代のものであるが全国的に見て弥生時代のものはほとんどなくウシの遺存体の出土量が実際に増えてくるのは奈良時代に入ってからである。特に平城京、平安京遺跡などの都城遺跡から多く検出されて

いる。高知県における奈良時代の動物遺存体はまだ知られておらず、また今回検出された遺存体資料自体が小さいため、中村平野におけるウシの導入時期について議論するまでには至っていない。しかし、少なくとも中世には中村平野にウシが導入されていたことは間違いない。特に鎌倉時代は各種の農業技術が発達した時代であり、牛馬耕が盛んになる時代でもある。こういった変化の波が中村平野に及んだことを示しているのではないだろうか。今後、文献記録や考古学資料等から考えていく必要がある。

今回動物遺存体が検出された3つの流路堆積物の遺存体の組成変化を通してしてみると、古代の流路堆積物から多く検出されたシカ、イノシシといった狩猟動物の遺存体が中世の流路堆積物からは検出されていないことが分かる。また反対に古代の流路堆積物からほとんど検出されなかった家畜の遺存体が中世の流路堆積物においてはすべてを占めていることがうかがえる。このような遺存体組成の変化を引き起こす原因としては食生活の変化と家畜の遺骸が流路に廃棄されるようになったためではないかと考えられる。特に前者については鎌倉時代になってシカ、イノシシ、タヌキなどを食べなくなったためかも知れない。文献記録によると肉食は仏教における禁忌事項であることから肉食の禁止が度々行われているようである。このような禁令の影響があるのかも知れない。また鎌倉時代において重要な狩猟動物を欠く例として広島県福山市の鎌倉時代～江戸時代初期の遺跡である草戸千軒遺跡がある。この遺跡においては鎌倉時代の遺構からウシ、ウマ、イヌといった家畜の遺存体と狩猟動物としてのシカの遺存体（具同中山では検出されていない）は多く見つかるもののイノシシの遺存体は1つも検出されていないようである（松井）。草戸千軒遺跡においてイノシシが検出されるのは戦国時代の遺構からである。中村と遺存体組成は違うが、鎌倉時代に重要な狩猟動物であるイノシシが検出されない点が一致するのは興味深い。多くの例を取り上げて今後調べていく必要があるだろう。

後者については発掘区の設定によるものかもしれないがはっきりしたことは言えないが堆積相からみてウシやウマといった大型の家畜の骨を大幅に移動させるような強い水流による掃き寄せではなく、廃棄後に分離した骨がそれ程移動せずして埋没した感がある。このためSR-2、SR-3の時期に家畜の遺骸が廃棄されるようになったことを示しているのではないだろうか。

SR-1E

番号	発掘区	遺構	綱名	種名(和名)	部位	左右	備考
1	1区	SR-1E	哺乳類	ウマ	橈骨	左	
2	1区	SR-1E	哺乳類		大腿骨転子		
3	1区	SR-1E	哺乳類	ウマ	踵骨	左	
4							
5	1区	SR-1E	哺乳類	ウマ	中足骨		
6							
7	1区	SR-1E	哺乳類	ウマ	下顎骨	左右	
8	1区	SR-1E	哺乳類	ウマ	門歯		2個
9	1区	SR-1E	哺乳類	ウマ	門歯		
10							
11	1区	SR-1E	哺乳類	ウマ?	顎骨	左	
12	1区	SR-1E	哺乳類	ウマ	上顎臼歯		
13	1区	SR-1E	哺乳類	ウマ	上顎臼歯		2個

SR-1G, F

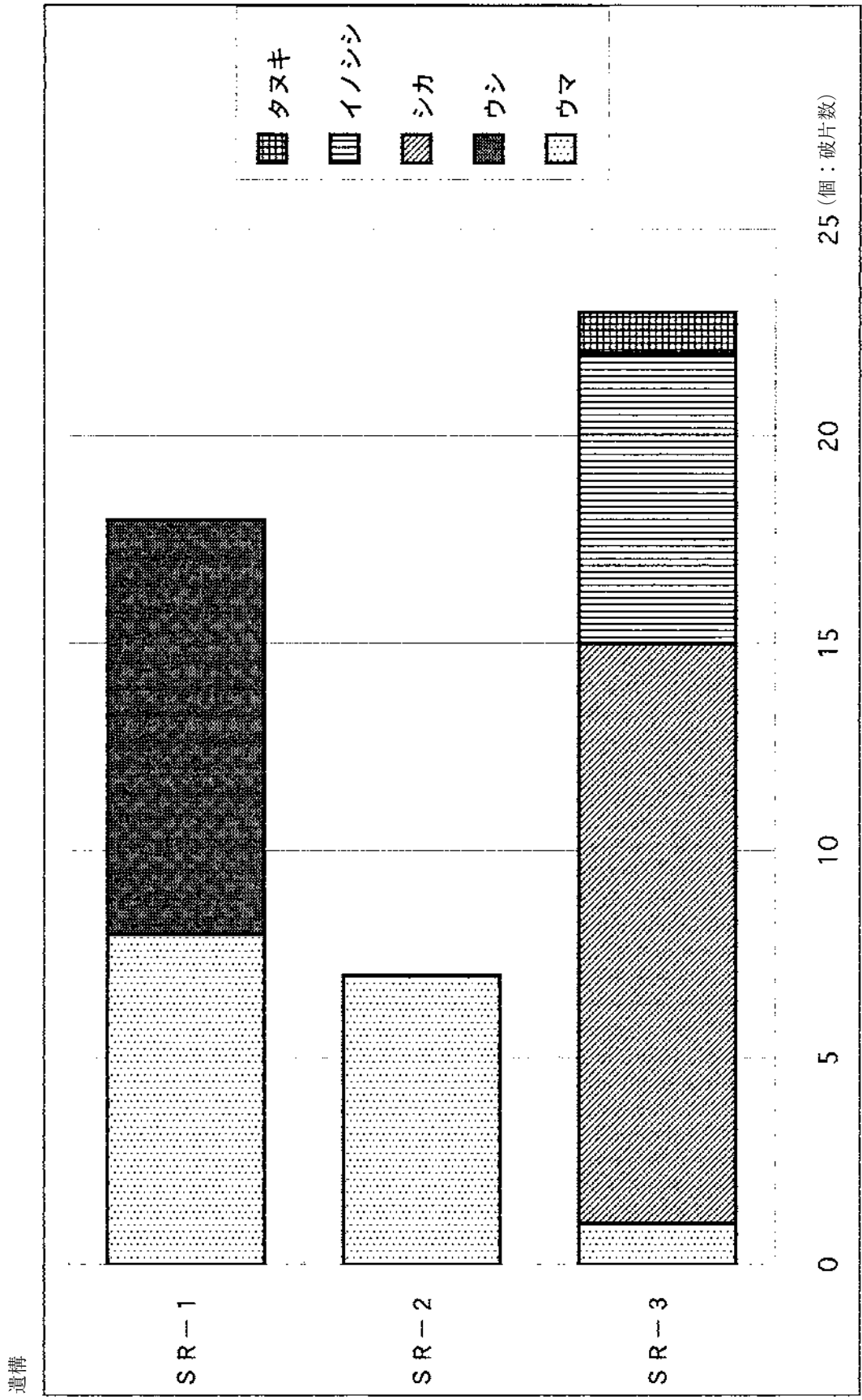
番号	発掘区	遺構	綱名	種名(和名)	部位	左右	備考
15	1区	SR-1	哺乳類	ウシ	臼歯		2個
16							
17	1区	SR-1	哺乳類	ウシ	肋骨片		G区
18							
19							
20	1区	SR-1	哺乳類	ウシ	下顎骨	左	F区。M2、M3のみ。
21	1区	SR-1	哺乳類	ウシ	下顎骨	右	F区。
22							
23							
24	1区	SR-1	哺乳類	ウシ	腰椎		F区
25	1区	SR-1	哺乳類	ウシ	腰椎		F区 3個
26	1区	SR-1	哺乳類	ウシ	軸椎		F区 他椎体1個
27	1区	SR-1	哺乳類	ウシ	頭骨		G区。
28	1区	SR-1	哺乳類	ウシ	頭骨		G区。
29	1区	SR-1	哺乳類	ウシ	肋骨		G区
30							
31	1区	SR-1	哺乳類	ウシ	頸骨	右	G区。近位端破損。
32							
33							
34	1区	SR-1	哺乳類	ウシ	踵骨	右	未G区

SR-2

番号	発掘区	遺構	綱名	種名(和名)	部位	左右	備考
60	1.E区	SR-2	哺乳類	ウマ	臼歯		複数、
61	1.E区	SR-2	哺乳類	ウマ	臼歯片		複数、
62	1.E区	SR-2	哺乳類	ウマ	臼歯片		複数、
63							
64	1区	SR-2	哺乳類	ウマ	下顎骨片		D区
65	1区	SR-2	哺乳類	ウマ	中手骨	?	遠位端なし。
66							
67	1.E区	SR-2	哺乳類	ウマ	臼歯片		
68							
69							
70	1.E区	SR-2	哺乳類	ウマ	末節骨		
71							
72							
73							
74							
75							
76				ウマ	橈骨	右	

番号	発掘区	遺構	綱名	種名(和名)	部位	左右	備考
37	1区	SR-3	哺乳類	イノシシ	上顎骨片	右	P1, P2, M1, M2が残存。
38	1区	SR-3	哺乳類	シカ	胸椎		棘突起、背部で欠損。
39	1区	SR-3	哺乳類	イノシシ	大腿骨	左	遠位部。中央部で破断。
40	1区	SR-3	哺乳類	シカ	寛骨	左	寛骨臼付近。増み痕あり、破断されている
41	1区	SR-3	哺乳類	シカ	上腕骨	右	遠位部。近位、人為的に破断。遠位滑車、破損。増み痕？。
42	1区	SR-3	哺乳類	シカ	尺骨、腸骨	左	
43	1区	SR-3	哺乳類	シカ	寛骨	左	腸骨は人為的に破断、切痕は発掘時のもの
44	1区	SR-3	哺乳類	イノシシ	側頭骨片？		
45	1区	SR-3	哺乳類	シカ	頰骨	左	遠位部。中央で人為的に破断。
46	1区	SR-3	哺乳類	シカ	橈骨	左	近位部。中央部で人為的に破断。
47	1区	SR-3	哺乳類	イノシシ	上顎骨片	左	M2、M3残存。
48	1区	SR-3	哺乳類	シカ	頰骨	左	近位部。近位端欠損、遠位人為的に破断
49	1区	SR-3	哺乳類	イノシシ	上腕骨	右	遠位部のみ、遠位端欠、近位破断
50-a	1区	SR-3	哺乳類	イノシシ	頰骨	右	遠位部、中央部で破断されている
50-b	1区	SR-3	哺乳類	シカ	上腕骨	左	遠位部、近位で破断
51	1区	SR-3	哺乳類		大腿骨		滑車片。
52	1区	SR-3	哺乳類	タヌキ	前顎、上顎骨	右	P1欠損。
53	1区	SR-3	哺乳類	シカ	頰骨	左	遠位部、人為的に破断、全体的にポーラス。
54	1区	SR-3	哺乳類	イノシシ	踵骨	右	遠位、破損。
55	1区	SR-3	哺乳類	シカ	下顎骨	右	P1欠損
56	1区	SR-3	哺乳類	シカ	寛骨	左	寛骨臼のみ、腸骨、座骨、恥骨は破断、切痕は発掘時
57	1区	SR-3	哺乳類	シカ	肩甲骨	右	近位部破損
58	1区	SR-3	哺乳類	シカ	側頭骨	左	
77	1区	SR-3	哺乳類	ウサ	臼歯片		

遺存体組成



写真図版



具同中山遺跡群遠景



同上 近景

PL.2



SR1 完掘状況



SR2 完掘状況



SR3 完掘状況（東側部分）



同上（西側部分）

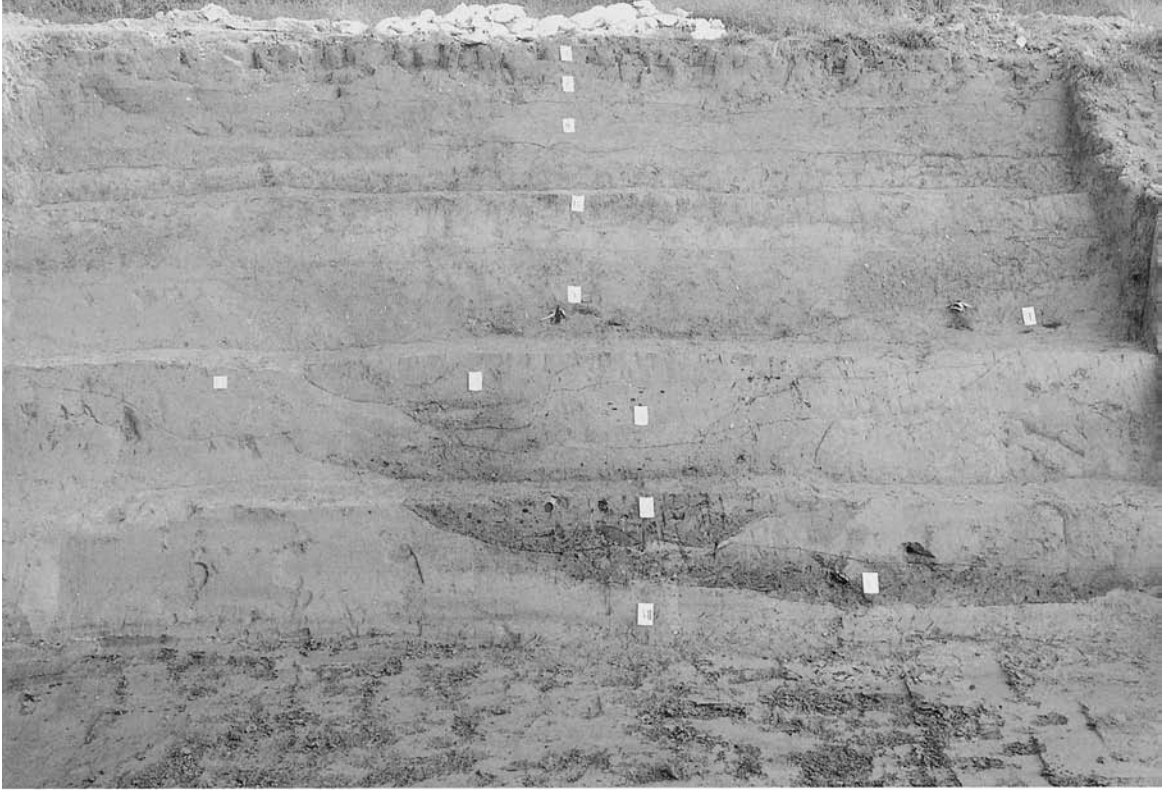
PL.4



SR 4 完掘状況



SF 1 検出状況



南東部セクション



SR1 セクション

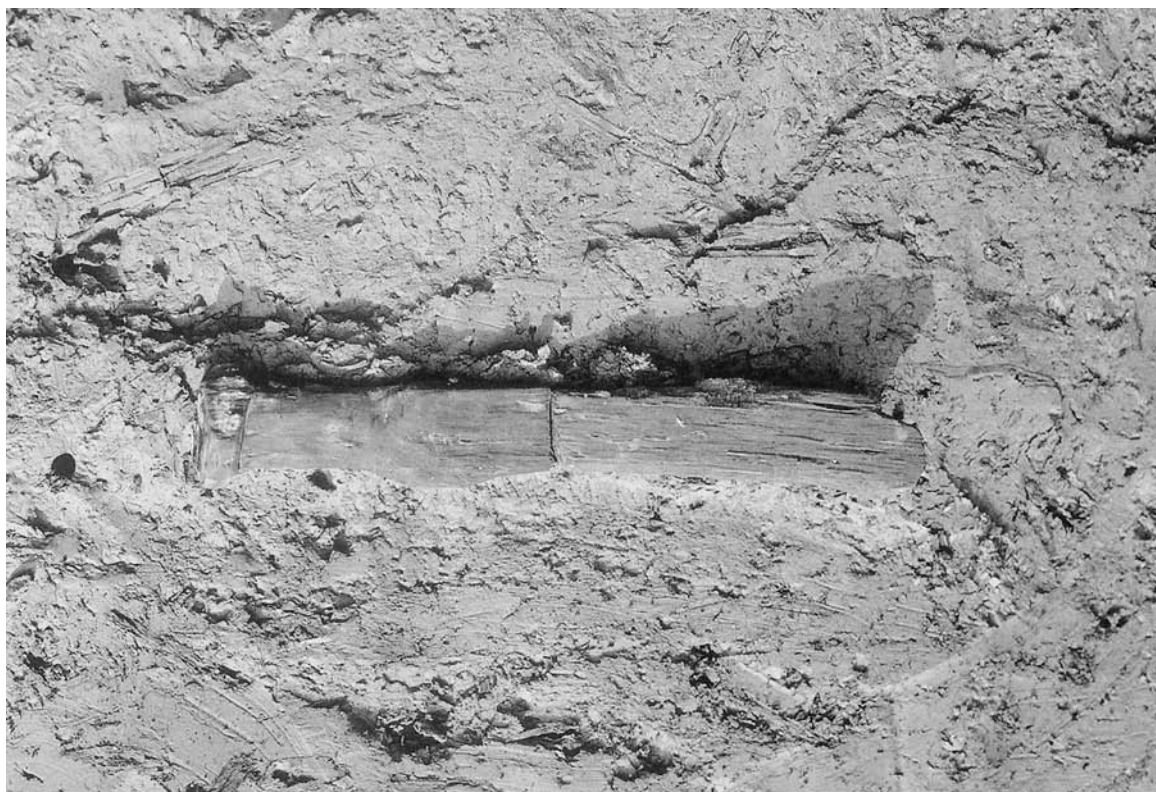
PL.6



SR2・3 セクション



SF1 周辺遺物出土状況



SR1 木製品出土状況（木製品）

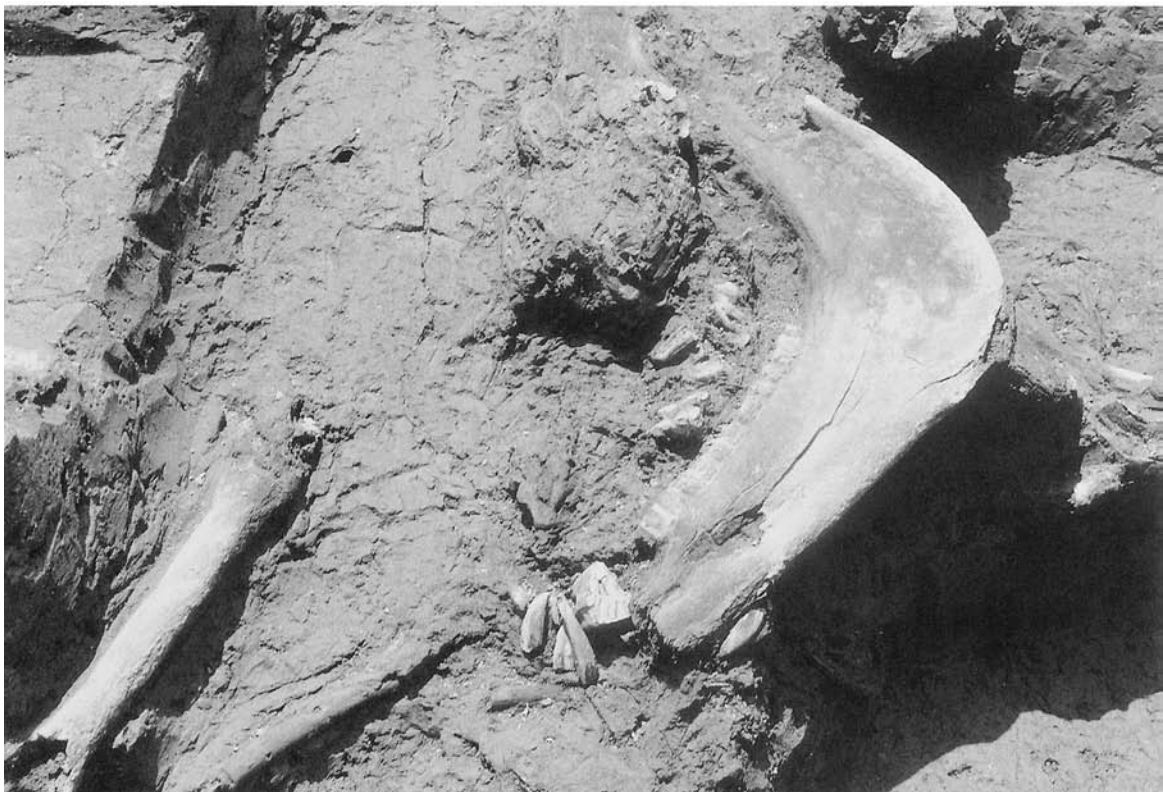


同上

PL.8



SR 1 獣骨出土状況



同上



SR2 木製品（柵列）出土状況



同上

PL.10



SR2 木製品出土状況



SR3 遺物出土状況

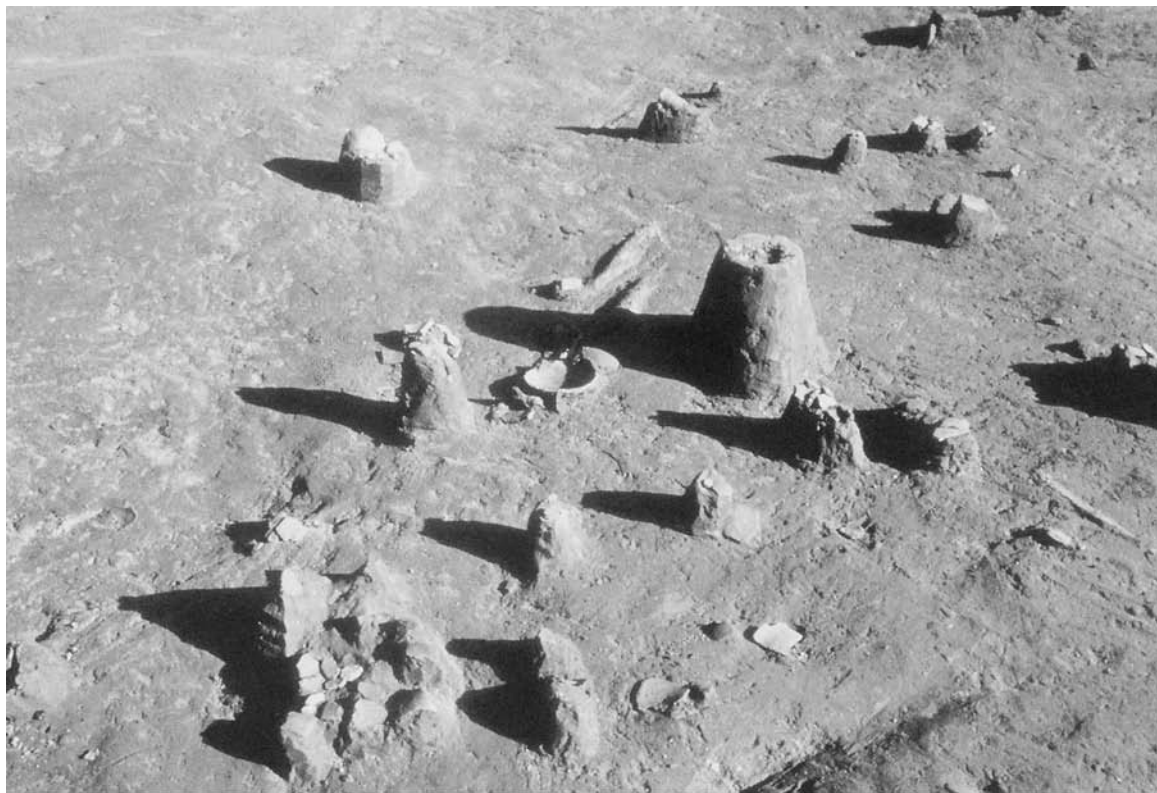


SR3 遺物出土状況

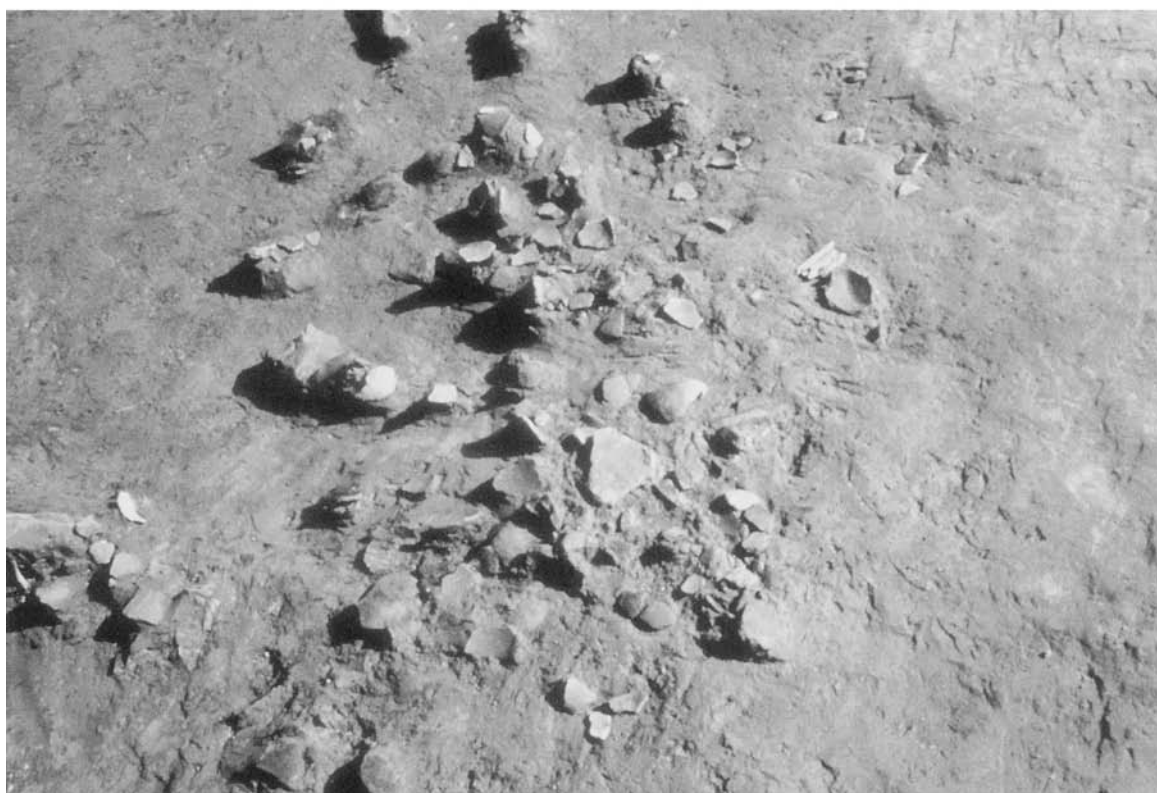


同上

PL.12



SR3 遺物出土状況



同上



SR3 須恵器出土状況



SR3 土師器出土状況

PL.14



SR3 土師器出土状況



SR3 須恵器出土状況



SR 3 木製品出土状況



同上

PL.16



SR 3 木製品出土状況



同上

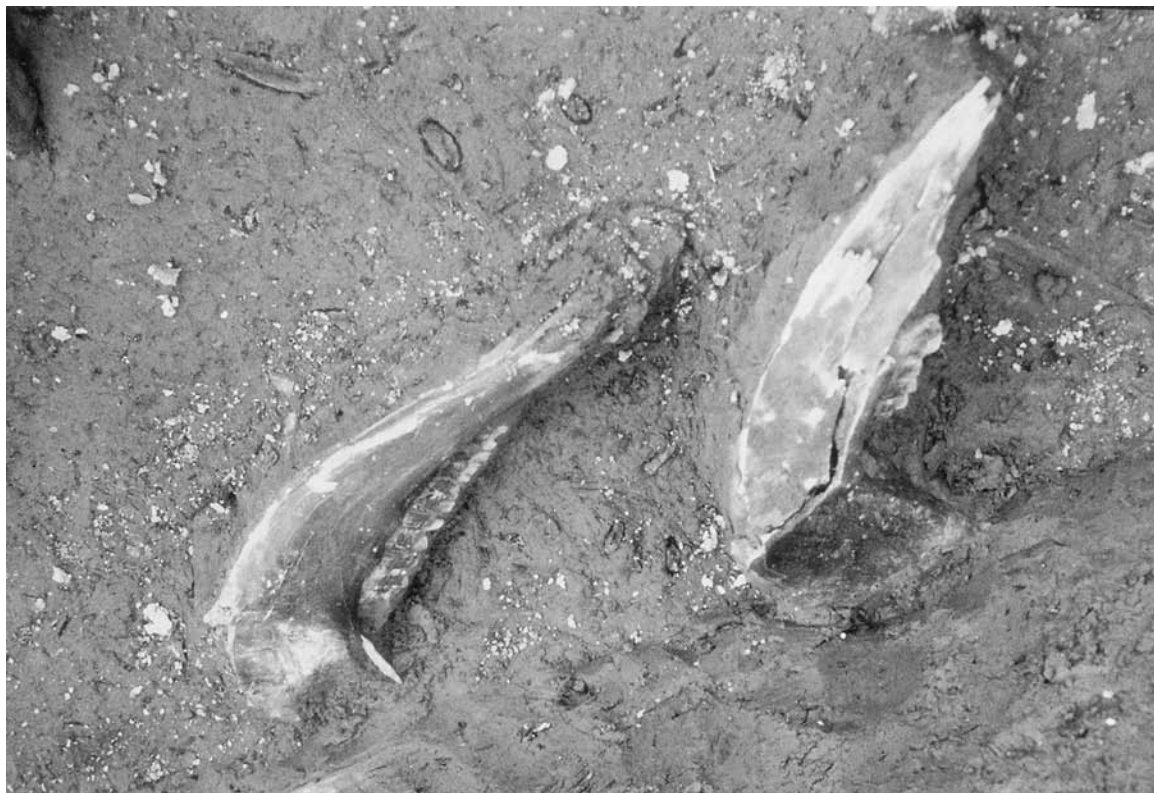


SR 3 木製品出土状況



同上

PL.18



SR3 獣骨出土状況



同上



SR3 鉄礫出土状況



同上

PL.20



SR 4 弥生土器出土状況



SR 4 木製品出土状況

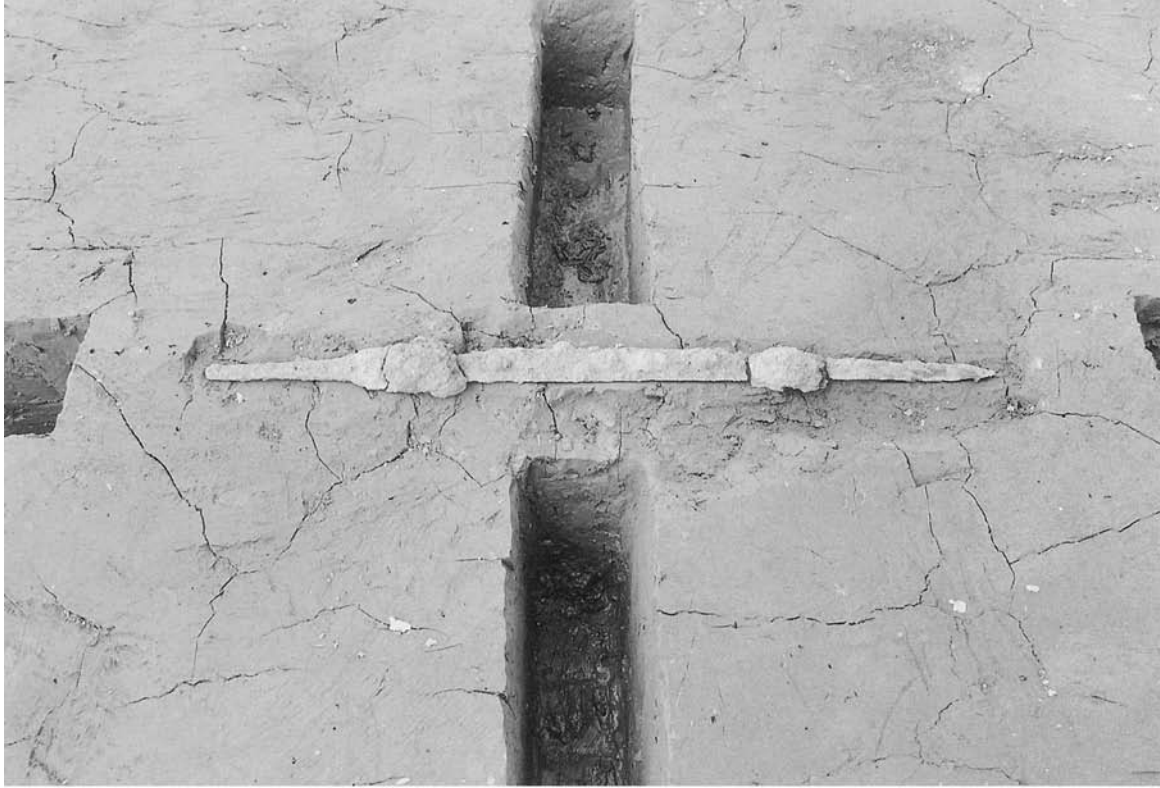


金属製品出土状況



鉄剣及び周辺遺物出土状況

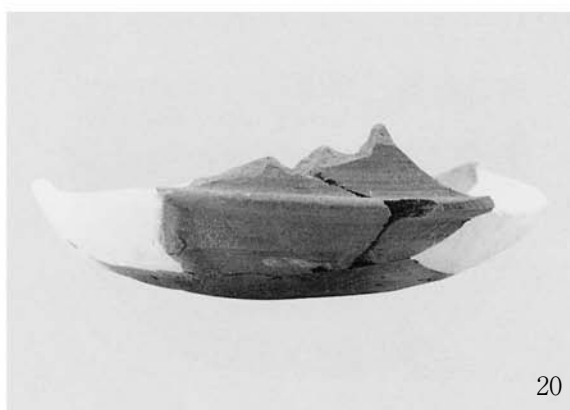
PL.22



鉄剣出土状況



第 I 区作業風景







SR 3 出土遺物

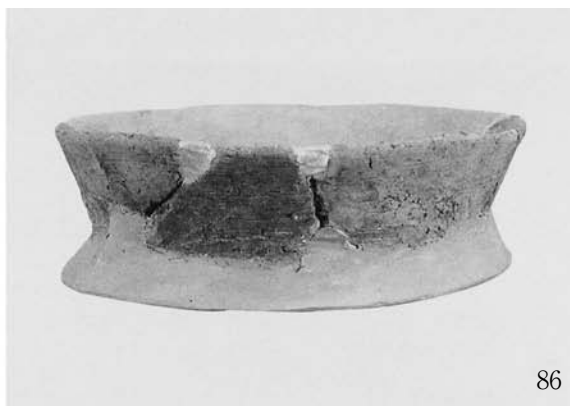








83



86



87



88



90



91



92



96

PL.30



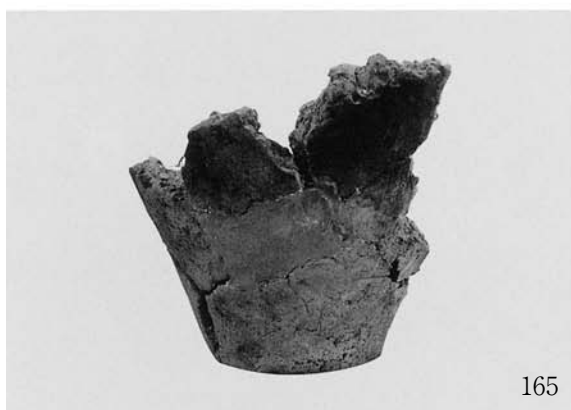


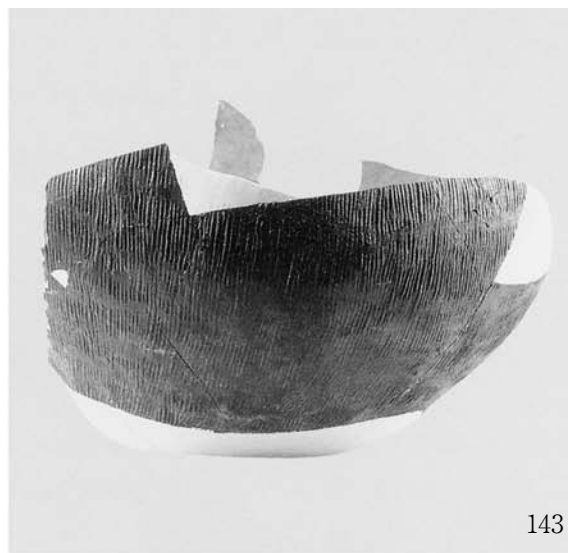


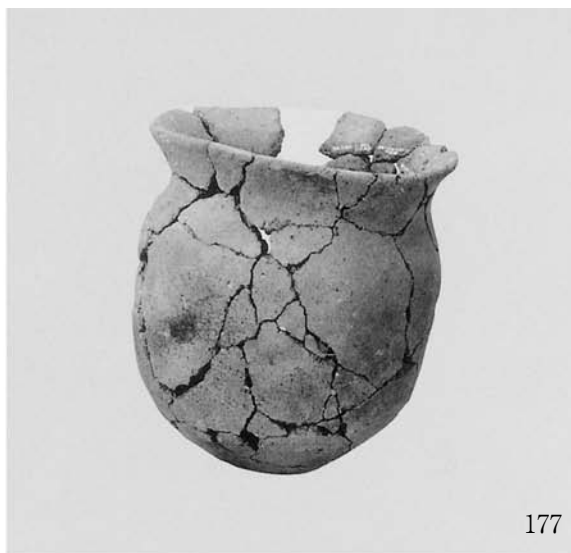
SR 3 出土遺物



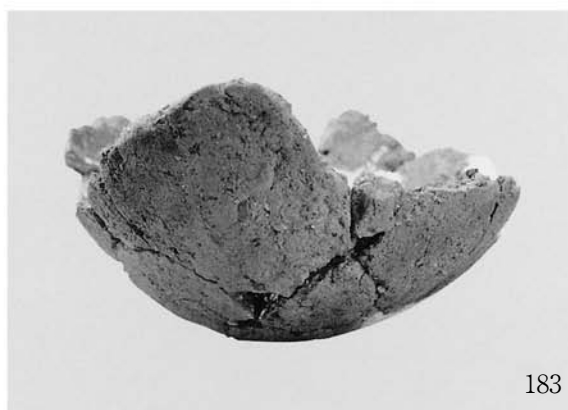






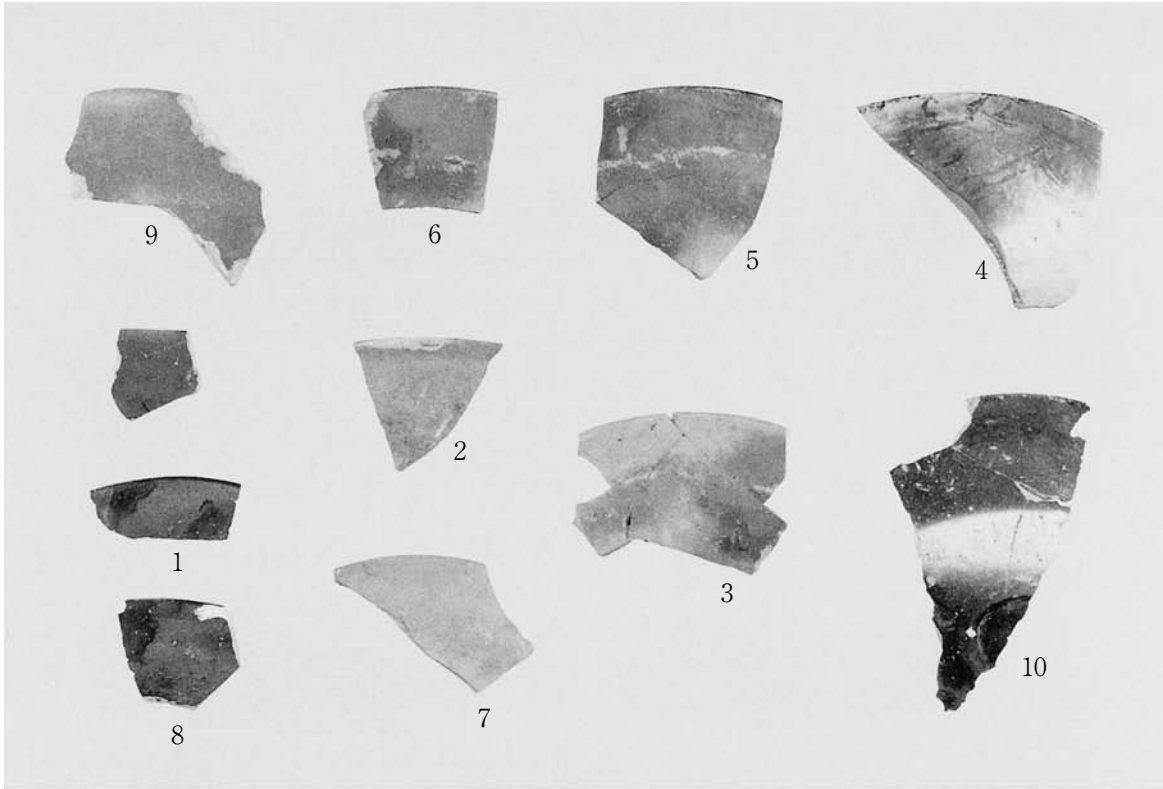


SF 1 出土遺物

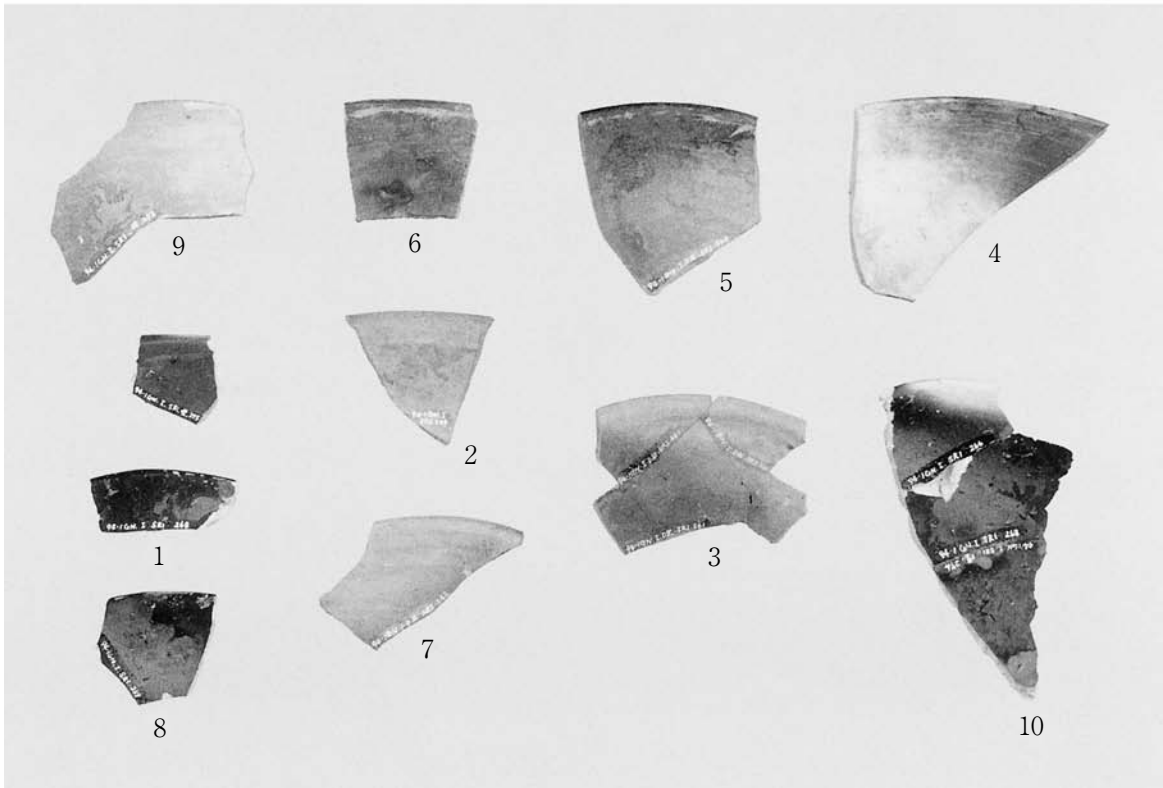




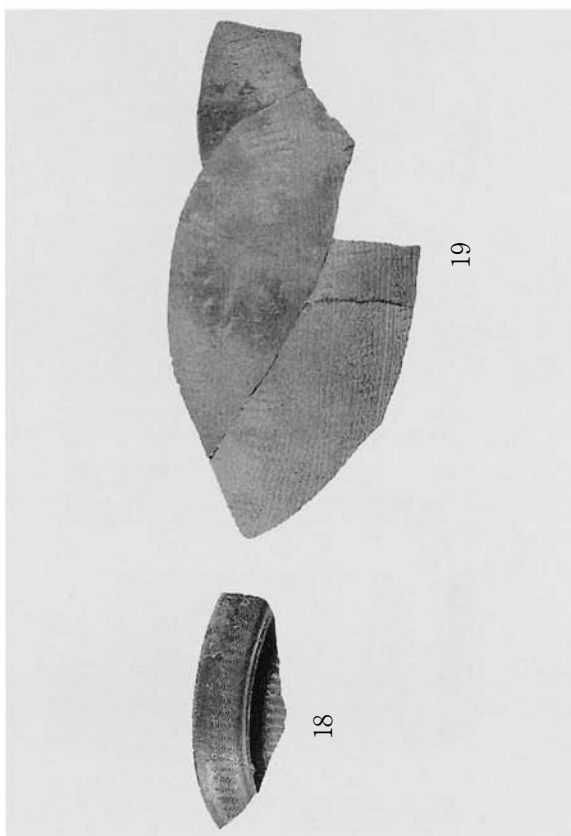
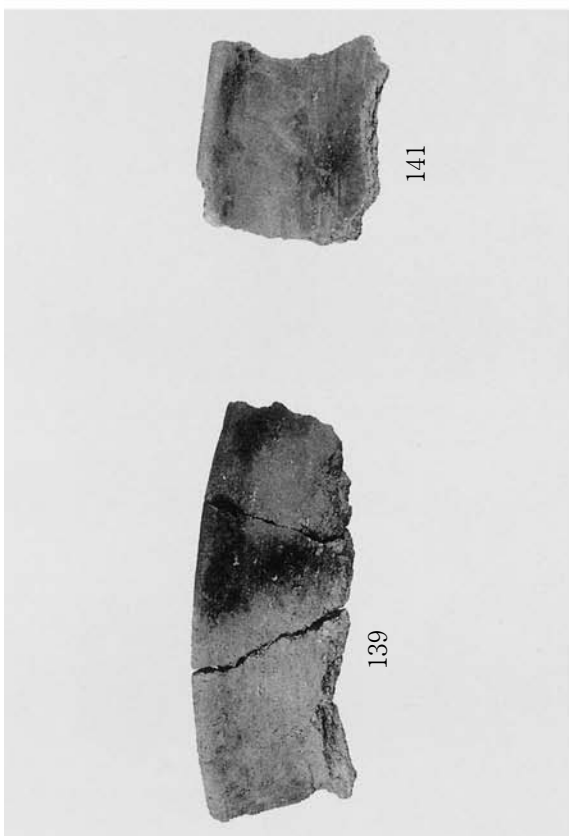
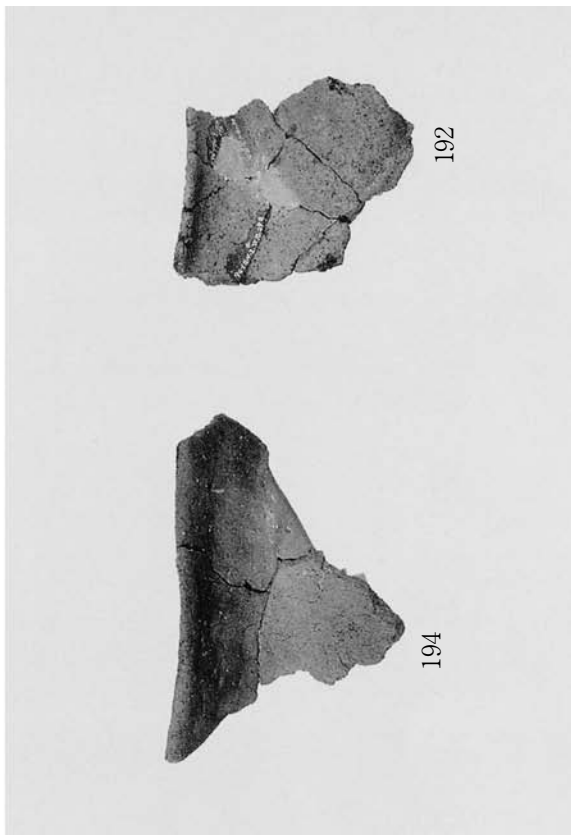
包含層出土遺物

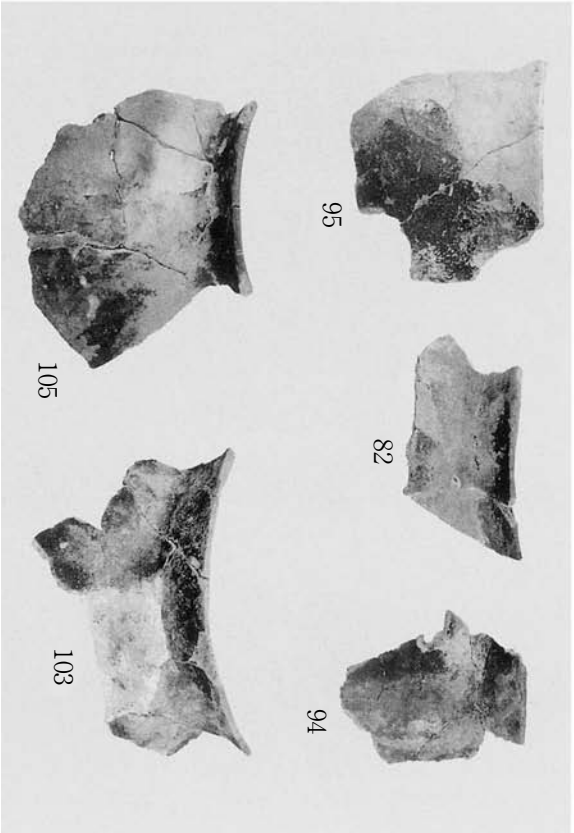
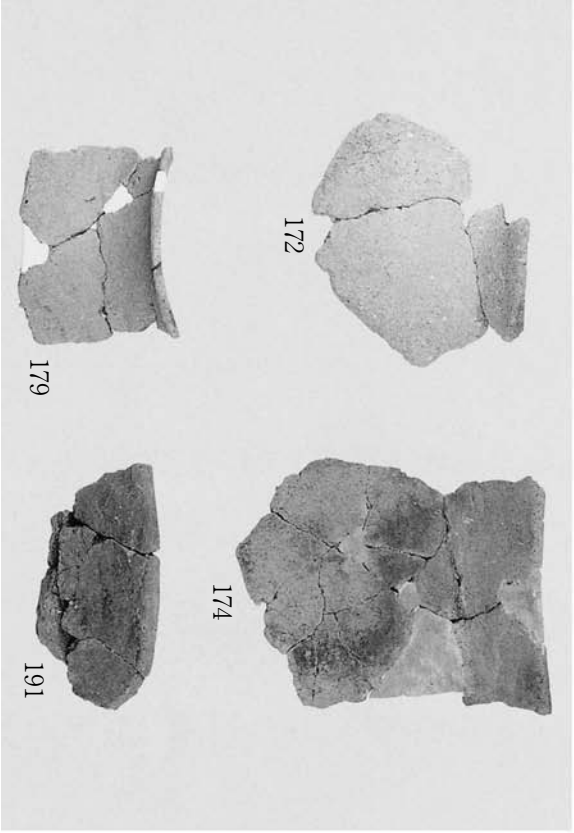
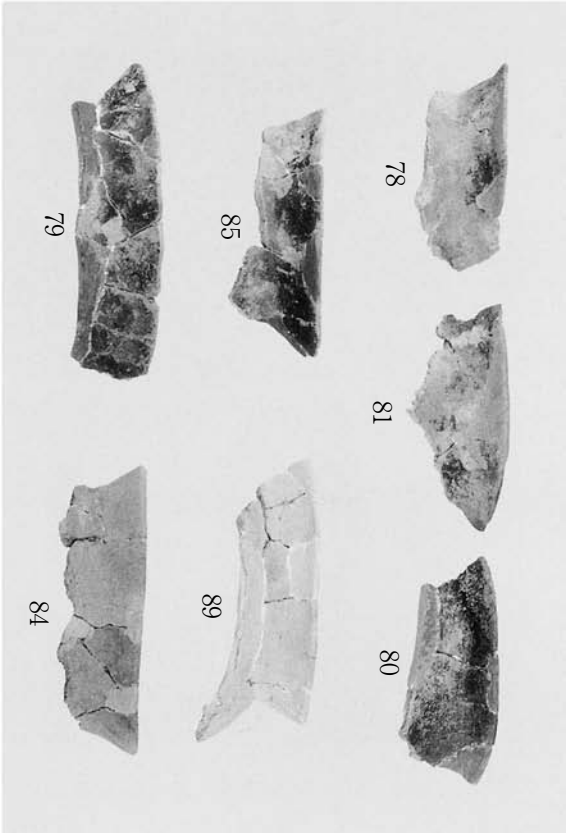
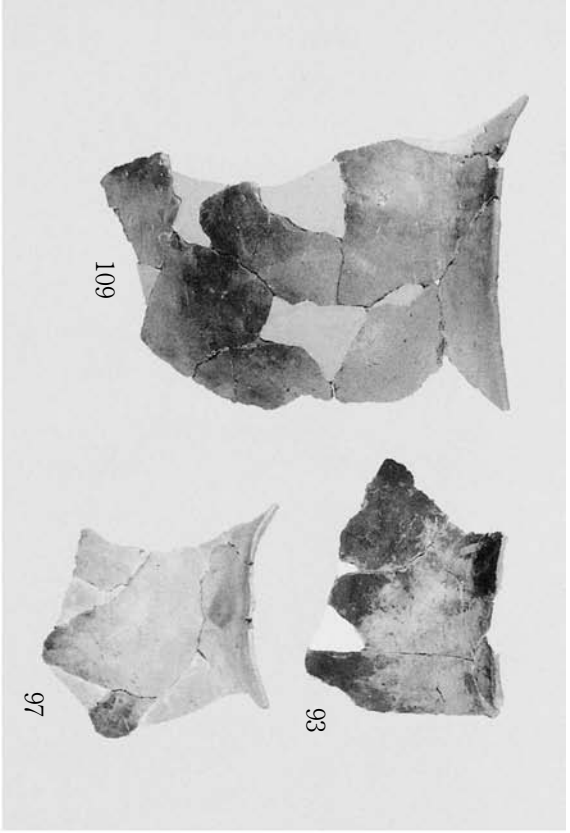


SR1 出土遺物（外面）

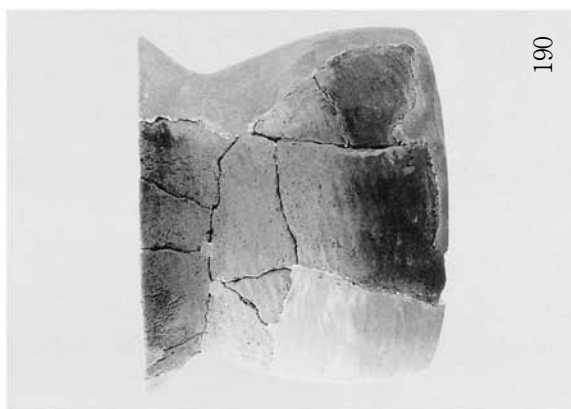
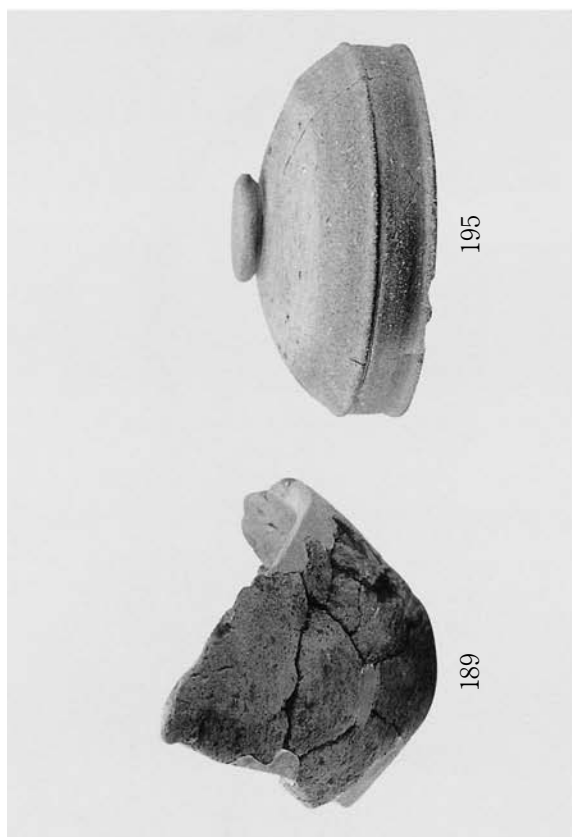
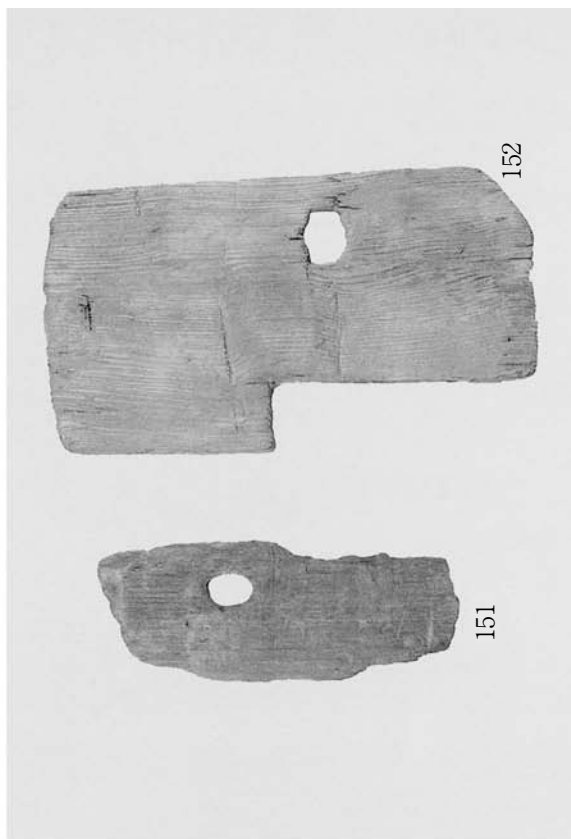
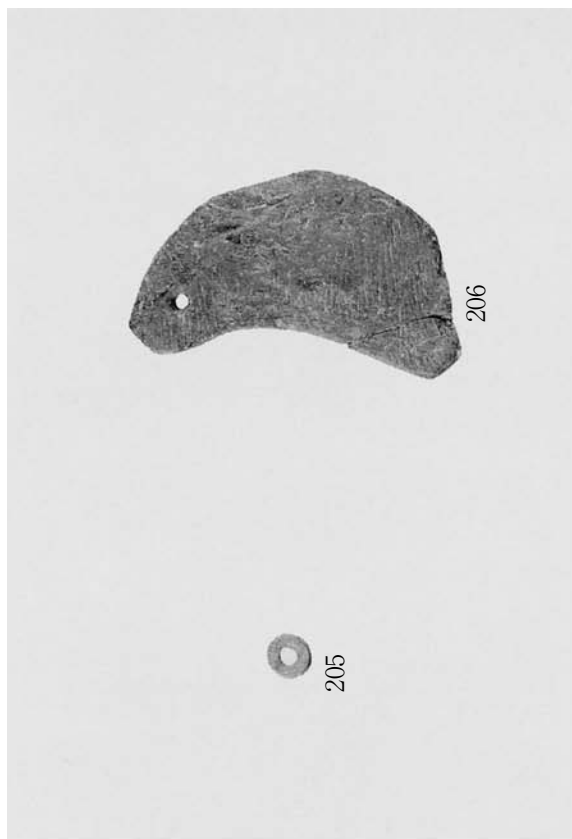


同上（内面）

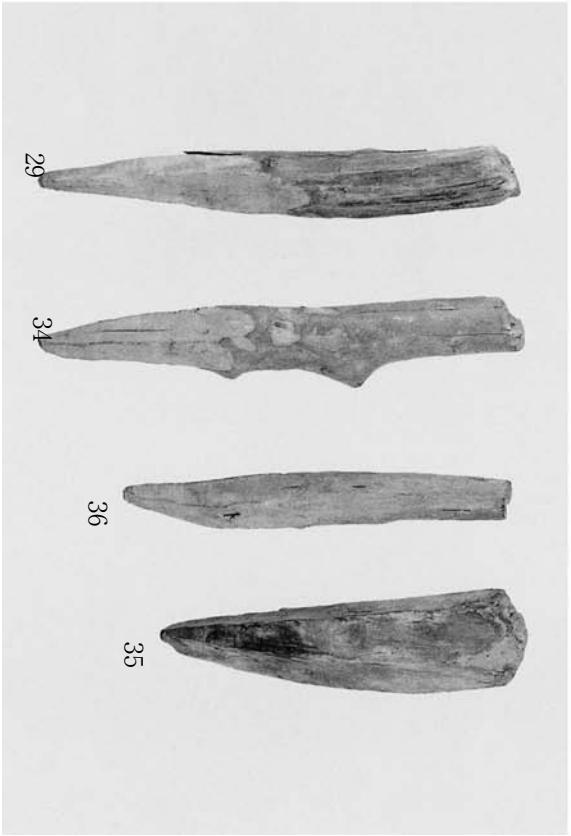
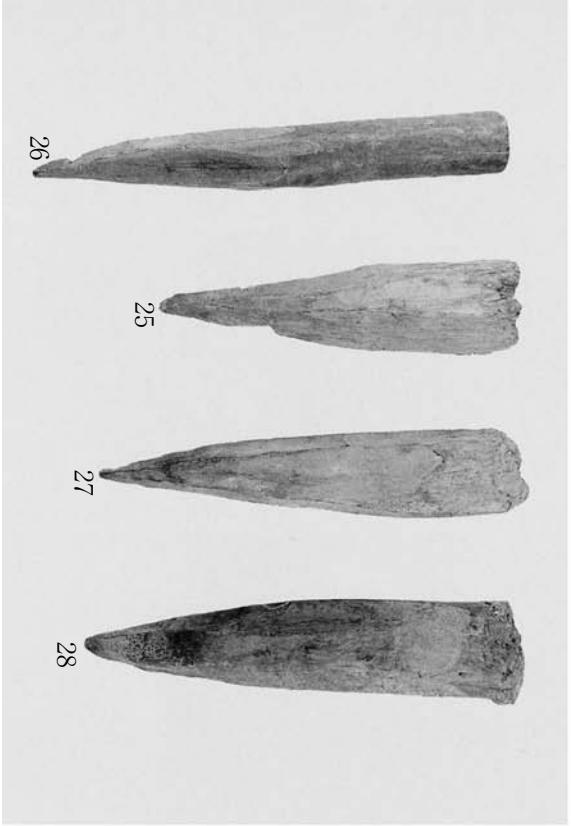
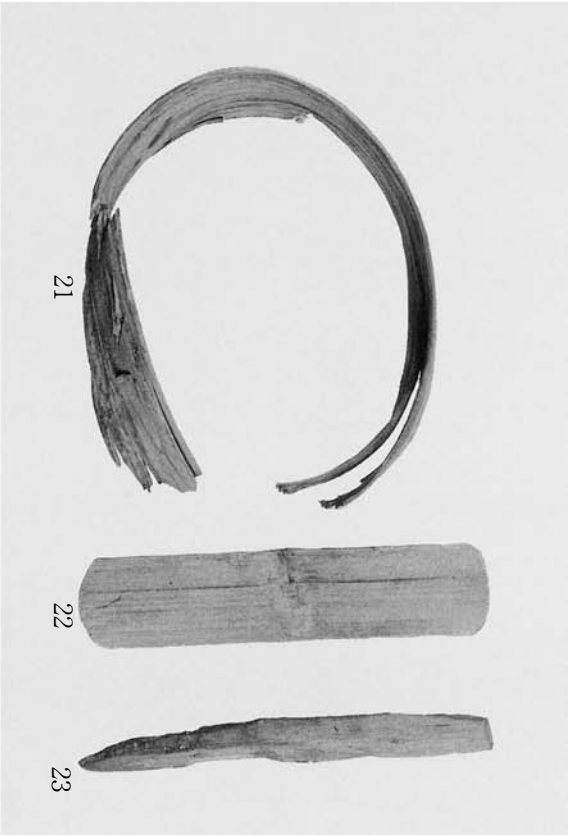
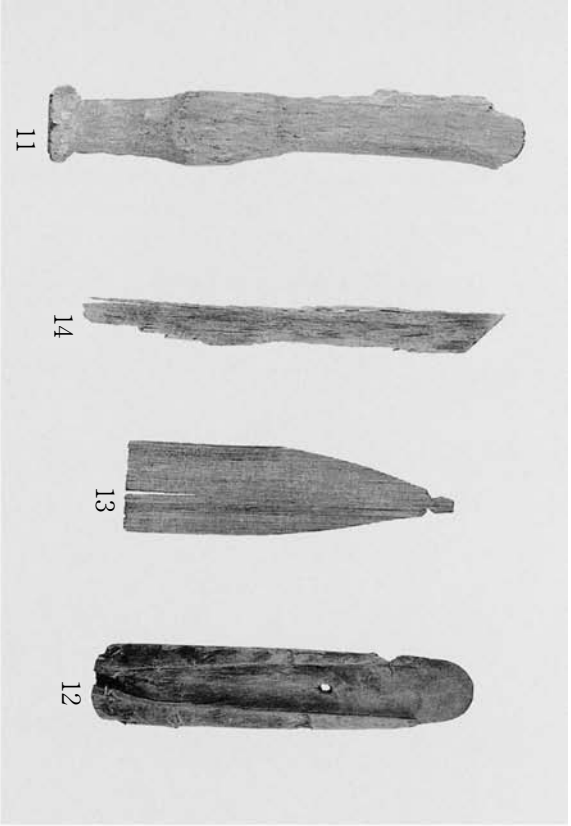




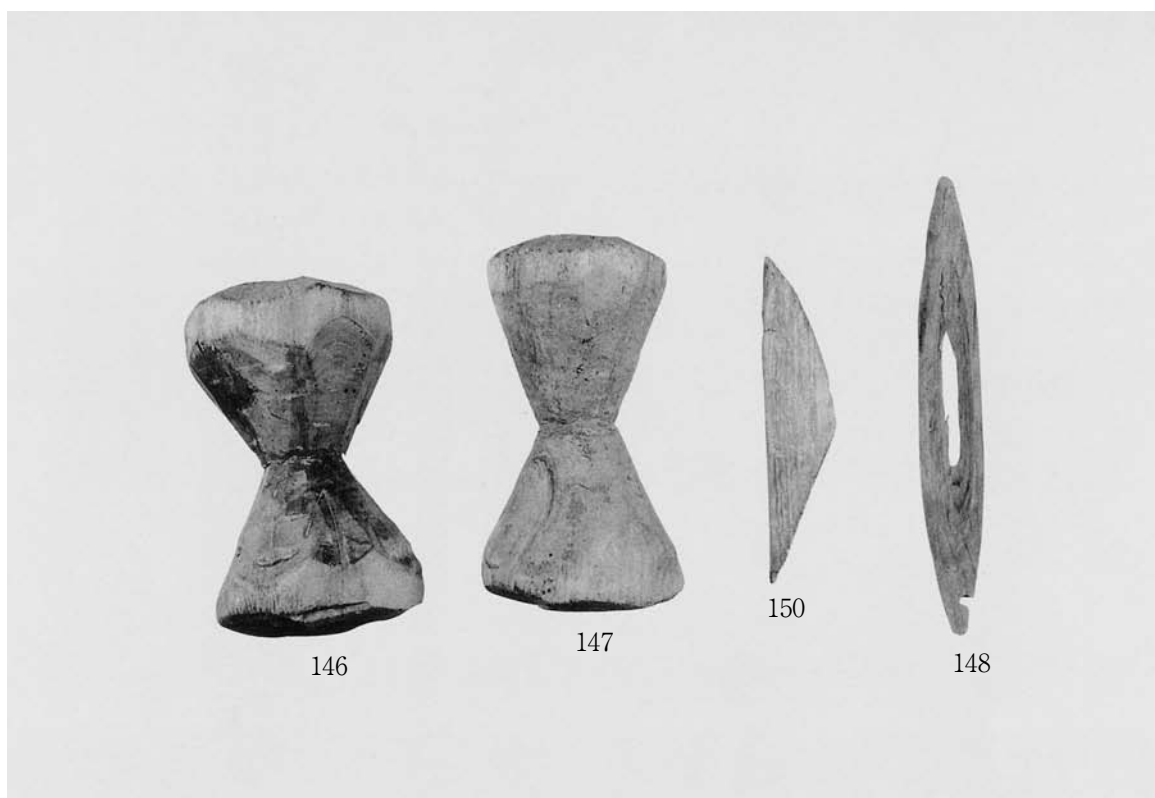
SR 3、SF 1、包含層出土遺物



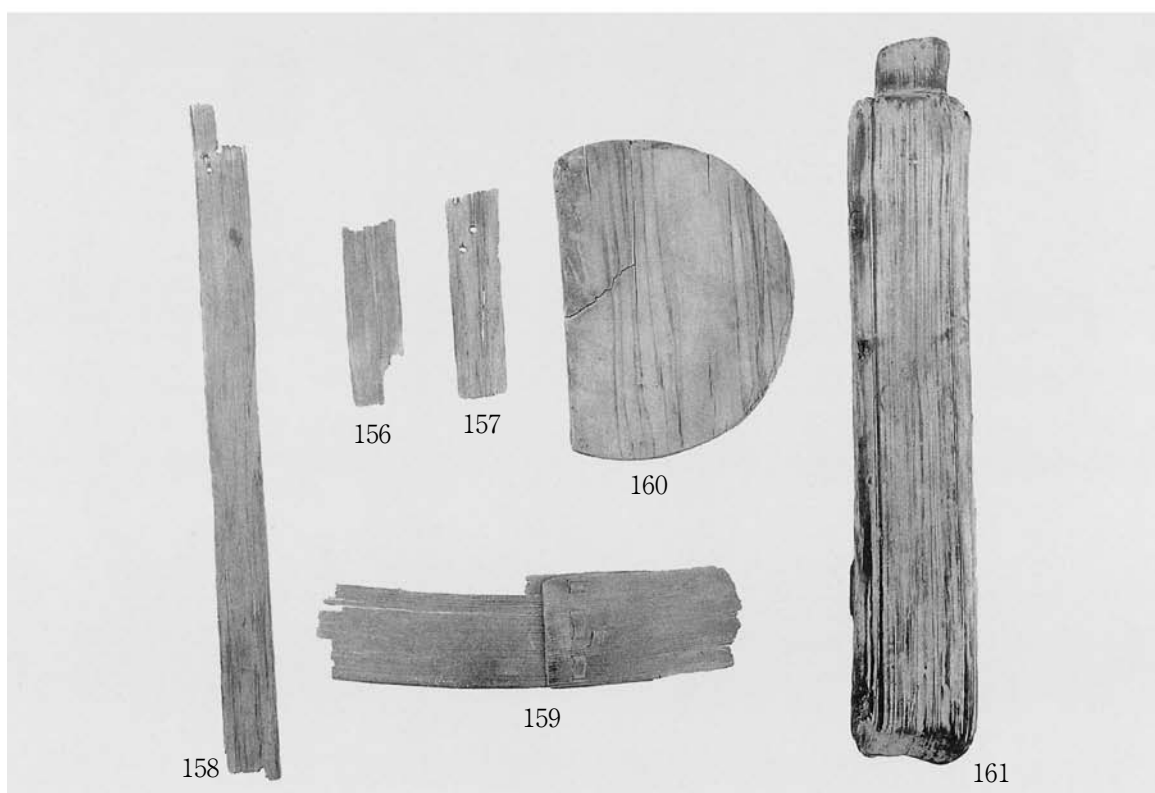
包含層 (土師器・須恵器・石製品)、SR 3 (木製品) 出土遺物



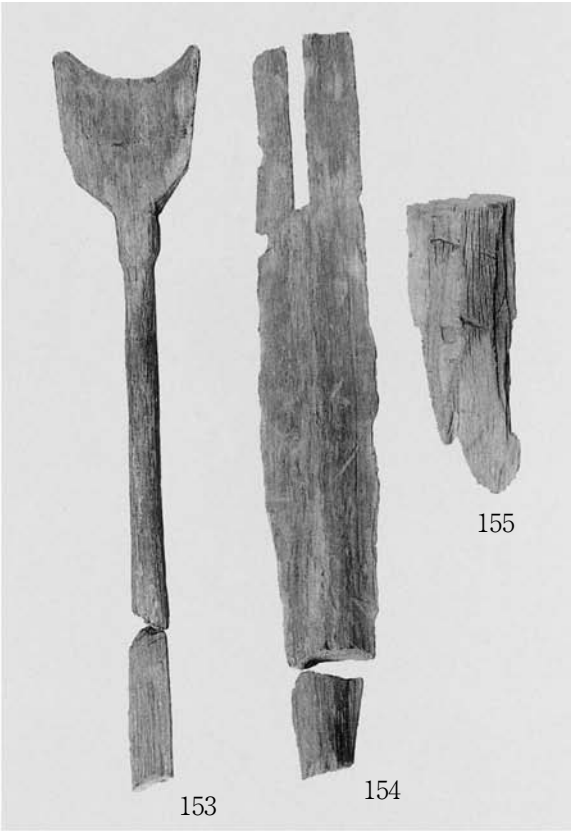
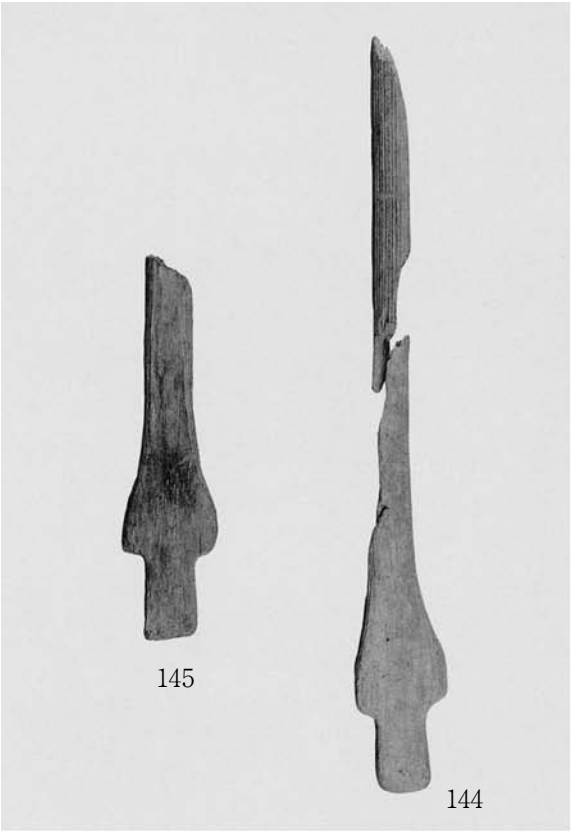
SR 1 · 2 出土遺物 (木製品)



SR3 出土遺物（木製品）



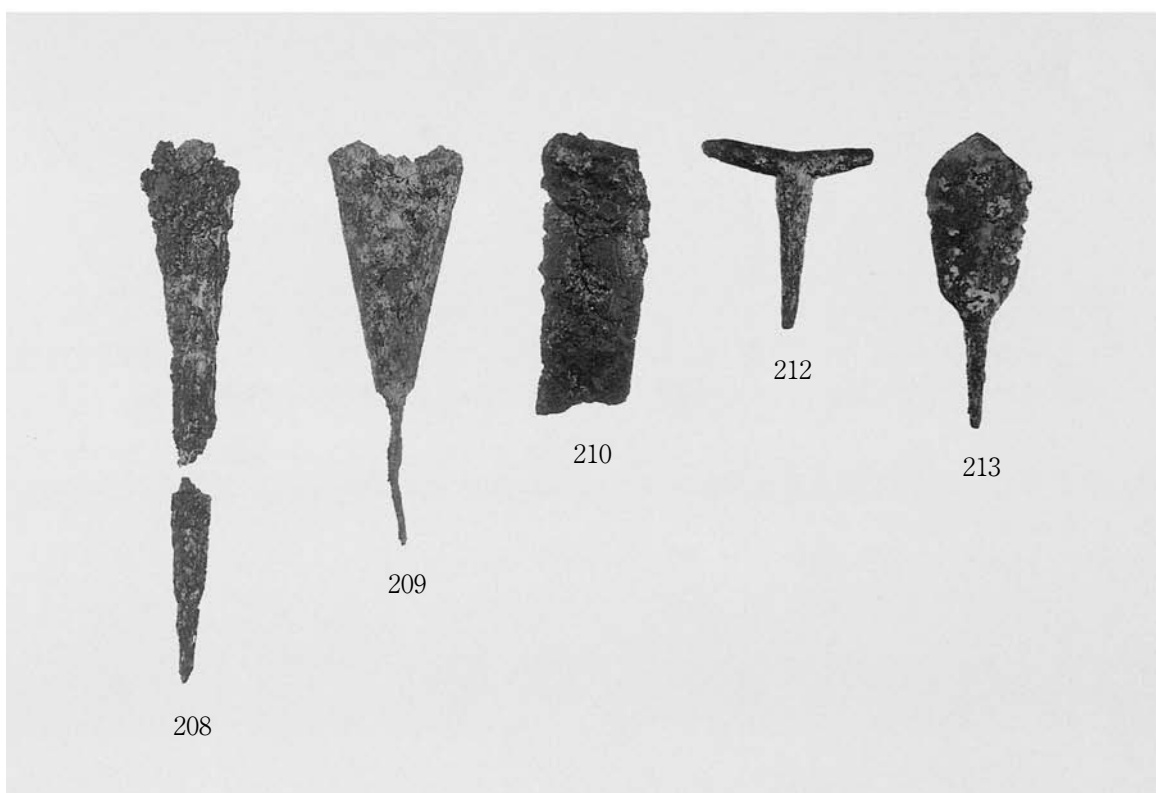
同上



SR 2 · 3 出土遺物 (木製品)

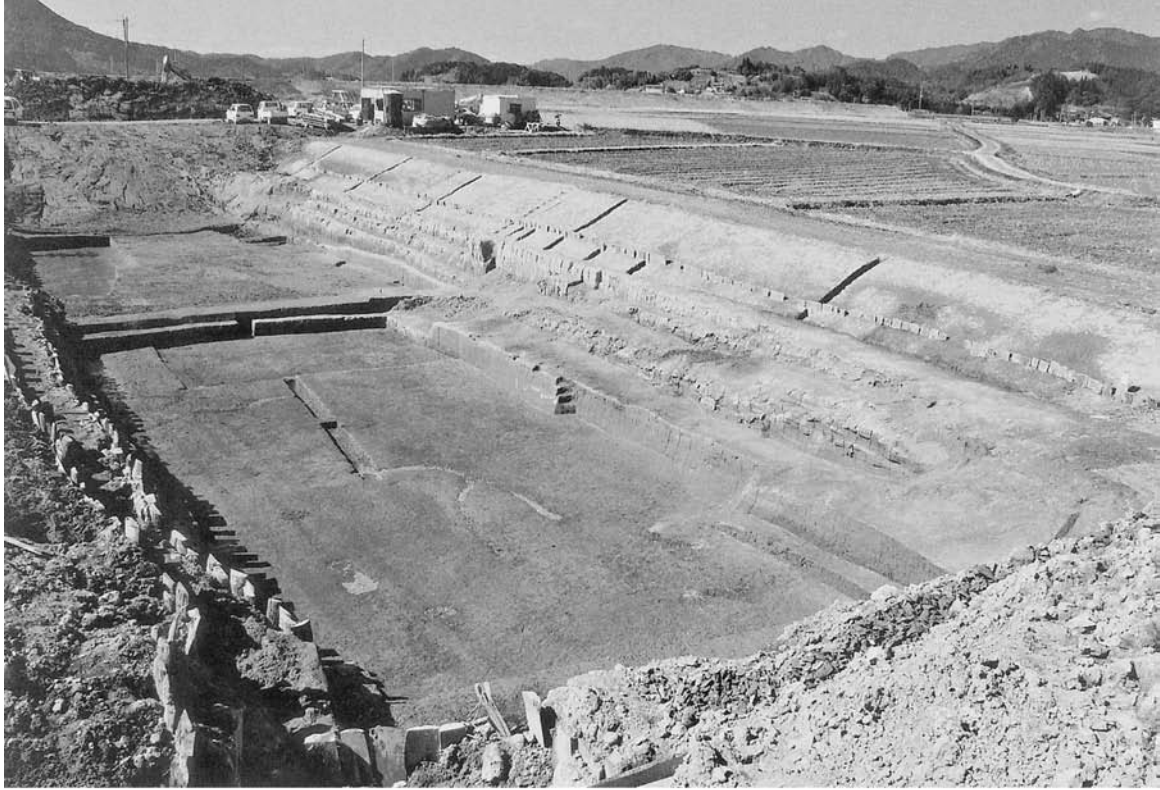


金属製品（鉄剣）



同上（鉄鏃・その他）

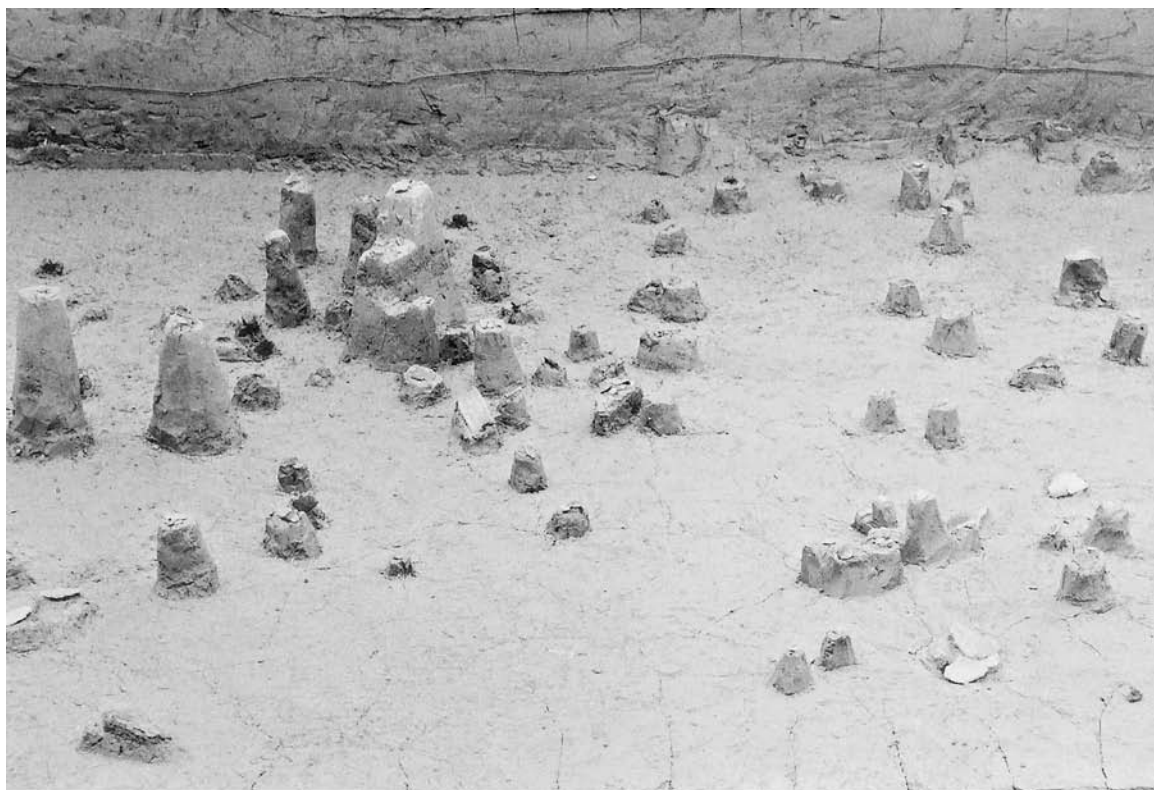
PL.48



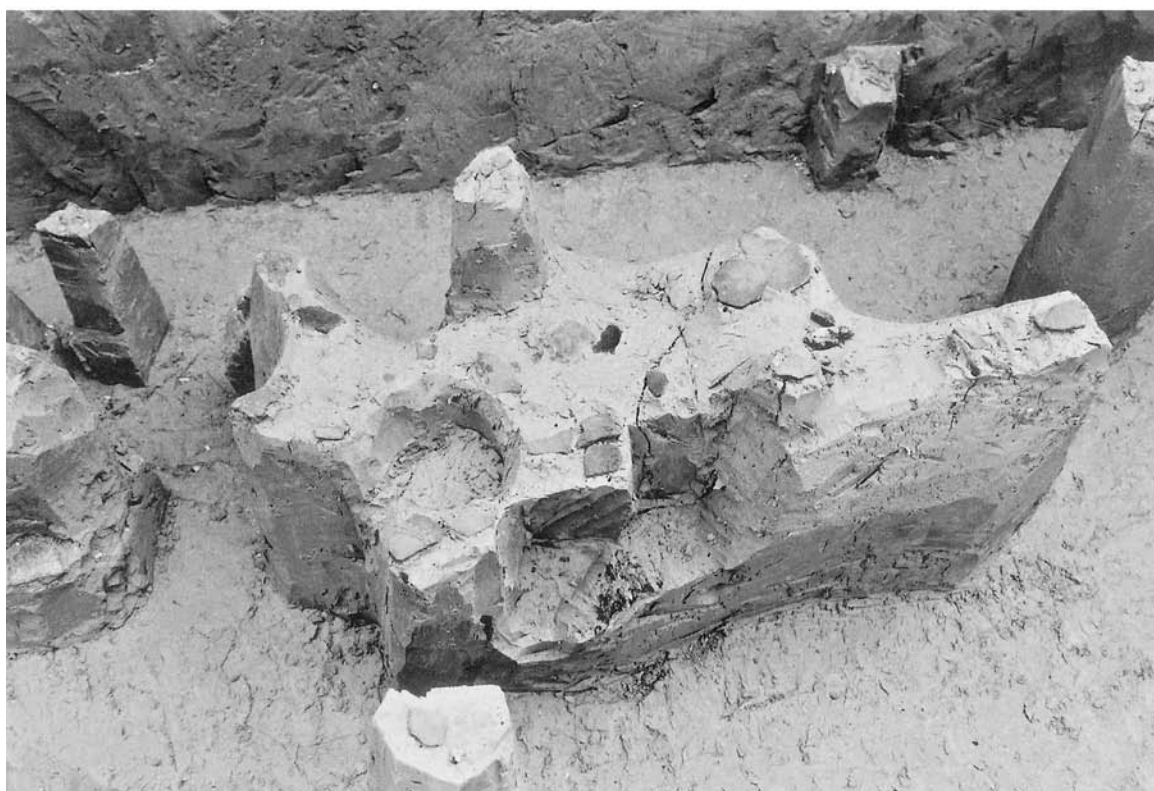
第Ⅱ調査区の全景（完掘時点）



北壁の堆積状況



縄文晩期～弥生前期の遺物出土状況（X～XI層）



弥生前期の甕出土状況（X～XI層）

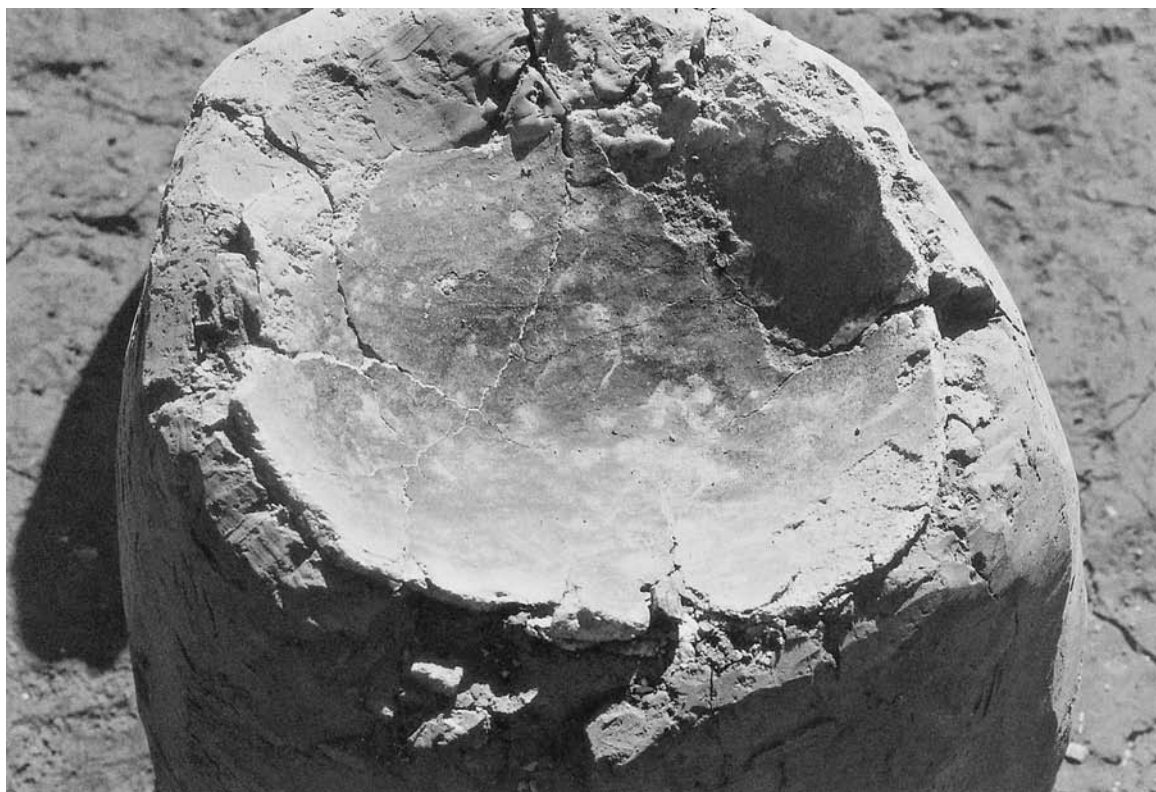
PL.50



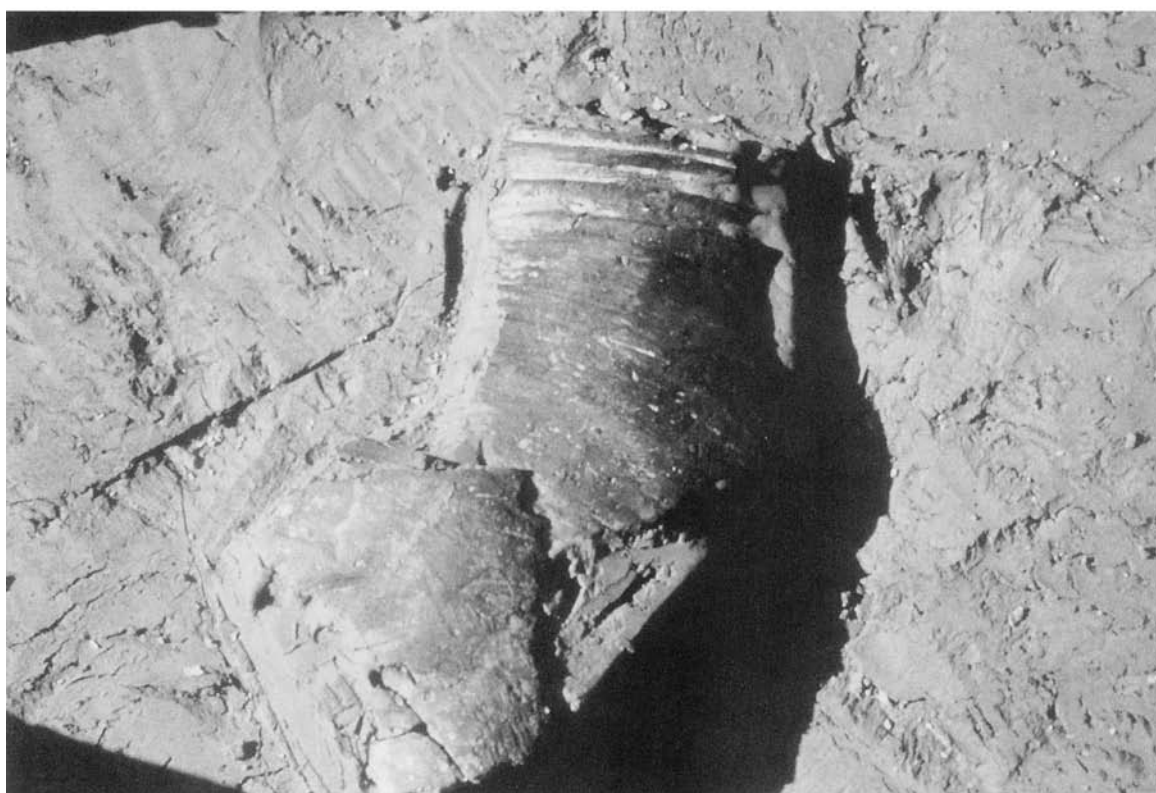
弥生前期の甕出土状況（X～XI層）



弥生前期の壺出土状況（X～XI層）



弥生前期の壺出土状況（X～XI層）



弥生前期の甕出土状況（X～XI層）

PL.52



弥生前期の甕出土状況（X～XI層）



小型打製石斧の出土状況（X層）



西壁堆積状況及び板状木製品・土器出土状況



B1・2区縄文晩期～弥生前期土器出土状況

PL.54



弥生中期～後期の土器出土状況（Ⅶ～Ⅷ層）



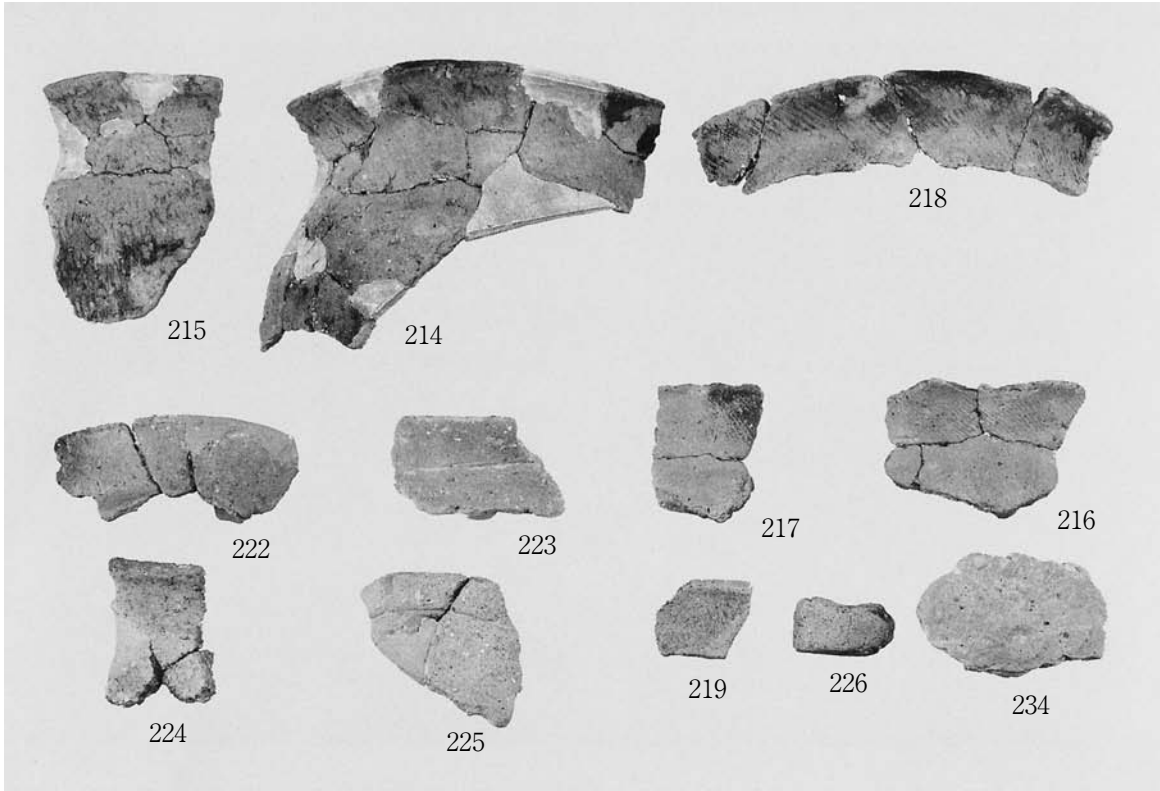
石製管玉の出土状況（Ⅷ層）



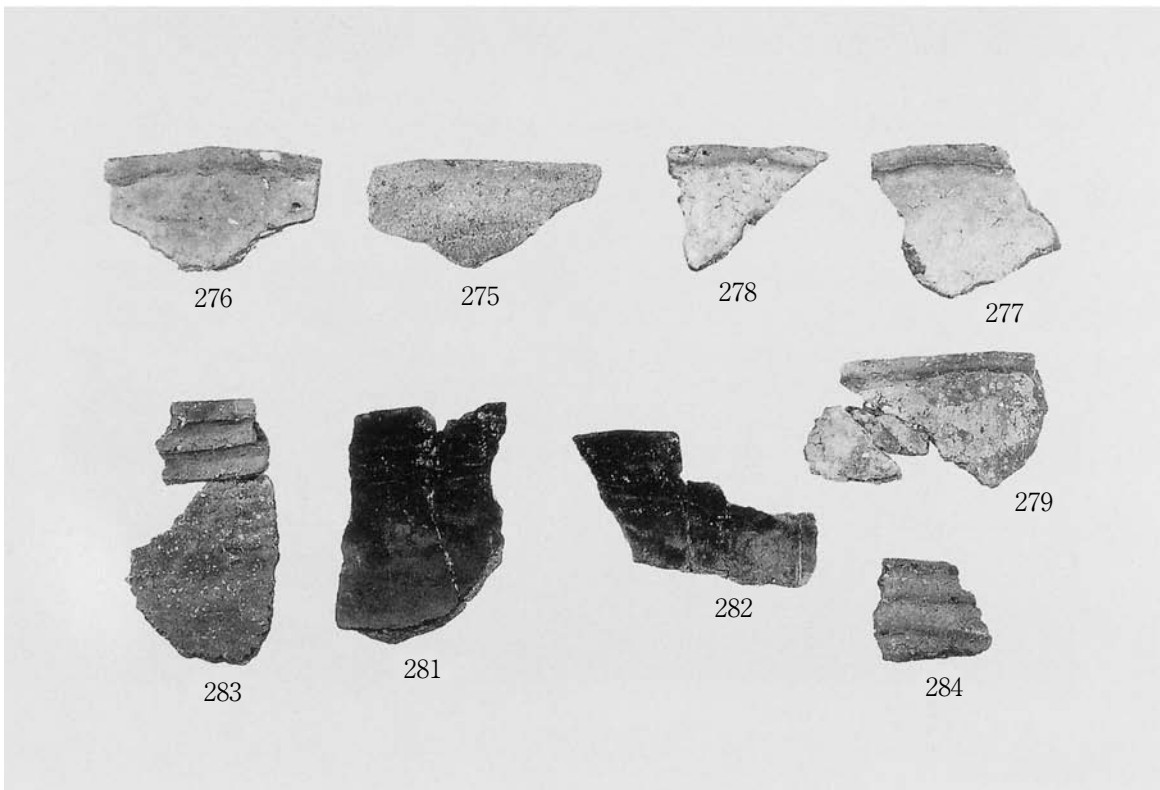
石包丁の出土状況（Ⅷ層）



作業風景



II区 VII～VIII層の出土遺物 弥生中・後期土器、壺・甕



II区 IX～XI層の出土遺物 弥生前期土器、甕



Fig.48-220



Fig.48-227



Fig.48-228

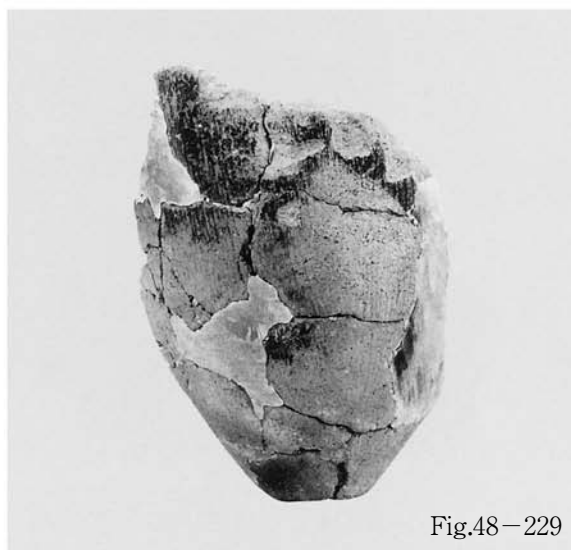


Fig.48-229

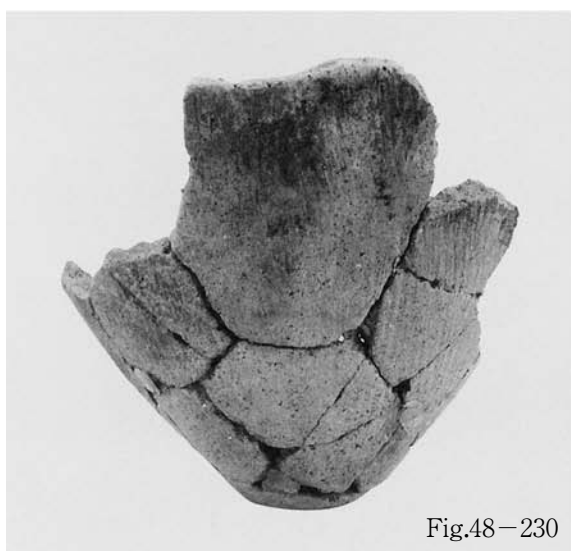


Fig.48-230

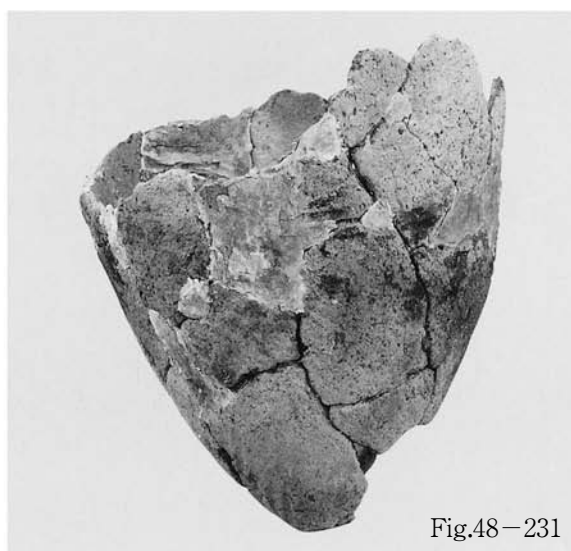


Fig.48-231

Ⅱ区 Ⅶ～Ⅷ層の出土遺物 弥生中・後期土器（土師器）甕

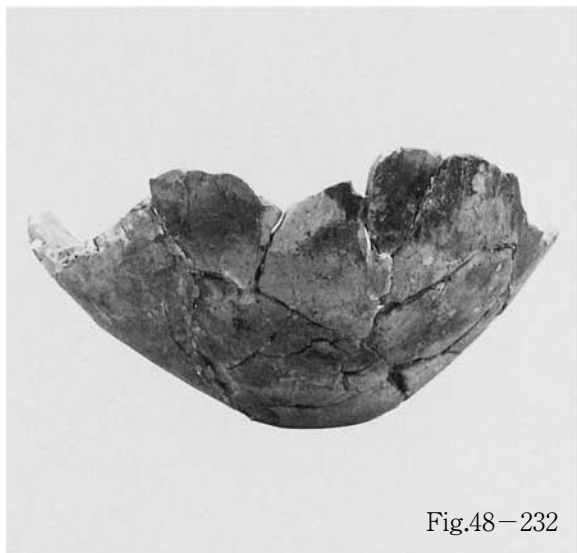


Fig.48-232



Fig.48-233

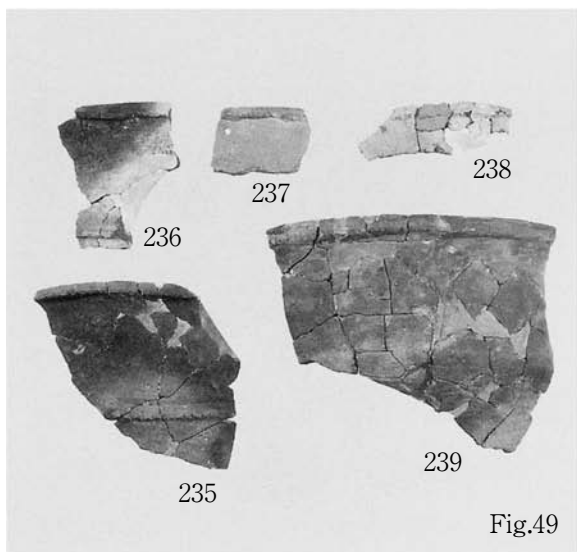


Fig.49



Fig.49-235

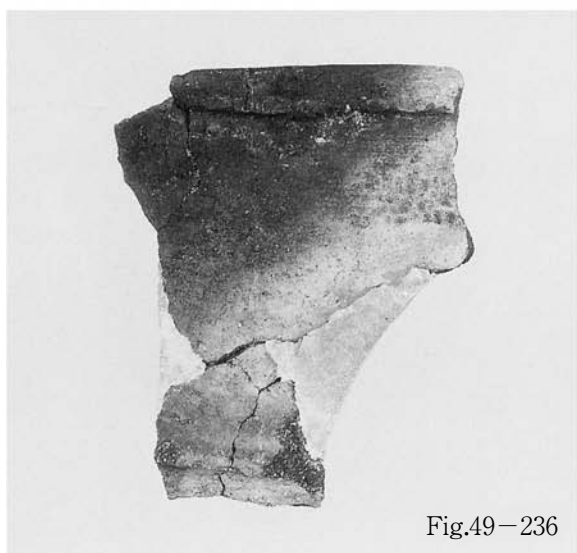


Fig.49-236



Fig.49-237

II区 VII～VIII層の出土遺物 弥生土器、壺・甕
IX～XI層の出土遺物 縄文晩期土器、深鉢

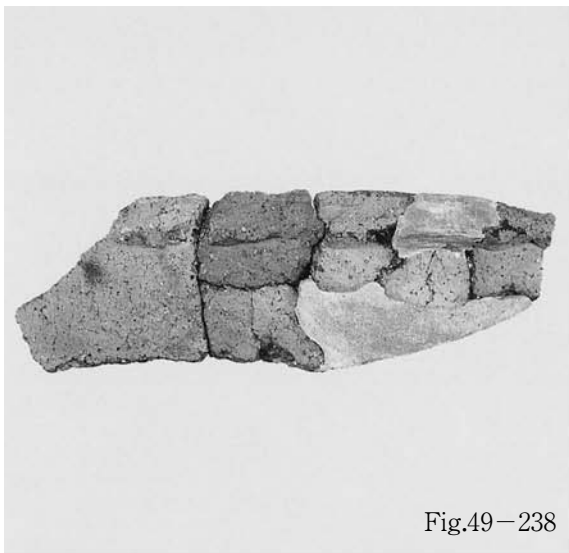


Fig.49-238

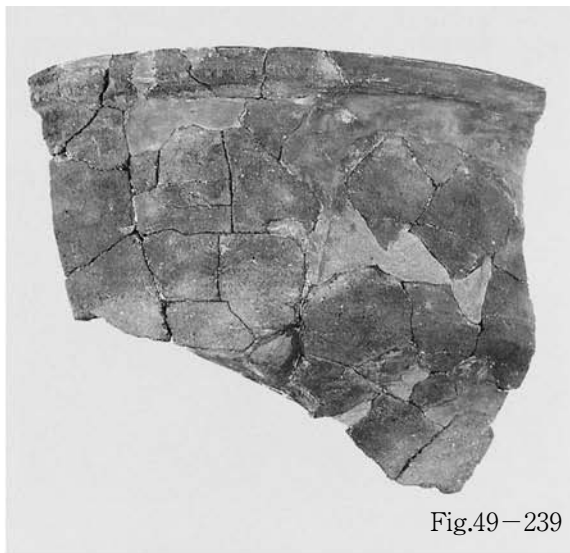


Fig.49-239

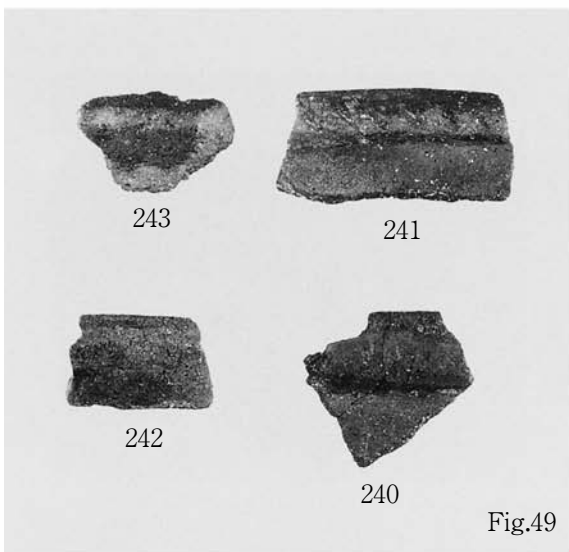


Fig.49



Fig.50-244

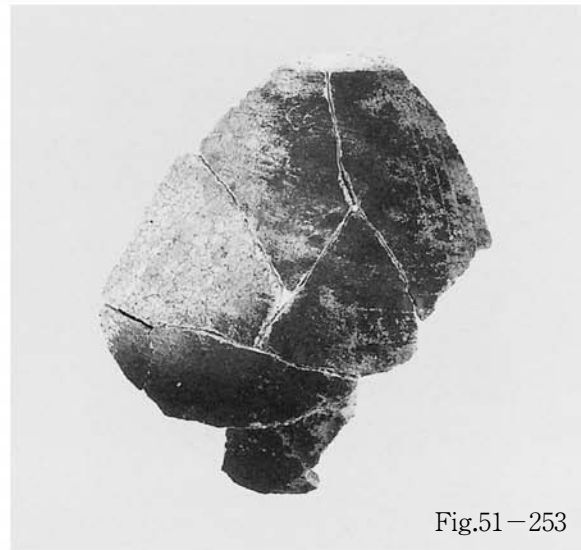
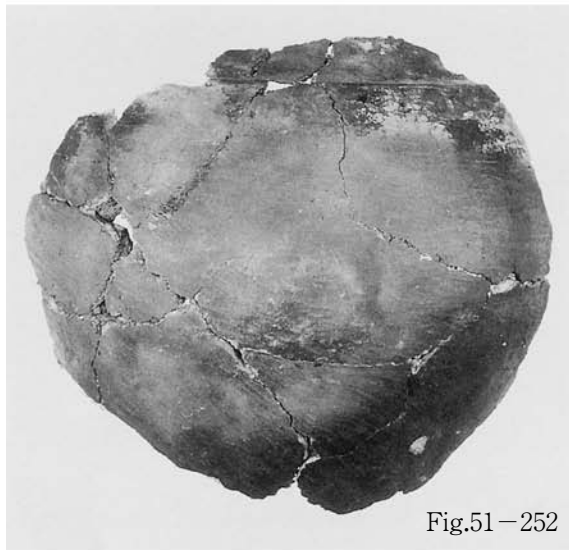
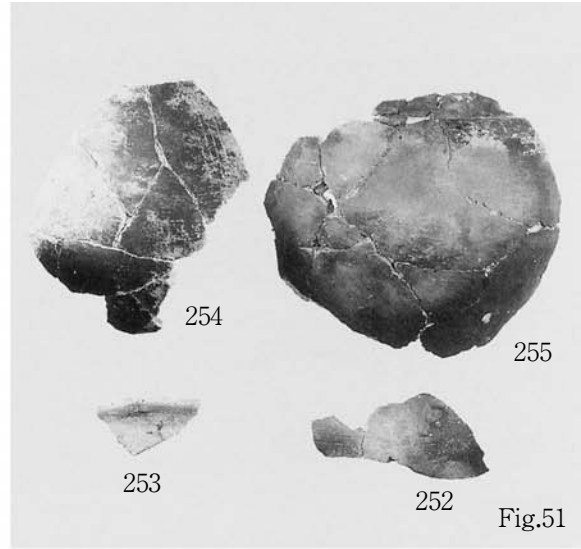
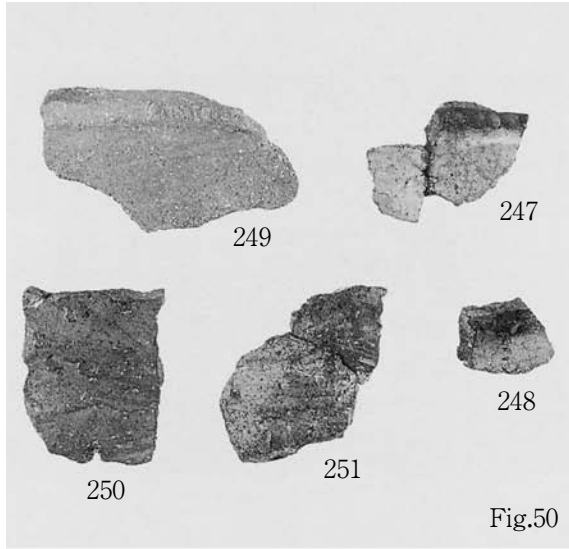


Fig.50-245



Fig.50-246

II区 IX～XI層の出土遺物 縄文晩期土器、深鉢・浅鉢



II区 IX～XI層の出土遺物 縄文晩期土器、深鉢・弥生前期土器、壺



Fig.51-256

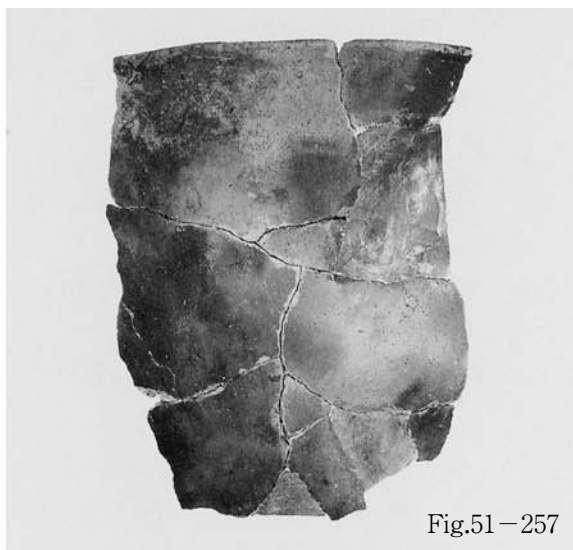


Fig.51-257



Fig.51-258

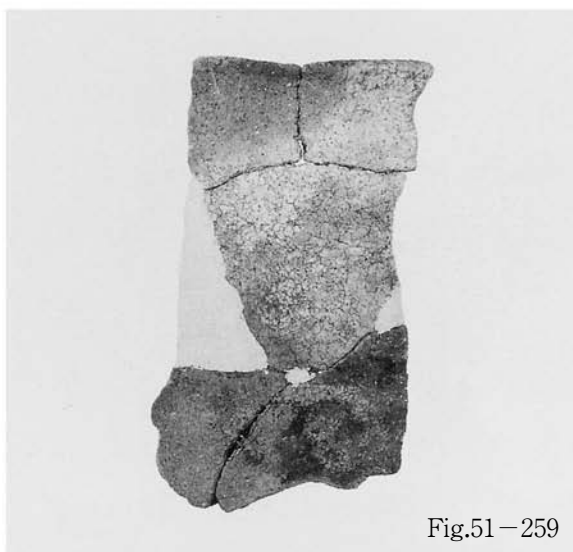


Fig.51-259

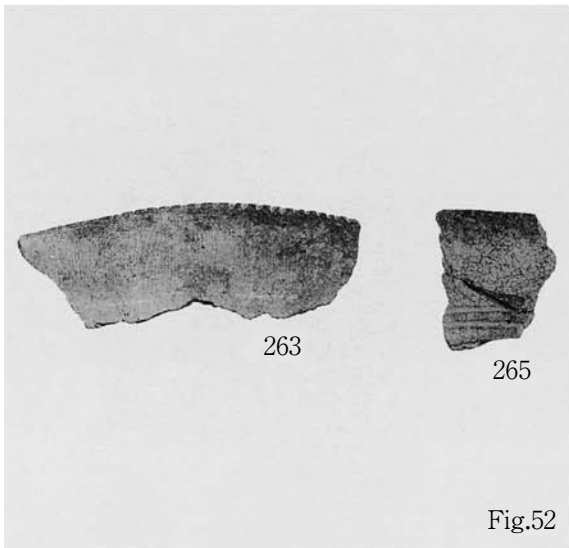
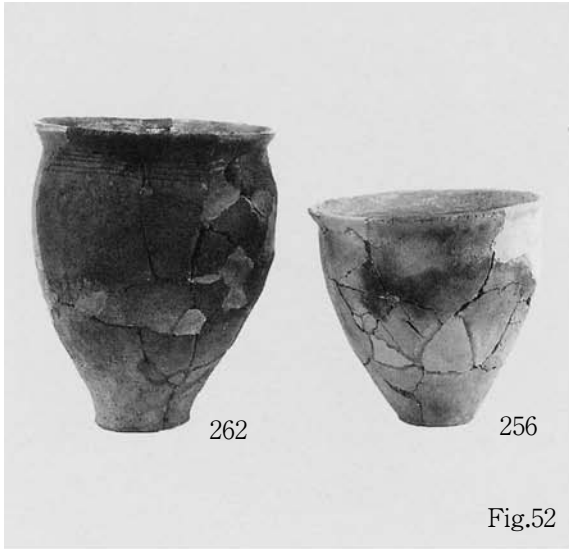


Fig.51-260

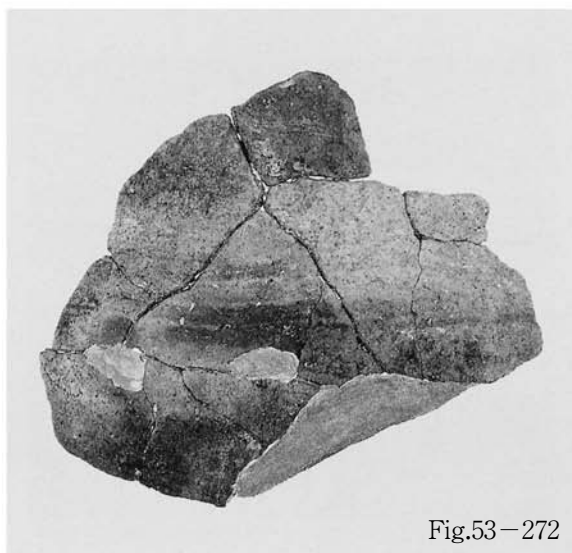
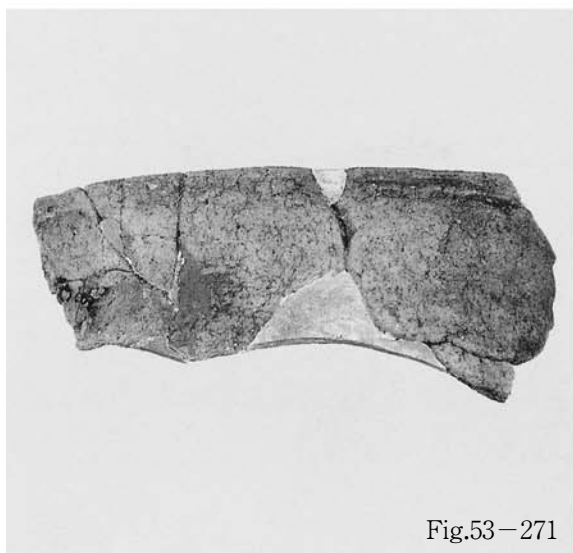
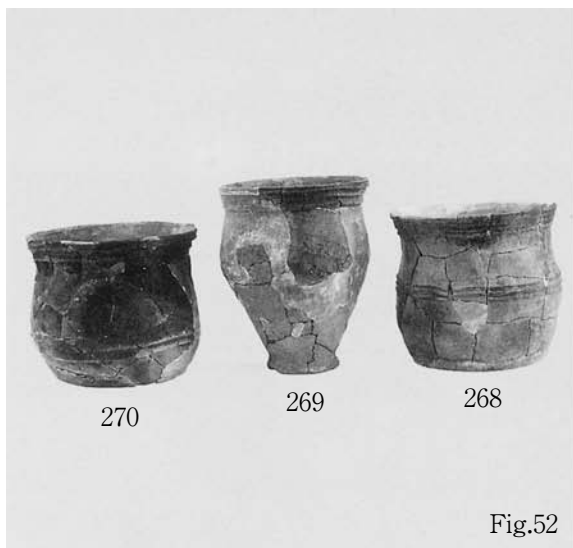


Fig.51-261

II区 IX～XI層の出土遺物 弥生前期土器、甕



II区 IX～XI層の出土遺物 弥生前期土器、甕



II区 IX～XI層の出土遺物 弥生前期土器、甕



Fig.53-273

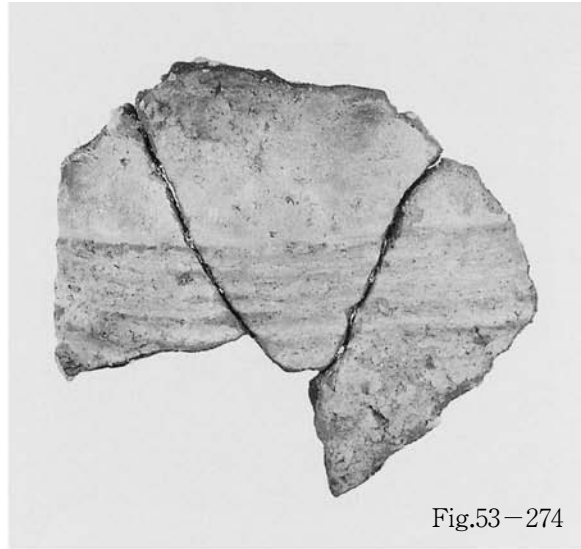


Fig.53-274

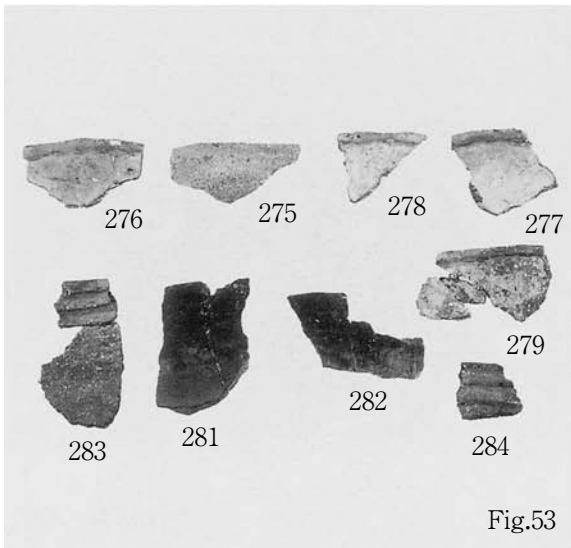


Fig.53

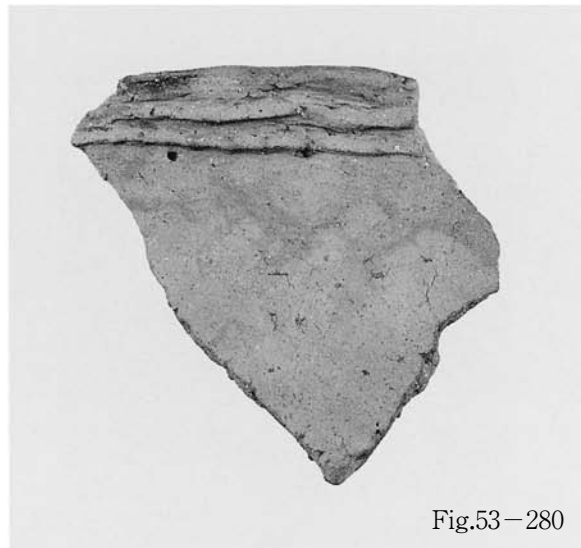


Fig.53-280

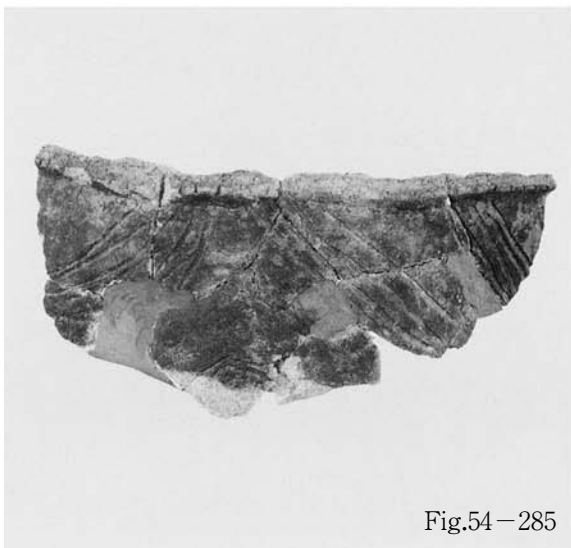


Fig.54-285



Fig.54-286



Fig.54-287



Fig.54-288



Fig.54-289

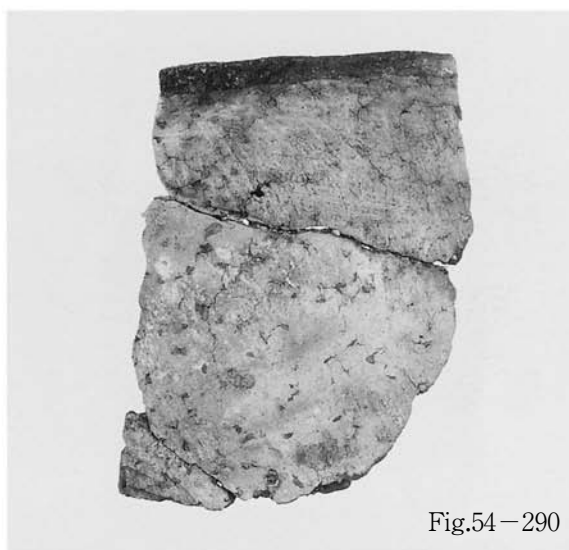


Fig.54-290

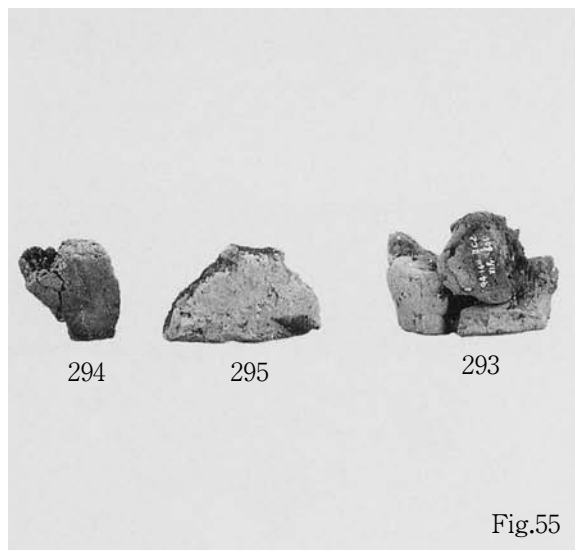


Fig.55-291



Fig.55-292

II区 IX～XI層の出土遺物 弥生前期土器、甕・壺



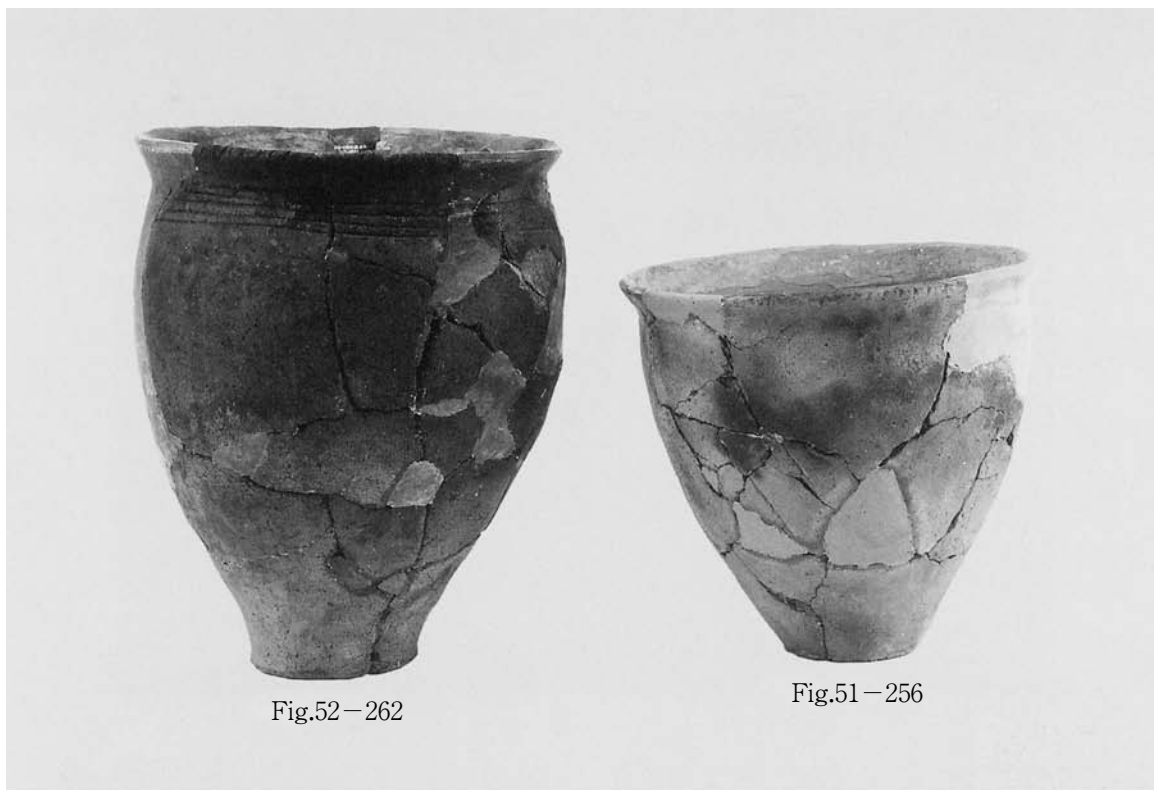


Fig.52-262

Fig.51-256

弥生前期末、甕（遠賀川系）



270

269

268

Fig.52

弥生前期末、甕（在地系）

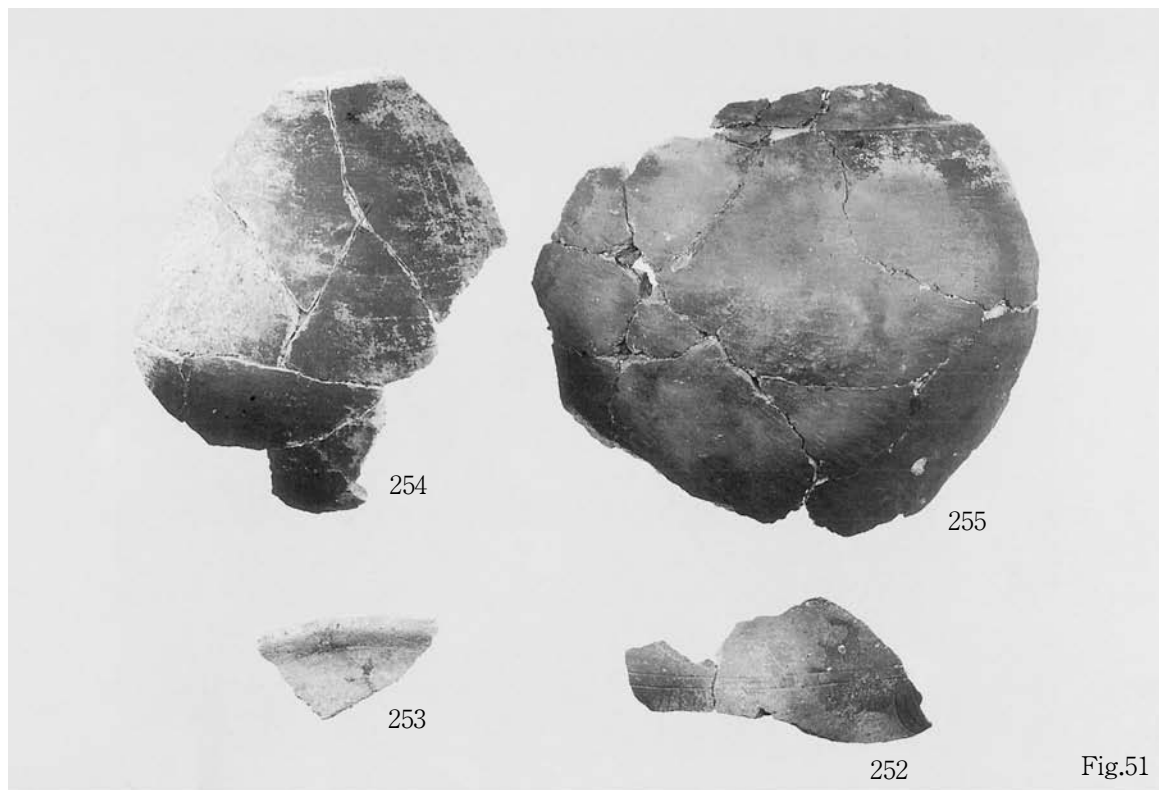


Fig.51

弥生前期 古段階、壺（遠賀川系）

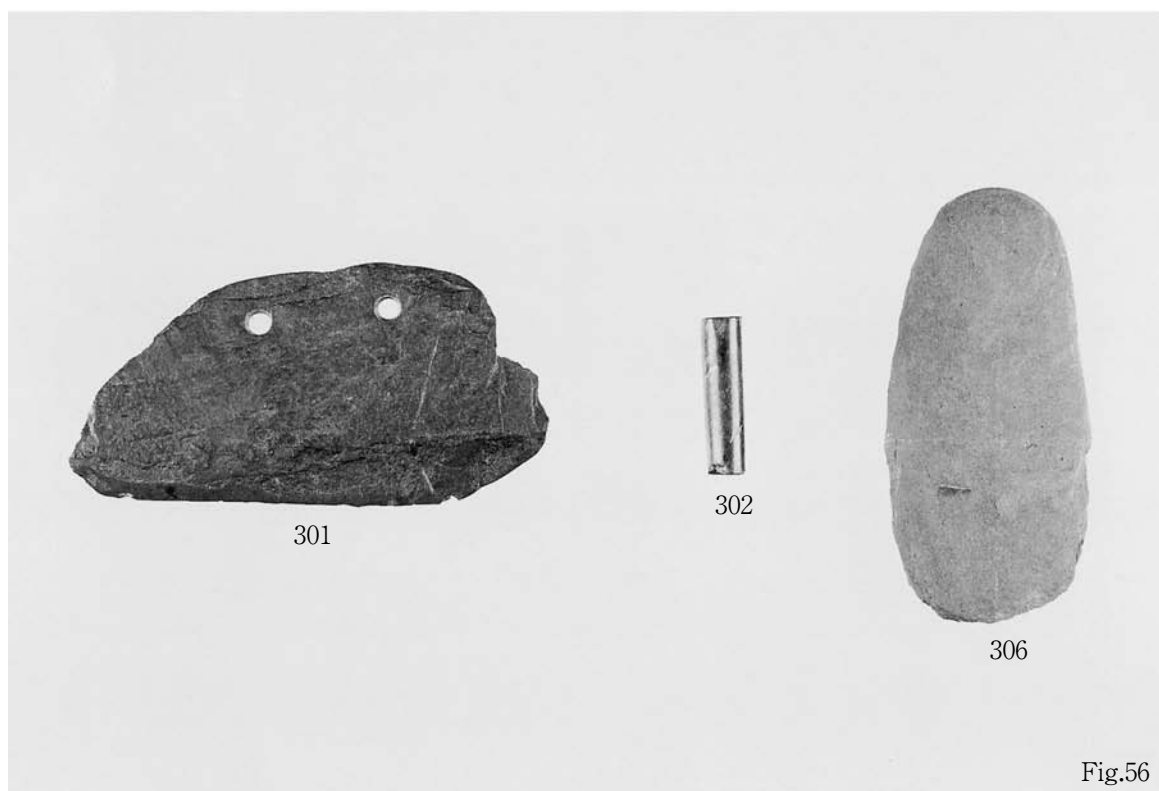
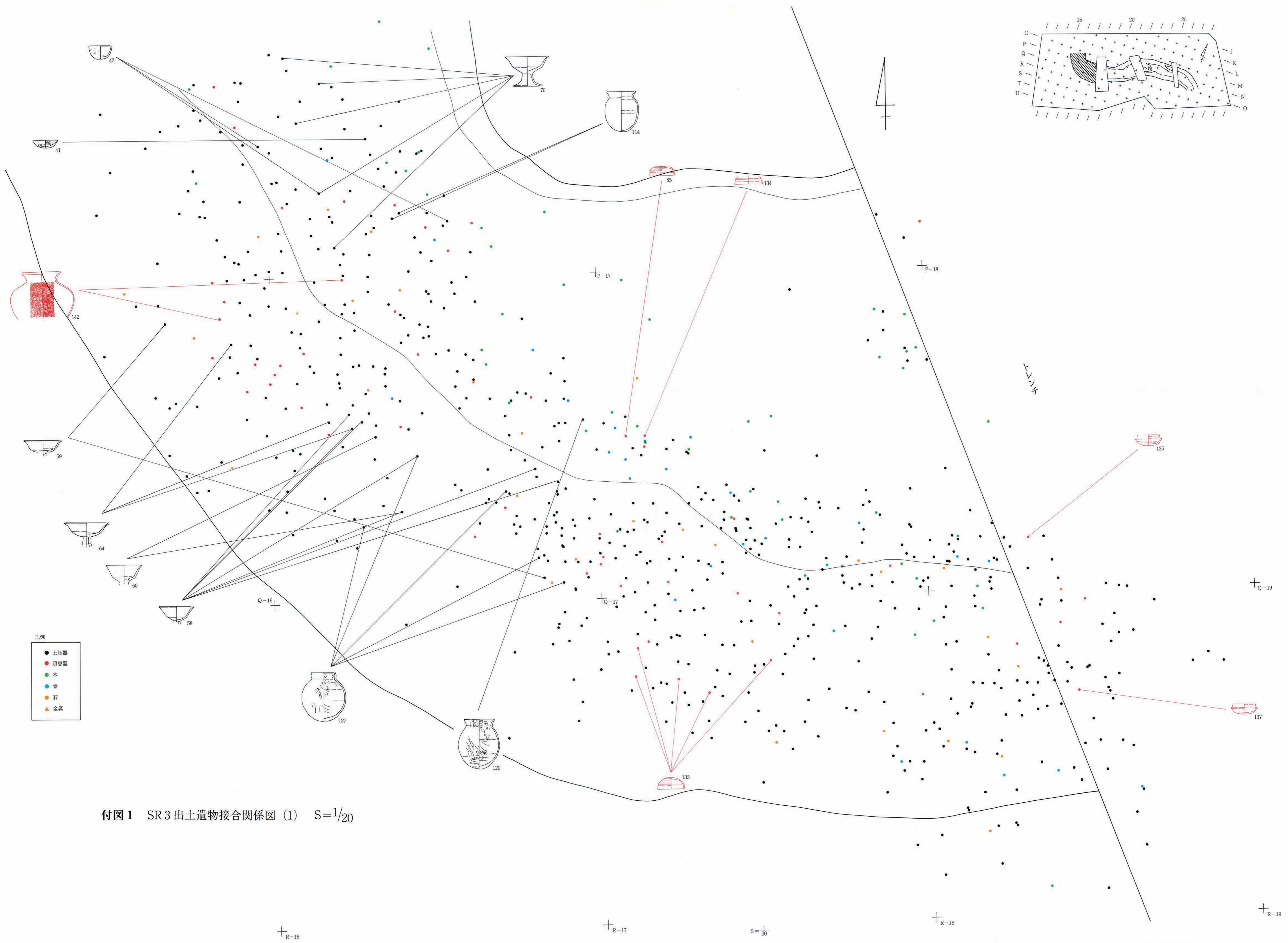


Fig.56

Ⅱ区 包含層出土の石器 石包丁・管玉・石製品

報告書抄録

ふりがな	ぐどうなかやまいせきぐんいち							
書名	具同中山遺跡群 I							
副書名	中村・宿毛道路関連遺跡発掘調査報告書							
巻次	3							
シリーズ名	高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第28集							
編著者名	松田直則・伊藤強・山崎正明・竹村三菜・武吉眞裕							
編集機関	(財)高知県文化財団 埋蔵文化財センター							
所在地	〒783 高知県南国市篠原南泉1437-1 TEL. 0888-64-0671							
発行年月日	西暦 1997年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 。 。 。	東経 。 。 。	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ぐどうなかやま 具道中山 遺跡群	〒787 こうちけんなかむらし 高知県中村市 具同	39207	070052	35° 58′ 10″	132° 54′ 28″	平成6年 5月12日 } 平成7年 2月17日	4,000	中村宿毛道 路高規格道 路建設工事 に伴う
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
具同中山 遺跡群	祭祀跡	縄文 弥生 古墳 古代 中世	流路跡	縄文土器 弥生土器 土師器 須恵器 瓦器 金属製品 木製品 石製品				



付図1 SR3 出土遺物接合関係図(1) S=1/20

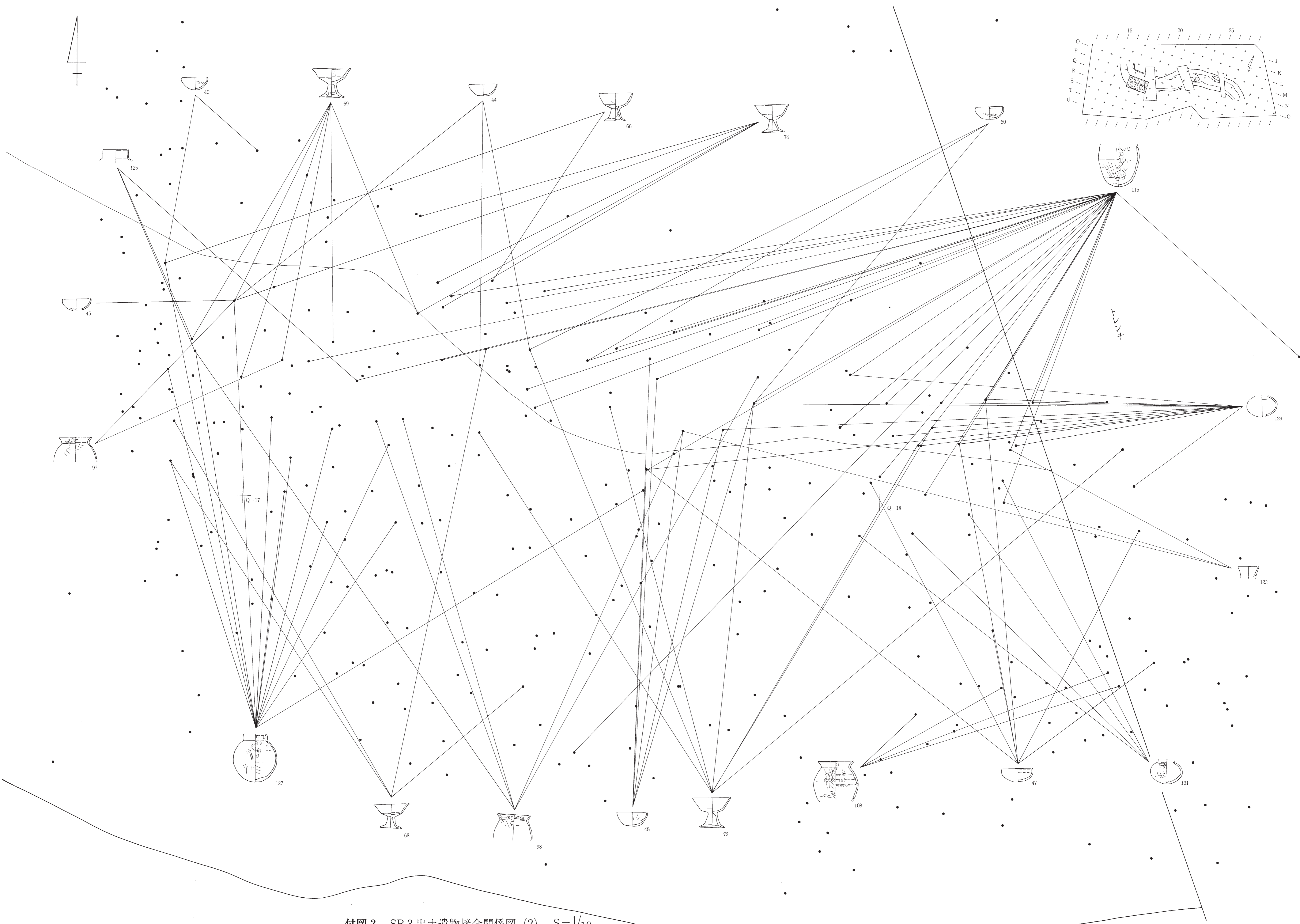
+R-16

+R-17

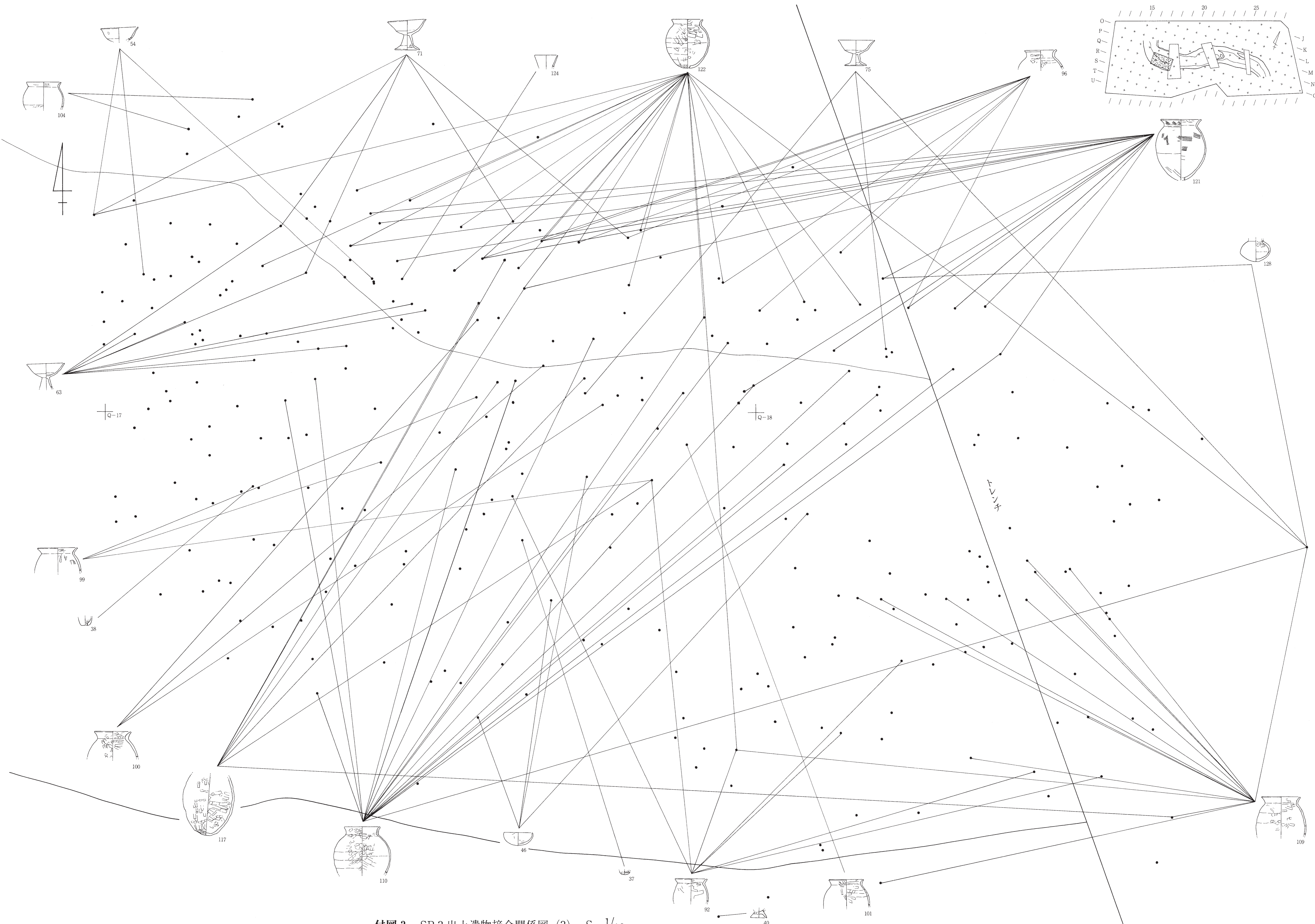
S=1/20

+R-18

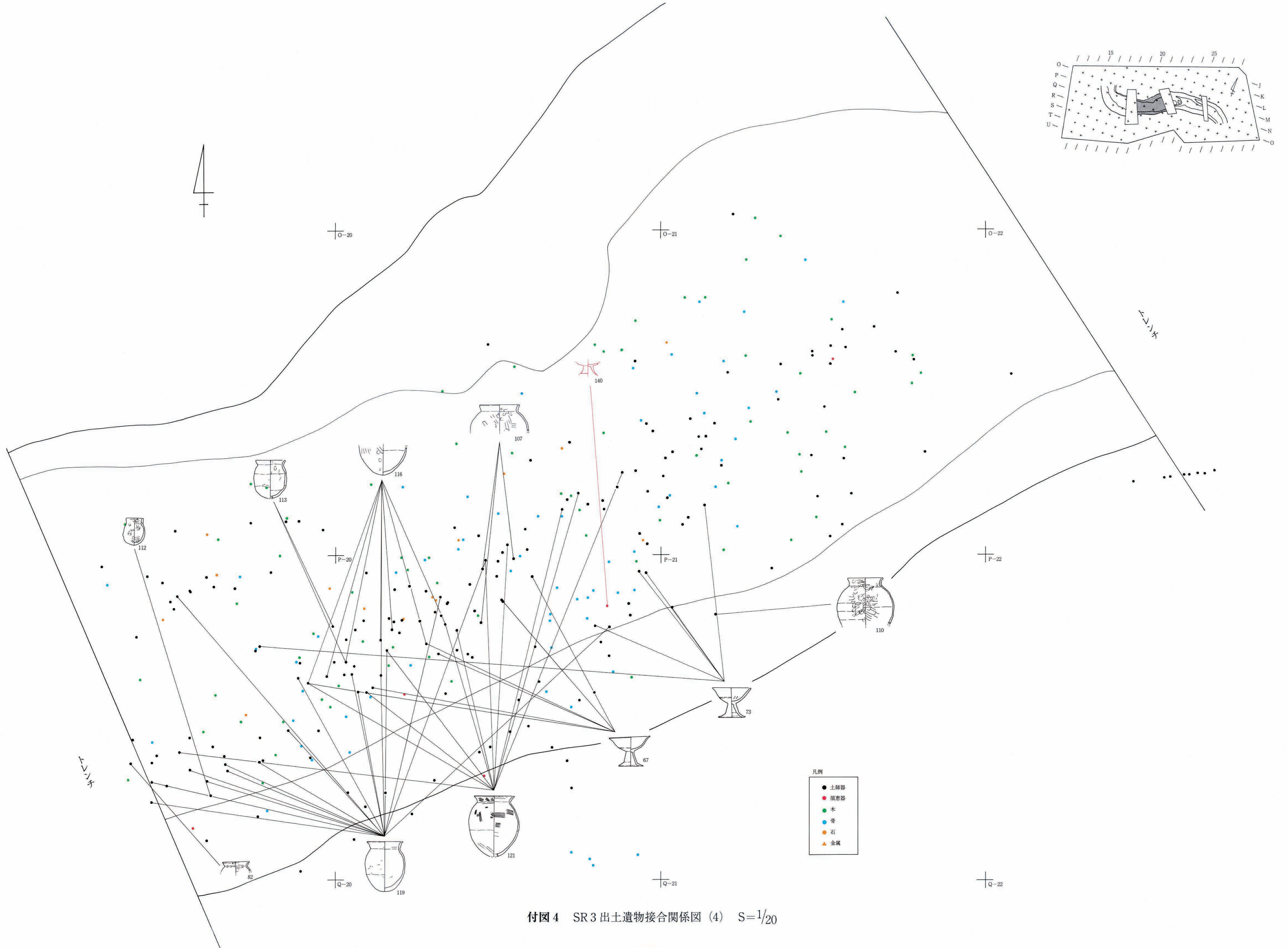
+R-19



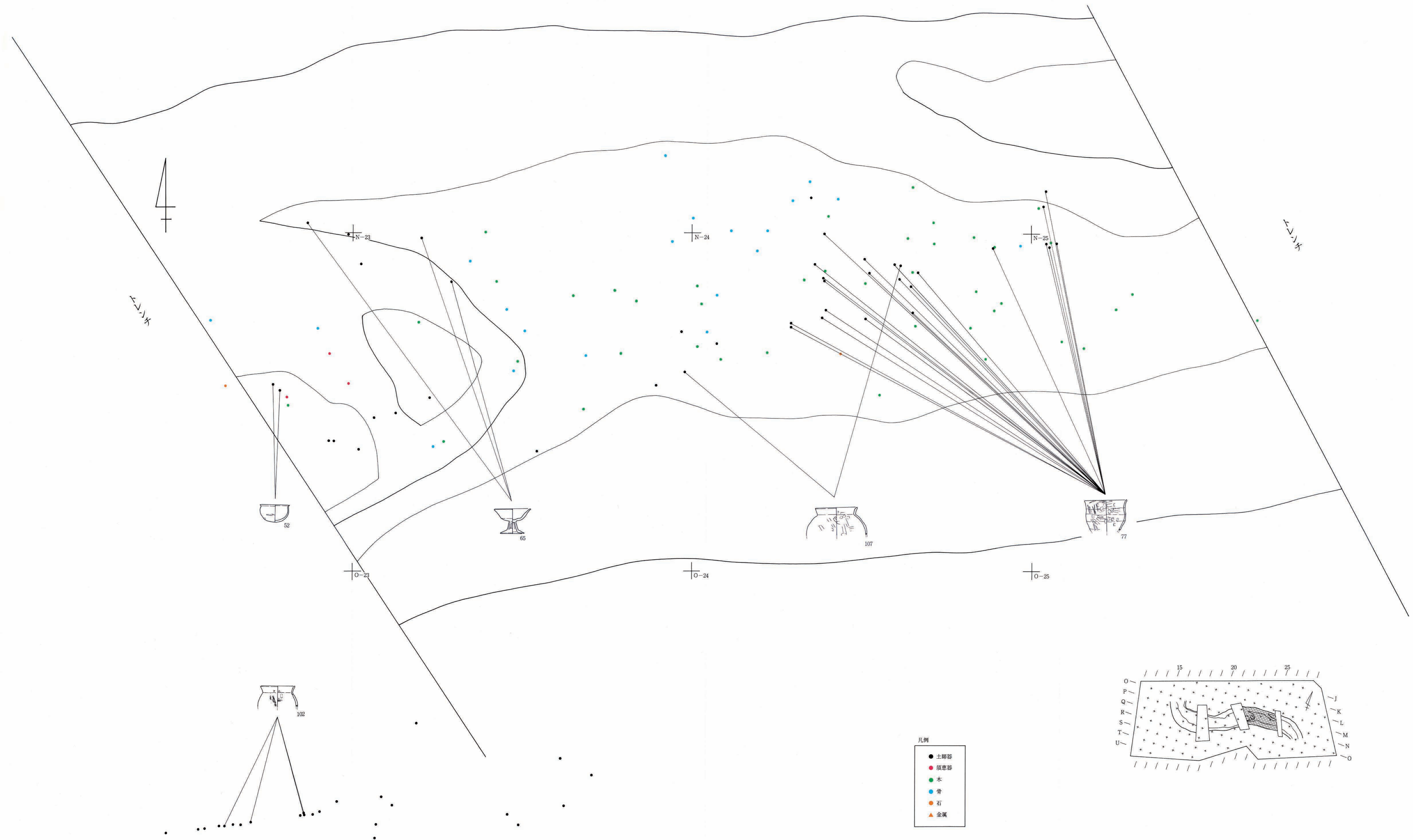
付図2 SR3 出土遺物接合関係図 (2) S=1/10



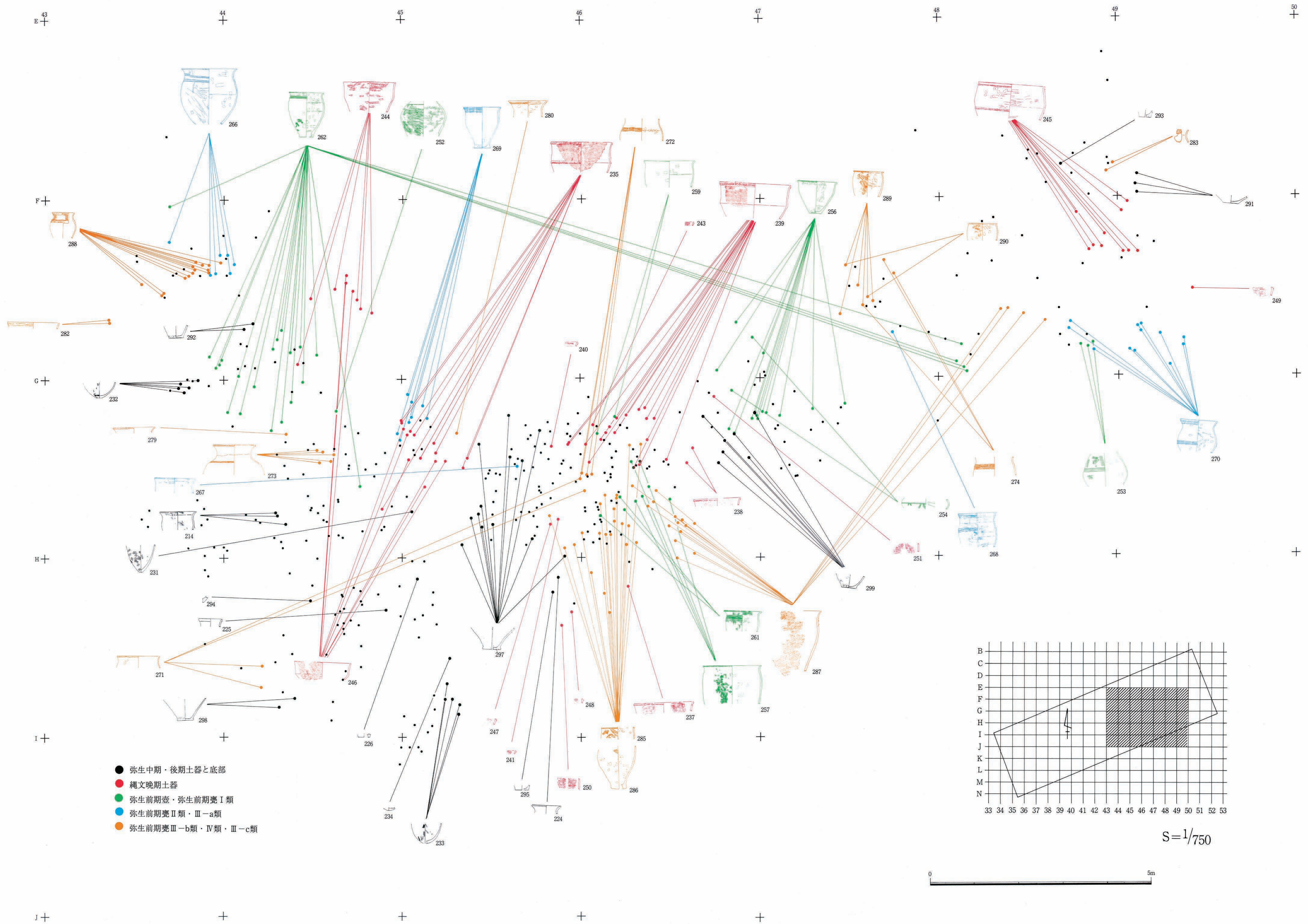
付図3 SR3出土遺物接合関係図(3) S=1/10



付図4 SR3 出土遺物接合関係図 (4) S=1/20



付図5 SR3出土遺物接合関係図(5) S=1/20



付図6 光波システム遺物地点測量方式による主要遺物接合関係図(第Ⅱ区)

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第28集

具 同 中 山 遺 跡 群 I

－中村・宿毛道路関連遺跡発掘調査報告書Ⅲ－

1997年3月

編集 (財)高知県文化財団 埋蔵文化財センター

発行 高知県南国市篠原南泉1437-1

Tel. 0888-64-0671

印刷 共和印刷株式会社